



TITLE:

アメリカにおける自然環境保全空間の成立過程に関する研究(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

伊藤, 太一

CITATION:

伊藤, 太一. アメリカにおける自然環境保全空間の成立過程に関する研究. 京都大学, 1993, 博士(農学)

ISSUE DATE:

1993-01-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3064812>

RIGHT:

新 制
農
645
京大附図

アメリカにおける自然環境保全空間の 成立過程に関する研究

伊 藤 太 一

アメリカにおける自然環境保全空間の
成立過程に関する研究

伊 藤 太 一

目次

序章 研究目的と全体の構成	1
第1章 時代背景：自然環境認識の芽生えとヨセミテの保全	4
第2章 最初の国立公園：イエローストーンの成立とその理想化	18
第3章 第2の国立公園：マキノー国立公園の変遷	53
第4章 生残った国立公園：ホットスプリングス国立公園の変遷	64
第5章 廃止された国立公園：小規模な国立公園の変遷	75
第6章 保全空間の設置：ナイアガラ公園とアディロンダックの森林	85
第7章 林業の実践：ビルトモアでの科学的林業と関係者たち	102
第8章 保全運動の展開：雑誌”Garden and Forest”の役割と都市域の森林保全	115
第9章 理想と現実：イエローストーン地域における大火災の影響と意義	131
終章 まとめと展望	156

序章 研究目的と全体の構成

1. 背景・目的

アメリカにおける自然環境保全制度は世界に大きな影響を及ぼし、日本の制度もアメリカを範としている。しかし、実際の空間の認識や管理の発展については表面的にしか知られていない。たとえば、国立公園は自然環境の保全と利用のために設置され、国有林は多目的利用のために設置されたと言われる。だが、管理主体が異なるものの、実際の空間としては截然と区別できるものではない。また、近年自然環境への関心が高まるに従い、その利用者が増加し、自然に接することによって自然環境保全意識が高まることは喜ばしいが、実際には過剰利用により、自然そのものが破壊されていく傾向が見られる。

さらに、地球全体の環境問題の深刻化にともなって、今後一層重要性が高まる自然環境の保全を推進する必要に迫られているが、明確な理念の欠如したまま、利用と保全と言う漠然とし相矛盾した目的だけでは、今後の自然環境保全空間の設置も管理指針も覚束ない。

そこで本論ではアメリカの2つの地域（東部と西部）、2つの組織（森林局と公園局）、2つの目的（功利主義的環境保全と功利主義的レクリエーション）の間で発展したアメリカの国有林と国立公園と言う2種類の異なった自然環境保全空間の初期の展開を明らかにする。

アメリカの環境保全の歴史に限らず、過去を振り返ることは未来を展望することである。とりわけ、自然環境は過去の人間活動によって大きく変化してきているので、その影響を把握してからでなくては未来は計画できない。本研究によって今後の自然環境保全の在り方に関する示唆が得られれば幸いである。

3. 研究方法と構成

環境保全運動はほぼ同時期に複合して進行したため、時代の流れに即して説明することが困難であるので、本論では前半を国立公園、後半は森林を中心として空間ごとに論じることにした(表)。資料収集に際してはかならず現地を訪れた。また、同じテーマに関する文献が複数ある場合には、比較検討して可能な限り原資料を調べた。

まず、第1章では18世紀半ばの時代背景を説明し、東部を中心とする環境意識の芽生えを芸術などから探るとともに、最初の保全空間としてのヨセミテの発展を論じた。第2章では、このヨセミテの成立を受けて最初の国立公園となったイエローストーンの設置過程について論じ、その過程が次第に理想化された背景を探った。第3章ではイエローストーンとヨセミテの狭間に隠れて無視されてきた2番目の国立公園としてマキノーに光を当て、その意義を探るとともに、イエローストーンとヨセミテの間で果たした役割を明らかにした。さらに、第4章ではマキノー

と同様に小規模な公園であったが今日まで存続することになったホットスプリングスの変遷を探り、公園基準形成過程における認識の変化を明らかにした。一方で除外された公園として、第5章ではブラットとサリーズヒルについて調査を進め、当時の国立公園認識とそのあいまいさを明らかにした。

このように前半では、国立公園と呼ばれる特異な景観を持つ対象の天然記念物的保護を目的とした空間設置の背景を探ったのに対して、後半では都市化とそれにともなう環境問題意識の芽生えと、それらの問題解決を目的とする保全空間の設置過程について研究を進めた。

第6章では東部における保全空間としてナイアガラ滝の展望地の公園化運動とアディロンダック森林の保全を対比させながら論じた。さらに、第7章では保全から一歩進んだ科学的林業の始まりをビルトモアを事例として検証し、そこに関係した人々の環境保全運動に置ける役割を検討した。第8章では、これらの保全運動の理論的リーダーが関係した雑誌を通じて、当時の東部の都市での森林保全理論と実践の展開過程を明らかにした。

最後の事例として第9章では、国立公園とそれを取り囲むいくつかの国有林等から構成されるイエローストーン地域の火災を検討し、当初の考え方が今日まで影響を及ぼしていることを明らかにするとともに、後に加わった生態系保全というテーマに対して国立公園と国有林の区別がどのような意味を持つのか探った。以上の事例を終章で総合的に考察しそこから将来を展望した。

なお、日本の国立公園は自然公園の1カテゴリーとして指定されたが、アメリカの場合には自然公園と言う概念で国立公園を捉えていなかった。アメリカにおいては歴史的空間や都市公園的空間などが国立公園システムに含まれていることから明らかであるように、都市公園に対する自然公園として位置付けられているわけではない。また、当初は個別に対処していたので国立公園としての設置基準も存在しなかった。国立公園の概念を統一させようとしたのは公園局ができてからのことである。以上の理由により"national park"という言葉が日本では国立公園と訳されているのに対して、当時は連邦政府が所有する土地に設立された公共のための空間を意味するに過ぎない。このようにアメリカの"national park"と日本の国立公園の実体には違いがあるが、本論では、"national park"を意味するものとして国立公園という言葉を用いる。

表 本論で触れる保全空間と関連事項年代

空間	1860年代	1870年代	1880年代	1890年代	1900年代	1910年代	1920年代
西部	・ヨセミテ州立公園(1864-1906)	・イエローストーン国立公園(1872-)			・ヨセミテ国立公園(1906-)		
中西部		・ホットスプリングス国立公園(1877-)			・プラット国立公園(1906-1972)		
東部			・アディロンダック州立公園(1885-)				
			・ナイアガラ州立公園(1885-)				
			・Garden and Forest誌(1888-1897)				
			・ビルトモア林業プロジェクト(1890-1917)				
法制度	・ホームステッド法(1862)			・国有林(1891-)			
				・森林局(1905-)			
					・国立公園局(1916-)		

第1章 時代背景：環境意識の芽生えとヨセミテの保全

摘要：19世紀になると文学や絵画において、アメリカの大自然を評価するようになった。その背景としては、開発によって急速に失われる自然環境へのノスタルジアと一体となったヨーロッパに対する独自性の主張と工業化した東部における環境悪化から盛り上がる環境保全の意識の高揚がある。これらの意識の反映として自然公園的な空間が提唱されるようになった。その最初の空間としてヨセミテ溪谷がとらえられる。当初は狭い溪谷だけがその対象であったが、後に水系を含む広大な地域に拡大された過程が、自然環境保全意識の発展を示唆する。

1. 社会状況

国立公園がこの世に呱呱の声をあげた19世紀後半は、アメリカにとって大変動の時代であった。移民の急速な増大、東部の都市化とそれにとまなう環境の悪化、北部の工業化と独占資本の形成、南北戦争（1861-65）とそれに続く奴隷解放、西部の開拓のとフロンティアの消滅宣言（1890）、鉄道網の拡大や自動車の出現などの運輸革命など、現代文明を特色付けるものが誕生した時代といえる。

このような大変動のなかで、東部にはゆとりのある階層が形成され、西部の開拓民とは異なった目で大自然を見る人々が育ってきていた。しかし、そのような一種の知的階層に属する人々は少数であった。さらに、その中で不便を耐え忍び、莫大な費用を費やしてまで、西部を旅行する人は稀であった。例えば、1863年にマリボサ鉱山の責任者として、カリフォルニアへ向かったオルムステッドの場合、まずニューヨークから船でパナマに向かいパナマ地峡を陸路横断し、再び船でサンフランシスコへ向かうという、陸路を避けるルートを選んでいる。

1) 公有地政策¹⁾

国立公園に係わりを持つ公有地政策も激動しつつあった。19世紀には、アメリカはルイジアナ（1803）、フロリダ（1819）、オレゴン（1846）、テキサス（1845）などの広大な領土を手に入れ、国土面積は4倍にもなった。これらの土地のほとんどは国有地とみなされた。しかし、実際には測量もされておらず、放任されたままであった。そのため開拓民が不法占拠している場合も多かった。このことは、今日にいたるまで、国立公園内の私有地の問題として尾を引いている。また、これらの土地には先住民であるいわゆるアメリカインディアンが生活していたが、合衆国政府はかれらの存在を無視し、一方的に国有地とみなした。このことも、今日の国立公園とインディアン保留地の問題として残っている。

領土の急速な拡大に対応して、西部開拓に拍車がかかり、資源は無尽蔵と見なされて浪費された。連邦政府は財政難から公有地の売却によって税収を補った。1785年に最初の公有地売却法が制定されたが、転売によって暴利を貪る者が出てきた。このように放任された開発に規制を加えるため、1841年に先買権法（Preemption Act）が制定され、開拓民に対して、国有地の先行買取権を認めた。さらに、1862年のホームステッド法（Homestead Act）で開拓さ

れた国有地の権利を一定の条件を満たせばひとり160エーカーに限って与えるようにした。なおこの法律はアラスカを除く地域では1976年まで、アラスカでは1984年まで存続した。

南北戦争後に鉄道会社や退役軍人に対しても、大量の土地が払い下げられた。更に、森林に関しても、林木育成法(Timber Culture Act, 1873)や無償林木法(Free Timber Act, 1878)によって伐採権が与えられたが、これによって乱伐が進んだ。このように土地の所有に関しては国有地の私有化が進んだ時代に、国立公園という、いわば時の流れに逆行するような空間が成立したことは注目すべきであろう。

2) 芸術における自然の評価²⁾³⁾⁴⁾

19世紀になるととりわけ東部の都市に生まれ育った人々の中には、イギリスのコンスタブル(John Constable)やターナー(Joseph M. W. Turner)などの風景画などに代表されるロマン主義運動の影響を受けて、これまでの田園環境から人手のまだ加わっていない大自然を対象とする芸術家が現れてきた。その代表はハドソン河派(Hudson River School)のコール(Thomas Cole)やその弟子チャーチ(Frederick Church)などに代表される画家たちであった。その中からビアシュタット(Albert Bierstadt)のように西部に出かけてその景観を描く画家たちが誕生した。それまでアメリカ人は文化的にヨーロッパに対して劣等感を抱いていたが、ヨーロッパを凌ぐ対象を発見したことによって自信が生れてきた。

文学においてもアメリカの風土に根差した作品が生れてきた。敵対するものとして征服すべき対象であった大自然を、開拓者たちとは異なった自然観でみることで環境の変貌のはげしい東部では可能となった。たとえば、アービング(Washington Irving)やブライアント(William Cullen Bryant)がアメリカの大自然を積極的に評価した。このようにして、自然環境が、ロマンと郷愁の対象に変化してきた。

3) 森林保護の動き

ヨーロッパから植民した人達の間でヨーロッパの伝統に基づく森林の保全はおこなわれていたが、アメリカにおいて森林を育成管理するという林業が芽生えたのは19世紀末であった。それまで、ヨーロッパの中世的自然観に基づき森林は悪いもの、資源としての森林は無尽蔵にあるものと思われていたので、伐り払っては別の場所に移動するといういわば掠奪的利用が普通であった。しかし、都市化の進んだ東部では森林破壊に帰因する災害などの環境問題が生じはじめた。また、都市の生活環境自体が悪化し、健康を維持するためのレクリエーション空間の必要性を感じる人々が増加した。このようにして、東部のエリートたちの間に森林の管理・保全という考え方が生まれた。たとえば、木の日(Arbor Day)がネブラスカ州で1872年4月10日に設定された。

このような自然環境と人間との関係の変化の指標として1890年にフロンティアラインの消滅宣言がとらえられる。これは自然環境を身近な敵として認識する必要がなくなり、むしろ保護

すべき対象となったという心理的变化と東部などの都市化が進んだために顕在化した環境問題の発生という意味を持つ。すなわち、滅びゆくものをいとしむ心の芽生えと悪化した都市環境からの逃避の場所としての認識を示す。

このような理由で初期の保全対象となった森林には2種類ある。都市の人々が利用する身近な森林の保全運動と巨木などの貴重な樹林の保全とである。前者は都市化が進んだ東部で推進されたのに対して、後者はジャインアントセコイア (*Sequoia Gigantea*) の巨木が発見された西海岸に添って連なるシエラネバダ山中のヨセミテ溪谷に近いマリポサ樹林 (*Mariposa Grove*) の保存運動となって現われた⁵⁾。

2. 自然公園概念の提示

東部のエリートたちから自然状態を残そうという考えが次第に提示されるようになった。以下に紹介する人々の考えが残されていたのは、彼らの文章がたまたま印刷されたためであろうから、彼らの他にも同様な考えを持っていた人々がいたはずであり、必ずしも彼らが発案者であるとは言えない。しかし、彼らの考えが印刷され、人口に膾炙することによって、後の国立公園設立運動に対して、影響を与えたことは確かである。

1) カトリン (George Catlin)⁶⁾⁷⁾

ホットスプリングスに保留地が設定されたころカトリン (George Catlin) はアメリカ西部をしばしば訪れ、アメリカインディアンを調査したり、絵を描いていた。彼は1832年にミズーリ川を遡り、5月に現在のサウスダコタ州に至りブレーリーのインディアンを観察した。この際の記事がその冬にニューヨークの新聞に掲載され、国立公園概念についての最初の記録となっている。その中で、彼は西部開拓によりバッファローなどの野生動物やインディアンが滅び行く現状を踏まえて、以下のように述べた。

「政府の偉大な保護政策によって将来はそうなると思われるが、この世界に足を踏み入れその価値を心から評価できる人にとって、その手つかずの美しさと自然さがそのまま保たれた状態で偉大な公園 (Magnificent Park) の中に保全されていることを想像することはなんとすばらしいことではないか。そこでは、世界の人々が幾世代にもわたって、その地のインディアンが伝統的な衣裳で野生の馬に乗り、頑丈な弓と、盾と槍を持ち、逃げ回るエルクやバッファローの群の中を進むのが見られる。将来、アメリカにとって、その洗練された市民と世界の人々が見学できるように保全すれば何と美しくぞくぞくする見本となることか。それは、人間と動物とを、自然美を野性と新鮮さを持ったままに包み込んだ国家の公園 (Nation's Park) である。」 彼の主張の特筆すべき点は、野生動物だけではなく、そこに住むインディアンをも含めて保全すべきであると考えていることである。しかし、丁度40年後にイエローストーンに設立された国立公園は先住民を無視したものであった。また、野生動物や生息地であるブレーリー

の保全に関しては1970年代に至るまで本格的に考慮されなかった。さらに、この中に "Uniformly sterile, and of no available use to cultivating man" というランテ⁸⁾が主張する無価値の土地 (Worthless land) 理論の萌芽とも見られる表現がある。

カトリンの記録の特色はインディアンと野生動物の関係を捉えた点である。この点景勝を中心としたその後の国立公園とは捉え方が異なるが、後になって彼らがアメリカ大陸の生態系に組み込まれていたとする認識が広まったり、ナバホ (Navajo) 保留地に見られるインディアンの民族公園 (Tribal Park) の成立に影響を及ぼしたとも考えられる。当然インディアンの生活も今では変わったので、彼らを含む生態系を今日創り出すのは不可能であるが、近年ビジターセンターなどで彼らの文化や歴史を展示・解説するようになったのは大きな変化である。

2) ソロー (Henry David Thoreau)⁹⁾

カトリンが広く西部の草原を見てまわったのに対して、ソローは東部のより身近な都市近郊の自然の中で考えを発展させた。彼はマサチューセッツ州のコンコード (Concord) にあるウォールデン池 (Walden Pond) 畔 (写真-1) の小屋での自給自足的生活を綴ったエッセイ、「森の生活 (原題: Walden, 出版: 1854)」で有名である



写真-1 ウォールデン池

が、そこに居を定めていた1846年と、その後の1853年、1864年の3回にわたって、人間の影響がより少ないメイン州の森林を見て歩いた。そのエッセイは彼の死後の1864年に「メインの森 (The Maine Woods)」として出版された。その第1章の終りに次の様なパラグラフがある。

「イギリスの王たちは、かつて、スポーツや食料のための、"王の獲物"を維持するために、時には集落を破壊してまでも森林を造成したり拡げたりした。彼らは本能によってそうしていたのだと私は思う。我々はこの王の権力は非難するが、集落が破壊される必要のない自分たちの国立保護地域 (national preserves) を持とうではないか。その中では熊や豹や、さらには狩猟民も生存し、決して"文明化"されてはならない。この我々の森林は王の獲物が生息するだけでなく、創造主である王自身も存続し、無駄なスポーツや食料のためではなく、インス

ビレーションと我々自身の本当の活力の再生(recreation)のためにある。それとも我々も、悪漢たちのようにその自分自身の国立の保護地で密猟をしてそれら全てを絶滅すべきか。」

ここでも動物だけではなくその中で生活する人間を含めているが、インディアンではなく自分たちであり、生活のためではなく自分たちの精神を高揚するために保全するという考え方が、カトリンとは違う。ソローは1851年の「歩くこと(Walking)」と言う題の講演の中で、自然(wildness, wilderness)の意義や土地の私有化の問題についても論じている。その中に、"natural preserve, not for idle spot or food, but for inspiration and our own true recreation"という文章があり、一種の自然公園の考えを示している。しかし、ソローは開拓者たちのような厳しい自然を体験したことはない。ウォールデン池での生活を体験した際にも、都市とのつながりは保っていた。すなわち、フロンティアの大自然とソローの体験したそれとは状況が全く異なっていた。ゆえにソローの提唱は概念的なものに留まらざるを得なかった。

このころになると東部では都市化にともなう生活環境の悪化が問題となり、都市公園の設立を促した。1857年にはニューヨークでセントラルパークがデザインされた。しかしながら大自然そのままを公園とする考えは当時の一般の人々の理解できるものではなかった。それ以前に、一般の人々はそういう場所に行くだけの余裕はなかったので存在さえも知らなかった。

3) エマーソン(Waldo Emerson)

ソローとともに超越主義の思想を展開したエマーソンも森林を公園とする考えを1844年の"Nature"というエッセイ¹⁰⁾の中で、「森林は実用と喜びを兼ねた優美な公園となる(The forest should become graceful parks for use and delight)」と書き記した。彼は具体的な空間の設定を考えて、いかなる働きかけをしたわけではないが、その思想が、ヨセミテ渓谷の後背地を成すシエラネバダ山脈の保全を推進したミュア(John Muir)に大きな影響を及ぼした。

4) マーシュ(George Perkins Marsh)¹¹⁾

マーシュは外交官としてヨーロッパに長年生活した経験から、人間による自然環境の改変問題を意識した。とりわけ、放牧によって植生が衰退した地中海の状況に危機感をいだいた。その問題が急速に開発の進むアメリカにおいても無視できないと感じて、ヨセミテが州に移管された年、1864年に"Man and Nature"を出版し、生態学的視点から自然をとらえ、人間の活動による環境改変の問題をとらえた。さらに、そのような過ちを繰り返さないで賢く利用することが大切であると訴え、その後の保全運動に大きな影響を及ぼした。

3. ヨセミテ公園の設立

1832年に国の保留地(Reservation)に設定された南部のアーカンソー州のホットスプリ

ングス(Hot Springs)を最初の国立公園とみなす考え方もあるが、第4章で論じるように、その設定理由は療養効果が有名になった温泉の私有化を抑制し人々が自由に温泉を利用できるようにするというものであり、面積も4平方マイル(2,560エーカー)程度であった。すなわち、その自然環境ではなく温泉のアクセス確保のために設立されたものである。その後、1921年に周辺地域を編入し4,800エーカー拡大して正式に国立公園となり今日に至っているが、それでも都市公園の規模であり、その内容は19世紀の温泉保養地が保全された歴史公園というのがより正確で、一般の国立公園とは別のものである。

同じく1830年代に推進されたナイアガラの滝の私有化防止保護運動も、第6章で詳述するように1885年にオルムステッド(Frederick Law Olmsted)らの努力によって公園として私有地を買収することが決定されたが、あくまで名勝の保全であり国立公園という広がりを持てなかった。これに対してヨセミテは当初幅1マイル長さ7マイル程度の渓谷という限定された空間が州の管理下に置かれたが、その法律がイエローストーン国立公園設置の際にも援用されていることから、むしろ最初の保全空間の事例としてとらえることが可能である。また、当初は名勝の保護が動機であるが、その後発展していく際の核になったのでヨセミテの州立公園化は実質的には最初の国立公園とも理解できる¹²⁾。

1) 白人による発見

ヨセミテ渓谷(写真-2)にはアワネチ(Ahwahneechee)族というインディアンが居住していた。白人としては1833年にウォーカー(Joseph Walker)らが初めてヨセミテ渓谷を見たと言われている。よく知られるようになったのは1851年にサベッジ(James

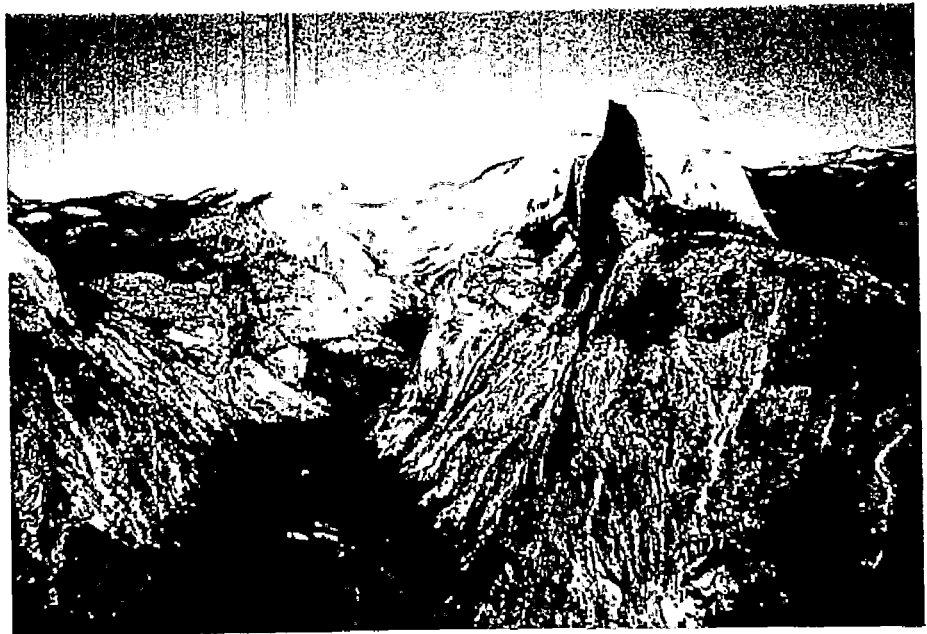


写真-2 ヨセミテ渓谷

Savage)率いるインディアン討伐隊が訪れてからである。このように白人に知られたのはイエローストーンに比べると遅いが、太平洋側沿いの地域は海路が利用されたため、ロッキー山中よりも発展が早かった。さらに、1848年にシエラネバダで金が発見されると山中に急速に人が

入り、開発の手が伸びた。

1855年にはハッチングス (James M. Hutchings) は最初のヨセミテ観光団を組織し、1859年には観光案内的な記事を雑誌 (Hutchings California Magazine) に掲載している。また1857年には最初の宿泊施設ができた。1859年にはラモン (James C. Lamon) が溪谷に入植して土地の払い下げをもくろんだ。東部でも1861年には新聞 (Boston Evening Transcript) でその景観がヨーロッパアルプスなどと比較して紹介された。1859年にはウィード (C. N. Weed) がハッチングの本のために溪谷の最初の写真を撮影し、1863年には画家ピアシュタットが訪れている。このようにヨセミテ溪谷は急速に人々に知られるようになった。

ほぼ同時期に、ヨセミテ溪谷南側のシエラネバダ山脈の西麓に生育していたセコイア巨木群が、開拓の手が進むにつれ急速に伐採されて行った (写真-3)。

2) 州への移管

1864年2月20日にサンフランシスコ在住の富豪で、汽船会社 (Central American Steamship Transit Company) のカリフォルニア支局長でもあったレイモンド (Israel Ward Raymond) がカリフォルニア州選出の上院議員コンネス (John Conness) に宛てた



写真-3 マリボサのセコイア樹林

手紙で、「民衆の利用、リゾート、レクリエーションのため (for public use, resort and recreation)」ヨセミテ溪谷とマリボサ樹林を連邦政府から州に移管するように働きかけた。さらにその中で木材資源はないが、私有化されないうちに保全することの必要を訴え、その保護地は譲渡できないものの10年以内のリースはできると考えを示している¹³⁾。

コンネスはこの手紙を添えて一般土地局 (General Land Office) に法案の作成を依頼し、議会にはかった。その法案は5月17日に上院の公有地委員会で好意的に評価された。さらにコンネスはここは「いかなる一般的利用目的には価値はない (for all public purposes worthless)」が世界でも有数の景観であると論じている。ここで価値が無いということは金を始めとする鉱物資源や木材資源などが無いということを意味している。さらに、マリボサ樹

林に関しては、かつてイギリスで開催された世界博覧会でセコイアの樹皮を展示した際に、イギリス人がアメリカ人のでっちあげとみなしたことに言及して、貴重な樹林の保護をナショナリズムを掻き立てる論法で訴えた。また、この空間は州に譲渡されるので南北戦争最中で財政的に逼迫した連邦政府にはいかなる負担もかからないことを強調した¹⁴⁾。

このようなコンネスの演説を受けて、公園法案は異議無しで両院を通過した。1964年6月30日にヨセミテ渓谷とその約20km南方のマリボサのセコイア樹林を連邦政府から州に譲渡する法案がリンカーン大統領によって署名され、ヨセミテ州立公園とでも呼ぶべき空間が世界最初の自然公園として設立された。

このようにして州立公園となったヨセミテとマリボサ樹林は初めての自然公園と言えるが、実体は40平方マイル程度の広さの渓谷と巨木群という天然記念物的な保全であった。とりわけ、マリボサの場合は森林の保全というよりも珍しい巨木の保護という見地からジャイアントセコイア林分が伐採から逃れたというのが近いように感じられる。

サックス¹⁵⁾はこの法案が連邦政府所有地が実利的ではない目的に供された最初の事例であるにもかかわらず、その背景がほとんど知られず、議会で議論もないまま成立した特異なものであると述べている。さらに、レイモンド以外の公園化推進者に関して検討しているが断定できる人物は全く浮び上がってこないと言う。

この法案がたいした議論もなく成立した背景としては、第1に南北戦争の最中であり、西部の山中の土地の移管に対する関心は皆無に等しかったことが考えられる。第2に、2年前に施行された土地払い下げ法(Homestead Act)によって入植者たちがヨセミテの景観やセコイアの巨木をだいなしにしてしまうのではないかと危惧の念を提案者たちは抱いていたと考えられる。州に移管することによってこの法律の対象外となり、入植者の私有地になることが避けられる。第3に、管理する州政府はこの公園に対して、いかなる支出も必要ではないと考えていたので、ただ州の財産が増加するのは良いことであると判断した。いずれの理由が原動力であるにしても、渓谷と巨木群という景勝地的指定であった。

この法律では10年を越えない期間のリースが許可され、その管理は州知事と彼が任命した無給の8人の委員から構成される委員会が行なうと規定されていた。公園境界は曖昧で、保護の規定がなかった。カリフォルニア州は1866年に正式に議会の議決を経てこの譲渡を受入れたが、実際には、ロー(Frederic F. Low)知事は1864年9月28日に受入れを宣言した。さらに、この法律の規定にしたがって公園管理運営委員会が設立され、秋までには測量が完了した。

管理委員会の中心はニューヨークのセントラルパークのデザインなどで著名で、当時マリボサ鉱山のマネージャーとして迎えられていたオルムステッドと州地質測量局の責任者ホイットニー(Josiah Dwight Whitney)であった。1863年にニューヨークを去ったオルムステッドはマリボサ鉱山の責任者として赴任し、翌年の夏にはヨセミテも訪れている。また、1866年

の州議会での正式承認を受けて、マリボサの樹林の発見者でもあるクラーク (Galen Clark) が年俸\$500で管理人に任命された。

3) オルムステッドのレポート¹⁶⁾

オルムステッド (写真-4) が 1865年8月9日に作成したヨセミテ公園の管理に関するレポートが1952年にローパー (Laura Wood Roper) によって発見された。その中でオルムステッドはヨセミテの概況について説明するとともに、自然環境の保全という今日的視点からその具体的な管理方法を提案している。その内容は、セントラルパークの



写真-4 オルムステッド

計画と同様に、当時としては画期的なものであった。そのなかで、第1に、風景が人間の健康、レクリエーションに及ぼす効用、第2に、私有化を阻止し政府によって、自然地を公園として、一番レクリエーションを必要とする大衆に解放することの必要性、第3に、"museum of natural science" として、芸術、学問、研究の場としての自然公園の必要性を提案した。

さらに、以上のことを実現するために、公園へのアクセスの改良が不可欠と考え、速く、安く、容易に訪れることができるように道路を改良し、キャンプ用品を備え、女性用のトイレも完備した小屋の設置についても、予算案を示しつつ言及している。さらに、道路を改善することによって防火帯にもなり、道路沿いの森林の保全が容易になること説明し、遊歩道や山小屋などのデザイン・管理にまで言及している。

このレポートは採用されなかった。オルムステッドの努力にも関わらずマリボサ鉱山の経営は行き詰まり、このレポートを書いた3ヶ月後に再びセントラルパークの仕事に就くべく、彼はニューヨークに戻っていった。彼が去ったためか、あるいは保全よりも観光開発志向の強いホイットニーらの委員が、地質測量局の予算の削減にもつながるオルムステッドの案に反対したためか、このレポートは採用されなかっただけでなく意図的に抹殺された模様である¹⁷⁾。

オルムステッドが公園管理委員に任命され、このようなレポートを残しているため、彼がヨセミテを公園として保全することに関与しているのではないかと言う説がある。この点に関してサックス¹⁸⁾はオルムステッドのレポートが公園設立法案作成者に影響を及ぼしたとは考えられないと述べている。オルムステッドが初めてヨセミテを訪れたのは既に議会での審議が完

了した1864年夏であることに加えて、1952年まで埋もれていたその報告書が公園設立運動に関わった人々に影響を及ぼしたという証拠は全くない。

4) 管理問題

公園が観光業者への土地のリースからの収入によって管理されると認識されたため、当初のみ僅かな予算が配当され



写真-5 シエラネバダ山脈

た。しかし、ラモンの場合年に\$1ドルというように形式的な賃貸料であったため十分な収入は上がらず、管理はなおざりとなった。当時溪谷の土地は測量されていないためホームステッド法による私有化の対象とはなっていなかったが、その観光地としての将来性から投機目的の不法占拠者が他にも入植していた。これらの不法占拠者との闘争は議会から最高裁まで持込まれ、結局、1872年12月の判決で私有権主張者は敗訴したものの、その施設投資に対する補償としてホテルを買い取ったハッチングには\$24,000、農場を営んだラモンには\$12,000という当時としては法外な金額が支払われた。ランテ¹⁹⁾はこのハッチングらと州との闘争の中でヨセミテが連邦政府から州に信託されたもの(national trust)であることや国立公園が合憲であることが確認されたことが意義深いと述べている。

この様にして溪谷の私有地問題は解決したものの、その間にリースによって有料道路が設置され、溪谷内の半分以上が柵で蔽われるという事態となり、管理委員会に対する批判も高まった。

5) 国立公園化²⁰⁾

天然記念物的保全を脱した、広大な自然環境の保全の認識が生れるのは、1868年にシエラネバダ山脈の中に来たミュア²¹⁾が、その自然に魅せられて、ヨセミテやセコイアを含むシエラ山脈に国立公園を設立する運動を展開するまで待たねばならなかった。彼はシエラネバダ(Sierra Nevada)山脈(写真-5)での羊の放牧による環境破壊を雑誌と通じて訴えた。

しかし、その運動を支持したサザンパシフィック鉄道(Southern Pacific Railroad)と灌漑関係者の存在が無視できない。彼らは肥沃なサンホワキン(San Joaquin)溪谷の農業開発がヨセミテ地域からの水利の安定化に掛かっている

ことを認識して、保全を求めた²²⁾すなわち、ミューアのようにロマンと科学から保全を求める人々と、水利と言う功利的な理由から保全を求める人々の利害が一致した。

一方で、1880年代になるとシェラ地域も測量が完了し、払い下げの対象となっていた。そのため私有化を危惧してか、1881年にはカリフォルニア州のミラー(Miller)上院議員によって2つの法案が上程された。一方は"to provide for enlargement of the Yosemite Valley and the Mariposa Big Tree Grove Grants" というヨセミテ州立公園の拡大を目指すもので、他方は"to provide for setting apart a certain tract of land in the State of California as public park"という新たな保留地を設置すると言う趣旨であった。その後も類似法案が提出されたが成立には至らなかった。

1890年の3月にはカリフォルニアのバンデバー(William Vandever)下院議員によってヨセミテ国立公園設置法案(to establish the Yosemite National Park)が出された。それが9月30日に公有地委員会のペyson(Payson)議員から修正された法案(H.R. 12187)として報告された際にはカリフォルニア州のある部分を森林保留地として除外する(to set apart a certain tract of land in the State of California as forest reservation)となっていた。さらに修正案では対象面積が5倍となっていた。

彼はその地域の景観の保護を訴えているが、その面積は2,096,640エーカーですでに私有地および私有権が主張されている面積が134,400エーカー含まれていた。しかしながら、この法案は下院を反対なく通過し、同日に上院も同様に通過した。翌10月1日にはハリソン(Benjamin Harrison)大統領によって署名されるという記録的スピードで成立し、ヨセミテとマリボサ樹林からなる州立公園を取り巻く1,500平方マイルの地域が「保護林(Reserved Forest Lands)」として設定された(図-1)。

この理由として、第1に、1864年のヨセミテ溪谷の法律と紛らわしく、会期末の慌たださの中で議員たちもよく理解しないまま賛成したこと、第2に、利害のかかわっている人々が反応する時間がなかったこと、第3に、南カリフォルニア鉄道による議会工作の成果、第4に、数日前に成立したセコイアの公園化に関する法案の影響などがあげられる。

また、ここで公園という言葉が使われなかった理由として、既に溪谷と樹林が州立公園となっていたことも関係していようが、これほどの広大な地域を公園という名称で開発から除外する法案では議会の承認を得ることが困難であることが予想されたため支持者たちが名称変更して現実的に対応したと考えられる。その名称は水利のための保全を求める人々の支持も得やすい。

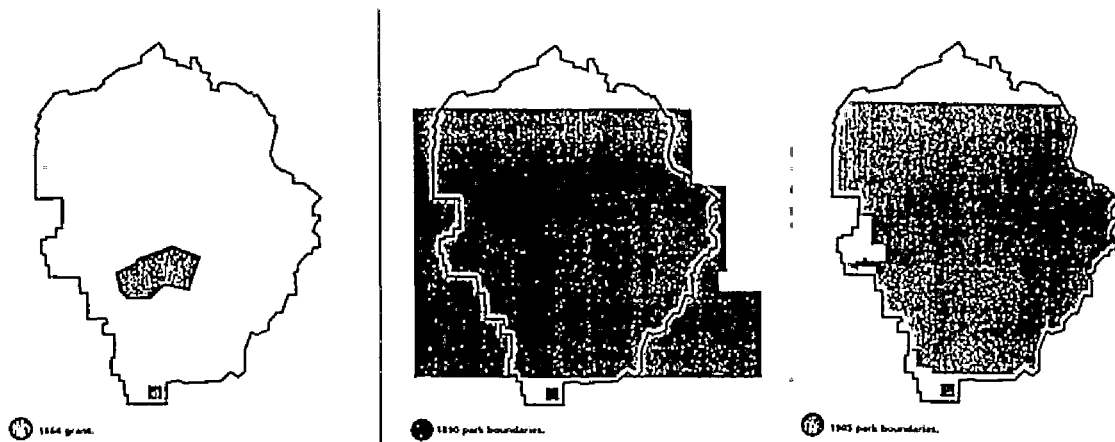


図-1 公園境界の変遷

さらに、この法律の数日前の9月25日には250平方マイルのセコイアが公園 (public park or pleasure ground) という名称で成立していることも関係があろう。数日を隔てて近接した地域に広大な国立公園を設置するのでは支持が得にくかったにちがいない。

ヨセミテと同時にグラント将軍 (General Grant) の木を取り巻く地域も保護林 (Reserved Forest Lands) となり伐採から免れることになった。これらの法律がセコイア、ヨセミテ、ジェネラルグラント (後にKings Canyon国立公園に含まれる) の3つの国立公園の出発となった。

一方、ヨセミテ渓谷は州の管理下におかれたままであったので、これらを連邦が管轄する公園が取り囲むという形態になった。このようにヨセミテはその渓谷とマリボサの樹林からなる州立公園を連邦政府の所有する保護林が取り囲むような形態を1906年までとった。1906年には州立公園の部分が連邦政府に返還され全体としてヨセミテ国立公園となった。

ナッシュ²³⁾が論じているように公有地政策ではホームステッド法による国有地の払い下げが推進されていた時代にこういう法案が出されたことはその転換期であったことを示すとも言える。

ヨセミテでは当初から、1883年に軍隊が管理に当たったというイエローストーンの先例に倣って同様に軍隊によって管理されたことは実質上の放置期間が長かったイエローストーンに比べると幸いであったが、ここでも罰則規定を持った取り締まり法がなかったために密猟や放牧のための火入れの問題の対応に苦慮した。また、地域内の私有地の存在と渓谷とマリボサ樹林が州の管轄であったことが管理上大きな問題であった。私有地に関しては1905年に公園境界の変更を行い、542平方マイルを除外し13平方マイルを追加した。半分以上が柵で覆われていたと言う渓谷等の州の管理する地域も1906年に連邦政府に返還された。しかし、公園内の私有地問題は今日に至るまで尾を引くことになった。

4. 考察

アメリカの自然景観を国家の自己アイデンティティの対象として評価する動きが出てきた状況を背景として、ヨセミテは1864年に渓谷と樹林の州による名勝的保護から始まり、1890年に周囲が水利保全の目的で実質上の国立公園となったことは、その間の環境意識の変化の事例と言える。しかし、ヨセミテ国立公園という名称が1907年まで使用されなかったことから理解されるように、あくまでその地域そのものではなく、その地域からの産物としての水源涵養機能が評価されていたわけである。換言すればその地域の自然環境自体の保全は結果でしかない。また、その公園空間がジャイアントセコイアの樹林地をも保全したが、それらの材の価値が低かったからに過ぎない。そのことはサンフランシスコ北部からオレゴン州の海岸にかけて生育するレッドウッド(*Sequoia Sempervirens*)に関してはジャイアントセコイアと同じ頃に保全が訴えられたにもかかわらず、既に土地が私有化され、その材の商業的価値が高かったので国立公園設立が困難であったことと比較すれば明らかである。1901年に設立されたビッグベイスンレッドウッド(Big Basin Redwood)州立公園などを核とし、保全団体や大富豪のロックフェラーなどからの買収資金の寄付によりレッドウッド国立公園が設立されたのは1968年の10月であった。その過程は巨木群の個体的保全から生態系の保全への以降の歴史でもある²⁴⁾

文献

- 1) 餅田治之(1984): アメリカ森林開発史, 古今書院
- 2) Marx, Leo(1964): Machine in the Garden, Oxford Univ. Press
- 3) Novak, Barbara(1980): Nature and Culture, Oxford Univ. Press
- 4) Nash, Roderick(1982): Wilderness and American Mind, Yale Univ. Press, New Haven.
- 5) Strong, Douglas Hillman(1968): Trees or Timber?, Sequoia Natural History Association
- 6) Ross, Marvin C.(1959): George Catlin, Univ. of Oklahoma Press
- 7) Nash, Roderick Fraser(1990): American Environmentalism(3rd ed.), 31-35所収, McGraw-Hill
- 8) Runte, Alfred(1987): National Parks, the American Experience(2nd ed.), 48-64, Univ. of Nebraska Press
- 9) Thoreau, Henry David(1962): Walden and Other Writings, Bantam Books
- 10) Huth, Hans(1957): Nature and the American, 87-89
- 11) Marsh, George Perkins(1974): Man and Nature, The Belknap Press of Harvard Univ. Press(初版1864)

- 12)Runte, Alfred(1987): ibid 29
- 13)Runte, Alfred(1990): Yosemite, the Embattled Wilderness, 19, Univ. of Nebraska Press
- 14)Runte, Alfred(1990): ibid:, 22-23
- 15)Sax, Joseph L.(1976): America's National Parks, Their Principles, Purposes, and Prospects, Natural History, pp.59-87, Oct.
- 16)Olmsted, Frederick Law(1952): The Yosemite Valley and the Mariposa Big Trees, Landscape Architecture, 43(1):12-25
- 17)Runte, Alfred(1990): ibid., 18-32
- 18)Sax(1976): ibid.
- 19)Runte(1990): ibid., 35
- 20)Buck, Paul Herman(1922): The Evolution of the National Park System of the United States, 59-70, Master's Thesis, The Ohio State Univ.
- 21)Cohen, Michael P.(1984): The Pathless Way, John Muir and American Wilderness, Univ. of Wisconsin Press
- 22)Runte(1990): ibid., 47
- 23)Nash(1972): ibid.
- 24)Schrepfer, Susan R.(1983): The Fight to Save the Redwoods, Univ. of Wisconsin Press,

第2章 最初の国立公園：イエローストーン国立公園の成立とその理想化

摘要：世界初の国立公園となったイエローストーンは、自然環境を保全し公共的利用を確保するために成立したと言われている。本論では諸説ある成立過程を、これまでの研究成果にもとづいて整理・検証するとともに、真実よりも理想化されたイメージの方が一般に知られるようになった理由を探った。まず成立過程に関しては、自然環境の保全ではなく間欠泉などのロマンティズムやナショナリズムの対象となるモニュメントの私有化を阻止して観光化による経済発展を求めることが主たる動機であることが明らかになった。その後、公園局などの関係者と公園に夢を託す人々による国立公園の成立過程やその理念の理想化が進められた。その結果、国立公園の現実の「自然」と一般の人々の描く幻想としての「自然」とのギャップを助長する結果にもなり、今日の公園管理政策にも影響を及ぼしている。

1. 研究目的と方法

1) 目的

1872年にイエローストーン(Yellowstone)(写真-1)が世界最初の国立公園として設立され、その後、国立公園制度が世界に広まったことは、アメリカが世界の文化に貢献した例として認識されている¹⁾イエローストーン国立公園の成立。今日多数の日本人も含め年間200万人以上が訪れているにもかかわらず、その成立史を正確に記した文献が日本には皆無であるだけでなく、アメリカ国内でも成立背景を理解する人は限られている。

そのため、すでに50年以上前に否定されている公園成立エピソードが、最近の日米の国立公園紹介文献にも頻繁に引用されている状況にある。それらには国立公園化の考えが1870年の探検隊が川のほとりで焚き火を囲んでキャンプした際に突然と閃いたように説明されているが、第1章で述べたように、自然公園あるいは保護地域の考えは、カトリン、ソロー、エマーソン、マーシュらによって19世紀半ばに提示され、具体的な空間としてもヨセミテ渓谷の保全例²⁾があり、イエローストーン国立公園設置法は1864年のヨセミテ州立保留地設立法に極めて類似している。

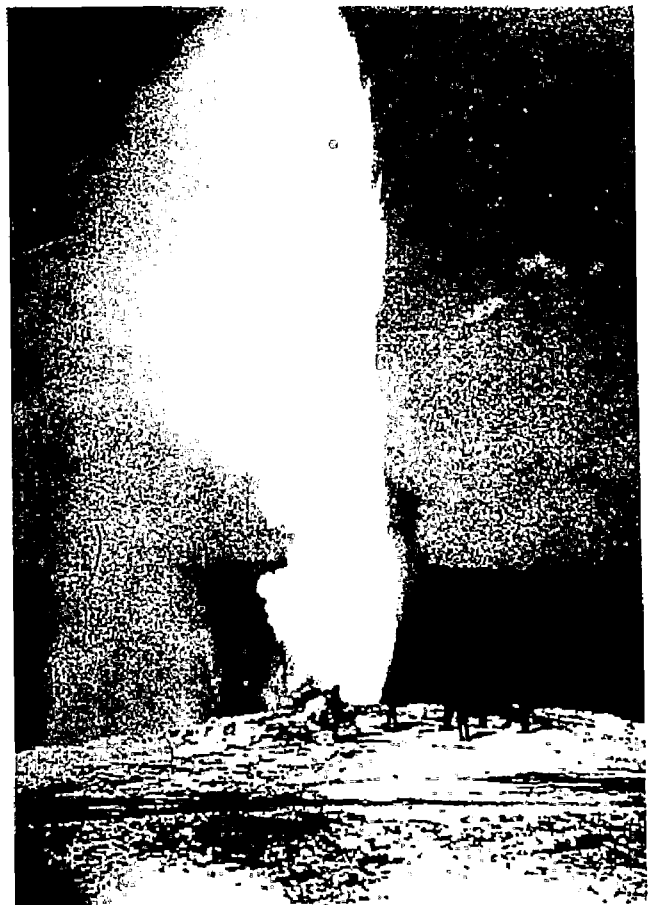


写真-1 ジャクソン撮影オールドフェイスフル間
欠泉

このような歴史的事実が紹介されないまま、公園の理念に関して様々な解釈がなされている今日、原点に戻ってその成立過程を振り返ることは今後の公園のあり方に対しても示唆するところがあるだろう。そこで、本論では成立過程を史実に基づき批判的に検証した上で、公園の設立が理想化された背景を明らかにして、今日に至る国立公園管理の問題の解決の糸口を探った。

2) 方法

初期のイエローストーンの歴史に関しては、1895年に出版されて以来好評で版を重ねたチッテンデンの著書³⁾⁴⁾が有名であるが、むしろ、国立公園の支持者であったクランプトン上院議員が1932年にとりまとめた内務長官への報告書⁵⁾の方が、資料に忠実に基づいているので評価に値する。同様に、初期の国立公園史に関してはバックの論文⁶⁾も参考になる。ここでは、近年の研究の成果も盛りこまれたヘインズ⁷⁾⁸⁾とパートレット⁹⁾の文献を重視して、成立までの概要を整理した。可能な限り原資料に当たったが、今日入手が困難なものは、参考文献の巻末資料として掲載されたものや資料集に所収のものを活用した。文献によって見解が異なる場合には、引用資料から信頼性を比較検討した。

次に、このようにして明らかになった成立過程がその後理想化されていく様子を、1990年までの日米の50ほどの関連文献における公園成立の紹介内容から調べた。それによってチッテンデンによるラングフォードの日記の紹介に端を発する理想化された成立過程の普及に、出版物やインタープリテーションが及ぼした影響とその背景を明らかにした。

2. 先駆者たち

19世紀の初めに毛皮を求めて白人がこの地域を訪れるようになる遙か以前から先住民たちはこの地を生活、あるいは狩猟の場として利用してきた。そのことは公園内各所に発見されている遺跡からも明らかである。ジャネットスキー¹⁰⁾によれば、氷河が後退した8,500年前からその利用は始まり、公園内で産出される黒曜石は紀元前にオハイオで使われている。紀元前にバノックトレイル(Bannock Trail)と呼ばれるイエローストーン北部を抜け、ロッキー山脈を越えるルートが存在し、19世紀前半からは白人の罾猟師や探検隊も利用していた。クロー(Crow)、ブラックフット(Black Foot)、ショショーニ(Shoshone)の3部族が公園地域を利用し、狩猟や採集のため訪れていただけでなく、狩猟動物の繁殖を増進するために数千年にわたって火入れをしていたという。また、冬は非常に厳しかったものの地熱を利用することも可能であった。

白人たちが初めてこの地域に足を踏み入れた頃に住んでいたのはショショーニの系統のシープイーター(Sheep Eater)とよばれる少数のツカドウカ(Tukaduka)族で、公園地域に西暦1800年頃から定住し始めたと言われる。西部開拓の進捗¹¹⁾ともな¹²⁾って周囲に白人が居住するようになってからもイエローストーン地域だけが空白状態に置かれた理由として、好戦的なブラック

フット族が、その地域を行動圏としていたことが理由としてあげられる。

罾獵師、金採鋤師などの活動は国立公園の設置とは関わりが薄いと思われがちであるが、彼らのもたらす情報が調査隊の派遣に結びついただけではなく、国立公園の生態系管理が重要となっている今日、人間の影響が比較的少なかった公園設置以前の自然環境を知る上でも、先駆者としての彼らの記録は貴重である。そこでゴウンス作成の当時の文献・地図資料集¹¹⁾などを参考にして調査隊以前の情報を以下にまとめた。

1) 罾獵師の時代

1800年ごろからビーバーなどの毛皮を目的としてトラッパー (trapper) と呼ばれる罾獵師がロッキーの山々を訪れるようになっていた。イエローストーン地域が初めて白人の目に晒されたのは、1805年ごろといわれている。その後1840年頃まで100人以上のトラッパーたちがビーバーを求めて訪れているようであるが、彼らの多くは文盲で記録を残さなかった上、誇張したほら話を一種の余興として利用したので、イエローストーンの驚異的景観の話をしても信ずる人が少なかった。しかし、彼らは高度な技術をもった専門職であった。このことは未知の世界でいかなる状況に遭遇しても生き延び、仲間同志では地域の詳細な情報を交換していた事実からも明らかである。そのような視点から彼らのほら話を見れば、この地域に精通していた彼らが、有望な獵場を知らせることを望まなかったため、作り話を混在させて、その情報をあいまいにさせたという見方も可能となろう。

当時、毛皮取引はアメリカの経済生活の最先端であり、ビーバーは毛だらけの銀行券とよばれるほど価値が高かった。だが、1840年頃になるとビーバーの激減と、山高帽の素材がその毛皮から絹に変更され需要がなくなった結果、獵師たちの活動は途絶えた。しかし、彼らが残したイエローストーンに関する情報は後の探検隊派遣にも影響を及ぼしただけではなく、その地図が活用されていた。

そのような獵師の中で中で1803年10月15日から1806年8月5日まで西部を踏査したルイス・クラーク (Lewis & Clark) 探検隊の一員であったコルター (John Colter) は特に有名である。探検隊から離れてからの数年間に彼の辿ったルートが1814年の探検隊の公式地図にも記されたことから、彼がイエローストーン地域を訪れた最初の白人とみなす文献もいくつか見られる。だが、地図と照らし合せて資料を検討したヘインズ¹²⁾は、彼がイエローストーンを訪れた確証はないと論じている。また、従来イエローストーンを指していると考えられた「コルターの地獄 (Colter's Hell)」と呼ばれる場所はイエローストーンではなく、現在のワイオミング州コディ (Cody) の近くの場所であることも確認されている¹³⁾。

1822年にアシュレー将軍 (General William Ashley) は毛皮会社を設立し、毛皮を求めてミズーリ川を遡行する100名の屈強な若者を募集した。彼の会社はランデブーシステム (rendezvous system) を採用して、トラッパーが毛皮と必需品を出向いて交易する手間を

削減した。そのメンバーであったボッツ¹⁴⁾は、1827年に兄弟に宛てた手紙の中でブラックフット族に毎日のように威嚇されていることを記すとともに、イエローストーン湖や地熱現象について述べている。1829年に同様にトラッパーとなったミーク¹⁵⁾はインディアンの攻撃を受けた折、仲間とはぐれてイエローストーンの今日のノリス間欠泉地域(Norris Geyser Basin)に足を踏み入れ、その記録を40年後に書き記している。

一方、アシュレーの会社のライバルとなったアメリカ毛皮会社(American Fur Company)の社員フェリスはランデブー地点での交易に随行した際、トラッパーたちからイエローストーンの話聞き、好奇心にかられて訪れた。1842年に週刊誌(Western Literary Messenger)に掲載された彼の記録¹⁶⁾によれば、1834年5月にマディソン(Madison)川源流の煮え立つ泉のうわさを確かめるために、回り道をしてイエローストーンを訪れたと述べている。彼による間欠泉地域の描写は生き生きとして鮮明な上、1836年に彼が記したこの地域の地図は他のものに比べて正確である¹⁷⁾。ヘインズ¹⁸⁾は彼が好奇心から訪れた最初の観光客である点、元測量技師であったためかその記述が以前のものに比べてきわめて正確である点、初めて間欠泉を"geyser"と表現していると言う3点で注目している。

フェリスの滞在が数時間に過ぎないのに対して、ラッセルは1835年7月28日に最初に訪れて以来、5回にわたってイエローストーン地域を隈無く歩き回っている。彼はトラッパーであったが、その文章は正確かつ表現豊かである。最初の訪問でラマー谷(Ramar Valley)を訪れた際には、その景観を叙情的に記し、美しいその場所で一生を過ごしたいくらいだと述べている¹⁹⁾。2回目には後述するブリッジャーの率いる狩猟グループに属していた。

その1804年生れのブリッジャー(Jim Bridger)は、ボッツと同様、1822年にアシュレーの募集広告で応募しトラッパーとなった²⁰⁾。1823年冬にはオレゴントレイル(Oregon Trail)のサウスパス(South Pass)の発見にも関わっているが、彼自身は記録を残さず、ほらふきで有名であった。にもかかわらず、彼は毛皮猟が終焉してからも砦(Fort Bridger)を設置・定住し、長期間にわたって案内人として活動したため、彼の知識に対する信頼性が評価されている。毛皮取引の最後の年、1840年にはベルギー人の宣教師デスメット(Pierre-Jean deSmet)が毛皮会社の一行と共にランデブー地点であるグリーンリバー(Green River)を訪れている。そこから彼が実際にイエローストーン地域に足を踏み入れたかどうか不明であるが、1851年にブリッジャーの情報に基づいて地図を作成している²¹⁾。最後のランデブーの後、ブリッジャーは砦でオレゴン開拓に向かう幌馬車を相手に商売~~仕事~~を始めるとともに、1840年代には好奇心のある金持たちをガイドしている。さらに陸軍ガイド兼インディアン通訳として、レイノルズ探検隊を案内している。なお、後に国立公園設置に関わったラングフォード(Nathaniel Pitt Langford)は1966年にブリッジャーに会ってイエロース

トーンの間欠泉などの話を聞き、興味を抱いたと日記に記している²²⁾。

2) 金採鉱師の時代

10年ほどの空白期間をおき、1850年代になると1848年にカリフォルニアで金が発見されたことに影響され、イエローストーンを取巻く地域にも一攫千金を狙って金採鉱師たちが押寄せてきた。彼らの一部もイエローストーンに足を踏み入れているが、罾獵師たちの活動と同様、信頼できる記録に乏しく、残された数少ない記録においてもその記述は景観よりも金の有無が中心となっている。

そのような中で、測量技師デレシイ(Walter W. DeLacy)は、1863年8月に42名からなる寄せ集めの金探索隊の隊長としてスネイク川(Snake River)を遡りイエローストーン地域に達した²³⁾。この一団は砂金探しが目的であったため、今日の公園地域の南西部に部分的に足を踏み入れたに過ぎないが、彼はその後モンタナ準州の地図作成責任者となり、1865年にモンタナ最初の公式地図(Map of the Territory of Montana with Portions of the Adjoining Territories)を作成し、イエローストーン内に地名を命名している。この地図が後述するフォルサムらの情報を元に1869年に改定され、ウォシュバーン隊によって利用されることになった。

同じく1863年にステュアート(James Stuart)の率いる金探しの一行も訪れているが、インディアンに襲われている。この時、左胸を撃たれたものの胸ポケットの手帳によって一命を取り留めたのが、後にウォシュバーン探検隊を組織し、モンタナ準州の知事ともなったハウザー(Samuel Thomas Hauser)であった。他にも金を求めて人々がイエローストーン地域に足を踏み入れているが、いずれも金を発見できなかったため、その話を伝え聞いた採鉱師たちの足が遠退いた。

3. 調査隊の派遣

毛皮や金ではなくイエローストーン地域の自然環境自体を目的とした隊が組織される頃には、上述した記録を残した者以外にも100人を越える白人が訪れ、その地理情報も正確になっていた。その点で調査隊の派遣は、未知の世界の探検と言うよりも、巷に流布する情報の確認とその社会化という点で認識されるべきである。

1) 関心の高まり

1859年4月13日にレイノルズ(William F. Reynolds)隊長の率いる工兵隊(Corps of Topographical Engineers)がイエローストーン地域の調査を命ぜられた。そのガイドとしてイエローストーン地域を熟知したブリッジャーが雇われた。この調査隊は初夏に南側から行動を開始したため、深雪と険しい地形に行動を阻まれた。また、与えられた調査期間も短く、南北戦争勃発のためイエローストーンの周囲を探索するにとどまった。それでもこの調査

を踏まえて作成された地図には、ブリッジャーからの情報をもとにイエローストーン地域の地形が書き加えられた。この調査報告²⁴⁾は南北戦争後の1868年によく出版されたが、地図はそれよりも数年早く印刷されていた²⁵⁾。この探検隊には1871年に大規模な政府調査隊を組織したハイデン(Ferdinand V. Hayden)が参加していたこと、および、最初の政府調査隊であった点で注目される。

また、1865年10月末にモンタナ準州知事代行ミーガー(Thomas Francis Meagher)ら一行が、ヘレナ(Helena)からベントン砦(Fort Benton)まで好戦的なブラックフット系統のピーガン(Piegán)族との条約交渉のため旅行の途上吹雪に見舞われ、クッペンス(Father Francis Xavier Kuppens)という宣教師のミッションに投宿することになった。その際、その春にインディアンの案内でイエローストーンを訪れた彼とその知人から、イエローストーンの話をして、知事がその地域を連邦政府の公園として保留すべきであると言ったことが、1897年に出版されたクッペンスの記録に残されている。なお、この一行の中には、モンタナ準州判事ホスマー(H. L. Hosmer)や後にウォシュバーン隊に加わった若い法律家ヘッジス(Cornelius Hedges)が含まれていた²⁶⁾。

ここでの話に興味を抱いたミーガーは、1867年にイエローストーン調査隊を組織した。6月29日の新聞記事(Virginia City Montana Post)には連絡担当者としてホスマー判事と後にウォシュバーン隊に加わるエバーツ(T. C. Everts)が言及されている。しかし、ミーガーは出発予定日の前夜、ミズーリ川で水死し、その探検は立消えとなった。それでも、イエローストーンを調査する動きは1869年まで幾つかあったが、いずれも遂行されなかった。

2) フォルサム-クック隊

そのような調査隊結成の動きを新聞で読み、興味を抱いたのがヘレナの近くのダイヤモンドシティ(Diamond City)に住むクック(Charles W. Cook)らであった。彼は1868年にイエローストーンの噂を耳にして行ってみたいと考えたという。その年はすでに無理であったが、翌1869年7月29日の新聞(Helena Weekly Herald)で探検隊が準備中であることが報じられていたので、参加するつもりで彼はヘレナに向ったものの誰も居なかった²⁷⁾。そのころ、インディアンと衝突が頻繁であったことに加えて、軍隊によるエスコートを断られたためヘレナの主催者は探検を中止していた。

しかし、戻ったクックは仕事仲間と同じクエーカー教徒の友人フォルサム(David E. Folsom)とピターソン(William Peterson)の3人だけで、行ってみることにした。3人は5頭の馬とともに9月6日にダイヤモンドシティを出発し、ボーズマン(Boseman)で食料などの最終準備を整え、イエローストーンを目指した。途中、1868年に入植したボトラー牧場(Bottler Ranch)を経てイエローストーン川を遡り、9月13日に今日の公園域に足を踏み入

れた。

彼らはイエローストーンの中心的部分をほとんど踏破し、10月11日にダイヤモンドシティに無事帰還したが、探検の話をして社会的信用を失うことを畏れてか、それほど積極的に広めなかった。しかし、フォルサムがヘレナに立ち寄った際に、ラングフォードは前述した銀行家ハウザーとともにファーストナショナル銀行に知合を招いて、フォルサムから探検について講演してもらった。このフォルサムの話を聞いて、ラングフォードらは翌年の探検の実現への意欲を燃やしたと記している²⁸⁾。

また、クラーク(Mr. Clark)という知合の勧めで、クックはフォルサムの記録と合わせた原稿の出版を試みたが、ニューヨークトリビューン(New York Tribune)やスクリブナー誌(Scribner's Monthly)などの著名な出版社は掲載を断った。ようやく1870年7月にシカゴの雑誌²⁹⁾に掲載され原稿料\$18~~18~~を受取った。だが、その著者としてクックだけが記載され、内容も編集者によってかなり省略されたものであった。

一方、フォルサムは、モンタナ準州の公有地監督管ウォッシュバーン(Henry Dana Washburn)のもとで地図を作成していた技師デレシーにイエローストーン情報を提供した。これによってそれまで空白であった地熱活動が盛んなイエローストーン核心部が正確に表記された。この地図はフォルサムらが戻ってから僅か21日後の1869年11月1日に公表されている。この縁でフォルサムは1869年の冬から、デレシーのパートナーとなり、1875年まで地図作成を手伝った。当然ながら翌年ウォッシュバーン探検隊はこの地図を活用している³⁰⁾。

軍の警護もガイドも、荷役夫もともなわない野外活動に熟練し息のあった3人組の自主的な探検は非常に臨機応変で、実質として探検本来の精神に溢れていた。彼らの好奇心を満たすための探検には科学的な目的がなかったが、その記録には自然の驚異に対する敏感な感受性、自然美を評価する感性を感じる。無名であったためあまり評価されていないが、自力で踏査したことは大掛かりなウォッシュバーンやハイデンらの隊よりも真の探検であったと言える。

なお、1922年に公園設置50年記念式典に招かれたクックは、マディソン分岐で探検最後のキャンプを設営した際、フォルサムとこの地域を政府が私有化を許すべきではないと論じたと伝えている³¹⁾。これは後に広く流布したウォッシュバーン探検隊の物語と類似している。この公共的利用の提案を別にしても、雑誌への寄稿、地図の改善、翌年のウォッシュバーン隊への協力などの社会的影響がクックらの探検の成果としてあげられる。

3) ウォッシュバーン-ドーン隊

フォルサムらに先を越されたハウザーらの探検立案者は、これ以上実現を先に延ばせないと感じたのか翌1870年に準備を整えた。そのメンバーにはウォッシュバーンを初めとしたモンタナ準州の有力者たちが含まれていた。その中でも初代の園長となったラングフォードとモンタナまで路線を延長しようとしていたノザンパシフィック鉄道会社(Northern Pacific

Railroad、以下NPRRと略す)関係に関して議論が多い。

1864年7月2日にNPRRは北西部の鉄道敷設権を与えられたものの何も具体化しなかったが、その期限切れが1870年に迫り、ジェイ・クック(Jay Cooke)の投資会社に援助を求めた。それを引受けたジェイ・クックはミネソタ州知事マーシャル(William R. Marshall, 在任期間1866-70)に協力を求め、70年2月5日にミネソタで工事を開始し、鉄道債と鉄道会社へ付与された沿線の土地の売却を促進するため、鉄道通過予定地域の宣伝をする必要に迫られていた³²⁾。

一方、マーシャルの義兄がテイラー(James W. Taylor)で、さらに義弟がラングフォードであった。テイラーがラングフォードにモンタナの徴税官の仕事や知事候補としての世話をしていたが、政権交代で彼は徴税官の職を失い、さらに準州の知事任命も受けることができなかった。いわば無職の彼は、新しい職が見つかるまで念願のイエローストーン探検に費やす時間を得た訳である。ここで、モンタナに詳しくイエローストーンの調査を計画していた無職のラングフォードとジェイ・クックの利害は一致する。

ラングフォードは1870年3月18日にニューヨークのNPRRの事務所に現れている。さらに、6月4日と5日にはジェイ・クックにも会っている。その後、彼はセントポール(St. Paul)でモンタナを管轄するハンコック少将(Maj. Gen. Winfield Hancock)に探検協力を要請し、7月27日にヘレナに戻り、8月1日には調査隊の派遣が具体的になったと記録している。

ここで注目すべきことは、探検が計画されていることを聞き知った、後に2代目園長となる、ノリス(Philetus W. Norris)³³⁾がヘレナで参加を求めていることである。彼はいくら待っても探検隊の準備が整わないので単身イエローストーンを目指した。途中のボトラ牧場で場主フレデリック(Frederick Bottler)を加えて、2人でイエローストーン川を遡ったが、フレデリックの怪我によってノリスの試みは中断した。彼が8月1日にヘレナにもどった際にも探検隊が出る様子はなかったので、最新の情報を知人のエバーツに伝えてから、測量の仕事のためミズーラ(Missoula)に去った。このように、熱心なノリスが調査隊派遣は当分無理と諦めるような状況であったのに、ラングフォードの帰還後数日で突然具体化したという事実は、NPRR関係者とラングフォードの間の取り引きの存在を想像される。

隊長となるウォシュバーンは8月9日にイエローストーンにもっとも近いエリス砦のドーン(Gustavus C. Doane)中尉に探検隊の護衛を要請し、さらにセントポールのハンコック將軍にも電報を打ち、約束したエスコートを依頼している。その許可は8月14日にエリス砦に伝えられ、それを受けて17日に探検隊はヘレナを発った。8月初めには約20名が参加する予定であったが、クロー族が攻撃的になっていたため辞退者が出て9名となった。なお、ヘレナ出発の前夜、ウォシュバーンはフォルサムと面談してイエローストーンの情報を直接得ている。その

際にも、フォルサムはイエローストーンを公共の目的に利用することも提案してい³⁴⁾。

22日には、護衛部隊を加えてエリス砦を出発した。最終的なメンバーは9人の隊員と2人の荷役夫、2人の黒人コック、護衛に当たったドーン中尉に率いられた5名の騎兵、総勢19名と40頭の馬とロバからなる一団であった。9名の隊員といっても、ジレット (Warren Caleb Gillette) を除いて野外での活動経験がほとんどなく、きまぐれで加わった人間も含むにわか仕立の隊であった。南北戦争で活躍したウォシュバーンは、戦後下院議員を勤めたが、結核に侵された体の回復を期待してモンタナ準州の公有地監督官 (surveyor general) の職を求めた。西部へ憧れていたノリスも同じ職を求めたが、1869年4月17日にウォシュバーンが任命され、その夏にヘレナに赴任した。この気晴らしの冒険旅行的な隊に軍の護衛が付いたのは彼の政治力によるものであろう。なおモンタナ赴任以前から体調が優れなかった彼は、探検から戻ると、風邪をこじらせ4ヶ月後の翌年1月に死亡した。このため公園設置運動には関わらなかったと考えられる。

ハーバード大学出身の法律家ヘッジスは地元の新聞 (Helena Herald) と特派員契約を結んでいた。途中で遭難したにもかかわらず37日後に奇跡的に発見されたエバーツはモンタナ準州の国税庁評価官 (assessor of internal revenue) であったが、ラングフォードと同様、新大統領の就任にともない職を失っていた。トランブル (Walter Trumbull) はエバーツの部下で、彼も同様に職を失いバケーションとして参加したにすぎない。彼の父親がイリノイ選出の上院議員でNPRRの支持者であったこと、および、後に彼自身が新聞の特派員として国立公園設立法案を提出したクラゲット (William H. Clagett) 下院議員に付添っていたことから、彼の国立公園運動への影響が言われるが、羊の放牧地にすることを雑誌の中で提案している程度であった³⁵⁾。商人であるジレットはドーンらを除けば一番野外活動に長け、エバーツの搜索が打切られてからも2名の騎兵と共にしばらく搜索活動を続けた。

隊員ではないが、ドーンはこの探検の公式記録³⁶⁾を残し、それが公園設置運動において議会にも回覧されている。また、トランブルとドーンの部下ムーア (Charles Moor) はイエローストーンのスケッチを残し、後にそれらに画家モラン (Thomas Moran) が手を加えて、スクリブナー誌掲載のラングフォードの記事に添えられた³⁷⁾。これが縁となってモランは翌年のハイデン調査隊に同行することになった。

一行は、フォルサムのアドバイスに従って変更した部分以外はほとんどフォルサム-クック隊のルートを辿り、9月23日にバージニアシティに到着した。ドーンらは24日にエリス砦に戻り、その他の者はエバーツを搜索していたジレットらを除き、27日までにヘレナに戻った。このように探検とも調査とも呼べない内容の隊であったが、ヘレナの有力者を含み、新聞や雑誌で彼らの活動が頻繁に報道されることによってパブリシティが増加した。そのことはフォルサムら

の報告をフィクションとして掲載を拒否したスクリブナー社がラングフォードの記録を1871年の5,6月号に掲載したことからも明らかである。さらに\$600の賞金を目指してエバーツ捜索に出かけたバロネット(Collins Jack Baronett)らが、10月16日に極度に衰弱した彼を発見した。10月21日にはそのニュースが掲載された。それまでのウォシュバーン隊の記事が地元の新聞中心の報道であったのに対して、このニュースは全国的な関心を惹起した。エバーツは野外活動の経験に乏しいため仲間からはぐれたに過ぎないにもかかわらず、スクリブナー誌に遭難記³⁸⁾を掲載し、公園設置後は初代の園長として推薦されるほどの時の人となった。

ラングフォード³⁹⁾やウォシュバーン⁴⁰⁾の記録がすぐに地元の新聞に掲載されたのに続いてジレットの記録も載った⁴¹⁾。その中で彼らが出合った怪しげな白人について記されている。彼の記録からも、当時金採鉱師や馬泥棒のような犯罪者など、イエローストーン地域に出入りしていた人間が少なからずいたことが読み取れる。一方、ヘッジスは10月6日から11月9日まで地元紙(Helena Herald)に掲載を始めた。その中で注目されるのは11月9日の「イエローストーン湖」という題の記事⁴²⁾で、イエローストーン地域をモンタナ準州に編入し、公共の利用に用いることを提案している点である。法律家の彼は当然ながら1864年のヨセミテグラントを承知の上で、イエローストーンに対しても同様な措置を求めていると考えられる⁴³⁾。

その頃、ラングフォードは6週間を費やして、講演のための原稿を作成していた。東部で20回講演するというのがジェイ・クック事務所との契約であったが、それに先立って、地元のヘレナで11月18日に、バージニアシティで11月22日に講演会を開催している。その後東部に発ったラングフォードは、1月19日に首都ワシントンのリンカーンホールで大聴衆を集めた。その際、ハイデン隊の調査予算を配当した有力下院議員でNPRR支持者のブレイン(James G. Blaine)がラングフォードをハイデンを含む聴衆に紹介している⁴⁴⁾。

1月21日にはニューヨークでも同様の講演会が催されている。この講演後、彼は体調を崩し、ニューヨーク州ユティカ(Utica)の実家で静養しながら、ジェイ・クックやNPRR関係者と手紙を取交わしたり、スクリブナー誌に掲載⁴⁵⁾⁴⁶⁾する探検記の原稿作成を行なっている。その合間の5月中旬にはフィラデルフィアのジェイ・クックの私邸でも講演している。

このようなパブリシティに比して、この探検隊の目的としてウォシュバーンは正確な地図の作成をあげ、ドーンらを派遣したハンコック少将も地図の作成を指示しているが、この探検隊によって改善された部分はほとんどなかった。このようにウォシュバーン隊の得た情報は、地名を付けた以外に新しいものはなかった。

4) ハイデナーバーロウ調査隊

1829年生のハイデン⁴⁷⁾は医学を専攻したが地質調査に情熱を注ぎ、ペンシルベニア大

学の地質・鉱物学の教授となっても、ほとんどの時間を西部の調査に費やしていた。1859年のレイノルズ隊のメンバーでもあった彼は、ワシントンでのラングフォードの講演を聴いてから、調査隊派遣計画書を作成した。彼がマサチューセッツ出身の上院議員で予算委員長のドウズ (Henry M. Dawes) や後に委員長となるブレインなどの有力議員と親しかったためか、1871年3月3日に\$40,000の予算が配当された上、彼の年俸が\$3,000から\$4,000になり、メンバーの人事権も与えられた。さらに、1869年に大陸横断ルートを完成させていたユニオンパシフィック (Union Pacific) およびセントラルパシフィック (Central Pacific) 鉄道は調査隊員と調査器具を集合地点となったユタ州オグデン (Ogden) まで無料で輸送した⁴⁸⁾。

隊員には気象、植物、動物、岩石、医学などの専門家に加えて、調査予算を通過させたドウズ議員の息子や画家エリオット、写真家のジャクソン (William H. Jackson) など19名からなっていた。さらに、ゲストとしてラングフォードが掲載した記事の挿絵を担当したモランが加わった。これには6月7日と16日付けのジェイ・クックの秘書ネットleton (Nettleton) からハイデン宛てに彼の参加を要請する手紙が残されている。彼は絵を担保にした借金\$500とジェイ・クックから提供された\$500で参加費用を調達した⁴⁹⁾。

メンバーに加えて荷役夫や料理人、猟師、案内人など20名が加わった一行は6月11日にオグデンを引き払い、バージニアシティを経由してクック隊やウォシュバーン隊も利用したエリス砦に到着する。ここで、ドーンの報告に興味を抱いたシェリダン (Philip H. Sheridan) 中将がシカゴから派遣したバーロウ (John Whitney Barlow) 大尉率いる写真家も含む5名からなる工兵部隊も6人の荷役夫とともに加わった。さらに、この両隊のエスコートとしてテイラー大尉 (Capt. Taylor) 率いる騎兵中隊が加わり総勢60名以上からなる大調査隊となった。ハイデン隊は7月15日、バーロウ隊は翌日に出発したが、途中前後しながら似たようなルートを取り、8月末から9月初めにかけてエリス砦に戻っている。当初、ハイデン隊はスネーク川のある南側に抜けてオグデンに戻るつもりであった。これはモンタナ側のNPRRとユタ側のセントラルパシフィックを結ぶルートの可能性調査でもあったが、予期せずバーロウ隊と一緒に行動することになり、予定を変更している。

この頃にはすでにマンモスホットスプリングス (Mammoth Hot Springs) 温泉の利権を目指してマッカーニー (James C. McCartney) らが小屋を営業していた。また、イエローストーン川には前年にエバーツを救出したバロネットによって有料の橋が掛けられ、調査隊も利用している。

この2隊はイエローストーンに関する莫大な情報を持ち帰ったが、バーロウ隊の調査資料は同年10月8～10日のシカゴの大火によって写真も含め多くが消失した。ハイデン隊は500ページ

に及ぶ報告書と400枚の写真を残したが、報告書の刊行は公園設置後となった。

4. 国立公園設立運動

ハイデンがワシントンに戻ると10月27日付けでジェイ・クックの秘書ネットルトンから手紙が届いていた。それはケリー判事(William Darrah Kelly)がイエローストーンを公園とすることを提案したので、ハイデンの調査報告書の中で公園化支持を提案して欲しいという内容であった。それを受けてハイデンは、報告書の中で公園化を提案するとともにNPRRの延長を支持した。なお手紙で言及されたケリーはペンシルベニア選出のベテラン共和党下院議員で、鉄道支持派であった⁵⁰⁾。

一方、ほぼ同時期の11月2日、ラングフォードもNPRRの件でミネソタに向かっている。すなわち、NPRRはワシントンのハイデンとモンタナのラングフォードを国立公園設置運動のプロモーターとして、議会工作を進めた。この時点で初めて、イエローストーンの宣伝を進めてきたNPRRが、国立公園と言う目標を明確にさせたことになる。この時から突如としてイエローストーンを国立公園とする運動が始まる。

1) 国立公園設立提案者

イエローストーンの私有化を防ぐ手立ての必要性に関する言及として、まず、1865年に宣教師クッペンの話を聞いたミーガーのものがあげられる。第2に1869年にフォルサムらが探検中に抱き、戻ってからヘレナでウォシュバーンに伝えたと言うもの。第3に、ヘッジスが1870年9月19日に探検最後のキャンプ地で提案したとラングフォードの日記に記されたもの、および同年11月に新聞に掲載されたモンタナの保留地設置の提案があげられる。第4に、1871年10月に調査から戻ったハイデンに届いていたネットルトンの手紙の中でケリー判事の提案としての言及されている。

しかしながら、それぞれ検討してみると、まず、ミーガーの提案に関しては同行のヘッジスの日記では触れていない上、ミーガーの提案を記録したクッペンスの資料は32年後1897年に出版されたものだ。またフォルサムの提案はクックが1922年に語ったものである。後に検討する有名になったヘッジスの提案も1905年に出版されたラングフォードの日記に記されたもので矛盾だらけだ。さらに、ケリー議員がネットルトンに提案したというのもネットルトンの手紙の中の引用だけでケリー自身の記録がない。このようにいずれも随分後になって公表されたり、間接的なものであるので信頼性に問題がある。

この中でどれが本当であるかの詮索にはそれほどの意味がなかろう。なぜならば、1864年のヨセミテ移管の件は既に広く知られていて、モンタナ準州初の新聞としてバージニアシティで刊行されたMontanaPost誌の1866年7月14日の記事にヨセミテよりもイエローストーンの方がすばらしいと記されている⁵¹⁾。さらに、1872年2月のスクリブナー誌の中でハイデ

ンはヨセミテに対するイエローストーンの優越性を述べ、上院での審議でもヨセミテの問題に触れられている。このようにヨセミテの設立の事例は知識人の間では知られていたことなので、それをイエローストーンにも当てはめること自体は、それほど特筆に値しない。むしろそのような考えを法律によって具体化させていった過程が重要である。そこで、なぜ州ではなく連邦政府の管轄とする法案となったのか検証する。

2) 法案提出

イエローストーンの大部分は、ワイオミングに属するが、その探検は主としてモンタナ側より遂行され、公園設立運動もモンタナの人々によって推進されていた。前述したようにモンタナ在住の法律家であったヘッジスは、ワイオミングに属している地域の水系がモンタナ側に流出しているから、分水嶺までモンタナに編入すべきであると考えた。すなわち、彼が描いていたのはヨセミテのように州の管理する公園であった。このため、地元モンタナの新聞や、議会における審議でも、ヨセミテの前例にならって州に移管すべきだという考えが出されている。

ところが、州立公園にするためには、イエローストーン地域の大半を占めるワイオミングもモンタナもまだ行政基盤の弱い準州(territory)であった。アクセスの関係でモンタナ準州民が探検の中心となり公園設置運動への関心も高かったにもかかわらず、その地域の多くがワイオミングであったことがモンタナ準州民の不満であった。しかし、ワイオミングの領地をモンタナに移管しようとするればワイオミング住民が猛反対することが予想されるため現実的ではない⁵²⁾。さらに、前例となったヨセミテがひどい管理状態であることも知られていた。これらの理由によって、イエローストーンは連邦政府が管理する土地のまま、ホームステッド法(Homestead Act)の適用による私有化を防止するために保留地⁵³⁾とする以外に方法がなかったと言える。

議会での立法化に関しても、誰が最初に提案したのかに関する議論があり、自分が中心であったと述べた人の記録がいくつか残されている⁵⁴⁾。しかし、債券を捌く必要に迫られたジェイ・クックがPR(public relations)ということばを今日的に使った最初の人間であると言われてることからも⁵⁵⁾、NPRRがイエローストーンの宣伝の延長として、鉄道建設支持議員やラングフォード、ハイデンを動かして国立公園化推進を進めたのは明らかである。ゆえに、特定の個人が働きかけたのではなく、彼らが協力して法案を作成したというのが妥当である⁵⁶⁾。

ハイデンがネットルトンからの手紙を受け取ってから2ヶ月足らずの1871年12月18日に公園設置法案は公有地委員会の委員長でもあるボメロイ(Samuel Clark Pomeroy)上院議員によって上院(S392)に、モンタナ選出のクラゲット下院議員によって下院(HR764)に同時に提出された。その法案は1864年のヨセミテ移管法を下敷として、その範囲などの地理的な部分はハイデンが執筆したと言われている。

3) 運動の展開

議会での支持を得るために、ラングフォードはドーンの公式報告書と自分のスクリプナ

ー誌の記事を議員全員に配付した。一方、ハイデンは調査で採取した鉱物見本や写真・スケッチを議事堂内に展示し、焼き増しされた写真は配付された。さらに、12月にはエバー



図-1モラン作イエローストーンの大渓谷

ツの遭難記もスクリ

プナー誌に掲載され、法案成立の直前の2月には、公園設置を訴える内容を盛り込んだハイデンの記事も同誌に掲載された。これらの中で一番威力を発揮したのが、ジャクソンが撮影した写真⁵⁶⁾⁵⁷⁾とモラン⁵⁸⁾⁵⁹⁾のスケッチであった。とりわけ短期間に大量の複製が容易な写真が効果的であった。

屋内でも写真が作成が困難であったときに400ポンドにも及ぶ器材を携行してその場で現像を行ったジャクソンの技術、体力、精神力ははずば抜けたものであった。そのことはイエローストーン探検後もハイデン隊のメンバーとして西部の写真を撮り続け、元気に長寿を全うしたことから明らかである⁶⁰⁾。また、彼の写真は作品として構図が優れていただけでなく、スケールとして人物を挿入することによって科学性も考慮されている(写真-1)。

これに対して、直後はスケッチの展示で対応したモランも、ジェイ・クックのために水彩画のセットを作成し、これが後に石版印刷され、ハイデンの調査隊の発見の記録とともに出版された⁶¹⁾。さらに、1872年にはイエローストーン渓谷の大作(7x12feet)(図-1)が\$10,000で連邦政府によって購入された上、議事堂に展示されたので一躍有名となった⁶²⁾。この調査を機に2人は親交を深め、ジャクソンはモランから構図のアドバイスを受け、モランはジャクソンの写真を元に絵画を作成し、2人ともその後も西部の大自然を対象とした。

このように滝や間欠泉などを対象とする写真と絵画が公園設置運動において一番威力を発揮したことは、モニュメントとしての景観が何よりも重視されたことを物語る。また、債券販売

と沿線の土地売却を目的とするNPRRの主導で進められた設置運動は、主として議会の中、せいぜいスクリブナー誌などを購読する東部の知的エリートたちに限定されたものであり、債券を購入することのない一般大衆にとっては全く関わりのない出来事であった。たとえば、地元ヘレナの新聞(Rocky Mountain Gazette)には、むしろ開発から除外されることによって、この地域が発展から取り残されることを危惧する記事も残されている⁶³⁾。

4) 議会での審議

上院では1872年1月22日に一旦公有地委員会から本会議に報告されたが撤回され、1月30日に審議が行われた。その際、カリフォルニア選出で上院予算委員会委員長のコール(Cornelius Cole)上院議員が、ロッキー山中には他にも十分な公園適地があるとして、広大な面積を開拓から除外して公園とすることに意味がないという意見を表明した。これに対して、まず、公園を支持するバーモント選出のエドムンズ(George F. Edmunds)議員が標高と緯度の見地から農耕に不適であることを説明したが、コール議員はそれならば利用者もないから公園として保全する必要がないと反論した。今度は、ウォシュバーン探検隊のメンバーの父親でもあるトランブル(Lyman Trumbull)上院議員が、コール議員の出身地のヨセミテ溪谷での私有地での通行料の徴収の問題を示し、開拓不適なイエローストーンも、近いうちに景勝地の展望を私有化され同様の問題が発生する可能性があるとし唆した。さらに、将来必要となればこの法律は無効にできるという考えも示した⁶⁴⁾。コール議員も反対ではなく必要性を感じられないという消極的な意見であったので、上院では採決せずにこの法案は通過した。

一方、下院で公園法案を受け取った公有地委員会では、1月29日にハイデンの報告に基づいて支持するレポートを作成したまま放置した。一方2月27日には上院を通過した法案が、下院に回されてきた。この上院からの法案も委員会に回されそうになった時、下院の最有力者で、ハイデン隊の支持者でもあったドウズ議員がすぐに通過させることを求めた。この時のドウズ議員による賛成理由の説明においても、8年前に彼が支持したヨセミテ移管の前例を紹介してから、すばらしい景色の保護を求めた。さらに、入植・農耕不適であるが、もし適地があれば入植も可能だと示唆した。また、スー族の保留地との関わりに関する質問が出されたものの、審議過程では反対意見はなかった。さらに、NPRRの本拠地ミネソタ選出で公有地委員会委員長ダンネル(Mark H. Dunnell)議員らが両院の法案支持を表明し、採決の結果、賛成115、反対65、棄権60で、1872年2月28日に成立し、3月1日にイエローストーン公園法としてグラント(Ulysses S. Grant)大統領によって署名され発効した。全体として共和党が賛成し、民主党が反対していた。

その法には私有化禁止に続いて、"set apart as a public park or pleasureing-ground for the benefit and enjoyment of the people"という目的が規定された。さらに、木材、鉱物、景観(natural curiosities, or

wonders)の破壊防止と自然状態の保持、魚類と動物の乱獲と商業目的の利用禁止が規定された。

その内容には1864年のヨセミテの州への移管による公園化を認めるヨセミテグラントから転用された部分が多く、違いは管理者が州政府か連邦政府かという点のみである。この法は"Yellowstone Park Act"と呼ばれ、"national park"という言葉は表われない。イエローストーンは1872年に「国立公園」に、ヨセミテは1864年に「州立公園」に、さらに1890年に「国立公園」になったと記述した文献が多いが、イエローストーンにしてもヨセミテにしても、それぞれの設立法案には"national park"や"state park"の文字は見当たらない。ただ、"reserve"とか"set aside"という表現で公有地としての保留を、"public park"という表現で公園化を宣言しているだけである。"national park"が初めて使われたのは公園法案が審議中の1872年1月1日の新聞の中であり、"Yellowstone National Park"という言葉は内務長官がラングフォードに宛てた園長受諾を要請する手紙の中であった⁶⁵⁾。さらに、法律の中で"national park"という言葉は、第3章で論ずる、2番目の国立公園として1875年に設立されたマキノー国立公園設置法で初めて使用された⁶⁶⁾。

当時はまだ国有林も、それを管理する森林局も存在しなかったため、イエローストーンの所管は、1849年に設立され、他の省に当てはまらない仕事をすべて引受けていたいわばなんでも屋の内務省となり、責任者は内務長官となった。設置法では不法占拠の禁止が規定され、内務長官が規制を制定できようになっていた。これにもとづいて、シュルツ(Carl Schurz)内務長官時代の1877年に規制が制定された。それによると管理人などの住民や利用者のレクリエーションおよび食料供給目的以外の狩猟や釣、その獲物の売買が禁止された。また、木石の無許可採取、不要な焚き火とその放置も禁止されている。換言すれば管理人や公園を訪れることができた少数の裕福な観光客であれば、狩猟の制限がないという意味であった。また、獲物がレクリエーションのためかそれを売るためかの判断は困難であるから、近隣住民の密猟も事実上野放しであった。さらに、違反者に対する罰則規定も、違反者を逮捕する管理体制もなかったので、机上だけの規定であった。そのため、設立後も確固たる管理組織のない放置状態が44年も続いた。さらに、1916年の国立公園局設置後は観光利用優先の時代となった。

5. 公園「管理」の開始

国立公園の設置が自然環境の保護と民衆の利用を目指す先見的なものであると言う公園運動の理想化が、非現実的であったという証として初期の「管理」を検証する。

1) ラングフォード時代

初代園長候補として遭難から37日後に救出されたことで全国的に有名になったエバーツが推薦されたが、その際の救援者にも謝礼を払わなかったほど金銭に厳しい商人であった彼は無給

の園長職を断った⁶⁷⁾。そこで、イエローストーン公園化推進者のラングフォード宛てに、初代園長を引き受けることを要請する内務長官からの手紙が1872年5月10日に届き、彼は10日後承諾の返事を出した。その中で既に小さなホテルが建てられていることや法外な通行料を請求する道路ができていますのでその規制が必要であることが述べられている。丁度その夏、ハイデンが南北2隊からなる調査隊を再びイエローストーンに派遣することになったので、ラングフォードはゲストとして南隊に加わるようになった。その際、彼は6月29日にグランドテトン(GrandTeton)山を初登頂したと言われるが、矛盾が指摘されている。このような点からもラングフォードの誇張癖が感じられる。また、この北隊がマンモスホットスプリングスに到着するとリュウマチなどの慢性病の温泉治療のため50人ほどの老若男女がマッカートニー(MacCartney)小屋の周囲でキャンプしていたと言う⁶⁸⁾。ラングフォードは、この調査後に内務長官に提出した彼の唯一の報告書の中で、園内での商業活動の規制、野性動物や森林の保護を訴えるとともに、アクセス改善のため道路建設費\$1,500を求めている。

銀行検査官として生計を立てていた彼自身にそれほどの資産があるわけではなかったので、公園を訪れたのはこのときと1874年8月の2回だけのようである。1874年の訪問の際には公式記録は残していないが、公園境界測量と道路建設のため\$10,000の予算配当を求めている。彼は当初委託業者からの収入で管理費がまかなえると考えていたようだ⁶⁹⁾。しかし、内務長官には園内での道路、宿泊施設、売店、製材所の建設の要求があったが、ラングフォードはすべて却下していた。これはNPRR以外による委託を排除したいと言う気持ちの反映かもしれない。無給では仕方がないとはいえ、イエローストーン宣伝にかけた彼の情熱と園長になってからの無関心さの対比は、彼が期待していたNPRRの延長にともなう観光開発が、1873年の恐慌によるジェイ・クック事務所の倒産によって延期されたことにも関係していよう。同年11月、鉄道延長に伴うリース収入による管理費が得られず荒廃する状況を憂慮したハイデンも、政府に管理予算と園長に警察権を与えることを求める手紙を出している⁷⁰⁾。なおNPRRの敷設は1879年に再開され、1882年秋にイエローストーンに近い町まで延びた。

広大な地域に管理予算も人員もない状態であつたので密猟者が跋扈しただけではなく、間欠泉等の岩石や野生動物の角等を土産物として採取する訪問者が跡を断たなかった。このため、地元住民およびイエローストーンを訪れた人々から管理不在に対する批判が高まった⁷¹⁾。特に1875年夏には、ベルクナップ(Belknap)陸軍長官一行がドーン中尉のガイドで視察に訪れ、ルドロー(CaptainWilliamLudlow)の率いる工兵隊も調査に訪れている。間欠泉などの破壊や野生動物の虐殺を見て、ルドローは報告の中で初めて軍隊による管理を提案している⁷²⁾。

1877年4月18日に至る5年間の在任期間中におけるラングフォードの活動としては、彼のアシスタントとなったフォルサムを通じて得た情報に基づき、園内の破壊行為や密漁問題を報告

している程度である⁷³⁾。

2) ノリス時代

1821年生まれで、若いときには猟師として生計を立てていた経歴を持つノリスは、新聞、デトロイト郊外の宅地開発などの事業で成功してから後も西部へのロマン抱き続け、1869年にはモンタナ準州知事の職をウォシュバーンと争ったり、1870年には途中までイエローストーンに足を踏み入れるほどであった。さらに1875年にはスミソニアン研究所の要請でイエローストーンで地質などの資料採取を行っている。そのような彼がラングフォードの管理に対する不満を背景として、1877年4月18日、遂に内務長官からイエローストーンの園長に任命され、自分の夢であるウィルダネスへの憧れを満たす機会を得た。

さっそく1877年6月に赴任したものの、シャーマン(Sherman)将軍一行に同行した際の落馬による怪我のため自宅に戻るようになった。これは同年8月末に騎兵隊に追われたネスパース(Nes Perce)族がイエローストーン内を通過する際に、観光客らも巻き込まれ死傷者が出る事件が発生したことを考えれば、不幸中の幸いであろう。

翌1878年から実際に園長として活躍し、最初の管理予算\$10,000を獲得している⁷⁴⁾。前年のインディアンの事件を意識した彼はまず、砦のような管理事務所をマンモスホットスプリングスに建設するとともに、間欠泉地域を結ぶ馬車道の開設に着手した。また、インタープリテーションのはしりとして、自分の印刷会社で500部の利用規則を作成し園内各所に掲示した⁷⁵⁾。この点、初代園長でありながらほとんど公園を訪れなかったラングフォードとは異なり、ノリスは公園に駐在して管理を直接行なうことができた。

1882年2月2日まで5年間の園長在任期間中に、人件費や道路建設予算も配当された。その総額は\$53,425.17で、その中から彼自身の給料などの人件費と道路建設費を賄ない、153マイルの馬車道と204マイルの歩道を建設している⁷⁶⁾。また、気象観測や間欠泉の噴出の記録も残し、密漁による野生動物の減少を防ぐために初めて動物管理人(gamekeeper)も任命している。また、先住民の住居跡などの歴史にも関心を抱き、スミソニアンに資料を送っている⁷⁷⁾。

不況を脱した1879年にはNPRRの鉄道建設が再開され、激化した公園内の利権争いに巻き込まれた彼は、1882年3月31日にコンガー(Patrik Henry Conger)に代わられた。

3) 猟官制による荒廃と軍隊の導入

ノリスに続いてコンガー(在任期間1882.4.1-1884.9.9)、カーペンター(Robert Emmett Carpenter, 同1884.9.10-1885.6.30)の2人が園長となったが、猟官制の結果として公園の意義を理解せずに、その地位を私腹を肥すことに利用したので、公園の荒廃が一層進んだ。特にイエローストーン公園改良会社(Yellowstone Park Improvement

Company)が権益を独占し、園内に製材所を設けてマンモスホットスプリング⁷⁸⁾にホテル(National Hotel)の建設を進め、宿泊客には園内の野生動物の肉が出されるほどであった⁷⁸⁾。

1877年に続いて、1881年にも公園を訪れたシェリダン將軍は野生動物の減少を見て、狩猟家の組織を通じて公園の拡張と保全を訴えたとともに、軍隊による管理を示唆した。また、同年12月には議会でもベスト(George Graham Vest)上院議員がイエローストーンの荒廃とその管理問題を取上げ、管理法案を提出した。この法案は成立しなかったが、1884年度の予算法案の中に、その意図が盛り込まれた。すなわち、内務長官の園内のリース許可権の制限、内務長官の要請があれば陸軍長官はイエローストーンに軍隊を派遣できること、園長の年俸\$4,200、10名のアシスタントの年俸\$900などが規定された。

さらに1884年3月6日には、公園内のワイオミング地域にはワイオミング法が適用されることになり、園内に2名の判事と2名の警官が配置されることになった。これによって密漁や焚き火の放置、岩石など採取行為は減少したが、その規定では罰金の半額が彼らに与えられることになったので罰金目当ての逮捕が生じ、評判を落とした。結局、その法は1886年3月10日に削除された⁷⁹⁾。

2人の後を引き継いだウェア(David Walker Wear, 同1885.7.1-1886.8.20)は公園管理の建て直しに尽力したが時既に遅く、1886年7月1日から執行される1887年度予算案でイエローストーンの管理予算が削除された。この際、連邦政府がショービジネスに関与すべきではないと言う公園廃止意見も出された。また、ヨセミテとマキノーの前例が引用され、イエローストーンも州に移管すべきであると言う意見も出た。管理人の人件費が削除された時点で、内務長官は陸軍長官に、1883年の規定にもとづく軍隊の派遣を要請した。⁸⁰⁾⁸¹⁾⁸²⁾かくしてハリス(Moses Harris)率いる騎兵隊による管理が始まった。

これに関しては、2番目の国立公園として1875年3月3日に設置され、軍の管理のもとにあったマキノーの前例の存在が重要である。ミシガン州選出のフェリー上院議員が1873年にマキノー国立公園設立運動を展開した際に、それを支持したベルクナップ陸軍長官がイエローストーンを1875年夏に訪れ、狩猟や釣を楽しむとともに、その管理の問題を指摘している⁸³⁾⁸⁴⁾。すなわち、彼は軍によるマキノー国立公園の管理に関わっていたから、この訪問が後のイエローストーンへの軍の派遣決定の端緒となっていると言える。

駐留軍も罰則規定がないため密猟者を公園境界の外に追放する以外に手立てがなかったが、ようやく1894年にレーシー法と呼ばれる罰則規定のある鳥獣保護法が制定された。1891年には隣接地域に保護林が設立され一種のバッファゾーン的な機能を果たすことになった。

軍隊の管理は1916年に公園局が設立され、1918年に実質的に移管されるまで続いた。その際、希望者がレンジャーとして公園管理を継続した。公園局設立後最初の園長が1919年に赴任

したオルブライト(Horace M. Albright)であった。このように設立されたものの管理が放置される状態が長く続いたこと自体が当時の国立公園と言うものの社会的認識を物語っている。

6. 成立背景に関する議論

以上、トラッパーの時代から調査隊の派遣を経て、公園法成立過程、および初期の管理実態を検証した。これらの事実を踏まえて、公園成立背景に関して議論を進める。アーリー⁸⁵⁾は6つの要因をあげ、議会での審議ではロマン主義の影響が強いことを示唆している。それらを再検討すると、イエローストーンはモニュメント性と資源価値の欠如という2つの要件から保留地化が提案され、それを鉄道の経済効果を期待する議員が支持することによって公園となったと言える。

1) モニュメンタリズムの認識

初期のトラッパーたちからラングフォードの記録に至るまでイエローストーンの説明にはロマン主義が反映されている。その意識は、開拓が進むに従って消失するフロンティアに対するノスタルジーによって増幅された。さらに、ロマンをかき立てるこれらの間欠泉や溪谷の景観が、アイスランドやスイスのものより優れているという優越性を誇示する表現が新聞や議会でも頻繁に出てくることから、ヨーロッパの歴史や文化に匹敵するものであるというナショナリズムの意識が感じられる⁸⁶⁾。

ヨーロッパに対して劣等感を抱いていたアメリカ人にとって、自国に誇れるものを見つけたことは重要であり、それらを保護することを考えた。すばやく保留地としないと、ナショナリズムの対象が入植者たちによって私有地化され、有料になってしまうという危惧の念が表明された。これはナイアガラの展望地がほとんど有料化され、その俗悪さがヨーロッパの旅行者から厳しく批判され、アメリカの知識人たちが恥じていたこととも関係する。さらに、1872年の時点でヨセミテでもすでに入植した人々による有料化した道路など州による管理の問題が明らかになっていた⁸⁷⁾。同様に、ハイデン隊が調査に訪れたとき既に、地域内で小屋や有料橋を営業している人々もいたので、すばやく立法化を望んだのであろう。法案成立直後のニューヨークタイムスの記事⁸⁸⁾で、鉄道によるアクセス改善によって質の高い文化人のリゾートとなることを期待しているが、これが公園設置の真意として読み取れる。

法案がわずか2ヶ月半で成立していることは、ハンブトン⁸⁹⁾が調査した国立公園法案成立所要期間の平均10年以上に比べると極めて短期間である。イセ⁹⁰⁾はこの法案が成立したのは奇跡に近いとして、その成立理由としてあまりにも僻地であるので酪農や木材産業などの政治力が及ばなかったからと述べている。確かにロッキー山中に取り残された空間として実際に知っている人間は限られていたため一部を除きほとんど無関心であったことに加えて、有力政治家が支持し、次に述べる資源のない場所であることを訴えたからであろう。

なお、大西洋を挟みヨーロッパに面した東部の人々にとってはナショナリズムであったが、開拓時代を迎えていたモンタナの人々にとってはニューヨークのナイアガラ、カリフォルニアのヨセミテをしのぐ景観としてリージョナリズムの発露の場となった。これはモンタナの新聞ではヘッジスらがイエローストーンのモンタナへの移管を求めていることから理解できる。

写真と絵画が国立公園設置にもっとも効果的であったということも、多くの人々がその要件を珍奇な現象やモニュメントとしての価値から見ていたことを説明する。モニュメント性の典型的なものとしては1929年に国家記念物に指定され1950年に解除されたホーリークロス(Holy Cross National Monument)⁹¹⁾があげられる。ロッキー山中に雪で浮き彫りになる十字架を頂く山があるという噂は知られていたが、イエローストーンの場合と同様、1873年にハイデンが調査に出向き、ジャクソンが撮影に成功し、モラン⁹²⁾も現地を訪れ絵画を完成させて以来、人口に膾炙し、巡礼も出るほどになった。

さらに、管理費が計上されないだけでなく、管理体制も放置された事実もモニュメント性を物語る。所有に関わらず間欠泉は残るとコール議員が述べたように、モニュメントとして認識されていたが故に、私有化を展望のためのアクセスを確保すれば充分で、施設は土地をリースすれば業者が設置すると考えられ、予算を組んで管理する必要を感じなかったのであろう。

2) 資源価値の認識

このようにモニュメンタリズムが評価されても、土地払い下げによる開拓最優先の時代にその対象からはずすという言わば時代錯誤的法律を制定するためには、そこが開拓には適さない無価値の土地であることを議会で納得させる必要があった。そこで、農耕牧畜には不適で、火山性起源のため天然資源も乏しいと言うことが力説された。さらに、まだ入植地が存在しないこと、インディアンの居留地もないことなども言及された。

実際、当時は野生動物も少ない土地であったようだ。そのことは探検隊が訪れた当時には動物が希であったので、食料確保に困ったことから明らかである⁹³⁾。さらに鉱物資源に関しては、1860年頃から盛んに金探しが行われたにもかかわらず、隣接するクックシティでは見つかったものの、イエローストーン公園予定地域内では発見されていなかったことが支持派には好都合であった。その意味では金を発見できなかった探鉱師たちも、間接的ながら、公園の設立に貢献している。また、地域を覆っているロジボールパインは木材としての価値が低かった上、東部では運河や都市水道等の水利維持を目的として森林保全が始まったが、イエローストーン水系の影響を受ける都市も下流になかった。

この審議過程に関してランテ⁹⁴⁾⁹⁵⁾は開発サイドからの反対を封じるために無用の土地であることが強く主張されたこと、および、賛成派もほとんどは自然環境ではなく間欠泉や滝等のモニュメントとしての対象の保護を目的としていたことを指摘している。

この国立公園「無価値」論を提唱したランテに対して論争が提起されている。異議を唱えたセラーズ⁹⁶⁾は、水や木材、観光などの資源があることは知られていたのだから、それで

も国立公園になったのは既に保全意識が芽生えていた証拠であると論じた。これに対して、ランテは「無価値」を1864年にヨセミテ法案が議会に提出された際に提案者のコンネス(John Conness)が述べた意味で使ったと説明した。すなわち、コンネスは国民一般による農林業などの開拓目的には価値がないが景観はすばらしいという使い方をしており、その「価値」には観光は含まれず、かつ大衆的なものであるという見解を示した。また、セラーズが「無価値」であるという議会での主張を単なる政治家のレトリックであると認識したのに対して、南北戦争直後の利己的な時代背景からすれば真剣なものであったと反論した。この両者の議論をコメントしたコックス⁹⁷⁾は、結局、両者の意見の相違は観光を資源「価値」に含めるのかどうかという定義の違いだと述べている。すなわち、イエローストーン設置当時、景観資源を利用する観光は、農牧業や鉱業などの産業には含まれていない。その背景には、勤勉を評価し観光などの娯楽を罪惡視する清教徒的意識が反映されている。

観光資源としての価値は探検時代から認識されていた。だからこそ、短期的には債券の販売促進、長期的には魅力ある沿線の土地売却と支線によるイエローストーン観光を期待したNPRRが公園運動を形成した。それを受けて、ラングフォードはスクリブナー誌の記事で鉄道敷設による観光増加と経済発展を論じ、ハイデンや新聞も同様な考えを示している。また、観光開発に政府が関与すべきではないという意識の議会では観光価値は議論されなかったものの、公園支持者と鉄道支持者が一致していたことおよびホテルなどの観光業者からの地代で管理費を賄う条項が公園法に規定されていることから、観光資源としての価値は了解事項であったと言える。

1878年2月21日付けの手紙でハイデンが法案審議当時を回顧し、少なくとも数年は管理予算を請求しないから経済的負担はないことを強調しなければ法案は成立しなかったと述懐している⁹⁸⁾ことから、南北戦争後の逼迫した財政状態がわかる。

ゆえに公園設置法は公園に観光旅行に訪れる人が期待するような間欠泉や溪谷等の私有化を阻止、保護することによって、内務長官が委託した鉄道資本による質の高いリゾート開発を推進するという意図があったと理解できる。換言すれば、公園法は環境保全を目指したのではなく、私有化を排除することによって開発の方向を観光に向けたものと考えられる。そのように読み取れば保護と利用を規定した設置法には何の矛盾もない。

3) 公園範囲の決定

ナッシュ⁹⁹⁾は公園の設立運動者は滝とか間欠泉などのモニュメント保護を目的としていたが偶然で広大な自然環境が保全されることになったと述べ、公園設置によってウィルダネス環境も保全したことが1880-90年代には時折ながらも理解されたと考えている。この面積の広さに関しては、まずそれだけの土地が未開拓のまま残されていたというアメリカの資源の豊かさが前提となっている。ナショナリズムを鼓舞するためのモニュメントとしての公園化であれば、もっと狭い範囲で十分であったはずだが、ハイデンは未発見の珍奇な景観や地熱現象等

の「興味深いもの (curiosity)」が周辺に存在する可能性があるという理由で広い範囲を求めた。彼はその規定理由としてその地域の標高が6000フィート以上であり火山性の地域であるから、農業も工業も牧畜にも適さず、科学的利用が可能に過ぎないと述べているから、広大であつても支障がないと認識していた¹⁰⁰⁾。

この広大さから、科学的利用として自然環境保全を意図していたという考えも提示されている。だが、ドーンの報告書に記録され、ハイデンが推し進めた科学的利用の実態は、資源開発のための基礎調査であつた。厳しい財政状態の政府が費用を負担して未開発地の調査しているように、開拓に先立つ資源および適性調査の意味合いの強いもので、いわば、文明を西部にもたらしための先遣隊であつた。ゆえに、1871年の調査はモンタナ側からワイオミングに抜ける鉄道の設置可能性を確かめようとし、予算が増加した翌年の調査では南北2隊に分けて、調査を進めたのである。さらに、1878年にも調査に訪れていることから、今後も私有化されていない調査地域を確保したいと言う実利的な科学者ハイデンの欲望も反映されていると考えられる。

広がりをもった空間の保全は1865年にヨセミテに関わったオルムステッドが提案しているが、その報告は近年まで埋没していたので、ヨセミテにもイエローストーンにも彼の考えは反映されていない¹⁰¹⁾。さらに、そのころまだ生態学は確立せず広大な面積のごく一部しか踏査されていない状況では、公園を生態系として捉らえていたとは考えられない。広大な面積が生態系の維持のために不可欠であるということが知られるようになったのは後のことである。

7. 成立過程と理念の理想化

国立公園の発展過程の中で、公園空間が自然環境を保全を目的し、公園が人々の公共的利用のためにその私有化を阻止すると言う利他的な思想から創設されたという理念が浮び上がってくる。ここでは前半において検討した成立史がどのようにして理想化されていったかを、文献から追ってみる。

1) ラングフォードの日記とその矛盾

ラングフォードの日記¹⁰²⁾によるとウォシュバーン探検隊はイエローストーン地域で最後となる1870年9月19日の夜にマディソン分岐のファイアーホール (Firehole) 河畔でキャンプした折、この地域の所有について議論したことが記されている。その中で、メンバーの1人、法律家のヘッジスが、この全域を私有化しないで国立公園としてすべてのアメリカ人が楽しめるようにすることを提案し、「彼の提案は1人を除いたメンバーから即座に好意的に受け止められた。そして、その時以来、我々の熱意は増大した。」と記されている。この1人が誰かは記されていないがラングフォードが日記の中でスミス (Jake Smith) 隊員を嫌悪していたことから、彼ではないかと推察される。

ラングフォードの日記の復刻版の前書きでヘインズも疑問を述べているが、このエピソードがチッテンデンの著書の中で紹介されて以来、焚き火物語 (Campfire Story) として広く知られるようになり、日本の文献にも掲載されているほどになった。しかしながら、最初に述べたように、自然公園の思想はすでに何人かによって提唱され、実際にヨセミテという前例もある。

そもそもこの日記のタイトル「イエローストーンの発見」自体からして矛盾を秘めている。前述したように先住民は数千年前から知っている上、猟師や採鉱師など100人以上の白人も19世紀初頭から足を踏み入れている。探検としてもフォルサム-クック隊が前年に訪れ、ラングフォードらは彼等から情報を得ている。さらに、これらのことについてラングフォード自身が言及しているのである。

彼の日記が発刊されたのはこの探検から35年後の1905年で、彼は74歳であった。探検直後に彼が寄稿した新聞の記事にも、その後の各地での彼の講演の記録にも、さらに1871年5月にスクリブナー誌に掲載された彼の記事にも、イエローストーン公園化に関して全く言及されていない。また、ラングフォードは1871年1月21日のニューヨークでの講演の際に国立公園化について言及したと主張し、チッテンデンもラングフォードの主張を掲載しているが、残された講演原稿¹⁰³⁾には、NPRRの延長によって観光が容易になる可能性については言及されているものの、国立公園設置に関しては何も述べられていない。また、ラングフォードはナイアガラの前例を示しイエローストーンの同様な保全を訴えたと述べているが、ナイアガラ保留地の成立がイエローストーンより後の1885年であることを考慮すると矛盾する¹⁰⁴⁾。このような矛盾を踏まえて、クランプトン¹⁰⁵⁾、フス¹⁰⁶⁾、ヘインズ¹⁰⁷⁾、ランテ¹⁰⁸⁾らが、その日記の信憑性に疑問を投げかけている。

さらに検討すると、この探検の記録はラングフォードの他に提案者とされるヘッジス、ジレット、トランブル、ドーン、ハウザーらが残しているが、エバーツの搜索のため別行動であったジレットを除外しても、他の隊員らの記録に何も残されていないのは、熱中した議論であったというラングフォードの記述と矛盾する。

9月8日にエバーツが行方不明となってから9月16日まで、全員で搜索を行ったが、食料が乏しくなってきたため、諦めて移動を開始したという状況の上、諦め切れないジレットは騎兵2人とともに搜索をまだ継続していた。そのような気が重い雰囲気でのこのような話に熱が籠るとは考えられない。

また、9月19日に焚き火を囲んで国立公園化を主張したはずのヘッジスが、11月の新聞でヨセミテの前例にならったモンタナ準州(1889年に州となる)の保留地とすることを提案しているのも一貫性がない。

以上の矛盾から、この日記はラングフォードの誇張癖か出版社の販売促進への配慮の結果で

あると思われる。

2) チッテンデンの著書の影響

イエローストーン史におけるウォシュバーン隊のヘッジスによる公園提案の紹介は、1895年に初版されたチッテンデンの著書に始まる。チッテンデン(1858-1910)は工兵隊の技師としてイエローストーンの今日のループ道路やガーディナー側の北口のローズベルト門を設計する一方、個人的に歴史に興味を抱き、18-19世紀に毛皮を求めてロッキーを闊歩した猟師たちの記録も残している。いずれも優れた内容で何度も版を重ねるほど好評であった。とくにイエローストーン史では、1832年のカトランの"Nation's Park"の提案を紹介するとともに、技術者らしく鉄道導入の問題に関しても議論しているように視野の広さを感じさせる。

しかし、ラングフォードの日記では1人を除いて公園化に賛成したとなっていたのが、チッテンデンの書では"acceptance with other members of the party"となり全員一致を示唆するような文章となっている。これが全員賛成として流布することになった。さらに日記では単に国立公園とするという内容であったが、恒久に人々の利用に供する内容となっている。また、ラングフォードが1871年のニューヨークでの講演の際に、国立公園化を示唆したと述べたのを、そのまま受入れて記述している。本書の出版はラングフォード日記の出版の10年前であるから、著者はラングフォードから直接得た情報を信じて記述したのであろう。さらに、今日の研究成果から判断すればイエローストーンを訪問したの最初の白人をコルターとし、コルターズヘルをイエローストーンとした点も誤っている。

他方で、チッテンデンは、第2版では民俗公園的であるから違うと変更したものの、初版ではカトランの提案を国立公園のオリジンとして評価し、また、1869年にフォルサムがウォシュバーンに公園化のアイデアを提供していることも言及している。この様にチッテンデンは国立公園化の考えの起源を論理的に述べているのであるが、その読者の間で焚き火物語だけが独立して歩き始めてしまった。

3) 焚き火物語の紹介

このチッテンデンの書物を通じて広まった焚き火物語は、1920年代にマザー局長が公園運動を推進した際に著されたヤードの書物¹⁰⁹⁾¹¹⁰⁾には掲載されていないが、1922年のキャメロンの国立公園局紹介図書¹¹¹⁾の中で、引用されている。1940年頃には政府の刊行物にまで掲載されるようになった¹¹²⁾。最近では、設置100年記念の1972年に公園局が出版した一般書¹¹³⁾にも焚き火物語が引用されている。

次に、専門書を調べると定評のあるイセ¹¹⁴⁾が、参考文献として焚き火物語に疑問を呈したクランプトンの文献もあげているにもかかわらず、チッテンデンの説をそのまま紹介しているのは意外である。さらに、大学の教科書にまで焚き火物語が登場してくる。たとえば、ブロックマン¹¹⁵⁾の野外レクリエーションの教科書でもその信頼性に疑問を呈しながらも、

チッテンデンの焚き火物語と「コルターの地獄」が引用されている。

さらに、造園史の教科書として広く利用されているニュートンの著書¹¹⁶⁾でも「コルターの地獄」をイエローストーンとするとともに、焚き火の話を紹介し全員が賛成したかの記述となっている。
 ような



写真-2 ファイアーホール河畔の記念碑

また、間接的ながら百科事典¹¹⁷⁾にも掲載された

ように、アメリカのほとんどの国立公園紹介文献や旅行ガイドなどの一般書に載せられた。一般書は専門書よりも購読者層が広いので、その影響も専門書以上に大きいのではなかろうか。たとえば毎年のように改定されているランドマクナリー社の国立公園ガイドは50万部が売れている¹¹⁸⁾。また、一般書では内容自体もラングフォードの日記よりも一層脚色され、学校劇の脚本¹¹⁹⁾まで出版されるに至った。

4) インタープリテーションの影響

このような文献での紹介に加えて、1922年の公園設置50周年記念式典はこの焚き火の場所であるマゼディソン分岐で行われ¹²⁰⁾、さらに1972年の100周年記念では、その場所に記念碑が建てられ(写真-2)、隣接の展示館(Madison Museum)にもその解説が掲示された。さらに1938年には内務省内にある博物館の国立公園局のコーナーにも焚き火のシーンが展示された(写真-3)。この様なディスプレイとあいまって、文献以上に焚き火物語が人口に膾炙するのに影響を及ぼしたのはレンジャーによるインタープリテーションである。

イエローストーンにおけるインタープリテーション活動は1919年にオルブライトが園長として赴任した際に開始された。1921年にナチュラリストと呼ばれたスキナー(Milton Skinner)によって博物館が設置され、教育プログラムが始まった¹²¹⁾。1926年に作成されたインタープリテーションマニュアル¹²²⁾を調べると焚き火物語が掲載されている。すなわち、レンジャーたちはこのマニュアルを参考にして最近まで、関連文献を直接読む人の数とは比較にならない莫大な訪問者たちに、この話をビジターセンターや夜間のキャンプファイアを囲みながら紹介していた。

1932年のクランプトンの著書は内務長官への公式報告書で、政府印刷局で出版されたもので

ある。ヘインズはイエローストーン公園に勤務した公園専属の歴史家であり、彼の著書も政府出版局によって刊行されている。このように成立史が政府の専門家の手で明らかにされていながら、同じ公園行政では理想化した成立物語を広めていたのは、研究成果よりも公園および公園局のイメージ向上と国民の支持拡大が優先された結果であろう。



写真-3 内務省博物館の焚き火物語の展示

半世紀にわたって公園局は成

立神話を流布させ、自己矛盾は一層増大した。そのことはチェイ¹²³⁾が公園の野生動物管理に関して指摘したように望ましくないデータの無視、管理正当化のための成果収集など科学成果の操作と結びつくものを感じさせる。

しかしながら、パークサービスと呼ばれる公園局は、その名の通り納税者にサービスを提供する機関であるから、国民の支持なしには活動できない。そのため利用者の支持を得やすい方向に進まざるを得なかったというジレンマが無視できない。すなわち、情報を受け取る側の利用者也、鉄道会社の利益のため設置運動よりも、ロマンに満ちた焚き火物語の方を望んだのである。

最近の公園局の文献では国立公園の考えの発案者はヘッジスではなくカトランであると訂正し、マサソン博物館の焚き火物語の展示も撤去された。しかし、河畔の公園設置百年記念碑と、内務省博物館の焚き火の光景の展示は今も残る¹²⁴⁾。

5) 日本におけるアメリカの国立公園紹介

明治・大正期の日本におけるアメリカの国立公園の紹介に関しては丸山¹²⁵⁾が調査しているが、その時代の文献にはイエローストーンの焚き火物語は言及されていない。それが紹介されるのは戦後である。日本では1948年の東の著書にこの話が掲載されている¹²⁶⁾。

その後の国立公園関係出版物を調べてみると、アメリカの国立公園に日本人が大挙して押し寄せる今日に至るまで、その物語は国立公園の誕生の説明の中で、百科事典まで含め一般書か専門書であるかを問わず紹介されている。

それらの文献には出典が全く示されていないので、実際にイエローストーンを訪れ展示やインターネットから知ったのか、あるいは公園ガイドなどの記述を紹介したものか不明であるが、内容を比較した結果、いくつかのアメリカの国立公園の紹介記事はヤード、ティル

デン¹²⁷⁾などのものを抄訳していると推察される。ティルデンの旧版は間接的ながら焚き火物語を紹介しているものの、1986年の改定版ではNPRRの影響を示唆している。

日本の国立公園紹介者は、専門書ではなく公園のパンフレットや旅行ガイドを参考にして、自分でも半信半疑であったが、読者に受けそうな話なので引用したのであろう。日本でも鉄道と公園設置運動が強く結びつき、外人旅行者からの外貨獲得がその主たる目的であったが、それに類似する話よりも公園の崇高な理念を示すのが適当と考えられていたのであろう。

さらに日本では、国立公園の紹介者の多くが、それを推進する立場にあったので、アメリカと同様、公園普及に都合の良い内容を選択した可能性もある。アメリカでも日本でも歴史家と官僚ではその歴史の解釈が異なる。歴史家は客観性を重んじるのに対して、官僚は自らの勢力拡大に役に立つ情報を評価するであろう。1990年に至るまで日本の文献において繰り返されているのは、ジャーナリスティックな物語としての魅力と、公園の理想の提示を含んでいたことがあげられよう。

8. 考察

イエローストーンの設置背景は、農鉱業資源がとぼしい地域でナショナリズムを誘う景観資源を活用して、観光による経済効果を引出すという鉄道会社などの功利主義的な発想が原動力であった。その後ロマンを求めた国民とその国民の支持を必要とした公園局が理想化を進めた。このようにしてでき上がった国立公園の提供する「自然環境」を「もっともな幻想(reasonable illusion)」という1963年に国立公園における自然環境管理重視を求めたレオボード委員会報告書の中で使われたことばをテーマにしてシュレリー¹²⁸⁾はエッセイに記している。

彼は人々が国立公園に求めている手つかずの自然というものは幻想にしか過ぎないと述べている。その例として、今日イエローストーンは釣人にとっては憧れの場所であるが、実際にはその河川に生息するサケ・マス類は、軍隊管理時代の1891年頃に孵化場を設置して始まった外来種の孵化、放流の成果である。また、それらを餌とするペリカンや、シカなどを襲うと考えられたオオカミは排除され、騒々しいキツツキも宿泊施設のそばから追い払われている。さらに、観光客の期待するクマは残飯で呼び集められた。彼は公園来訪者も、ディズニーランドと同様に、現実よりも幻想を国立公園に期待し、管理された「自然」を求めているのだから、幻想を提供することで十分ではないかと述べている。

しかし、それが1988年の大火災¹²⁹⁾のように、国民の期待する公園が、現実の公園の管理方針と掛け離れていることが露呈された場合、大きな困難が生じる。シン普森¹³⁰⁾は、自然状態(natural condition)の残っているとする幻想と人間の手がかなり加わっている現実のギャップをそのままにして増大する利用者のニーズに対応せざるを得なかった公園局が陥ったアンビバレンスを「2つの公園の物語」として述べている。さらに、その幻想自体も初期のロ

マン主義的なものから、近年では生態学的なものに変化していることを言及している。

本来ならばそのような矛盾を解消すべき公園紹介文献やインタープリテーションが、公園および公園局に対する支持を得ようとするしたが故に、むしろ溝を拡大せざるを得なかった事実は皮肉である。近年日本でもインタープリテーションが重視されてきたが、その影響力を考慮すると、提供する情報の内容の重要性を痛感させる。幻想と現実のギャップを埋めることに今後のインタープリテーションの使命があろう。

文献

- 1) Nash, Roderick(1970): The American Invention of National Parks, American Quarterly, 22(3):726-735
- 2) 伊藤精悟編(1991):森林風致計画学, 文永堂出版, 158-172
- 3) Chittenden, Hiram Martin(1964): the Yellowstone National Park, Univ. of Oklahoma Press(1895年の初版の復刻版)
- 4) Chittenden, Hiram Martin(1905): the Yellowstone National Park(2nd ed.), Stewart & Kidd Company
- 5) Crampton, Louis C.(1932): The Early History of Yellowstone National Park, Dept. of Interior
- 6) Buck, Paul Herman(1922): The Evolution of the National Park System of the United States, A Thesis Presented for the Degree of Master of Arts, The Ohio State University 5-20
- 7) Haines, Aubrey L.(1974): Yellowstone National Park, its Exploration and Establishment, Government Printing Office
- 8) Haines, Aubrey L.(1977): The Yellowstone Story, Vol.1, Yellowstone Library and Museum Association
- 9) Bartlett, Richard A.(1974): Nature's Yellowstone, Univ. of New Mexico Press.
- 10) Janetski, Joel C.(1987): Indians of Yellowstone, Univ. of Utah Press
- 11) Gowans, Fred R.(1989): A Fur Trade History of Yellowstone Park, Mountain Grizzly Publications
- 12) Haines(1977):ibid., 35-38
- 13) Mattes, Merril(1962): Colter's Hell & Jackson Hole, Yellowstone

Library and Museum Association and the Grand Teton Natural History Association

- 14) Daniel Potts' Letter(1827), Sweet Lake, July 8(Gowans, ibid., 187-188所収)
- 15) Jowe Meek's Narrative(1870) (Gowans, ibid., 192-194所収)
- 16) Ferris, Warren A.(1842): Wild Western Scenes, Rocky Mountain Geysers, Western Literary Messenger 2(2):12-13, July 13(Gowans, ibid., 197-202所収)
- 17) Mattes(1962): ibid., 57
- 18) Haines(1977): ibid., 46-47
- 19) Russell, Osborne(1955): Journal of Trapper, ed. Aubrey L. Haines, Oregon Historical Society(Gowans, ibid., 227-259所収)
- 20) ロデリック・ナッシュ(1989): 人物アメリカ史(上), 193-228, 新潮社
- 21) Father Pierre-Jean deSmet to Messrs. Albert and Campbell, July 1, 1857(Gowans, ibid., 266-267 & Map18所収)
- 22) Langford, Nathaniel Pitt(1975): The Discovery of Yellowstone Park, Introduction xxix, Univ. of Nebraska Press, Lincoln(1905の初版の復刻版)
- 23) Haines(1977): ibid
- 24) Raynolds, W.f.(1868): Report on the Exploration of the Yellowstone River, 40th Congress, 2nd Session, Senate Executive Document No.77, Government Printing Office(Gowans, ibid., 268-272 & Map 21所収)
- 25) Mattes(1962): ibid., 81-83
- 26) Haines(1974): ibid., 45-46
- 27) Haines(1977): ibid., 91-94
- 28) Langford(1975):ibid., Introduction xxxiv
- 29) Cook, C.W.(1870): The Valley of the Upper Yellowstone, Western Monthly, July(Crampton, Ibid., 83-89所収)
- 30) Haines(1977): ibid., 101-102
- 31) Haines(1977): ibid., 103
- 32) Harnsberger, John L.: Jay Cooke and Minnesota, The Formative

- Years of the Northern Pacific Railroad, 1868-1873, Arno Press, 1981(1956年の論文の復刻版)
- 33) Gray, John S.(1972): Trials of A Trailblazer, P.W. Norris and Yellowstone, Montana Western History, 12(3):54-63
- 34) Haines(1974): ibid., 56
- 35) Haines(1972): ibid., 135
- 36) Doane, G. C.(1871): Report of on the So-Called Yellowstone Expedition of 1870 to the Secretary of War(Crampton, ibid., 113-148所収)
- 37) Hirsch, Sarah(1983): The Art of the Yellowstone, Thomas Gilcrease Museum Association
- 38) Haines, Aubrey L.(1972): Lost in the Wilderness, Truman Everts' 37 days of terror, Montana Western History, 22(3):31-41
- 39) Langford, N.P.(1870): The Yellowstone Expedition, Helena Daily Herald, Sep. 26(Crampton, ibid., 90-91所収)
- 40) Washburn, H.D.(1870): The Yellowstone Expedition, Helena Daily Herald, Sep. 30(Crampton, ibid., 92-96所収)
- 41) Cockhill, Brian, ed.(1972): The Quest of Warren Gillette, Based on the Original Diary, Montana Western History, 22(3): 12-30
- 42) Hedges, Cornerius(1870): Yellowstone Lake, Helena Daily Herald, Nov. 9(Crampton, ibid., 107-110所収)
- 43) Haines(1977): ibid., 135
- 44) Early(1984): ibid., 15-16
- 45) Langford, N.P.(1871): The Wonders of Yellowstone, Scribner's Monthly, 2(1):1-17
- 46) Langford, N.P.(1871): The Wonders of Yellowstone, Scribner's Monthly, 2(2):13-128
- 47) U.S. Geological Survey(1980): Ferdinand Vandiveer Hayden and the Founding of Yellowstone National Park, U.S. Geological Survey
- 48) Haines(1977): ibid., 48-49
- 49) Hirsch(1983): ibid., 8
- 50) Haines(1974): ibid., 109およびBartlett(1974): ibid., 206-207

- 51) Haines(1977): *ibid.*, 75
- 52) Haines(1977): *ibid.*, 166
- 53) Crampton(1932): *ibid.*, 28-35
- 54) Bartlett(1974): *ibid.*, 188
- 55) Haines(1977): *ibid.*, 116
- 56) Chambers, Frank, comp.(1988): *Hayden and His Men*, Francis Paul Geoscience Literature
- 57) Selmeier, Lewis W.(1972): *William Henry Jackson: First Camera on the Yellowstone*, *Montana Western History*, 22(3):42-53
- 58) Ayers, Linda(1987): *Yellowstone, the Poetry of Power*, Works of Thoman Moran, Art Museum, Jackson Hole
- 59) Truettner, William H.; Bolton-Smith, Robin(1972): *National Parks and American Landscape*, Government Printing Office
- 60) Findley, Rowe(1989): *The Life and Times of William Henry Jackson*, *National Geographic*, 175(2):216-254
- 61) Goetzman, W.H. & W.N.(1986): *The West of the Imagination*, 178, W.W Norton & Company
- 62) Hirsch, Sarah(1983): *ibid.*, 16-17
- 63) Haines(1974): *ibid.*, 121 & 127
- 64) Haines(1974): *ibid.*, 119
- 65) Haines(1974): *ibid.*, 180
- 66) 伊藤太一(1990): マキノ一国立公園の変遷からみた初期の国立公園の実体, 造園雑誌, 53(5):25-30
- 67) Crampton(1932): *ibid.*, 37-38
- 68) Haines(1977): *ibid.*, 196-198
- 69) Haines(1977): *ibid.*, 214
- 70) Early(1984): *ibid.*, 48
- 71) Haines(1977): *ibid.*, 214-215
- 72) Haines(1977): *ibid.*, 203-204
- 73) Haines(1977): *ibid.*, 212
- 74) Haines(1977): *ibid.*, 241-242
- 75) Haines(1977): *ibid.*, 244

- 76) Haines(1977): *ibid.*, 244-245
- 77) Norris, P.W.(1881): Annual Report of the Superintendent of the Yellowstone National Park, to the Secretary of Interior for the Year 1880, Government Printing Office
- 78) Haines(1977): *ibid.*, 264-269
- 79) Haines(1977): *ibid.*, 271
- 80) Hampton, H. Duane(1966): The Army and the National Parks, *Forest History*, 10(3):2-17
- 81) Hampton, H. Duane(1971): How the U.S. Cavalry Saved Our National Parks, Indian Univ. Press
- 82) Hampton, H. Duane(1972): The United States Army and the National Parks, *Montana Western History*, 22(3):64-79
- 83) Crampton(1932): *ibid.*, 36
- 84) Haines(1977): *ibid.*, 206
- 85) Early, Katherine E.(1984): "For the Benefit and Enjoyment of the People", Cultural Attitudes and the Establishment of Yellowstone National Park, Georgetown Univ. Press
- 86) Tejada-Flores, Lito, ed.(1988): Yellowstone to Yosemite, Early Adventure in the Mountain West(原著Bryant, William Cullen(1872): Picturesque America)
- 87) Runte(1987): National Parks (2nd Ed.), 59, Univ. of Nebraska Press
- 88) Early(1984): *ibid.*, 42-43
- 89) Hampton, H. Duane(1981): Opposition to National Parks, *Journal of Forest History*, 25(1):36-45
- 90) Ise(1962): *ibid.*, 17-18
- 91) Szasz, Ferenc M.(1977): Wheeler and Holy Cross, Colorado's "Lost" National Monuments, *Journal of Forest History*, 21(3):133-144
- 92) Goetzmann(1986): *ibid.*, 170-182
- 93) Chase, Alstone(1986): Playing God in Yellowstone, The Atlantic Monthly Press
- 94) Runte, Alfred(1987): *ibid.*, 33-64

- 95) Runte, Alfred(1977): The National Park Idea, Origins and Paradox of the American Experience, Journal of Forest History, 21(2):64-75
- 96) Sellars, Richard W. et al.(1983): The National Parks, A Forum on the "Worthless Lands" Thesis, Journal of Forest History, 27(3):130-134
- 97) Sellers(1983): ibid.
- 98) Crampton(1932): ibid., 37
- 99) Nash, R.W.(1963): The American Wilderness in Historical Perspective, Forest History, 6(4):2-13
- 100) U.S. Geological Survey(1980): ibid., 18-25
- 101) Sax, Joseph L.(1976): America's National Parks, Natural History, (10):58-87,
- 102) Langford(1972): ibid., 117-118
- 103) Langford, N.P.:自筆講演原稿(1870)、イエローストーン図書館所蔵
- 104) Haines(1977): ibid., 138
- 105) Crampton(1932): ibid., 18-19
- 106) Huth, Hans(1984): Yosemite, the Story of an Idea, Yosemite, Natural History Association (reprinted from Sierra Club Bulletin, 1948)
- 107) Haines(1977):ibid., 129-130
- 108) Runte(1987): ibid., 41-42
- 109) Yard, Robert Sterling(1920): Glimpses of Our National Parks (初版1915)
- 110) Yard, Robert Sterling(1921): The Book of the National Parks, Charles Scribner's Sons
- 111) Cameron, Jenks(1922): The National Park Service, 3-4, D.Appleton and Company
- 112) Huth, Hans(1948): ibid., 36
- 113) Clary, David A.(1972): "The Place Where Hell Bubbled up", A History of the First National Park, Office of Publications, National Park Service

- 114) Ise, John(1961): Our National Park Policy, 15, Johns Hopkins Univ. Press
- 115) Brockman, C.f.; Meriam, L.C.Jr.(1973): Recreational Use of Wild Lands(2nd ed.), 42-43, McGraw-Hill
- 116) Newton, Norman T.(1971): Design on the Land, The Development of Landscape Architecture, 518, The Belknap Press of Harvard University Press
- 117) Encyclopedia Britannica(1967): national parks and nature reservesの項, 68
- 118) Frome, Michael(1967-): National Park Guide, Rand McNally
- 119) Hansen, Bert(1957): The Birth of Yellowstone National Park
- 120) Albright, Horace Marden(1972): Memories of the Great and Near-great in Yellowstone, Montana Western History, 22(3):80-89
- 121) Chase(1984): ibid., 235-236
- 122) Yellowstone National Park(1926): Ranger Naturalists Manual of Yellowstone National Park
- 123) Chase(1986): ibid.
- 124) 国立公園局歴史専門官Barry Mackintosh氏およびイエローストーン古文書専門官Tom Tankersley氏に照会
- 125) 丸山宏(1986):黎明期ナショナル・パークについての情報とその紹介者たち, 京都大学演習林報告, (57):268-282
- 126) 東良三(1948): アメリカ国立公園考, 淡路書房
- 127) Tilden, Freeman(1986): The National Parks, Alfred A. Knopf(初版1951)
- 128) Schullery, Paul(1979): A Reasonable Illusion. Rod and Reel, the Journal of American Angling(Nov./Dec.)(Schullery, Paul(1984): Mountain Time, 73-95にもこのエッセイが転載されている)
- 129) 伊藤太一(1991): イエローストーン地域における大火災の影響と意義, 京都大学演習林集報, (21):163-182
- 130) Simpson, John(1987): A Tale of Two Parks. Landscape Architecture(May/June), 60-67

第3章 第2の国立公園：マキノー公園の変遷

摘要：イエローストーンに続いて1875年に設立されたマキノー国立公園の変遷からの初期の国立公園観とその意義が明らかになった。すなわち、当時は自然環境の保全よりも、地元の経済的利害が重要であった。そのためいかにして管理費を確保するかが最大の問題となった。また、マキノーの自然は国立公園としての要件はみたせなかったが、軍によって公園らしい管理が行なわれ、その後の国立公園の発展に大きく貢献した。

1. はじめに

1872年にイエローストーン地域が世界初の国立公園となったことについては、前章で述べたように多く論じられているが、その3年後に設立されたマキノー(Mackinac)国立公園については、国立公園史においてほとんど触れられていない。その理由としては、国立公園局が設立される遙か以前の1885年に州に移管されたということと、その空間の質が国立公園に足る水準のものとは認識されていなかったということの2点が考えられる¹⁾。

確かに、偶然にも国立公園になってしまった²⁾³⁾⁴⁾というのが現実であるが、そのこと自体が当時の国立公園に対する認識の反映でもある。本論ではその変遷を探ることによって、国立公園という空間に対する当時の人々の考え方を明らかにするとともに、国立公園の発展におけるマキノーの位置づけについて検討する。

2. マキノー国立公園の変遷

1) 国立公園設置⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾

マキノー島はミシガン州の北部のミシガン湖とヒューロン湖を結ぶ狭まった部分に位置する東西、南北とも約4kmの島である(図-1)。

五大湖沿岸は大西洋からの水運を生かして早くから交易が盛んで、1669年にインディアンとの毛皮の交易を行なったフランス人たちがマキノー島に西洋人として最初に足を踏み入れている。1763年にフレンチ・インディアン戦争に勝利し、北米での覇権を確立したイギリスは、二つの湖を結ぶ水運の要所であるこの島で、1780年に砦の建設を開始した。パリ平和条約によりアメリカの独立が承認された1783年には一旦アメリカに引き渡されたが、1812年に勃発した第二次英米戦争で再びイギリス軍によって占拠された。その終結後の1814年に返還され、その後80年間に渡って、アメリカ陸軍が駐屯した。

対外的に社会が安定した19世紀後半、とりわけ、南北戦争後になると、この島の夏の気候が非常にすぐれているということが広く知れわたり、島に寄港する汽船が増加したこととあいまって、シカゴやデトロイトなどから避暑のために裕福な人々がやってくるようになった。

1873年3月11日にマキノー島出身のミシガン州選出の上院議員フェリー(Thomas W. Ferry)が、陸軍長官にマキノー島での国立公園設立の検討を要請する決議案を議会に提出した。彼は、砦が軍事的には必要性が薄れて

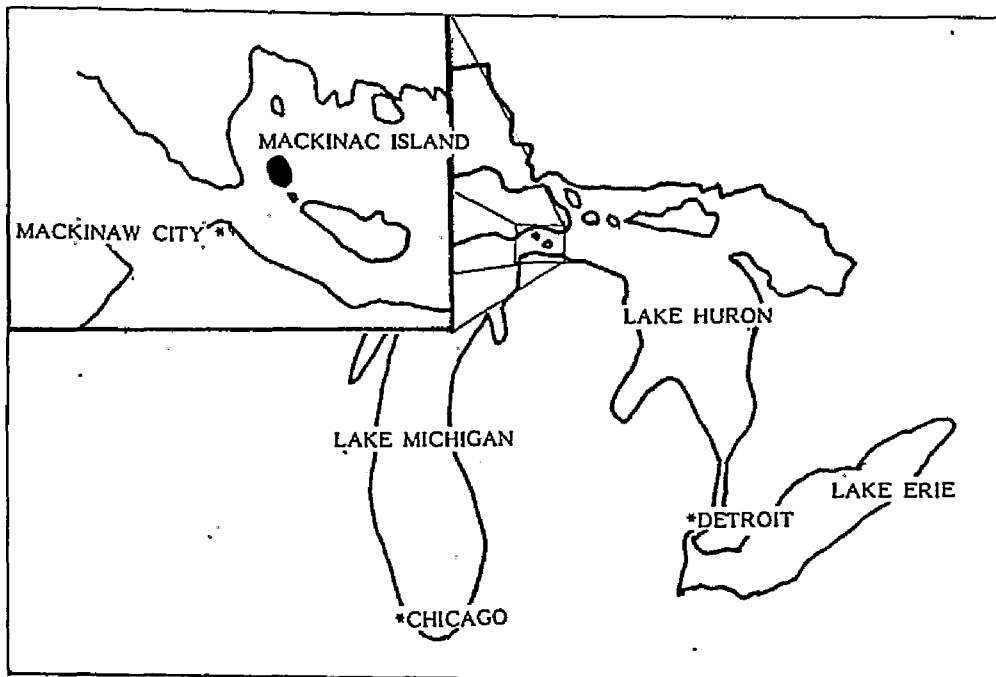


図-1 マキノー島の位置

いることを指摘し、砦とその周囲を除いた島の約半分を占める約1,000エーカーの連邦政府の軍用地(図-2)を公園として設定するということを提案した。彼が公園設立を企図した理由としては、軍事的には意義を失いつつあるが歴史的な意義が大きいこの砦と周囲の風光明媚な地域(写真-1,2)が、公有地が払い下げられている時代を反映して民有化されるのを放置したら、ナイアガラのように有料化され人々が自由に楽しめなくなると危惧したことがあげられる。当然のことながら、彼は前年に成立したイエローストーン公園法を意識していたし、公園設立による地元への経済効果も期待していた。

これに対して、テキサス州選出の上院議員ハミルトン(Morgan C. Hamilton)は移民による土地の開拓を進めているさ中に公園を設立することは、時代に逆行することであり、またそのような目的のために国費を支出できないと述べた。さらに、歴史的意義に関しては他にもたくさん貴重なものがあると述べ、最後に、インディアンの保留地にしたらどうかと提案した。結局、陸軍長官に検討を促すだけの決議案であったためか、37対13で可決された。この要請に対して、1873年12月17日に陸軍長官ベルクナップ(William W. Belknap)はフェリーの考えを支持した。

これを受けて提出された公園設立法案が1874年5月28日に上院を通過し下院に回された。下院においても反対理由として管理費用の負担があげられた。また、インディアナ州選出の下院議員ホーマン(William S. Holman)は、州に移管することを提案したが支持されなかった。結局、1875年3月3日、この法案は下院でも2/3の賛成で可決され、同日、グラント(Ulysses

S. Grant)大統領が署名し、マキノー国立公園が設立された。

この法律はイエローストーンのものに似ているが、陸軍長官が管理し、必要によってはパレードや軍事演習に利用できることを規定し、また、10年以内の土地のリースを許可してその収入を公園の管理や道路の建設に充当する条項を設けている点が特色となっている。さらに、園内での軍人以外の不法行為の規制が問題となったが、管理責任者は規制権を有するという司法側の判断が下された。この公園法が容易に成立した理由として以下の点が考えられる。

- ① 連邦政府の所有地であり、管理主体も変化しなかった。
- ② 管理者としてすでに軍隊が駐屯していた。
- ③ 別荘地のリースによる収入を期待し、国庫からの管理予算配当を要しなかった。
- ④ 鉱山資源や有用な樹林、動物などの経済価値を有する対象がなかった。
- ⑤ 新たな移民の居住と開拓の可能性がなかった。
- ⑥ 1864年に州に移管されたヨセミテ溪谷のひどい状態が知られていた。
- ⑦ 前例としてイエローストーンが設立されていた。
- ⑧ 砦としての軍事的必要性が薄れていた。
- ⑨ 大都市からのアクセスが良かったので、議員やその支持者を含む東部の富裕階層の避暑地としてよく知られていた。

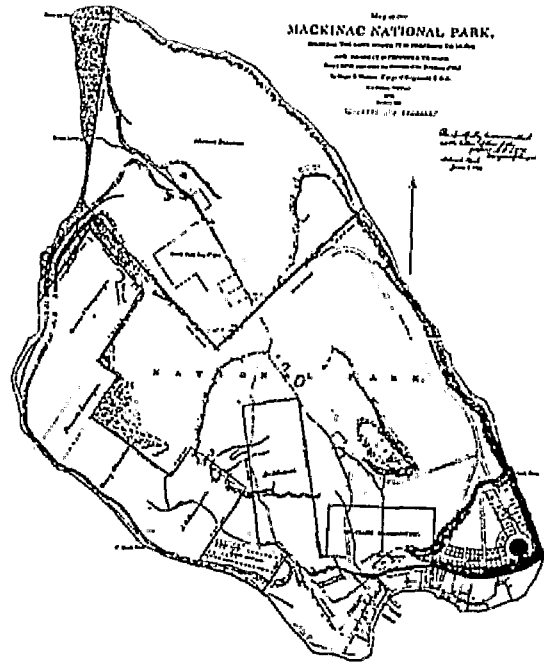


図-2 マキノー国立公園境界

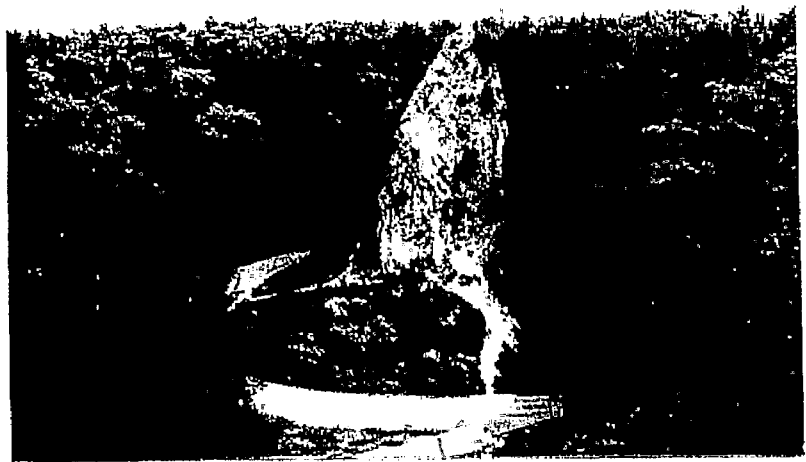


写真-1 シュガーローフ

この公園の設立に際して、マキノーの自然環境が国家的保全に価するののかという公園としての要件に関して、ほとんど議論の対象とならなかったという点は重要である。ランテは、アメリカの初期の国立公園が設定された主たる理由はそのすぐれた自然環境の保全ではなく開拓や資源開発などの経済的な価値が見出されない無価値の土地 (Worthless Lands) であ

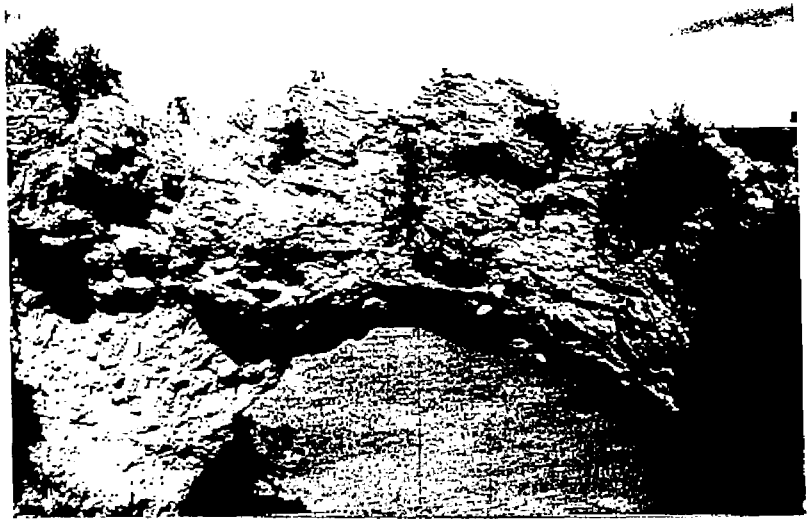


写真-2 アーチロック

るという消極的なものであるという理論を展開した¹¹⁾¹²⁾。彼はマキノーについては論じていないが、その理論はここでも当てはまる。

2) 国立公園時代⁹⁾

公園の管理責任者にはその砦の指揮官が兼任したが、片手間で行なうにはその管理の仕事量が膨大であった。また、道路整備などの管理用の収入源として当初あてにしていた土地のリースは、希望者があったのにも関わらず、測量予算がなかったので1886年まで実現しなかった。しかしながら、人員に関しては1876年5月にはフェリーの要請で1個中隊が増員され、2個中隊で管理されるようになった。当時はインディアンの制圧のため陸軍の西部派遣の要請が強かったことを考えると、これは異例の対応と言える。

1875年には砦の指揮官ハフ少佐 (Major Alfred L. Hough) は傷みの激しい建物 (North Block House) を、修理予算はないが石材は利用できるとして、取り壊す許可を申請した。これに対して、1876年春に主計総監メイグス (Quartermaster General M.G. Meigs) は、申請を却下した。彼はその歴史的価値を評価し、その希少性と観光資源としての重要性について述べた文書をハフ少佐に出し、その修理予算 (\$723) を配当した。砦自体は公園から除外されてはいたが、これは国立公園における歴史的対象の保全の嚆矢とも言えるもので、その先見性が評価される。今日ではこの歴史的な砦自体が州立公園の中心的存在となっている (写真-3)。

1881年には最寄りのマキノーシティ (Mackinaw City) に鉄道が伸び、そこから船で島に渡れるようになった。これによって東部の諸都市から鉄道で容易に来ることが可能になった。

鉄道会社にとっては減少する木材などの運搬に代わるものとして観光客の輸送は重要であった。翌1882年にはデトロイトからの汽船の定期的運航も始まった。

これらの交通網の整備に対応して、島の宿泊施設も増加し、1875年には5つの小規模のホテルがあったに過ぎなかったが、1887年7月には当時としては最大級の1,300ベッドをもつリゾートホテルとしてグランドホテル(Grand Hotel)(写真-4)が開業し、1890年までに島の宿泊容量は2,000人近くに達した。

以上のような公園へのアクセスや施設の改善は訪問者の増加を促し、過剰利用の問題をも引き起こした。訪問者によるカバの樹皮の剥ぎとり、石の持ち去り、住民による樹木の伐採、牛の放牧による食害、私有地との境界の問題、



写真-3 港と砦

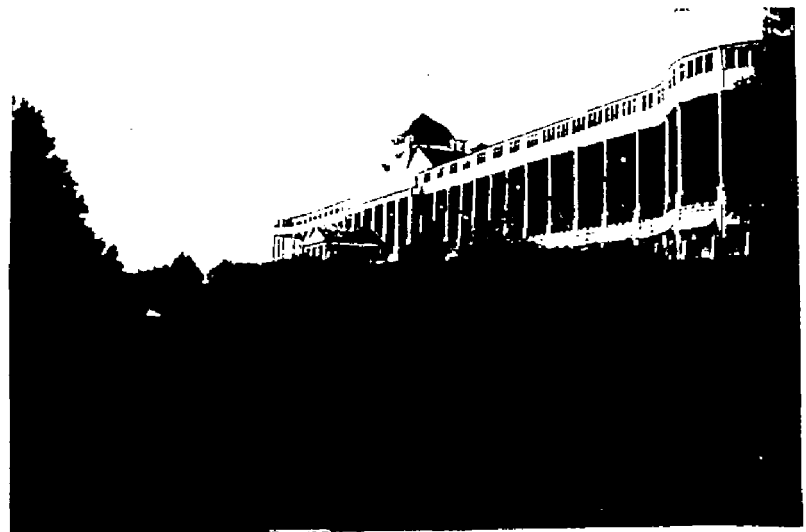


写真-4 グランドホテル

増加するごみの処理問題などが顕在化し、軍隊の負担が増加した。1884年2月25日、フェリーに公園設定を提案したと言われる医師バイリー(John R. Bailey)は、陸軍長官に対して、公園の破壊を防止するために管理予算を付け、文民の専任園長を任命するように求めた。当時の指揮官も彼を支持し、地元の下院議員(Edward Breitung)によって管理予算法案が下院に提出された。この法案は否決されたが、陸軍省の所有する隣の島(Bois Blanc Island)の売却が許可され、その収入で初めての公園管理予算が得られた。しかしながら、その額が不十分であったため専任の園長は雇用されなかった。

1886年からようやく土地のリースが始まり、1891年までに25軒の別荘が建てられた。1894年には島の名所での委託業者による出店が許可され、これも公園収入となった。これらの収入は主として道路の建設に当てられ、展望台も作られた。

1887年には園内での広告の禁止が通達された。また、1894年にはドックの建設、天然ガスの探索、湖岸沿いの電車の建設などの開発計画案が出されたが、軍はすべて却下した。

3) 州立公園への移管⁹⁾¹³⁾¹⁴⁾

1895年に陸軍省はマキノー砦をもはや維持できないと判断した。軍事的必要性が全くなくなり、年間4-5万ドルに達するその維持費用が、軍事的業務のためではなく、35家族ほどの別荘と旅行者のための名勝の保全に使われることは正当化できないということが主たる撤退の理由であった。また、内務長官の要請を受けて、1886年からはイエローストーン、1891年からはカリフォルニアの3つの公園にも軍隊が駐屯するようになっていたので、これ以上公園の管理に人員と予算をさくことは、有事の際に支障をきたすと危惧されていた。

陸軍長官ラモン(Daniel S. Lamont)は、砦だけを残して売却、現状維持、賃貸料を増額しそれで人件費を賄う、公園と砦を州に移管するなどのいくつかの可能性を考えていた。彼はその年次報告の中で、この公園は「人々の公園」にはならず、金持たちのリゾートであったと述べている。しかし、イエローストーンなどと比較すると、大都市から鉄道や汽船を利用して遥かに短時間かつ安価に訪れることのできた上、マキノーシティから島までは1時間足らずであった。また、島の宿泊容量が2000名に達していたことは、かなり大衆化した避暑地になっていたことの現われでもある。

民間に払い下げられることを危惧した地元の働きかけに応じて、1895年2月14日にミシガン州選出の上院議員で、デトロイトとマキノーを結ぶ汽船会社の株主でもあったマクミラン(James McMillan)は陸軍省とかけ合い、砦と国立公園を州に移管し州立公園とする案に承諾を得た。3月2日には移管した土地が公園として使われなくなった場合には連邦政府に返還するという条項を付加し、マキノーを州に移管する法が上院で成立した。5月31日には受入れ側の州議会でもマキノー島州立公園委員会(Mackinac Island State Park Commission)を設立する法案が可決され、国立公園の設立を推進したフェリーがその委員長となった。しかしながら、この州立公園法もその管理予算を配当していなかったもので、委員会は陸軍省が徴収した土地リース料の引き継ぎや、シーズン終了までの兵士の駐屯を求めた。

1895年8月3日に移管が陸軍長官によって許可され、9月16日に兵士が去り、砦と公園が州に引き渡された。国立公園としての20年の歴史に幕を閉じるとともに、ミシガン初の州立公園が発生した。その翌年には馬車の御者たちが自動車反対運動を行ない、公園委員会は1899年から園内でのその利用を禁止し、今日まで続いている。御者たちにとっては仕事の確保が動機だっ

たとしても、委員会では公園の利用との関係も検討されたと考えられる。近年、国立公園内での自家用車の制限の必要性が認識されるようになったが、出現し始めた当時としては画期的と言える。ここで自動車の導入が阻止できた理由として、島が自動車なしで移動できる程度の広さであったこと、住民は港周辺に集中しているので交通手段に影響を受けなかったこと、まだ当時は自動車の存在自体も稀であったこと、さらに、御者たちの団結が強かったことなどがあげられる。

表1 マキノー公園および関連事項年表

マキノー公園	関連事項
1814 陸軍による砦の管理開始	1862 ホームステッド法成立 1864 ヨセミテ溪谷が州立公園となる 1872 イエローストーン国立公園設立
1873 国立公園設置運動開始 1875 国立公園設立 1876 駐屯人員を2個中隊に増員 1876 砦の建物保存決定 1881 マキノーンティまで鉄道敷設 1882 デトロイトとの定期航路開設 1884 公園管理費が計上される 1886 土地のリース開始 1887 グランドホテル開業 1887 園内の広告禁止	1886 イエローストーンに軍隊の駐屯開始 1890 セコイアとジェネラルグラント、ヨセミテ溪谷を取り囲む地域がそれぞれ国立公園となる 1891 上記の3公園に軍隊の駐屯開始
1894 委託業者による商業活動開始 1894 開港計画案を全て拒否 1895 州に移管、州立公園となる 1897 連邦政府は州からの返還拒否 1899 園内の自動車の利用禁止	1894 イエローストーンでの盗猟などの取締法制定 1905 ヨセミテ溪谷から連邦政府に返還される 1906 ヨセミテ国立公園に溪谷が含まれる 1916 国立公園局設立、公園が軍から移管される

表-1 マキノー公園および関連事項年表 州に移管されても当初は管理予算が配当されなかったため、土地リース料を値上げして対処していたが、管理に費用がかかりすぎるため、1897年4月27日には州議会で公園を連邦政府に返還するという法案が可決され、公園委員会は全会一致でそれを支持することを決定した。しかし、連邦議会はそれを受け入れず、州はその法を撤回した。

さらに、1938年には州知事及び州議会に対してマキノー島の市長名でこの州立公園を国立公園局の管理する国立歴史地区(National Historic Site)として管理することを求める陳情書が出された。この中で、1935年に成立した歴史地区法(Historic Sites Act)がマキノー州立公園に適用されれば、連邦政府の十分な予算で恒続的に管理され、さらに、観光地としての名声も高まるなどの利点をあげている。だが、この請願は採択されず、公園委員会は料金を徴収して、その歴史的な砦の保全に充当するようになった。このように地元としては公園は望むが管理費は負担したくないという姿勢が明白である。現在に至るまでマキノーは州立公園として管理されている。

3. 初期の国立公園の管理(表-1)

1) ヨセミテとイエローストーン¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾

1864年にはヨセミテ溪谷とマリボサのセコイアの樹林からなる地域が1862年のホームステッド法(Homestead Act)による私有化の対象から除外するために州立公園になった。その法に

は「民衆の利用、リゾート、レクリエーションのために維持される (be held for public use, resort, and recreation)」と規定された。

1866年には罰則規定と管理委員会、管理者の給与などに関する州法が成立し、クラーク (Galen Clark) が初代の管理人 (Guardian) となった。その年には \$2,000 の管理予算が配当されたが、その後は管理人の給料程度であったので、委員会は土地をリースして道路などの施設の改善を民間に委託した。そのため道路なども有料となった。さらに利権をめぐる委員会の決定が州議員によって覆されたりするような問題が発生し、その成立目的とは掛け離れた状態となり、溪谷は羊の放牧や樹木の乱伐などによって荒れ果てた。1880年にはその対立が収拾のつかない状態となった。

1888年には委員会の査察が行なわれ、1889年にはミュア (John Muir) らによる国立公園設立運動が開始された。その結果、1890年には9月25日にセコイア (Sequoia) が3番目の国立公園に、さらに10月1日にはヨセミテ州立公園を取り巻くドーナツ状の地域とジェネラルグラント (General Grant) 樹林が、保護林地 (Reserved Forest Lands) に指定され、実質的に4,5番目の国立公園空間となった。翌夏からは、軍隊がこれらの公園に駐屯し、管理するようになった。なお溪谷とマリボサ樹林は1905年になってようやく連邦政府に返還され、翌年厳密な意味でのヨセミテ国立公園が設立された。

一方、1872年にはワイオミングなどの領土 (Territory) だったイエローストーン地域は州に払い下げて保全することが不可能であったので国立公園になった。この法には「人々の楽しみのために、公園あるいは遊楽の場として保留する (set apart as public park or pleasuring-ground for the benefit and enjoyment of the people)」と規定されていた。しかし、1878年まで全く管理予算がなく、また、破壊行為や密猟に関しては1894年に至るまで取り締まるべき法律がなかった。

1883年には公園内の土地のリースを許可する法が制定され、管理員が私利私欲のためにリースの拡大を進めるなどの問題が発生した。1886年8月4日に成立した予算には道路建設費2万ドルのみが配当され、人件費がなかったので、その2日後に内務長官は陸軍長官に軍隊の派遣を要請した。8月20日1個中隊が園長に取って代わり、その後32年間駐屯した。

2) マキノーの特色と意義

マキノー国立公園の設立法もヨセミテやイエローストーンに似かよってはいるが、「国立公園地として、健康、慰安、遊楽のため、人々の利益や楽しみのため保留する (set apart as a national public park, or grounds, for health, comfort, and pleasure, for the benefit and enjoyment of the people)」と規定され、イエローストーン法にはなかった「国立」ということばが明記され、より広く公園の目的が定義

されている。

また、実現までに時間を要したとは言え当初からリース収入による管理費捻出と陸軍長官による規制条令の施行を認める条項が付随していたことは、管理について配慮がされていたという点で重要である。この管理費捻出のためのリース規定は他の公園では管理責任者の私利私欲のために濫用されたが管理主体がしっかりしていたマキノーでは有効に活用された。

当時イエローストーンやヨセミテがとて公園として利用される状態ではなかったのに対して、マキノーでは軍と言う確固たる組織によって、施設の改善や利用の規制が客観的に遂行された。この成功が、1916年に国立公園局が設立されるまで、イエローストーンやヨセミテ、ジェネラルグラント、セコイアなどの国立公園において軍隊による管理が内務長官によって要請されるきっかけとなったのは明白である。また、1916年の国立公園局の設立に際して、これらの公園から軍が引き揚げる際には、希望者が公園のレンジャーとして残留し、それまでに培われた公園管理の経験が公園局に引き継がれた。

4. 考察

もし当初から管理費や人件費などの予算の配当を規定していたら初期の国立公園法案は全て否決されたであろうが、いずれの公園においてもその設立時には管理するための予算が全くないか不十分で、管理の方針もあいまいなままであった。これは大衆に関わりのないことに国費を支出できないという考え方の反映であろうが、当時は国立公園空間自体やその意義が一握りのエリートたちにしか理解されていなかったことを意味する。また、自然環境からなる公園と言うものをどのように管理するべきかという点も模索状態であった。換言すれば、ごく少数の人々を除いて、国立公園の設立に際してはその直接の利害だけが問題であり、その理念というものは"curiosity"ということばが用いられたように名勝・天然記念物的な保存以上のものとしては認識されていなかった。公園の数が増加し管理経験が蓄積されるようになって、次第に理念が形成されていったというのがより正確であろう。

そのような時代にあって、マキノーは国立公園としての規模も内容も備えていなかったとは言え、公園の具体的な管理の仕方を模索する実験場として機能し、歴史的建造物の保全や委託業者の監督などの試みや過剰利用への対応を通じて、その後の国立公園の発展に大きく貢献した。

文献

- 1) Hogenauer, Alan K.(1983): Gone, But Not Forgotten, America's Delisted National Park Service Sites. Paper Delivered at the Travel and Tourism Research Association 14th Annual Conference, Banff, Alberta.

- 2) Ise, John(1961): Our National Park Policy. The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore
- 3) Sax, Josef L.(1980): Mountains without Handrails, Reflection on the National Parks. The Univ. of Michigan Press, Ann Arbor
- 4) Mackintosh, Bary(1985): The national Parks, Shaping the System. Government Printing Office, Washington, D.C
- 5) Williams, Meade C.(1986): Early Mackinac, A Sketch Historical and Descriptive. Avery Color Studios, Au Train, Michigan(Originally Published in 1897).
- 6) Piljac, Pamela A. & Thomas M.(1988): Mackinac Island, Historic Frontier, Vacation Resort, Timeless Wonderland. Bryce-Waterton Publications, Portage, Indiana
- 7) Bailey, John Read(1904): Mackinac, A History and Guide Book with Map. The Richmond & Backus Company
- 8) Benjamin, Robert E.(1955): Mackinac Island, Three Hundred Years of History
- 9) Widder, Keith R.(1975): Mackinac National Park, 1875-1895. Mackinac Island State Park Commission
- 10) Peterson, Eugene T.(1973): Mackinac Island, Its History in Pictures. Mackinac Island State Park Commission
- 11) Runte, Alfred(1987): National Parks, the American Experience, 2nd ed.. Univ. of Nebraska Press, Lincoln
- 12) Sellers et al.(1983): The National Parks, A Forum on the "Worthless Lands" Thesis. Journal of Forest History, 27(3):130-145
- 13) Doud, Robert V., Mayor(1938): Petition to the Hon. Frank D. Fitzgerald, the Chambers of the Legislature, to Cede the Mackinac Island State Park to the United States as a National Historic Site and Park, Mackinac Island, Michigan.
- 14) Lotz, David Terry(1976): An Analysis of Deletion of Areas Formaly Administered by the National Park Service. Unpublished Master's Thesis, Michigan State Univ.

- 15) Hampton, H. Duane(1971): How the U.S. Cavalry Saved Our National Parks. Indiana Univ. Press, Bloomington
- 16) Hampton, H. Duane(1966): Army and National Parks. Journal of Forest History, 10(3):2-17
- 17) Haines, Zubrey L.(1974): Yellowstone National Park, Its Exploration and Establishment. U.S. Government Printing Office, Washington, D.C.

第4章 生き残った国立公園：ホットスプリングス国立公園の変遷

摘要：1832年に連邦政府保留地となったホットスプリングスの国立公園史における位置づけを試みた。保留地とはなったものの実際に管理が始まったのは1877年であった。さらに、1921年に保留地から国立公園となったが、その理由として、当時は温泉ブームあった上、マザー国立公園局長が公園と地域コミュニティとの繋がりを重視したことがあげられる。近年は、保全対象が温泉自体から歴史的な温泉リゾートとしての建造物とその環境に移行している。すなわち、今日でも国立公園となっているものの、実体は歴史公園として管理されている。このことは国立公園という名称を消去することの困難さと、国立公園局が史跡の保全を媒介とした都市域での活動を重視していることを示す。

1. 研究対象および目的・方法

ホットスプリングス (Hot Springs) 国立公園はアメリカのアーカンソー州の州都リトルロック (Little Rock) の南西約88kmのホットスプリングス市街に接している (図-1)。今日、この公園は47の泉源およびその温泉を利用するために1920年代に建設された浴場街

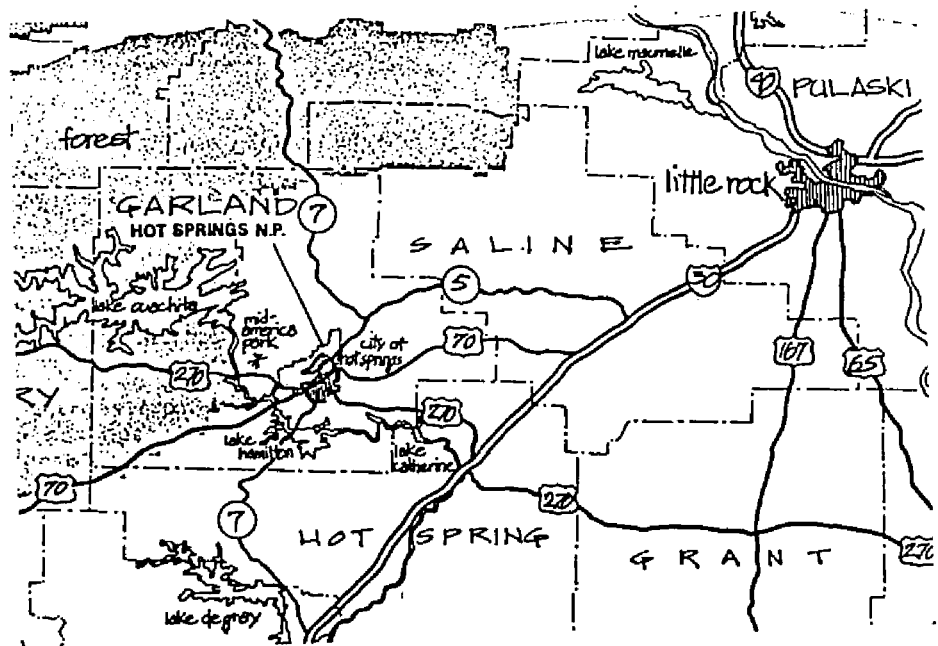


図-1 ホットスプリングス国立公園位置図

(Bathhouse Row)とその周囲のホットスプリングス山 (Hot Springs Mountain) などの丘陵地が主たる管理対象となっている (図-2)。面積は5,839エーカーで、そのうち4,837エーカーが連邦政府所有地である¹⁾

このように、他の国立公園にくらべると、きわめて小規模で市街地にあること自体が特異である上に、その対象が自然景観ではなく歴史的浴場街となっている。次章で述べるように、すでに他の小規模な国立公園が他のカテゴリーに移管された今日、ホットスプリングスの特殊性が際立っている。ニュートン²⁾この点からホットスプリングスを国立公園に値しないと記しているが、今日の基準で過去を評価することには問題がある。

そこで、本章ではホットスプリングス公園資料室や内務省図書館などに保存された文献資料

を用いて、この特殊な公園の成立および管理の変遷過程を明らかにした。さらに、その時代の社会的背景と国立公園の状況を考慮しつつ分析し、アメリカの国立公園史において、果たした役割の評価を試みる。

2. 保留地の成立と確定³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾

温泉を訪れた最初の白人は1541年のスベ

イン人のデソト(Hernandode Soto)の一行ではないかと言われている。信頼できる記録としては1803年にアメリカがフランスのナポレオンから広大なルイジアナを購入した際に、この温泉の噂を聞いて興味を抱いたジェファースン(Thomas Jefferson)大統領がダンパー(William Dunber)とハンター(George Hunter)を派遣した際のものが残されている。それによると1804年12月5日から翌年1月8日まで彼等はホットスプリングスに滞在し、医者のハンターは温泉の成分を分析している。そのときすでに温泉を利用するために建てたと思われる獵師の小屋があったと記録されている。

1830年に先買権法(Preemption Act)が成立し、違法であっても公有地を占有しているものに先買権が与えられることになった。この法律による公有地の占有増加を危惧してか、1832年4月20日にアーカンソー準州選出のセビアー(Ambrose H. Sevier)議員が提出した、温泉を中心とする4セクションの土地(2560エーカー)を連邦政府の保留地とする法律が、ジャクソン(Andrew Jackson)大統領によって署名された。しかし、この法には保留する目的に関して何も言及されていない。さらに、保留地とはなったものの管理体制が存在せず、測量も1838年まで行なわれなかった。その後も連邦政府が放置したので、ここが保留地であることを知らないまま定住する占有者が増加し、後にその先買権が問題となった。1830年には最初の浴場が、1834年には宿泊施設が営業を始め、1836年にはリトルロックからの馬車も通じるようになった。1870年までにはこの保留地の中に4,000人も住む町ができあがっていた。

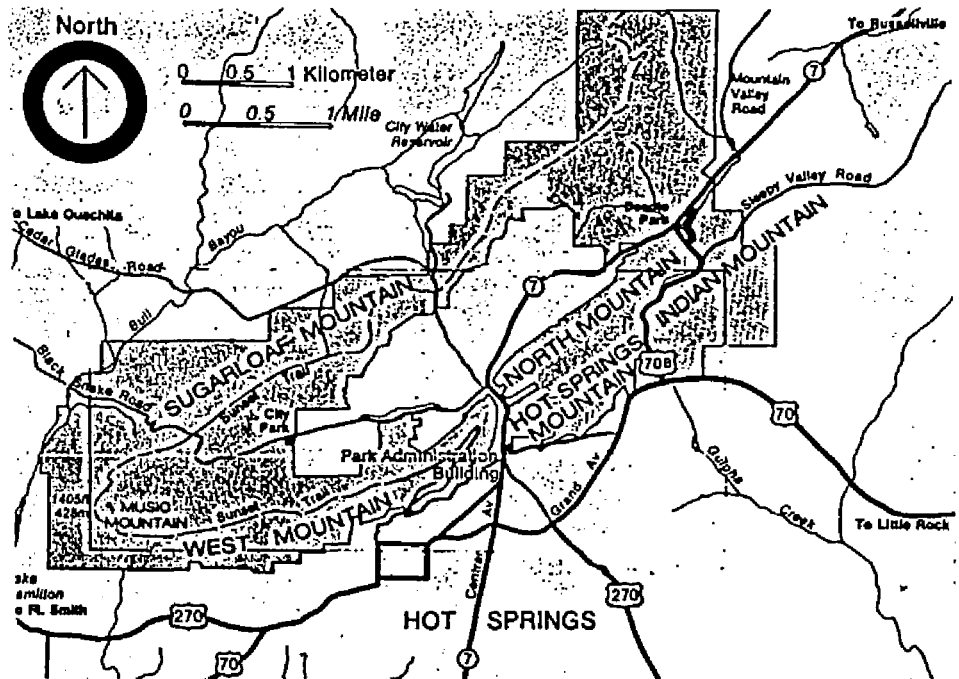


図-2 現在の公園境界図

南北戦争後の混乱も終結した1870年代になってようやく議会在本腰を入れて保留地内で私有化された土地の所有権問題の解決を目指した。1870年6月11日に、保留地内の土地の所有権を主張するものは請求裁判所に提訴できるとする法律それをもとに1876年4月24日に最高裁判所は請求者には有効な権利がなく、連邦政

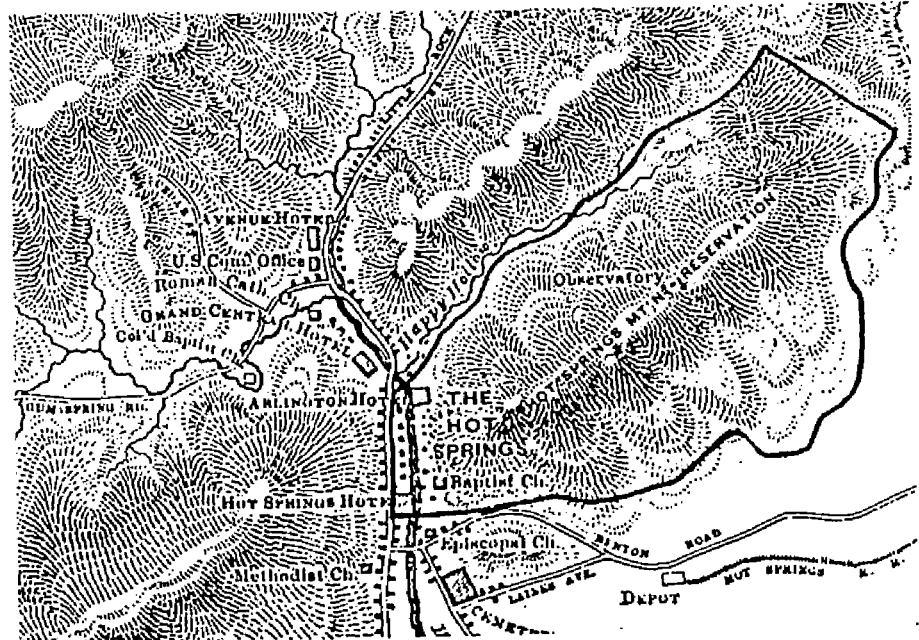


図-3 1878年の公園境界図

府の保留地であること認めるという判断を下した。しかし、公有地担当機関の怠慢のゆえに、すでに町ができ上がっているという現実を無視するわけにはできないので、1877年3月3日には土地問題を解決するために3名からなる委員会の設置法案が議会で成立した⁷⁾。その内容は、保留地を測量してから、温泉とホットスプリングス山を永久保留地 (Permanent Reservation) として保全すること、それ以外の土地をホットスプリングス市街の区画整理に充当すること、さらに、住民の主張を配慮することなどであった。委員会はこの困難な仕事を翌年12月11日に終了させたが、住民にとってこれまで占有してきた土地の評価額が高かった上、その年の大火で町の建物の多くが焼失していたので、住民が購入する際の土地評価額を下げることを求める陳情が議会になされた。その点を配慮した1880年1月16日の法律では、境界が確定した永久保留地が設立される一方、市街地の区画整理で拡張される道路上の建物は政府の評価額で収用された。それ以外の地域の住民には評価額の40%で占有している土地が売却された。また、残された山地は永久保留地に組込まれた。旧保留地は実際の面積が2,529エーカーで、そのうち911エーカーが永久保留地、700エーカーが住民に売却、348エーカーが街路用地として町に移管、残りの570エーカーが市街地として区画され競売された。永久保留地は1880年6月16日の法律では公園として公共の利用に供された¹⁾。

3. 保養温泉としての管理⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾

1877年には温泉とその背景の山からなるわずか265エーカーが永久保留地として確定し(図-3)、ケリー(Benjamin F. Kelley)が最初の管理責任者(Superintendent)として大統領によって任命された。なお面積は、上述したように、1880年に開発不適地が加わり増加している。さらにその後10回以上にも渡り境界が調整され今日に至っている¹⁾。

永久保留地の設置時点で、すでにホットスプリングスの町の中心部にはホテルが建ち並ぶ一方、それらを利用する程の経済力のない者たちが山中に小屋掛けして温泉で療養している様子が当時の記録から明らかになっている¹¹⁾。1878年12月16日の法律で保留地管理責任者は貧困者を無料で入浴させることが規定され、政府の管理する浴場が設置された。1884年には改築され、女性用浴場も建設された。1904年にはさらに施設が拡充され、延べ134,539人がこの浴場を利用している。この政府無料浴場の様子を1915年に視察に訪れた公園局設置準備中のマザー(Stephen T. Mather, 1867-1930)が評価し、ホットスプリングスが国立公園となる一因となった。

一方、その永久保留地内において浴場を経営するものは地代と温泉使用代を政府に支払うことになった。たとえば、1896年の収入は\$17,190.88で、管理者の給与や諸経費の総額\$14,758.62を差引いても充分余裕があるほどであった⁸⁾。このように収入が充分あったため、保留地の社会基盤の整備が進んだ。1884年には温泉街の前を流れていた川(Hot Springs Creek)は埋立てられ、上部はセントラルアベニュー(Central Avenue)となり並木が植えられた。この造園はオルムステッド(Frederick Law Olmsted, Sr.)の事務所に依頼されたが、内務長官がその案を支持しなかったため、工兵部隊出身のスティブン(Robert Steven)のデザインが採用された¹²⁾。

1875年にはホットスプリングスまで鉄道が敷設され、療養を必要とする人々が馬車に揺られずに来ることが可能になっていたが、1900年にはリトルロックからの直接乗り入れも始まり東部の都市からのアクセスが改善された。

4. 国立公園としての管理¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾

1915年11月にマザーはホットスプリングスを訪れ、1916年に内務長官に提出した国立公園に関する報告書の中で高く評価している¹⁷⁾。政府無料浴場の利用頻度が高いことに言及し、浴場の増設と政府雇用医者をそのスタッフとして配属することを要請している。

1916年に内務省に公園局が設立され、マザーが初代の局長となったが、翌1917年に彼は過労のためノイローゼとなり、自らホットスプリングスで静養している¹⁸⁾。彼の要請を受けて、1920年には新しい政府の無料浴場の建設が始まり1922年には完成した。また、その園地の整備のため、彼はシカゴの造園家ジェンセン(Jens Jensen)を私費で雇っている。

1921年3月4日には内務省の管轄下にあったホットスプリングス保留地が18番目の国立公園となった。マザーがこの保留地を国立公園システムに編入した理由として、地域コミュニティの社会意識の向上があったとシャンクランドが述べている¹⁹⁾。

温泉ブームの当時、ホットスプリングスの利用は他のどの国立公園よりも多く、1914年の報告によれば年間の浴場街の入浴利用だけでも延べ625,860人、その売上は\$230,000に達し、300人が雇用されていたとなっている。さらに、政府の無料浴場の延べ利用者も154,035人に及ぶ。公園局が民衆の支持を渴望していた当時、このように利用が活発で、また裕福でなくても利用できるようになっていたホットスプリングスは公園局にとって好ましいものであった。特に西部の国立公園はアクセスの問題から金持ち達だけものだと言う批判に対して、ホットスプリングスは盾の役目を十二分に果たしたと言える。

今日の浴場街の建物は、借地契約更新に際して1911年から1922年に建て替えられたものである。1930年頃にはその周囲のデザインが次第に自然風になってきた。たとえば泉源の修景も幾何学的なものから手が加わった痕跡を見せないようなデザインとなった。これは国立公園というカテゴリーに適合させるための配慮であった¹²⁾。このようにデザインの変化からも国立公園という名称と、これほど手が加わって形成された都市的空間である現実とのギャップがすでに1930年代に意識されていたのが伺える。

5. 歴史的保養温泉として管理²⁰⁾²¹⁾²²⁾²³⁾

1946年、第2次大戦中の旅行制限の廃止にともなって温泉の利用者が記録を更新した。町全体で延べ1,052,000人、浴場街の入浴だけでも延べ649,270人に利用された。だが、一般的な薬が自由に買えるようになり温泉治療の必要性が薄れるとともに、自動車の普及は西部などの他の地域への移動を促進した。こうしてホットスプリングスの利用は次第に減少していった。一番豪華なフォードイス(Fordyce)浴場が1962年に閉鎖されたのを皮切りに、他の浴場も次々と続いた。さらに1953年には政府の無料の浴場も廃止されている。その結果、当然ながら市自体も衰退していった。

温泉自体の利用が減少する一方、歴史的環境に対する国民の関心が高まってきた。国立公園局による戦跡などの歴史的環境の管理は、ホットスプリングスの利用が最盛期を迎えていた1930年代に始まるが、1966年10月15日に歴史保全法(The National Historic Preservation Act)が成立して以来、国立公園局が比較的新しい歴史環境の保全に乗り出した²⁴⁾。これを受けて、翌年には公園局に考古学と歴史保全の部門が設けられた。ホットスプリングスでは1974年11月13日に6エーカーの浴場街が歴史保全地区(National Register of Historic Places)となった。

1980年には保全された建物を賃貸することが可能となり、実際に利用されている状態での保

全が可能となった。今日、ホットスプリングスでは一部の修復した浴場を民間に委託し、当時の湯治を体験できるようにしている。また、1989年に修復されたフォードイス浴場(写真-1)がビジターセンターとして公開され、当時の温泉浴場を再現している。

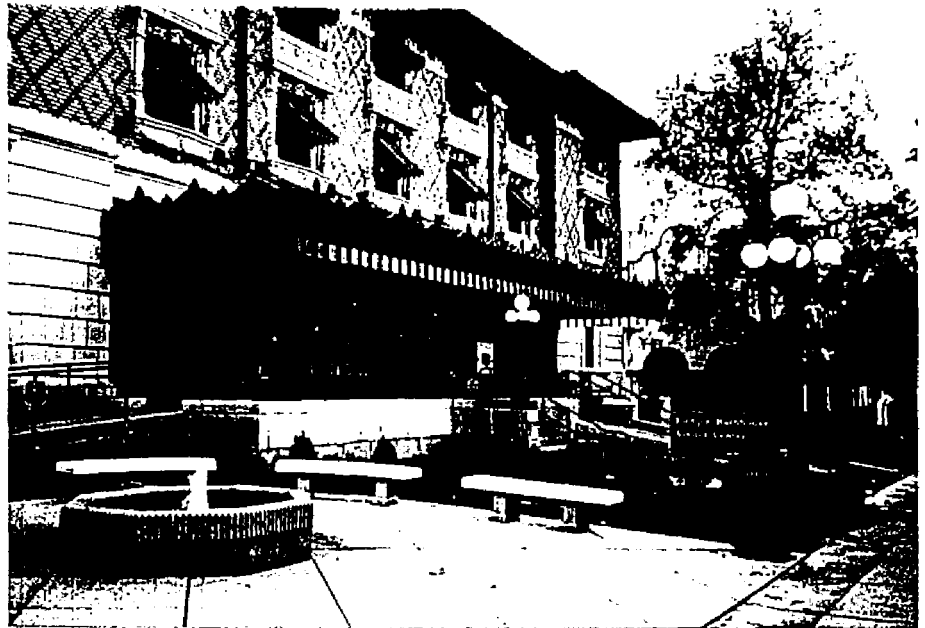


写真-1 フォードイス(Fordyce)浴場

このように今日、この公園は温泉自体ではなく、1920年代の浴場街の歴史性がその主たる保

全の対象となっている。換言すれば歴史的温泉リゾートの保全である。このように温泉自体の保全から歴史的浴場を利用できる状態で保全することによって、当時の雰囲気を追体験できるようにしている。一方で、この処置によってホットスプリングス市の経済にもなんらか貢献できる。

6. 考察

ホットスプリングスの歴史を概観すると、泉源保護から始まり、保養地としての温泉利用管理を経て、近年は温泉街の歴史的環境の積極的保全へ移り変っていることが明らかになった。以下、国立公園であることに関わる問題について考察する。

1) 最初の国立公園なのか

国立公園史において一部にホットスプリングスを最初の国立公園とする考え方がある。ホットスプリングスも1872年に設置されたイエローストーンも、規模と質を度外視すれば、好奇心(curiosity)や驚き(wonder)を抱かせる温泉が保全対象であったという点では共通している。すなわち、イエローストーンも間欠泉などの名勝的保全が目的であり、ただそこが未開地で、まだ他にも景観資源がある可能性が高いために広大な面積になったにすぎない。基本的には公有地を私有化の対象から除外したという意味で共通している。

しかし、イエローストーンの設置法では管理費はなかったものの、公園としてのレクリエーション利用が規定されていたのに対して、1832年のホットスプリングス保留地の設定に際しては、いかなる利用目的も示されていない。さらに、保留地でありながらその後そのことを知ら

ない定住者が増加したことからも明らかなように全く放置され、公園的な利用が規定されたのは1880年である。これらの理由からホットスプリングスを最初の国立公園とする考え方には問題がある。あえて積極的に評価すれば、この保留地が功利主義的な目的以外で設定された最初のものであり、後のレクリエーション空間としての保留地設定に道を開いたものであるということが言える。そのことはイエローストーン国立公園設置運動の中でホットスプリングス保留地の前例が言及されていることから明らかである。

2) 国立公園システムに編入したことの是非

前述したようにマザーの支持によって1921年に国立公園となったが、イセ²⁵⁾は国立公園とせず保留地のまま留まるべきだったと述べている。国立公園の基準を高く設定しようとしていたマザーがホットスプリングスに関しては例外的に支持した理由として、第一に人口の少ない西部に偏在している国立公園の支持を集めるためには東部にも必要であったということがあげられる。特に上流階級の訪れる保養地は政治と流行の中心となる。彼らは社会的影響力が大きいので、その公園に対する支持を得ることは、公園運動にとって都合がよい。

第二に1920年代が温泉ブームであったという時代背景があげられる。今日の考え方からすれば温泉があること自体に国立公園が設置されるほどの価値があるとは考えられないが、まだ病気の治療法や治療薬が未発達のため、温泉に治療効果が期待された時代にはその存在意義は大きかったであろう。イエローストーンやヨセミテなど、景観のモニュメント性の高い公園に比べて、ホットスプリングスは問題外だが、ここでは景観ではなく温泉の心理的インパクトの大きさが評価されたのであろう。すなわち、大地から万病に利く湯が湧き出るという現象は驚異的で、それだけで特別扱いする価値があった。

第三に温泉人気と関係して、ホットスプリングスは"The American Spa"と呼ばれ、ヨーロッパのバーデンバーデンなどの温泉と同等、あるいはそれ以上のものとしてアメリカ人のナショナリズムを掻き立てていた。また、マザーが1916年の報告で述べているように、庶民が利用できる無料の浴場が盛況であったことも、この温泉の大衆に訴える効果を見逃できなかったであろう。

公園の基準に理想を求めたヤード²⁶⁾らはホットスプリングスを景観以外の基準で設定された例外的な公園であるが、国家的価値を有すると譲歩して記述している。ヤードはマンモスケーブ(Mammoth Cave)などの国立公園設置に対してその質を低下させるものだとして反対したが²⁷⁾、現実的なマザーは質の維持と大衆の支持を秤にかけて、ホットスプリングスでは後者を優先させたのではなかろうか。ホットスプリングスが国立公園となったのと同じ年にマザーは州立公園会議を組織し、地方的な質の公園を州立化して、国立公園の乱立を防止しようとしていることから明らかなように、質の問題に関してもなおざりではなかった。また1916年だけで公園局は16もの地方的国立公園設置案を消し去っている²⁸⁾。結果的には、利用者の多いホットスプリングスを国立公園としたことによってその支持が広がった半面、マザーの上司で

ある内務長官から同様な公園をその所有地に設立することを要求されるような苦境にも立つはめにも至り、低質な国立公園要求への対応が困難な場合が生じた²⁹⁾。

3) 国立公園における歴史的環境保全

メサベルデ (Mesa Verde) などの先住民の遺跡は当初から国立公園に含まれていたが、マザーの後に公園局長となったオールブライト (Horace M. Albright) が1930年代に古戦場などを国立公園局の管理下に置き、歴史公園というカテゴリーをシステムに導入した。

それに対して、ホットスプリングスでは比較的新しい半世紀ほど前の建築空間が保全の対象となった。今日公園の管理規定においても、その温泉という自然環境の保全よりも歴史的浴場の保全が重視されている。確かに視覚的にも、ただ温泉が湧き出しているだけの小さな泉 (写

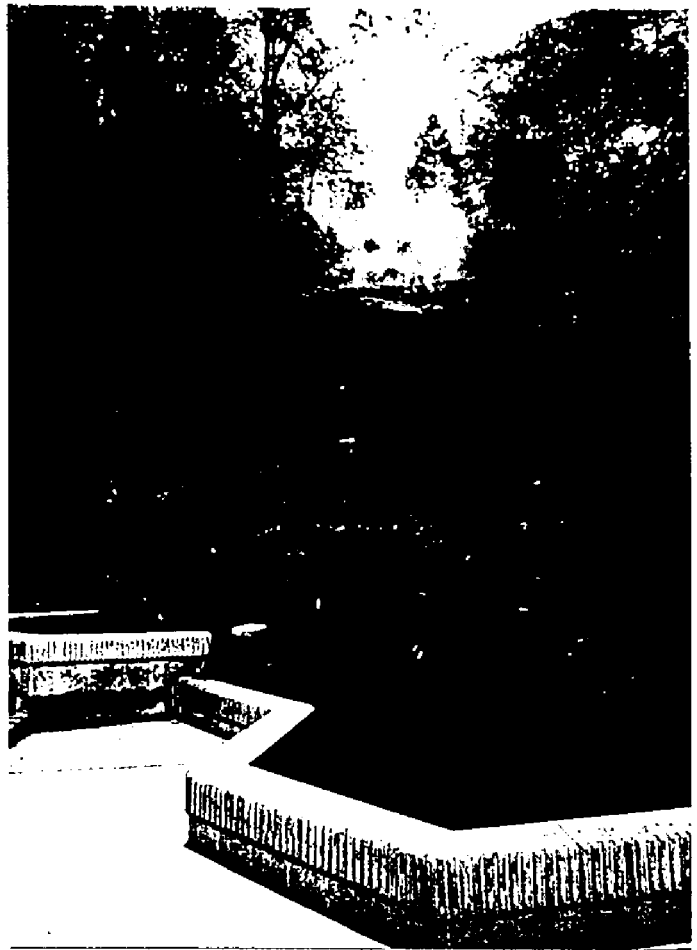


写真-2 公園内の公開泉源

真-2)よりも、フォーダイス浴場のようにスペイン風の堂々とした浴場とその中の入浴施設の方が訴える力が大きい。しかし、これが国立公園に訪問者が期待するものであろうか。実際にイエローストーンのように自然の温泉を期待し、訪れてみて落胆する訪問者も多いようだ。国立公園という名称が連想させる確固たるイメージ³⁰⁾が否定されることになる。ゆえに、むしろ同じ国立公園システムの歴史公園として管理されるのが妥当であると考えられる。

1954年には国立公園等の諮問委員会は調査チームの報告を受けて、プラット (Platt) 国立公園およびホットスプリングス国立公園は州などによる管理が望ましいという決議を採択している³¹⁾。後にプラットはレクリエーション地域に編入されたが、ホットスプリングスは今日まで国立公園のカテゴリーのままである。本来ならば歴史公園に名称変更すべきであるが、いわゆる格下げは政治的な条件によってなかなか困難である。とりわけ、ホットスプリングス市のように温泉を中心とする観光産業に人口のかなりの部分がかかっているところでは、その湯治リゾートの衰退は町の衰退でもあった。ゆえに一層地元は国立公園という名称を失うことに反発を抱いたに違いない。市が公園と同じ名称であることから明らかなように、その保留地

の中から発展した一体のものである以上、その廃止あるいは格下げは議論の対象外として抵抗するであろう。今日までホットスプリングスを国立公園以外のカテゴリーにするという法案は一度も議会に提出されたことがない。

引用・参考文献

- 1) National Park Service(1989): The National Park Index, 24, U.S. Government Printing Office
- 2) Newton, T.N.(1971): Design on the Land, 527-528, The Belknap Press of Harvard Univ. Press
- 3) Scully, F.J.(1964): Hot Springs, Arkansas and Hot Springs National Park, Hansen Co.
- 4) Brown, Dee(1982): The American Spa, Hot Springs, Arkansas, Rose Publishing Company
- 5) Bedinger, M.S.(1974): Valley of The Vapors, Hot Springs National Park, Eastern National parks and Monuments Association
- 6) U.S. National Park Service(1917): General Information Regarding the Hot Springs of Arkansas, U.S. Government Printing Office
- 7) Office of the U.S. Hot Springs Commission(1877): Report of the Commission regarding the Hot Springs Reservation in the State of Arkansas, U.S. Government Printing Office
- 8) U.S. Dept. of the Interior(1896): Report of the Secretary of the Interior, 110-112, U.S. Government Printing Office
- 9) Hot Springs Reservation(1903): Report of the Superintendent of the Hot Spring Reservation to the Secretary of the Interior, U.S. Government Printing Office
- 10) Hot Springs Reservation(1914): Report of the Superintendent of the Hot Spring Reservation to the Secretary of the Interior, U.S. Government Printing Office
- 11) Van Cleef, A.(1878): The Hot Springs of Arkansas, Outbooks(reprinted in 1981)
- 12) National Park Service(1985): Bathhouse Row Adaptive Use Program, The Bathhouse Row Landscape, Technical Report 1, 6-15,

National Park Service

- 13) National Park Service(1924): Report of the Superintendent of the Hot Springs Reservation to the Secretary of the Interior for the Fiscal Year Ended June 30, 1924, Government Printing Office
- 14) National Park Service(1925): Annual Report of the Director of the National Park Service to the Secretary of the Interior for Fiscal Year Ended June 30, 1925, Government Printing Office
- 15) National Park Service(1926): Annual Report of the Director of the National Park Service to the Secretary of the Interior for Fiscal Year Ended June 30, 1925, Government Printing Office
- 16) National Park Service(1926): Rules and Regulations, Hot Springs National Park, Arkansas, Government Printing Office
- 17) Mather, S.T.(1916): Progress in the Development of the National Parks, Government Printing Office
- 18) Shankland, R.(1951): Steve Mather of the National Parks, p.82, Alfred A. Knopf
- 19) Shankland: ibid., 25-26
- 20) Hot Springs National Park(1986): General Management Plan, Development Concept Plan
- 21) Paige, J.C.; Harrison, L.S.(1987): Out of Vapors, A Social and Architectural History of Bathhouse Row, Hot Springs National Park
- 22) Harpers Ferry Center(1987): Historic Furnishing Report, Hot Springs Fordyce Bathhouse, National Park Service
- 23) Hot Springs National Park(1989): Landscape Management Plan, Bathhouse Row, Hot Springs National Park
- 24) Mackintosh, Barry(1986): The National Historic Preservation Act and the National Park Service, Historic Division, National Park Service
- 25) Ise, John(1961): Our National Park Policy, 245, The Johns Hopkins Univ. Press
- 26) Yard, Robert Sterling(1921): The Book of the National Parks, 305-317, Charles Scribner's Sons

- 27) Yard, Robert Sterling(1926): Politics in Our National Parks, American Forests and Forest Life, vol.32, 392, pp.485-489
- 28) Hampton, H.D.(1981): Opposition to National Parks, Journal of Forest History, 25(1)
- 29) Albright, H.M.(1985): The Birth of the National Park Service, 130, Howe Brothers
- 30) Ruddell, E.; Westphal, Joanne(1989): Images Relating to Park Titles and Ambient Qualities at Selected National Park Service Areas. Landscape Journal, 8(2) 122-127
- 31) Ise: ibid., 522

第5章 廃止された国立公園：小規模な国立公園の変遷と意義

要旨：アメリカにおける初期の国立公園史をたどると、ブラットのように小規模で都市公園的な国立公園も設立されている。これらの公園が設立された時代にはまだ管理主体が存在せず、システムとしての考え方もなかったことが、大小混在した理由である。これらは国立公園の基準をはずれるものであったが、これらが基準外の公園として存在したがゆえに、公園の基準が明らかになってきた。国立公園の基準は今日もお流動的であり、むしろ国立公園局が近年都市域での活動を重視していることを鑑みると、その歴史の中で小規模な公園が国立公園の普及と発展に果たした役割は重要である。

1. はじめに

今日、アメリカの国立公園システムは自然、歴史、レクリエーションに大別され、50の国立公園を含む355地域から構成されている¹⁾その

核心をなす国立公園は自然環境を中心とするが、それぞれの公園にはさまざまな政治的・歴史的背景が控えているため、その内容は種々雑多である。とりわけ、1916年に国立公園局が内務省に設置されるまで、国立公園とは何かという基準が漠然としていたため、今日の観点からすれば規格外の公園も設立されている。しかしながら、これらの公園が設立、管理、あるいは移管される過程で、国立公園の在り方が次第に明らかになっていったのではなかろうか。そこで、本論ではもはや国立公園ではなくなった2つの小規模な公園の変遷を検討し、国立公園の発展過程における位置付けを試みた。

2. ブラット国立公園の変遷(表-1)

1) 成立過程²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾ 1803年のフランスからのルイジアナ購入によってミシシッピ川以西、ロッキー山脈に至る広大な地域が一挙にアメリカの領土となった。1830年にはインディアン強制移住法が制定され、ミシシッピ川以東に生活していた「文明化した五部族(Five

表-1 ブラット国立公園略年表

年	できごと
1839	チカソー族がサルファー地域に移住
1887	インディアン一般土地割当法制定
1895	開発業者による鉱泉私有化の動き
1900	五部族連合の代表がワシントンを訪問
1900	サルファーに町制施行(人口1,198人)
1902	保留地設立への最終的合意
1903	保留地の拡大と町の再移動の決定
1904	保留地の設立
1905	保留地内の建物の焼死
1906	年間訪問者10,000人に達する
1906	ブラット国立公園に名称変更
1906	奥化カリ鉱泉周囲の改良に予算配当(\$400)
1907	サルファーの人口3,500人に達する
1907	オクラホマが州となる
1907	園内への牛の侵入
1907	年間訪問者25,000人に達する
1908	スミソニアンへの移管提案、住民の反対
1908	サルファーの町がリゾートとして繁栄
1908	年間訪問者106,332人
1910	内務長官による州立公園化提案
1913	内務長官による州立公園化提案
1914	マザーの来訪、放牧の中止指示
1917	オクラホマシティーから動物寄贈
1919	マザーの再訪、フェンスと入口の問題指摘
1920	イエローストーンからバイソン寄贈
1921	地元下院議員による管理予算増額要求
1925	内務長官による州立公園化提案
1925	議会でブラット州立化提案
1927	内務長官による州立公園化提案
1927	年間訪問者250,000人を越える
1928	全国立公中2番目の訪問者数記録
1928	ふたたび、州への移管示唆
1930	州立公園化および記念物化法案議会提出
1933	CCCによる公園施設改良始まる(1940まで)
1933	内務長官による州立公園化提案
1938	レクリエーション地域への移管提案
1943	64エーカー追加し912エーカーとなる
1947	年間訪問者500,000人に達する
1949	年間訪問者百万人を初めて突破
1962	アーバックル法案成立
1964	アーバックルダム建設開始
1969	ネイチャーセンターの完成
1972	奥化カリ鉱泉枯渇
1975	チカソー・レクリエーション地域に吸収

Civilized Tribes)」と呼ばれる先住民がこの新領土に強制移住させられた。1838年の冬には「涙の旅路」と呼ばれるようなチェロキーの悲慘な移動も行われた。この五部族のうち、チョクトー

(Choctaw)とチカソー(Chikasaw)の両部族が今日のオクラホマ州南部のサルファー(Sulphur)の町のあたりに割当てられた保留地に住むようになった。

1887年にはインディアン一般土地割当法が制定され、インディアン保留地内の土地をインディアン個人に所有者として割当てられるようになったことを受けて、インディアンから土地を借り、あるいはインディアンの女性と結婚して、この地域に定住する白人が増加した。その増加は1900年にサルファーに町制が敷かれるほどであった。その結果、白人の移住者がチカソーの人々よりも多くなり、保留地でありながら土地の管理が彼らの手から離れていった。

そこで、部族が共有してきた湧泉とその流域にある夏の幕営地までが私有化されることを危惧したチカソーの人々は、湧泉がすべての人々によって恒久的に利用されることを願った。その動きは1900年に五部族委員会のスポークスマンが首都ワシントンを訪れた頃から活発化した。早くも1901年3月には対象地域の測量が行われた。1902年3月には五部族委員会とチカソーとチョクトー両部族との間で湧泉地域の連邦政府への売却とその金額が合意された。この保留地の買い取り価格は1エーカーにつき\$20で、面積629.33エーカーの合計は\$12,586であった。これを受けて同年7月には議会で買収予算支出の承認が得られた。そして9月にはインディアン側は投票によって3月の合意を正式に決定した。1903年2月には、撤去の対象となる地域内の家屋の評価額が算出された。総額は\$86,981となった。しかし、この間のやりとりが住民には伝わっていなかったので、8月に住民に対する転出命令が通告されると、住民は大混乱に陥った。このため11月には内務長官がこの地域を視察し、保留地全域が必要とは限らないと述べ、再調査を約束した。しかしながら、再調査の結果、32の医療効果のある鉱泉の存在が判明するとともに、南の隣接地218.7エーカーを追加しなければこれらの泉が下水で汚染されることも警告された。湧泉の保護を重視した内務長官による拡張案が、1903年11月に議会のインディアン担当委員会で支持されたのを受けて、町の再移転が通告され、住民は再び混乱に陥った。

インディアン担当委員会が承認した保留地拡大のための予算法案は1904年に議会で可決された。この委員会の有力者が、コネチカット州選出のブラット(Orville H. Platt)上院議員であった。これによって1904年4月29日に合計面積848エーカー(343ha)のサルファースプリングス保留地(Sulphur Springs Reservation)が設立された(図-1)。1905年には敷地内の300以上の買収された建物が競売にかけられた。さらに、1906年6月29日には、前年4月に死去したブラット議員がこの保留地の設立に貢献した功績を讃えて、名称をブラット国立公園に変更する決議が全会一致で採択された。

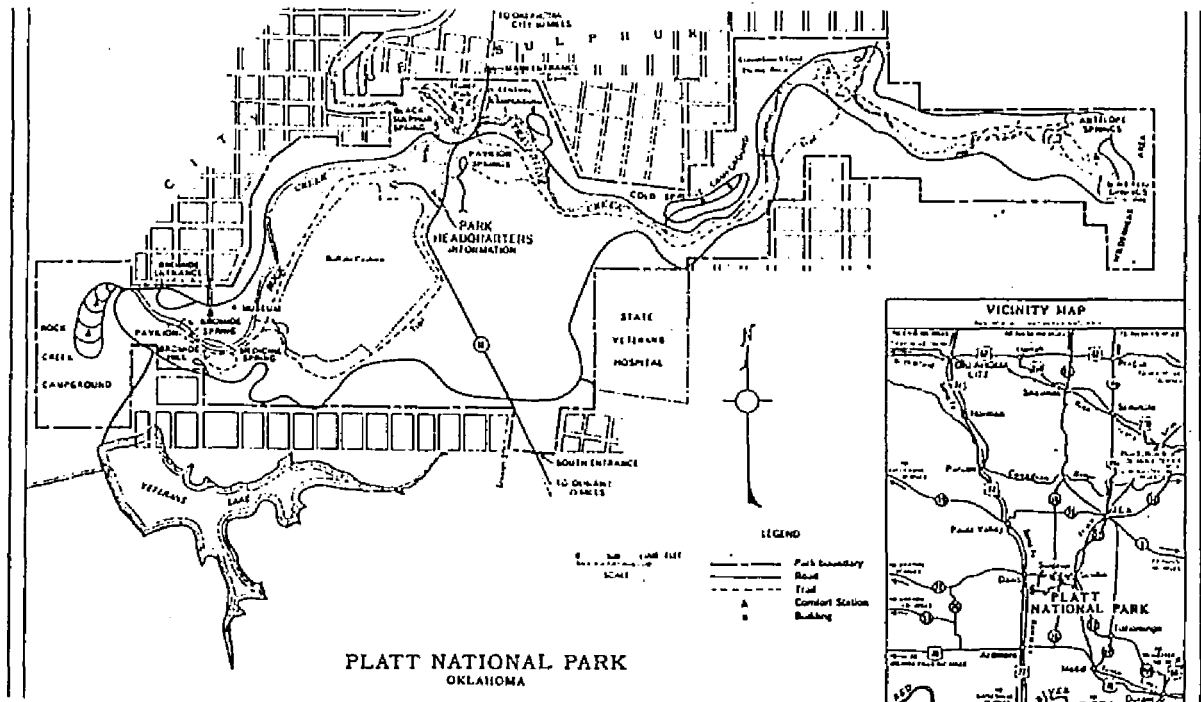


図-1 プラット国立公園平面図

事前の同意なしで2回もの転居を余儀なくされたサルファー住民は当初政府に対して不満を抱いていたが、補償金が現金で支払われ、万病に効果のある鉱泉を控えたリゾートとして町が繁栄したので、次第に公園に対して好意的になった。その後、植樹などの修景がなされ、パイソンなどの動物も各地から寄贈されて、行楽地としての整備が進んだ。1928年には全国立公園中2番目の訪問者数を記録している。一方、人口の増加にともなって、公園を見下ろす高台に移転した町からの下水が園内に流れ込んだり、水不足を補うための地下水くみ上げの影響で夏期に園内の湧泉が涸れることが頻発した。また、鉱泉ブームも次第に下火となり、1972年には臭化カリ鉱泉が涸れてしまった。

2) 国立公園としての特異性

プラット国立公園は、雄大な風景など人間に感動を抱かせるような対象が存在したからではなくインディアンの土地の権利保護のために設立されたこと、および、既存の町の移転をとまったので、小面積ながら莫大な費用と手間を費やしていることの2点で特異である。それ以前は国立公園設置法案が議会で可決されるためには、費用がかからないということが必須条件であったのに対して、ここでは土地の購入だけではなく敷地内の建造物の補償まで行なって保留地を設定した。これは国立公園設置のための土地買収の先例と言える。

このような出費が承認されたのにはいくつかの理由が考えられる。第一に、当時は万病に効くといわれた温泉、鉱泉に対する人々の関心が非常に高かったのに加えて、1832年にはアーカンソー州にホットスプリングス(Hot Springs)保留地が人気のある温泉療養リゾートとして設

立されていた。ブラットの鉱泉も万病に効くと宣伝され、瓶に詰めて販売されるほど人気が高く、湧出量の少なかった臭化カリ鉱泉は、1916年までその取水を1人1日1ガロンに制限したほどであった。第二の理由としては、後にブラット上院議員の名が被せられたことから明らかなように、有力者の彼が連邦政府による買い上げを働きかけた



写真-1 公園内の湧泉 (Buffalo Spring)

推察される。第三に、名称がブラットに変更されたのと同じ日にコロラド州の崖に築かれたインディアンの住居遺跡がメサベルデ国立公園となり、また、その3週間前の6月8日にはその後の保全地域の指定に大きな影響を及ぼした古物保存法 (Antiquities Act) が成立していることから、インディアンの文化保護に対する関心が高まっていた当時の社会背景も無視できない。

(3) 批判と廃止の動き^{5) 7)} このようにインディアンの望んだ湧泉 (写真-1) へのアクセス確保を目的として設定された公園ではあったが、一旦連邦政府によって管理されるようになると、地元住民は一層の施設整備を働きかけた。1925年には、何もない900エーカーほどの場所にどうしてそれほど金が注ぎ込まれるのかという批判が他州の議員から出るほどであった。管理費用を地元負担することなく公園が維持され、さらに「国立」ということばが他の地域からの行楽客を呼び寄せるのに効果があったので、地元住民は非国立公園化の動きに警戒した。

議会でもたびたびブラット公園批判がなされる一方、連邦政府としても国税の使途が特定の地域の利益に限定されることには難色を示し、度々移管することを試みた。まず、1908年に政府はスミソニアン研究所への移管を考えたが、内務省管轄のままの方が良いと考えた住民の反対運動にあった。1910年に内務長官はこの公園を州立にするかインディアン保留地に戻すことを提案したが、オクラホマ州は拒否した。その後も、1913年、1925年、1933年に内務長官は州へ移管し州立公園とすることを勧告したが、その都度住民は地元の国会議員を通じて反対している。また、1930年には国立公園局を積極的に擁護したミシガン州選出のクランプトン (Louis Crampton) 下院議員によって、州立公園化法案と国家記念物化法案が出されたがどちらも通過しなかった。さらに、1938年には新設カテゴリーの国立レクリエーション地域 (National Recreation Area) とすることの打診があったが、このときも住民は反対し

ている。

1940年代には鉱泉ブームが去り、また、町による地下水汲み上げのため、湧泉がたびたび枯渇するような事態になったにも関わらず、度重なる移管の動きが成功しなかった理由として、地元の圧倒的な支持に加えて、レクリエーションの場としての利用者が多かったことがあげられる。四半世紀を経て樹木が生長し町の痕跡が薄れた1930年代には全国立公園の中でも3-5番目の利用者数を記録している。その多くは近隣の地域からの常連による都市公園的な利用であったが、利用実績は連邦政府による予算の配分を正当化するとともに、国立公園の普及と勢力拡大を求める公園局には必要なものでもあった。

結局、ブラットの非国立公園化は、1962年にアーバックル(Arbuckle)ダム建設が決定し、そのダム湖のレクリエーション地域化が推進される過程の中でようやく可能となった。1976年3月18日、この地に移り住んだインディアンに因んで名付けられたチカソー国立レクリエーション地域が正式に設立され、ブラット国立公園はその中に吸収された。

3. サリーズヒル国立公園の変遷

1) 成立⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾

ノースダコタ州北東部のデビルズ湖(Devils Lake)に北側を接したサリーズヒル公園(Sullys Hill Park)はブラット以上に国立公園らしくない空間であった(図-2)。ブラットには当時人気を集めた鉱泉という対象が存在したが、ここは「森林と流れがある小さな公園」と記述されたように特色のない地域で、当時のガイドブックでも重視されていなかった¹³⁾¹⁴⁾。この近くにはインディアン保留地(Devils Lake Indian Reservation)があったが、1875年の政府の測量が間違っていたため、その西側の境界付近の64,000エーカーの土地が失われた。また、1867年と1890年にはフォートトッテン(Fort Totten)駐屯地建設のため保留地から木材が供出されていた。そこで、1901年にインディアン局(Bureau of Indian Affairs)と保留地住民との交渉の結果、これらの損失の補償措置として、政府は賠償金を支払うとともに放棄されたフォートトッテン軍用地(Fort Totten Military Reserve)を含む不要な地域を、彼らに払い下げることにした。

上述のサルファースプリングス保留地設立2日前の1904年4月27日に、議会でいかなる意見もなくこの法案が承認された。その規定には、大統領が宣言すればその払い下げ予定地の一部を教会や布教館、インディアンの学校、役所用地と

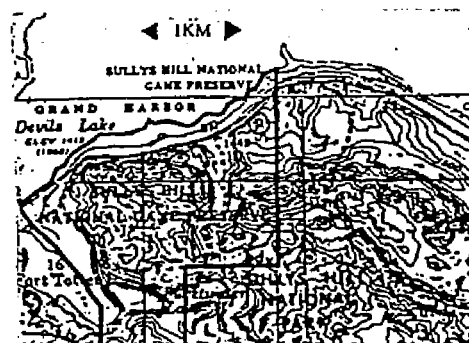


図-2 サリーズヒル国立公園境界

して除外し、また軍用地の北東の部分占める960エーカーのサリーズヒルと呼ばれる地区を公園(public park)として保留できるという条項が付随していた。6月2日にローズベルト(Theodore Roosevelt)大統領による宣言の際には、この条項に従って780エーカー(315ha)を人々の利用のためのサリーズヒル公園として払い下げから除外した。この法案では当初「特にデビルスレークインディアンによる利用のため」の公園となっていたが、インディアン委員会で審議する過程で、利用者を特定する表現は取り除かれた。このようにこの地域は、国立公園ではなく、保留地住民の利用を前提とした小公園を意図して設立された。しかし、内務省インディアン局の行政事務処理上、州などの所有にできなかったため、連邦政府の所有する公園、結果的には国立公園となってしまったのである。このため地元の学校の校長が管理員を兼ねたものの管理予算は全く配当されなかった。ただ、1914年に鳥獣保護区(National Game Preserve)に重複指定される際に、その管理のための予算が与えられたにすぎない。

2) 廃止過程とその意義

以上のような経緯のため、内務省は便宜上国立公園に区分してその報告書にも掲載していたが、管理予算を配分しなかったことから明らかなように、実質的には国立公園とは認識していなかった。1916年の公園局設立時には、公園の設置基準が内部では暗黙の内に形成されていたようだ。初代のマザー(Stephen T. Mather)公園局長は1921年の年次報告で議会は公園としてのサリーズヒルを廃止し、農務省の鳥獣保護区としてのみ管理すべきであると記している。

1920年代にサリーズヒルを訪れたクランプトン下院議員は、ブラットと同様、マザーらの要請を受けて、1930年に廃止法案を提出した。この法案は翌1931年に議会で承認され、サリーズヒルを農務省に移管するとともに3,000エーカーの土地が追加された。ブラットが度重なる移管提案に関わらず、地元の強い反対によってそれが実現しなかったのに対して、サリーズヒルには地元の利害が関わっていなかったためか、ノースダコタ選出議員の反対も地元の反対もなかった。以来マザーの主張通り農務省管轄の鳥獣保護区として今日に至っている。

4. 基準外の公園の意義

これらの基準外の公園は国立公園史において2つの動きを促したと考えられる。第一の動きは公園の質の向上を目指すもので、管理組織を設立して、基準を満たさない公園の設立を未然に防ぐようになった。これに対して、第二の動きは量を充足させる方向に向かった。すなわち、地域ごとの多様な要求を満たし、人々が手軽に利用できるような公園が提供されることを促進した。

1) 管理組織の設立と公園基準の設定¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾²²⁾

国立公園の数が増加するに従って、その管理体制の不備や、上記2例のように連邦政府が管理

すべき価値のない公園が設立されるようなことが問題になった。しかしながら、公園の設立や管理の基準がない段階では政府としてこれらの問題に対応できなかった。そこで公園の基準とそれに対応して公園を管理する組織の立法化が図られるようになった。

最初の公園管理組織設立の動きは、1906年の古物保存法の提案者でもある、レーシー(John F. Lacy)下院議員が1900年に提案したことに始まる。1910年にはバリンジャー(Richard A. Ballinger)内務長官が国立公園局(Bureau of Naional Parks)設立法案を起草し、オルムステッド2世(Frederick Law Olmsted, Jr.)らが手を加えている。しかしながら、この法案は、森林局が国立公園を管理すべきだと考える人々によって葬り去られた。

次期のレーン(Franklin Lane)内務長官も現存の公園基準のぼらつきと管理の問題を感じ、1914年にたまたま彼宛てに公園管理に対する抗議文を差し出したマザーに公園局の設立を任せることにした。その公園局設置法案も反対にあい、なかなか成立しなかったが、1916年8月によりやく可決され大統領の署名を経て公園局(National Park Service)が設立された。しかしながら、第一次大戦中でもあり当初は人件費などを含む予算が配当されない状態が続き、実質的に公園局が公園管理主体として機能し始めたのは1918年であった。

公園局設立後も政治家がその出身地で国立公園設立を謀ったことを憂慮してか、1918年5月13日にレーン内務長官がマザー公園局長宛てた手紙の体裁をとった文書の中で初めて国立公園の設置基準と管理水準が提示された。それによると国立公園は、1.最高の景観や国家的保全に値する自然現象を対象とすること、2.最高水準に達しない対象を含めて基準を低めないこと、3.広さよりも管理の可能性の3点に留意して選定するべきであるとした。さらに、その管理は将来の世代のためにも損なうことのないようにすること、人々の利用、健康保持などの目的のために設立されていること、国益が公園内の営業に優先することなどが管理原則として示された。さらに、具体的な管理指針として20の項目が示されている。実はこの文書はオールブライト(Horace M. Albright)が中心となりマザーやシエラクラブの公園支持者などの意見を取り入れて完成させたものである。さらに、1925年3月11日の内務長官から公園局長に宛てた書簡もこれと同様な内容である。また、ヤードの公園ガイド²³⁾でも同様に尋常ではない美しさ、目だった現象や普通ではない特質などが言及されている。

2) 地域のレクリエーションへの対応²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾

ブラット国立公園の人気は公園局に多様な空間の必要を痛感させた。すなわち、西部の遠隔地の国立公園はどんなにすばらしくても、多数の都市住民にとっては無縁の存在でしかない。また、公園局がその管理する公園の基準をいくら厳格にしても、政治的圧力によってふさわしくない公園が設立される可能性がある。事実、1922年に公園局が属する内務省のフォール(Albert B. Fall)長官は、自分の所有する牧場の周囲に、狩猟も鉱山の採掘も、放牧も可能な国立公園を設立することを要求した。マザーらはそれを断念させることを試みたが、フォー

ルはホットスプリングスやブラットが国立公園の基準を満たさないにも関わらず設立されている事例を引き合いに出し、自分の提案する公園も別なクラスのものとして国立公園にできると主張した。この無理な要求に苦慮したマザーは1年近くノイローゼで入院するほどであった。結局、この公園はフォールが収賄事件に関わり辞職したため実現されなかったが、公園局は次第にその管理する公園の種類を増加させ、1936年の「公園、パークウェイ、レクリエーション地域調査法(Park, Parkway, and Rec-reational Area Study Act)」の成立を受けて、1938年には最初のレクリエーション地域が設立されている。

さらに、連邦政府だけではなく州も積極的に公園に関わるべきだと考えたマザーは1921年1月に州立公園会議を組織して、まだ州立公園のない州が29もあることを示し、州立公園の普及を訴えた。その会議から州立公園のシステム化の動きが生まれるとともに、州立公園全国会議が結成され、その目的が宣言された。

5. 考察

2つの公園が同時期に設立され、どちらにもインディアンの権利が関わっていたことは、アメリカの固有文化に対して人々の目が向き始めた時代背景を象徴する。だが、公園空間自体よりも、むしろそれらの廃止過程で公園基準や公園管理が認識されたことが重要である。

元来保留地内のインディアンのための近隣公園を意図して設定されたサリーズヒルが名目だけの国立公園になったことは、イエローストーン設立以後30年を経ても、議会の中で国立公園とは何かまだ理解されていなかったということを物語るとともに、公園局にとっては、廃止されたこと自体が一種の公園基準となった。

ブラットは、鉱泉を含む湧泉からなる都市公園にすぎなかったにもかかわらず、地元からの強い支持とその利用者数の多さの故に非国立公園化が困難であった。この人気は身近なレクリエーションを供給する場として、国立公園システムの多様化と都市域での展開を促し、それを補完する州立公園システムの発達に影響を及ぼした。また、困難な廃止過程は公園局にその後の国立公園基準を一層慎重に検討させたであろう。

その後の公園の拡大に従って、1964年にユードル(Stewart L. Udall)内務長官は自然、歴史、レクリエーションの3種類にシステムを分けるという管理政策に関する覚書に署名した。さらに、1972年のシステムプランでは1918年の書簡とはかなり異なる基準が用いられている²⁷⁾²⁸⁾。自然地域の選定基準に関してはより科学的、生物中心的となっている。具体的にはまず、国家的重要性と管理適性が問われ、さらに、システムに編入されなければ保護不可能かどうか、また、保護されても人々による観察や利用は可能かがチェックされる。最後に、顕著な地学的特色、地上の生命進化の顕著な証拠、その地域の代表的生態系、特色のある動植物の生息域、自然の産物である景観など科学的に意義のある地域も選択するようになっている。

文献

- 1) National Park Service(1990): Facts about the National Park System, National Park Service
- 2) Rogers, E.B. compiled(1958): History of Legislation Relating to the National Park System Through the 82nd Congress, vol.75, U.S. National Park Service, Washington, D.C.
- 3) Brown, P.E.(1953): Brief History of Platt National Park(unpublished paper)
- 4) Barker, B.M.; Jameson, W.C.(1975): Platt National Park, pp.3-24, Univ. of Oklahoma Press, Norman
- 5) Boeger, P.H.(1987): Oklahoma Oasis, Western Heritage Books, Mukogee, Oklahoma
- 6) Rolfe, M.A.(1927): Our National Parks. Benj. H. Sanborn & Co., Chicago
- 7) Ise, J.(1961): Our National Park Policy, pp.140-142, Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore
- 8) Lots, D.T.(1976): An Analysis of Areas Formerly Administered by the National Park Service, pp.66-70, A Report Submitted to Michigan State University in partial fulfillment for the requirements for the degree of Master of Science.
- 9) Harmon, David(1986): Sullys Hill and the Development of National Park Standards, North Dakota History, 53(2):2-9
- 10) Superintendent of the Crater Lake National Park(1910): Report on Wind Cave, Crater Lake, Sullys Hill, and Platt national Parks, and Casa Grande Ruin
- 11) Hogenauer, A.K.(1983): Gone But Not Forgotten, America's Delisted National Park Service Sites, Paper deliberated at the Travel and Tourism Research Association 14th Annual Conference, Banff
- 12) Ise, J.(1961): Ibid., pp.139-140
- 13) Allen, E.F., ed.(1918): A Guide to the National Parks of America pp.226-227, Robert McBride & Co.
- 14) Yard, R.S.(1921): The Book of the National Parks, Charles

Scribner's Sons, New York

15) Buck, P.H.(1922): The Evolution of the National Park System of the United States, A Thesis Presented for the Degree of Master of Arts, The Ohio State University

16) Albright, H.M.(1985): The Birth of the National Park Service, pp.68-73, Howe Brothers, Salt Lake City

17) Cameron, J.(1922): The National Park Service, Its History, Activities and Organizations, AMS Press, New York(Reprint)

18) Mather, S.T.(1916): Progress in the Development of the National Parks. Government Printing Office, Washington, D.C.

19) Proceedings of the National Park Conference, 1912, 1913, 1917

20) Shankland, R.(1951): Steve Mather of the National Parks. Alfred A. Knopf, New York

21) Swain, D.C.(1970): Wilderness Defender, Univ. of Chicago Press, Chicago

22) Ise, J.(1961): Our National Park Policy, Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore

23) Yard, R.S.(1920): Glimpses of Our National Parks, Government Printing Office, Washington D.C.

24) Runte, A.(1984): National Parks, 2nd ed., Univ. of Oklahoma Press, Lincoln

25) Albright, H.M.(1985): *ibid*, pp.129-135

26) Tilden, F.(1962): The State Parks, pp.3-44, Alfred A. Knopf, New York

27) Foresta, R.A.(1984): America's National Parks and Their Keepers, pp.112-117, Resources for the Future

28) Lots, D.T.(1976): *ibid*, pp.10-17

第6章 保全空間の設置：ナイアガラ公園とアディロンダックの森林

摘要：自然美を評価する機運がいち早く高まったニューヨーク州では、19世紀後半にナイアガラ瀑布とアディロンダック山地の保全が同時に進行した。しかしながら、ナイアガラ瀑布は既に多くの人に知られた名勝となっていたため、その風致の保全が比較的円滑に受け入れられたのに対して、広大な面積にわたり私有地が分散するアディロンダック山地においては利害の調整が困難であった。そのため、その風致ではなく運河の水利を保全するという功利主義的な考え方から保全が始まった。しかしながら、同様に功利主義的な林業は、伐採だけの製材業と混同され、1895年の州憲法のいわゆる「永久に自然に(forever wild)」条項で、森林に手を加えることが一切否定された。このことからアディロンダックの保全運動は世論を動かす論理としてはコンサベーションを目的としていたが、運動推進者の感情にはプレザベーションの思いがあったと考えられる。

1. はじめに¹⁾

19世紀半ば頃からアメリカにおいて自然環境の保全に対する関心が芽生えてきた。その動機は2種類に大別される。まず、生活が安定してきた結果、自然環境が開拓を通じて征服する対象から享受する対象に変化したことがあげられる。これは特に都市化による生活環境の悪化と自然の喪失によって助長された。その例としてコール(Thomas Cole)やその弟子のチャーチ(Frederick Edwin Church)らのロマン主義絵画の隆盛があげられる。それまで人間の手が加わった田園的自然が絵画の対象であったのに対して、彼らは荒々しい手つかずの自然に崇高な美を見出し、描き始めた。

もうひとつの関心は環境の悪化にともなう生活基盤の破壊への危機感に関わっている。前者が点としての名勝などの特定の地区をその保全の対象としてとらえたのに対して、後者においては面として広がりをもった地域が対象となっていることが特色としてあげられる。本論ではほぼ同時期にニューヨーク州内で保全が進められたナイアガラ瀑布(Niagara Falls)を前者の事例として概説するとともに、その発展形態としてのとしてアディロンダック山地(Adirondack Mountains)の保全を後者の事例として検討する。

2. ナイアガラ瀑布の保全

ニューヨーク州とカナダのオンタリオ州の境界に位置するナイアガラ瀑布へは1820年代から旅行者が訪れるようになり、その後50年間にその数は10倍に増加し、観光が地域の最大の産業となった²⁾。しかしながら、次第にナイアガラ瀑布の眺望にすぐれた場所が私有化され、1860年頃までにはそれらの地点に柵が張りめぐらされ、入口には料金徴収小屋が並ぶようになった。また、観光馬車や土産物売、ガイドなどが旅行者に付きまとい³⁾。このような景勝の私有化とその商業主義に対する反発からナイアガラ公園の設立運動が展開された。

1) 保全運動の展開⁴⁾⁵⁾

1832年にコーク(E.T. Coke)が初めて滝の保全を主張したとされるが、その考えを広めたのは画家のチャーチであった。彼は1856年にナイアガラに来て、"Horseshoe Falls"という有名な作品のスケッチを描いている。この際、彼は商業主義によるナイアガラ瀑布周辺の侵食に悩まされ、公園化の考えを抱いた。彼は当時すでに著名な画家として、その有力な人脈を通じての社会的影響力が強かった。一方、その知人でもあるオルムステッド(Frederick Law Olmsted)は幼少の頃からナイアガラを訪れていたことに加えて、当時ナイアガラに近いバッファローで公園計画に携わっていた。このようにナイアガラ瀑布を頻繁に訪れる機会があった彼は40数年間の変貌を痛感したにちがいない。その惨状に胸を痛めた彼は1869年8月7日にドーシャイマー(William Dorsheimer)やリチャードソン(Henry H. Richardson)などの有力な知人に保全を持ちかけている。その翌日にはセントラルパーク設計の際のパートナーでもあるヴォクス(Calvert Vaux)も加わった。

カナダのダファリン(Lord Dufferin)総督からの協力依頼もあり、1879年1月7日にロビンソン(Robinson)ニューヨーク州知事はオンタリオ州の代表も加えてナイアガラ保全計画の策定を州の委員会(Commissioners of the State of New York)に要請した。この委員会からレポートの作成を依頼されたオルムステッドと州地質調査局のガーディナー(James T. Gardiner)は5月28日にナイアガラ瀑布を訪れている。オルムステッドはその報告書に対する委員の賛同を9月27日には得たと記している。ガーディナーは、1864年のヨセミテの州立公園化、1872年のイエローストーン国立公園設立を引き合いに出して州政府による保全をうながした。また、オルムステッドは土地を買取り、現存の建物を撤去し、公園や人工的な囲いは作らないという保全方針を提案している。

1880年3月末にそのレポートが公表され、著名人らが賛同した。これらの人物によって提起された保全運動は多くの人の支持を得るにいたり、1880年にはニューヨーク州議会に州保留地(statereservation)としての土地収用に関する法案が提出された。しかしながら、その後コーネル(Alonzo B. Cornell)知事の無関心のために停滞した。コーネル知事は国際的な公園に対して州が支出することに同意しなかった。そこで保全推進側は新聞などを利用してキャンペーンを展開した。1881年夏にナイアガラ瀑布で開催された銀行家の会議でもオルムステッドらの保全計画は支持されている。

オルムステッドの要請によって1883年1月11日にはナイアガラ瀑布協会(Niagara Falls Association)が結成された。1882年には知事がクリーブランド(Glover Cleveland)となり、1883年にふたたび保留地を設置する法案が提出された。両院を通過した法案が1883年4月30日にクリーブランド知事によって署名され、5人の委員が任命され、6月にはオルムステッドとガーディナーの案が推薦された。

一方、協会の強力な活動の結果、土地買収資金を得るための公債発行法案は1885年4月30日にヒル(David B. Hill)知事によって署名された。対立関係にあるグリーン(Andrew H. Green)が委員になったためオルムステッドの計画案策定への参画が危ぶまれたが、委員会は1886年10月6日オルムステッドとヴォクスにナイアガラの保全計画を要請した。1887年にはナイアガラの景観を復元する彼等の案が提示された。オルムステッドの案は自然状態の復元を第一として、人工的なものを抑制している⁶⁾⁷⁾。

これを受けて5人からなる委員がその土地の選定を行ない、166.7haが選ばれ、そのうち買収する土地の収用手続きを含む評価額は\$1,452,810.40となった。同年7月15日にはこの地区が州保留地(New York State Reservation)として公開された。なお1806年から州が払い下げたナイアガラ瀑布周辺の土地収用までには、その後20年を要した。

一方カナダでも、瀑布の周辺の商業化を憂慮して1873年に政府が委員会(Royal Commission)を設立したが、何も進展しなかった。画家チャーチはナイアガラ川がカナダとの国境となっていることから、国際協力の必要性を感じて、カナダのダファリン総督にコンタクトをとった。それを受けて、ダファリン総督は1878年にナイアガラの国際公園(international park)化をオンタリオ州とニューヨーク州知事に呼びかけた。しかしながら、同年に彼の任期が終了したため彼は帰国した。

上述したようにニューヨーク州知事ロビンソンはその考えを支持し、州委員会がオルムステッドとガーディナーに調査を依頼した。その土地買収を提案する調査レポートはカナダ側にも支持されたが、カナダ連邦政府かオンタリオ州のいずれが公園化を進めるかに関してその地域管理権を巡って対立した。それぞれが相手がその公園化の費用を負担すべきであると主張したため、進展が見られなかった。ニューヨークほど財政にゆとりのないオンタリオでは連邦政府による設立を望んだ。一方連邦政府は特定地域に予算を注ぐことが困難であった。このカナダの国内事情に帰因する調整の困難さのため、1882年までにアメリカ側はカナダとの国際公園化の考えを放棄した。

ダファリン総督の後任としてカナダに赴任したローン総督(the Marquis of Lorne)は1883年6月にナイアガラ瀑布の国立公園化を支持した。しかしながら、ニューヨーク州での公園化運動の進展に刺激されてか、1885年3月30日にナイアガラ瀑布公園法案(the Niagara Falls Park Act)がオンタリオ州議会で成立し、1886年末には154haの土地と建物の評価額が\$436,813.24と報告された。翌年には公債の発行によってその費用を賄うことになった。それを受けて1887年に州政府は新法案(Queen Victoria Niagara Falls Act)を成立させた⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。

今日ではオンタリオ州側のナイアガラ公園はエリー湖とオンタリオ湖を結ぶナイアガラ川の

左岸に添って56kmに渡り、その面積は1,254haに及ぶ。その内容は滝だけではなく遺跡、ゴルフ場、キャンプ場、マリーナ、水泳ビーチ、レストランや園芸学校まで含む総合公園となっている。この点でオルムステッドの主張した自然状態が維持されたアメリカ側とカナダ側は著しく対照を成していると言える¹¹⁾。

2) 保全運動の特色

ナイアガラ瀑布がニューヨークで最初の州立公園となったことは、それが滝と言う名勝的保全であったが、私有化された土地を買い取るという前例となった点でその後の環境保全運動の原点ともなっている。

もうひとつナイアガラ保全運動で注目すべき点は、700人におよぶ著名人の署名を集めたり、マスメディアを有効に利用したことからも理解されるように、国民的支持を得るためにきわめてモダンな運動が展開された点である。この戦略はその後の保全運動の展開に大きな影響を及ぼした。

また、オルムステッドを中心として組織された有力者が、新聞などを通じて世論に訴え州政府を動かすと言う方式を用いたナイアガラ瀑布の保全が成功したのは、その戦略の巧妙さもさることながらナイアガラという名勝としての特性と時代が影響を及ぼしている。この運動が支持された背景にはアメリカの代表的な観光地としての知名度がまずあげられよう。1846年のオレゴン協定および1848年のメキシコ割譲によって西部の広大な地域を購入するまで、アメリカで一番の景勝がナイアガラ瀑布であった。その後もグランドキャニオンやイエローストーンに次ぐ景観として観光客が途絶えなかった。そのためアメリカを代表する観光地としてヨーロッパからの観光客も迎えていた。彼らによるその商業主義に対する批判は良識あるアメリカ人にとって耳の痛いものであったにちがいない。さらに、人口密度の高い東部の諸都市からの近接性ため、多くの人々がその実体を知っていた。たとえば、前述したようにオルムステッドも6才の時から何度も訪れてその変貌もつぶさに理解していた。

このようにナイアガラという人口に膾炙した場所であったが故に、保全に対する賛同も容易に得られた。また、展望台を占有する人々はそこを訪れる観光客に比してきわめて少数で、かつ政治力も持ち合せていなかった。これに対して、水力を利用した製材工場や、後に問題となる水力発電はその恩恵を享受する人々も多数で、政治力も大きいため、この景観と経済の対立は複雑になる。

3. アディロンダック地域の保全(表-1)

1892年にニューヨーク州北部に州議会で制定されたアディロンダック公園は(図-1)、面積が5,927,600エーカーにおよび、アラスカの国立公園よりも広大である。そのうち約40%が州の保護林(State Forest Preserve)となっている(図-2の黒い部分)。換言すれば、6

表-1 アディロンダック保全関連事項年表

割の私有地が混在するという、いわば地域制の公園となっている。このアメリカの自然公園の中で特異ともいえる私的土地所有がその保全運動の展開に大きな影を投じている。

1) アディロンダック山地の開発¹²⁾

ニューヨーク州の北部に位置し、湖沼の点在するアディロンダック山地(写真-1)は、アメリカ独立の結果、1779年にニューヨーク州のものとなったが、利用できる資源もなく農耕にも不適であったがため、19世紀半ばまで西進する開拓前線からとり残されていた。その地域の正確な地図が1830年までなかったということは、ニューヨーク市から300マイルと言う距離を考慮すると意外に感じられるほどである。

1825年にはナイアガラ瀑布

にも近くエリー湖に面したバッファローと州都オルバニーを流れるハドソン川を結ぶエリー運河が開削された。この運河は西部への安価な交通手段を提供した半面、開拓者がアディロンダック地域を素通りする原因ともなった。その後、鉄道が発達するにつれ東部の都市の裕福な階層の避暑地として発展した。まず、1830年代にはアディロンダックの南端に位置するサラトガスプリングスがその鉱泉の人気のゆえにリゾートして繁栄し、山中の湖を訪れるハンターや釣人も増加した。1868年にマレー(William H. Murray)が「アディロンダックの探検(Adventures in the Wilderness)」というガイドブックを書いたところ爆発的に売れ、

年	事項
1779	アディロンダック地域がニューヨーク州有地となる
1784	州有地の払い下げが立法化
1837	地学者エモンズが最高峰に登山
1866	州が初めて民有地を買い上げた
1872	州立公園委員会が任命された
1873	州立公園委員会が公園化を支持する報告を提出
1883	森林購入予算\$10,000が初めて配当される
1883	州有地の払い下げが禁止される
1884	サージェント委員会が州有地の保全を提案
1885	アディロンダック保護林設立(681,000acre)
1885	3人で構成される森林委員会設立
1886	州が個人と同様に地元に保護林の固定資産税を払う事が立法化
1887	森林委員会による保護林の飛地と木材の売却が立法化
1890	私有地の購入予算(\$25,000)が立法化
1892	アディロンダック公園(2,800,000acre)設定
1893	森林委員会が3人制から5人制となった。
1894	州憲法会議が保護林を「永久に自然に」保つ条項を採択
1895	新憲法が公布
1896	保護林での別荘地等のリース許可法案否決

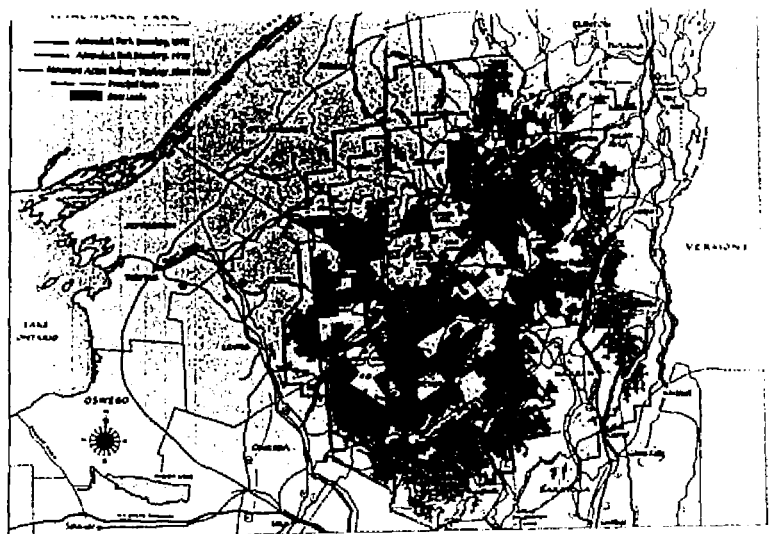


図-2 アディロンダック公園の土地所有図

その健康回復効果(図-3)を信じてこの本を携えて訪れる人々が増大した。この本によって知れ渡ったアディロンダックは1890年にブームを迎え、都市から避暑客と彼等を収容する宿泊施設が増加した(写真-2)。いわゆる俗化したアディロンダック山地の状況に対してその火付け役であるマレーが不満を表明する

ほどであった。また、結核の治療に都市から到来する人々もいた。その1人であった医者の特ールドー(Edward Trudeau)は、余命幾許もないと危ぶまれていたが、アディロンダックで数年生活するうちにすっかり回復し、1884年にサラナック湖(Saranac Lake)畔に結核療養施設を設立した。ここでは収入のない者も収容し、患者が土産物を作って経営の足しにした。

リゾートとしてアディロンダック地域が人気を集めると同時に、メイン州の森林を伐り尽くした木材産業が次第にアディロンダック山中に浸透して来た。製材業者は入植者のいない土地や放棄された土地を安価に購入し、その材を伐採し尽くすと別の場所に移動していった。そのころ製鉄用の炭の需要が増大し、大きさや形にとらわれずに皆伐されるようになったので、森林の荒廃が加速された。また、初期には流送が容易な針葉樹の、それも一定の大きさの材に限られていた伐採対象が、鉄道の発達にともないパルプの原料としての大小や樹種に関係のない利用が可能になるにつれて、壊滅的な伐採が進んだ(写真-3)。1850年にニューヨークは全



図-1 アディロンダック公園位置図



写真-1 ラケット湖(Raquette Lake)

米で最大の木材生産州となり、1900年には全米の製材所の1/3がニューヨークにあった。リゾート化による都会からの人口の流入と伐採の拡大は当然ながら対立を引き起こした。破壊的な伐採に対する非難が高まった。1864年にニューヨークタイムスにアディロンダックを保留地とする提案が掲載された。1868年にはコルビン (Verplanck Colvin) が公園あるいは保護森林の設立を提案した。森林管理官のもとで違反者へ罰金や最小伐採木の規定や利用税の徴収を行うべきだと述べている。また、彼はアディロンダックの水源涵養機能をスポンジに例えてその保全の必要性を平易に説明して、人々に訴えた。

2) 保全運動の展開¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾⁴⁸⁾

1871年にはニューヨークタイムスが保全を支持する運動を展開した。また、同年ウィスコンシン州で起きた大森林火災はアディロンダックの保全の必要性を一層痛感させた。これらの状況を踏まえて1872年にニューヨーク州議会は公園委員会 (Commission of Parks) 設立法案を可決した。この委員会は鉄道による火災の発生や製材産業の問題に関して、州保護林の設定の可能性を審議する7人の委員から構成され、そのメンバーにはその地域を隈無く歩き精通したコルビンや合州国の林業部門の初代の主任であったハフ (Franklin Benjamin Hough) が含まれていた。

その報告ではエリー運河の水運維持、製材や工場の動力、農家の灌漑、洪水防止のための水源涵養の必要性が述べられた。そのために専門家による森林管理が要望されたが、レクリエーションは支持されなかった。また、その委員の1人に選ばれたコルビンは耕作不適地が公園になるので新たな土地は必要ないという考えを表明した。これはイ



図-3 マレーの本の中の自然の健康回復効果の挿絵



写真-3 ハドソン川の集材風景

エローストーン国立公園法案審議の過程で支持派が示した意見と類似している。

1883年1月にはコルビンがアディロンダック山地の測量を委嘱された。同年、州議会は、鉄道会社への払い下げを危惧して、州有地の売却を禁止する法案を可決した。翌1884年はサージェント(Charles Sprague Sargent)を委員長として構成されたもう一つの調査委員会へ\$5,000の予算が配当さ



写真-2 リゾートホテル(Blue Mountain Lake House, 1889)

れた。彼はこの予算の半分を地図の作成に費やした。翌年の1月にまとめられたレポートにはアディロンダックの森林の価値とその危機状態が簡潔に述べられていた。また、完璧な管理には私有地の買収が不可欠だと指摘する一方、全私有地の買収は現実的ではないとして、3人からなる無給の林業委員会の設置、伐採後のデブリの焼却など私有地を含めての森林保護の徹底、伐採後林地を放棄するという浪費の排除の3点が答申された。新聞の支持にもかかわらず、1885年4月にはこの答申は暗礁に乗り上げ、サージェントは落胆した¹⁶⁾。

しかしながら通商会議(the Board of Trades and Transportation)のガードナー(Frank S. Gardner)が中心となって起草した法案が州議会を通過した。この組織はニューヨーク市のビジネスマンを中心にして構成されているため、鉄道による運輸の独占を阻止するために水運の確保は重要であった。その中には後の州憲法の条文にも生かされた"forever kept as wild forest lands"という表現が用いられていた。これによってナイアガラ瀑布保留地が設立されたのと同じ1885年の5月15日にアディロンダック保護林(Adirondack Forest Preserve)が設立された。その条文には3名で構成される森林委員会の設置、管理員の配置、保護林での火災に対する罰則、鉄道の通過地域からの可燃物の除去、土地の買収、保護林の売却、リースの禁止が規定されていた。

保護林が設立されたとは言ってもそれはモザイクのように私有地と入り交じっていた。また、その州有地の多くは一旦民間の伐採業者に払い下げられた際に、商品価値のある材がすべて切払われてから税金の滞納のため州に戻った土地なので、保全よりも育成が必要な空間であり森林とは呼べる代物ではなかった。今日ではこのような場合には放置するブリザベーション

(preservation)よりも育成を行なうリハビリテーション(rehabilitation)的な対応が望ましいとされるであろう。翌1886年にはこの保護林の地元の郡に対して、州が固定資産税を負担するという法律が可決して、地元の支持が得られた。

1890年には州議会は森林委員会に将来の公園を目指した土地の買収費\$25,000を配当した。1892年5月2日にはアディロンダック公園設立法案が可決した。その2,807,760エーカーの領域のうち551,093エーカーが州有地に過ぎなかった。また、公園と称してもその目的はレクリエーションではなく水利保全のための買収対象の限定であった。その後、有給の5名の委員からなる委員会を設置するランシング(Lansing)法案が可決された。この中には伐採の規制が盛り込まれていなかった。すなわち、製材産業の政治力に屈したといえる。これを受けて翌年には森林委員会が設立され、その中での木材の販売が可能になった。

しかしながらこの伐採を許可する法に対する反対運動が広がり、1894年の州憲法改定会議の中で州保護林における伐採を禁止する条項が加えられた。この法案起草の中心人物のマックルー(David McClure)は州民のレクリエーションを第一に言及しているが、ここでも水利の保全が最大の理由として主張された。グラハムはこの条項の"forever"ということばについて、実際は多数の人が次の改定会議で変更できるものと考えていたと説明している。すなわち、"forever"と記しながらも乱伐を抑制するための一時的な処置と林業家たちも認識し、あえて反対しなかった。この新憲法は1895年から施行され、さっそく売却や交換、賃貸を求める修正案が議会で審議されたが否決され、今日に至るまでこの"forever wild"条項は残っている。

このように次第に保全関係法規が整備されたが、製材業者の権益が反映された森林委員会による保護林の管理に対する批判が強かった。その実情については以下、"Garden and Forest"誌の編集者による論説を追ってみる。

1888年4月^{17)|18)|19)}: 5 エーカー未満、5年未満の保護林地のリース法案に反対を表明、鉄道会社への湖畔の土地のリースに反対、保護林は金持の別荘のためではなく、河川の保全と住民の衛生のためにあると主張。1889年3月^{20)|21)}: 運河への水の供給に準ずる機能として人々の健康と生活があげられる、永続的管理のため私有地の購入を求める、アディロンダックの保全と林業の知識の普及を求める。1889年4月²²⁾: 保護林地への鉄道の敷設に反対。1889年7月²³⁾: 鉄道の侵入による火災や伐採の拡大の問題を訴える。1889年10月²⁴⁾: 木材泥棒や樹皮剥ぎ、シカの減少、違法ダムなどを非難。1890年1月²⁵⁾: 私有地の買上げ法案の解説とその必要性を述べる。1890年3月²⁶⁾: 公園法案について、レクリエーションはあくまでも2次的なもの、鉄道の延長と金持の別荘としての利用が最大の問題だとする。1890年4月²⁷⁾: 鉄道の問題と州立公園案での土地の購入を支持。1890年6月²⁸⁾: 公園

設立にともなう土地購入の支持とレクリエーションの場としての肯定的評価が始まる。1890年10月²⁹⁾³⁰⁾：炭焼きによる森林破壊、クラブの所有林をファーノウが調査し、科学的に管理、保続的に木材が生産される。1890年12月³¹⁾：アディロンダックの36年間の変化を説明。1891年1月³²⁾：伐採による変貌。1891年2月³³⁾：公園設立と土地価格の上昇。1891年6月³⁴⁾：鉄道の阻止、森林委員会批判。1893年4月³⁵⁾：公園設立、林産物販売は監督次第で受容できるとする。1894年3月³⁶⁾：伐採の最小直径に関する12インチ規定が小径だと批判、訓練された林務官による監督を求める。1896年3月³⁷⁾：盗伐問題、森林委員会批判、保護管理の問題、買上げの推進。1897年1月³⁸⁾：土地は高くなるばかりだから買上げ以外に保全の道はない。

全てに記事に共通する考え方は、鉄道の侵入に対する反対、水利が風致より優先する考え、科学的林業の必要性、土地の買上げの必要性などである。しかしながら、水利をアディロンダック保全の最優先の理由に一貫して挙げてはいるものの、レクリエーションの認識が次第に高まってきたのが感じられる。

3) 科学的林業の展開³⁹⁾⁴⁰⁾⁴¹⁾⁴²⁾⁴³⁾⁴⁹⁾

アディロンダックの保全推進者の多くは掠奪的な伐採業者の活動には反対したものの、科学的林業を否定しているわけではなかった。それは雑誌 "Garden and Forest" や新聞の記事の中にもはっきり読み取れる。しかしながら、今日でも当てはまるが、一般の人々にとっては科学的林業を行なって伐採された空間も木材業者が放縦に掠奪し放置した跡地も区別がつくものではなかった。とりわけ、当時、ドイツで林学を学んだ者によって林業が始まったばかりの状況の中では、一般人にとって林業の必要性を認識するのは困難であった。しかしながら、挫折したとはいえ、以下に論じるコーネル大学の演習林の設立は環境保全のために林業の必要性が強く認識されていたことの表われとも考えられる。

連邦政府の森林部門責任者の職をピンショー (Gifford Pichot) に譲ったファーノウ (Bernhard Fernow) は、1898年にアメリカ初の4年制の林業教育機関としてコーネル大学に設立された州立の森林学部 (School of Forestry) の部長職を引き受けるとともに、アディロンダック公園内の私有地を州が買上げて設定された30,000エーカーの演習林の経営を進めた。この森林は30年後に保護林の一部として州に返還されることになっていた。

ファーノウはこれを科学的林業実践の場として好機だととらえ、教育および経営に邁進したが、軌道に乗らなかった。トンプソン (Roger C. Thompson) は以下のような理由をあげている。1. 場所の選定が悪かった。過去に有用な針葉樹は伐採され、残された材は不良であった。さらに、北側が裕福な人々の別荘地のある湖畔に面していた。2. すでに有用樹が伐採された林地を、生産効率の良い森林に転換するためには資金が不足していた。3. 搬出の際に利用することが期待されていた鉄道が敷設されなかったため、敷地内に加工工場を設置しなければならな

かった。4.ファーノウの政治力の不足が実験遂行の敵を作った。

ファーノウは精糖会社(Brooklyn Cooperage Company)と砂糖樽用のブナ材を15年に渡って提供する契約を結んだ。彼はこれをブナ林を利用価値の高いトウヒやホワイトパインに林種転換するチャンスととらえた。しかしながら、そこのブナの多くが低質であることが判明し、契約した量の材を得るために伐採面積が増大した。ファーノウから支援を求められ現地を視察したシェンク(Carl Schenk)は、林種転換をするためには\$30,000の資金は不十分なうえ、アディロンダック自生種ではなくヨーロッパトウヒを選択したのが植林の失敗した原因だと回想している。

さらに、誘致した工場からの排煙やそれによる森林火災の発生と、それに対するファーノウの対応の拙さが隣接する別荘所有者との関係を悪化させた。その結果、所有者の1人である有力な法律家が知事に働きかけ、1903年には林学部への予算の配当を拒否させるまでに至った。これによって70人の学生を擁した林学部は5年にして廃止された。

一方、15年契約で演習林の敷地に工場を設立した"Brooklyn Cooperage Company"は\$350,000も投資していたため伐採を継続し、州政府との訴訟に発展した。結局、会社側が敗訴したが、その際、州が私有地を演習林用地として買い上げた段階で森林に一切手を加えることが禁止される保護林になると言う解釈も可能なため、州憲法の規定と演習林を設立する州法の矛盾が指摘された。さらに、この私企業の誘致を巡ってファーノウの責任も問題となった。

以上のように当初から悪条件に置かれたのが原因とはいえ、このコーネルの演習林経営の失敗は、アメリカでようやく端緒に付いた林業には大きな痛手となり、林業への期待に水を差した。その後、ファーノウは合州国を去り、カナダでの林業教育の発展に尽くした。

一方、1892年にビルトモア(Biltmore)の所有者のバンダービルト(George Vanderbilt)の義理の兄弟であるウェブ(William Seward Webb)はビルトモアを訪れ、アメリカで最初の大規模な林業の実践に感銘した。彼は、そこの林業を推進していたピンショー(Gifford Pinchot)に、アディロンダックにあるナハサネパーク(Nahasane Park)と呼ばれる自分の所有する40,000エーカーの森林の調査を依頼した。同年10月に調査したピンショーは、ナハサネが所有者の別荘地を含む森林であることを考慮してか、軽度の択伐施業を提案している。

具体的には、ここでの林業の原則は保続生産とトウヒへの誘導であった。彼は、ナハサネの管理マニュアルを作成するとともに、1896年からここでトウヒの調査を開始した。その成果が1898年に"Adirondack Spruce"という本としてまとめられた。生長量、材積、収穫などが表示されたこの本が、アメリカでの最初の森林施業に関する出版物となった。

さらにこの頃にまでには、ナハサネパークに隣接する68,000エーカーの森林における林業経営の指導契約も交渉中となっていた。このようにアディロンダック公園内の州保護林の中で

は林業は締め出されたが、私有地の中ではその実践が広まって行った。

4. 考察⁴⁴⁾⁴⁵⁾⁴⁶⁾⁴⁷⁾

ナイアガラもアディロンダックも私的土地所有がその保全の根本に関わっていたため、規模の点では大きく異なるが、どちらも土地の収用を目指した点が共通する。だが、空間に関してはナイアガラが点としての景勝の保全であるのに対してアディロンダックは面としての保全を行なった。また、その目的も前者が瀑布の自然景観の復元と自由なアクセスを目指したのに対して、後者では水源涵養が保全理由であった。しかし、最大の違いはナイアガラではその保全理由が明快であったのに対して、アディロンダックでは建前として水源涵養が主張されたものの、実質的には複雑な利害がからんでいた。換言すれば、ナイアガラでは風致というもので戦えたのに対して、アディロンダックではそれが保全運動の武器として役に立たなかったと言える。このことが今日のアディロンダックの保全にも影を投げかけている。

アディロンダックで公園に州保護林と私有地が含まれる状態は今日の日本における国立公園にきわめて似ている。公園的利用よりも将来の収用の範囲を定めることがその設定目的だったとはいえ、日本やイギリスの地域制に類似するものがそれらの設立以前にアメリカで設定されていた事実は重要である。また、私有地の占める割合が非常に高かったことは今日的な意味を有する。しかし、アディロンダック公園においては禁伐の規定を初めとする諸規制は私有地の部分には適用されなかった点で今日の日本の地域制公園と異なる。

このため、別荘所有者たちがその周囲を取巻く州有地の環境を保つことによって、その既得のアメニティを確保することが、水利保全の裏側に潜む保全運動の理由であるとも考えられる。実際、アディロンダックをレクリエーションの場として一番活用していたのはそこに別荘を持つ裕福な人々であった。また、ナイアガラにおいては景観とレクリエーションという風致を前面に出して人々の支持を得ることができたのに対して、アディロンダックではそれを主たる保全理由として掲げることができなかったのは、この風致が特権的なものであるとの認識の故であると考えられる。このことは1892年のアディロンダック公園設定に際して、その目的はレクリエーションではなくあくまで水利であるという釈明されていることから推察できる。公園は功利主義の時代には社会に受け入れられないという危惧の念からそのような解釈を付加されたのであろう。

この点について、ランテ(Alfred Runte)はアディロンダックの保全については、自然環境ではなく水利の維持が最大の動機であった点を指摘し、アメリカの自然環境保全史の中での位置付けはそれほど重くないと考えている。これに対して、ライガー(John F. Reiger)は保全運動の中心はビジネスマンではなく、スポーツマンだとして、水利を主たる保全理由として考えたのは、人々の支持を得るのに好都合だったからと論じている。確かに利用者が当初は裕福な階層の人々だったとはいえ、訪問者がかなり多かったことはレクリエーションの場所と

して認識が潜在的にあったと考えられる。

さらに、ランテはアディロンダックの保全は地方的なものであると述べているが、それがニューヨークという政治経済の中心地域であることを鑑みると、その影響はアメリカ全体に及ぶと考えるのが妥当である。その点、ウィリアムズ(Michael Williams)はこの保全運動で、後の東部での国立公園設立の種子が撒かれたと述べている。さらに、州保護林のための私有地購入は、1911年のウィークス法(Weeks Act)による国有林のための私有地の購入の先鞭を付けたものと認識し、ニューヨーク州の財政が豊かであることが可能にした保全であるとはいえ、このウィークス法が実効性を持てなかったことを考えれば、アディロンダックでの土地の買上げは先見の明のある処置と判断した。

さらにナッシュ(Roderick Nash)は1885年のアディロンダック公園設定段階ではレクリエーションや風致をその主たる理由として表面に出せなかったが、1895年の州憲法での規定制定の段階までには風致という対象の置かれた立場が変化してきていることを示唆している。このことは前述した"Garden and Forest"誌の論調の変化からも読み取れる。

保全運動に関わった人々たちは科学的林業を否定していなかった。むしろそれを過大評価し短期間での成果を期待し過ぎていたくらいだ。サージェントらの林学の専門家も現況の乱伐を厳しく糾弾する一方、科学的林業によって改善を計る必要を痛感していた。世論を反映する新聞も乱伐を問題として、保全の必要を訴えたが、その保全地域における林業を否定してはいなかった。しかしながら、大多数の人々に取って伐採(lumbering)と林業(forestry)は同一対象として捉えられた。また、科学的林業の伐採段階も乱伐の跡地も多数の人々に取っては同じように醜く映った。

この林業の認識不足に加えて、保全の本来の目的が水利ではなかったことが、林業の否定の説明ともなる。水源涵養が真の目的であれば、乱伐のあと放置されて保護林になった荒廃林地の回復を促進するために育林が進められたはずである。その際、憲法の規定はむしろ障害となる。逆にブリザベーションを目指すのであれば、ナイアガラの場合と同様、既存の別荘地などの建物も含めて買収しなければならないはずだ。すなわち、別荘を潰し、元の林地として復元されなければならない。そのことが論じられなかった背景にある水利と別荘所有者の既得権の保持と言う利害の妥協が、アディロンダックの保全運動の特色と考えられる。

5. おわりに

森林に対して手を加えることを一切否定した州憲法の規定は1950年にアディロンダックを襲った嵐によって生じた大量の風倒木の迅速な処理を困難にした。翌1951年に4年半に限ってその処理作業を許可する州法が成立したが、利用可能な風倒木の腐朽が進むだけではなく、火災の危険が増大することが指摘された。この過程を通じて、全く手を加えないことの是非、憲法の解釈とその管理政策の関係、州や国家の経済的な要求と憲法との関係が論議された。

さらに、州憲法の条項追加が議論されていた1894年に、この世に送り出された自動車が普及した今日、道路建設とレクリエーションとの関係で森林に一切手を加えないことの矛盾も明らかになった。しかし、19世紀末に水利と別荘地の環境保全と言う功利主義と風致が混在した動機で憲法に追加された条文は、生態系の保全という近年支持される強力な保全理由を新たな動機として今後も生き延びると考えられる。

文献

- 1) Huth, Hans(1957): Nature and the American, Univ. of Nebraska Press, Lincoln
- 2) Moriyama & Teshima Limited(1988): Ontario's Niagara Parks, Planning the Second Century, 30-31, Toronto
- 3) Runte, Alfred(1987): National Parks, the American Experience, 2nd Ed., 6, Univ. of Nebraska Press, Lincoln
- 4) Roper, Laura Wood(1973): FLO, A Bibliography of Frederick Law Olmsted, 378-382, 395-398, The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore
- 5) McKinsey, Elizabeth(1985): Niagara Falls, Icon of the American Sublime, 263-265, Cambridge Univ. Press
- 6) Fein, Albert(1972): Frederick Law Olmsted and American Environmental Tradition, 42-47, George Braziller, New York(黒川直樹訳: アメリカの都市と自然, 48-53, 井上書院, 1983)
- 7) McKinsey, ibid, 264
- 8) Seibel, George A.(1987): Ontario's Niagara Parks, 22-27, The Niagara Parks Commission, Niagara Falls, Ontario
- 9) Moriyama & Teshima Limited, ibid., 12
- 10) Keller, Jane Eblen(1980): Adirondack Wilderness, 174-175, Syracuse Univ. Press
- 11) Fein, ibid, 44
- 12) Graham, Frank, Jr.(1978): The Adirondack Park, a Political History, Syracuse Univ. Press
- 13) Keller, Jane Eblin(1980): Adirondack Wilderness, 175-188, Syracuse Univ. Press, New York
- 14) Terrie, Philip G.(1985): Forever Wild, Environmental Aesthetics

and the Adirondack Forest Preserve, Temple Univ. Press, Philadelphia

15) Van Valkenburgh, Norman J.(1985): New York State Forest Preserve Centennial Fact Book

16) Sutton, S.B.(1970): Charles Sprague Sargent and the Arnold Arboretum, 97-104, Harvard Univ. Press, Cambridge, MA

17) Adirondack Forests in Danger(1888), Garden and Forest, 1, 49(Mar. 28)

18) A Dangerous Measure(1888), Garden and Forest, 1, 73, (Apr. 11)

19) Adirondack Forests in Danger(1888), Garden and Forest, 1, 87, (Apr. 18)

20) The Adirondack Forests(1889), Garden and Forest, 2, 109, (Mar. 6)

21) Organizing for Forest Preservation(1889),, Garden and Forest, 2, 146, (Mar.27)

22) Railroads and the Adirondack Reservation(1889),, Garden and Forest, 2, 181-182, (Apr. 17)

23) Railroads and the Adirondack Reservation(1889),, Garden and Forest, 2, 325, (July 10)

24) The Adirondack Reservation(1889),, Garden and Forest, 2, 493-494, (Oct. 16, 1889)

25) Legislation for the Adirondacks(1890), Garden and Forest, 3, 49, (Jan. 29)

26) Legislation for the Adirondacks(1890), Garden and Forest, 3, 121, (Mar. 12)

27) Legislation for the Adirondacks(1890), Garden and Forest, 3, 209, (Apr. 30)

28) Legislation for the Adirondacks(1890), Garden and Forest, 3, 282, (June 11)

29) Forest Destruction(1890), Garden and Forest, 3, 506-507, (Oct. 15)

- 30) Adirondack League Club(1890), Garden and Forest, 3, 520, (Oct. 22)
- 31) The North Woods Thirty-six Years Ago(1890), Garden and Forest, 3, 618, (Dec. 24)
- 32) Adirondack Mountains(1891), Garden and Forest, 4, 26, (Jan. 21)
- 33) Adirondack Reservation(1891), Garden and Forest, 4, 49, (Feb. 4)
- 34) Railroads in the Adirondacks(1891), Garden and Forest, 4, 265-266, (June 10)
- 35) The Adirondack Park(1893), Garden and Forest, 6, 171, (Apr. 19)
- 36) The Adirondack Reservation(1894), Garden and Forest, 7, 91, (Mar. 7)
- 37) Plunder of the Adirondack Reservation(1896), Garden and Forest, 9, 101-102, (Mar. 11)
- 38) The North Woods(1897), Garden and Forest, 10, 91, (Jan. 20)
- 39) Thompson, Roger C.(19629: The Doctrine of Wilderness, A Study of the Policy and Politics of the Adirondack Preserve-Park, 429-452, Unpublished Ph.D. dissertation
- 40) Thompson, Roger C.(1963): Politics in the Wilderness, New York's Adirondack Forest Preserve, Forest History, 6(4), 14-23
- 41) Forestry Building Named for Dr. Fernow(1923), Journal of Forestry, 11(4), 316-318
- 42) Schenck, Carl Alwin(1974): Birth of Forestry in America, 107-110, the Forest History Society and the Appalachian Consortium, Santa Cruz, Cal.
- 43) Pinchot, Gifford(1987): Breaking New Ground, 74-78, Island Press, Washington, D.C.(originally published in 1947)
- 44) Runte, ibid, 57
- 45) Reiger, John F.(1986): American Sportsmen and the Origins of Conservation, p.91, Univ. of Oklahoma Press, Norman
- 46) Williams, Michael(1989): Americans & Their Forests, A

Historical Geology, 406-407, Cambridge Univ. Press

47) Nash, Roderick(1982): Wilderness and the American Mind, 116-121, Yale Univ. Press, New Heaven

48) Kranz, Marvin W.(1961): Pioneers in Conservation, 318-368, Ph.D Dissertation, Syracuse Univ.

49) Rogers, Andrew Denny, III(1991): Bernard Eduard Fernow, 277-278, Forest History Society(Originally published in 1951)

第7章 林業の実践：ビルトモアでの科学的林業と関係者たち

摘要：アメリカにおける林業と森林の保全は、19世紀末に急速に進んだ産業化や交通網の整備に帰因する東部の都市化の問題と西部の森林破壊による環境問題の顕在化によって始まった。その嚆矢としてのビルトモアにおける林業は、第一に科学的林業経営を目指したこと、第二に、近代造園の創立者といえるオルムステッドと、後に森林局長として国有林の発展に貢献したピンショールが出会い、働いた場であるということ、第三に、林業教育が始まった場であるということ、第四に、森林だけではなく、樹木園や苗畑、農地、牧草地をも含む総合的な環境整備を目指したこと、以上の4点から重要である。結局、このプロジェクトはジョージ・バンダービルトという個人の決断に頼るものであったので、彼の興味や財力に左右され、ここでの森林経営と教育は長期間続かなかった。だが、ここに関係した人々やここで教育を受けた人々が、合州国の20世紀の森林の管理を担うことになり、森林の保全と言う概念の普及の種をまいた。

1. はじめに

"conservation"という言葉が今日のような「環境保全」という意味で用いられたのは1875年に"American Forestry Association"が設立された際に、その立て役者のワルダー(John Aston Warder)が最初だと言われる¹⁾。その頃、森林の破壊による問題を体験したヨーロッパ、とりわけドイツ出身の人々がアメリカでも同様な森林を保全する必要に気づき始めていた。そのためには、管理を政府が行なえる体制として、森林を管理できる技術者と、彼らを育成する教育機関の設立が不可欠であった。

政府ではなく一個人の事業ではあったが、ビルトモア(Biltmore)は林業および林業教育の最初の実験地となり、その後の環境保全思想に大きな影響を及ぼした人々が関係したという点で、合州国の林業および環境保全の原点であるとも言える。また、そこに近代造園を確立したオルムステッドが関わっていたことは、造園が当初から環境という視点を持っていたことを明らかにする。晩年のオルムステッドは最後の情熱をここに注ぎ、彼が森林の管理を任せた、アメリカ人最初の"forester"であるピンショールはビルトモアを去ってから森林局長として、シオドア・ローズベルト(Theodore Roosevelt, 1858-1919)大統領の強力な支援を得ながら"conservation"運動を展開していった。

2. 自然環境の認識の変化と政府の対応

19世紀後半は合州国の社会が激しく変動した時代であった。産業の発展に伴い自然に対する人間の影響力が急速に拡大し、自然環境に対する考え方も大きく変わらざるをえなかった。それまで資源は無尽蔵にあると認識され、木材に関しても伐採したら別の場所に移動するだけだった。また、木材を必要としないときには森林は邪魔者とみなされ焼き払われた。ところが、都市化が進んだ東部では資源の枯渇の兆候が現われ、西部においても伐採による浸食や砂嵐の発生が大問題となり始めた²⁾。さらに、1890年にはフロンティアラインの消失宣言が出された。

これによって、自然環境に突然と変化が現われたわけではないが、合州国の資源が無尽蔵であると信じ、使い捨てを当然と考えていた人々の心理に大きな影響を及ぼした。

時代をさかのぼれば、1626年に最初の入植地であるマサチューセッツ州プリマス(Plymouth)で木材の伐採と売買を取り締る法律が制定されたり、1681年に5エーカーを開墾する毎に1エーカーの樹林を保存せよと言う布告を発した現在のペンシルベニア州の領主ウィリアム・ペン(William Penn, 1644-1718)のような事例もあるが、³⁾かれらはヨーロッパの森林に関する対応をそのまま新世界でも実践したに過ぎないと考えられる。しかし一般には、人間の手の加わった自然は評価するが手つかずの自然は悪魔の住むところとして敵視された。

新世界に住み始めてその自然環境の変貌にいち早く気づいたのは、すでに都市化が進みその問題も顕在化した東部に住むエリートたちであった。1840年代に狩猟を趣味とする彼らはその動物相が貧弱になっている傾向に気づき、それが獲物の減少の問題にとどまらず自然環境全体の変貌の兆しではないかと心配した。

第1章でも触れたように、ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)は1854年マサチューセッツ州のコンコード(Concord)郊外のウォールデン池(Walden Pond)畔での小屋暮らしの生活の記録を出版したが⁴⁾、これは人間に飼い慣らされた自然環境における体験である。外交官としてヨーロッパに滞在した経験からマーシュ(George Perkins Marsh, 1801-1882)は地中海沿岸の文明の興亡を観察して、人間の自然環境に対して働きかけることによる問題に関して他人事ではないという危惧の念をいだき、合州国で最初の自然環境に関する書物、"Man and Nature"⁵⁾を1864年に出版した。彼は森林を消費するのではなく、利用すべきだと考え、皆伐の害を訴えた。この本はビンショーを始めとする知識人たちの環境に対する認識に大きな影響を及ぼした。

このように知識人の中には資源の問題に対して早くから警鐘を鳴らす者がいたが、とても社会を動かすほどの影響力はなかった。しかし、日常生活に関わる問題が発生するにしたがって、それらに対処するための立法処置が次第に講じられるようになった。1869年には大陸横断鉄道が開通し、それまでは市場が遠すぎて利用されなかった資源にも人の手が加わることになり自然環境の搾取が加速された。1872年にはネブラスカ州で植林を呼びかけるために緑化記念日(Arbor Day)が4月10日に制定された。

森林破壊の問題に対する政府の対応はカール・シュルツ(Carl Schurz, 1829-1906)⁶⁾(写真-1)の内務省長官時代(1877-1881)に本格的になった。彼はドイツの林業地域に生まれ、1852年に合州国に移民した。内務省長官になると森林の保全は国家的な問題であると議会に訴え、連邦政府による森林の管理を主張した⁷⁾。当時は土地利用の規制は自由の侵害だとして、とりわけ西部の人々からは反発されたが、1891年に"Forest Reserve Act"が成立する基盤をつくった。1878年にはパウエル(John Wesley Powell)が南西部の乾燥地帯を

探検してのそこでの農耕に関するレポート⁸⁾を議会に提出した。この中で農地を維持するために灌漑施設を政府が建設すべきことを提案し、政府の協力を訴えた。

シュルツが内務省長官を退いた1881年には、農務省内に林業部門(Division of Forestry)ができた。これは初代の主任となったハフ(Franklin Benjamin Hough, 1822-1885)が1878年に農務省の依頼を受け、森林破壊の問題を述べ、その保全を訴えるレポートを作成したことが発端となっている。

2代目のイグレストン(Nathaniel H. Eggleston, 1822-1912)のあとを1886年に引き継いだドイツ出身で林業の専門家であったファーノウ(Bernard E. Fernow, 1851-1923)(写真-2)は1898年にピンショーに職を譲るまで12年間に渡り、林業部門の主任として森林を政府が管理することの必要性を訴えただけではなく研究の意義も述べていた⁹⁾。このころになると西部で旱魃が続く一般の人々の環境管理に対する理解も次第に深まってきた。

1891年には保護林を指定する法律(Forest Reserve Act)ができた。これによって大統領の命令によって公有林地を資源の保全および水源涵養の目的のため保護林に指定することができるようになった。ハリソン(Benjamin Harrison, 1833-1901)大統領は制定直後に西部の13,000,000エーカーを指定した。その中には州立公園となっていたヨセミテ溪谷(Yosemite Valley)を取り巻く地域が含まれていて、ヨセミテの国立公園設置の準備が前進した。これによってその後の国有林や国立公園が発展する基盤が整った。

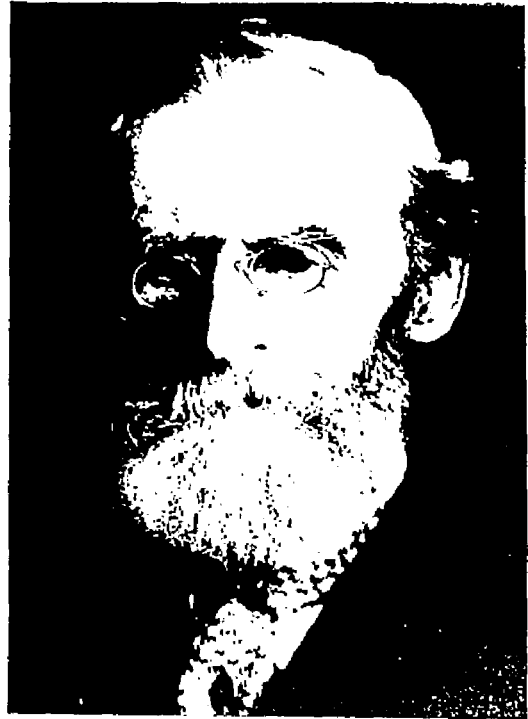


写真-1 Carl Schurz



写真-2 Barnhard E. Fernow

1897年には保護林(Forest Reserve)が国有林(National Forest)と改称され、1898年3月11日にはファーノウの後任としてピンショーが林業部門の主任となった。1901年にはピンショーの知人であったシオドア・ローズベルトが大統領に就任し、この林業部門(Division of Forestry)が森林局(Bureau of Forestry)と改称され、拡充された。1905年には"National Forest"の管理が内務省の土地事務所(General Land Office)から農務省の森林局へ移管され、ピンショーの強い要望によって、人々に奉仕するという意味がはっきりする"Forest Service"という名称とした。

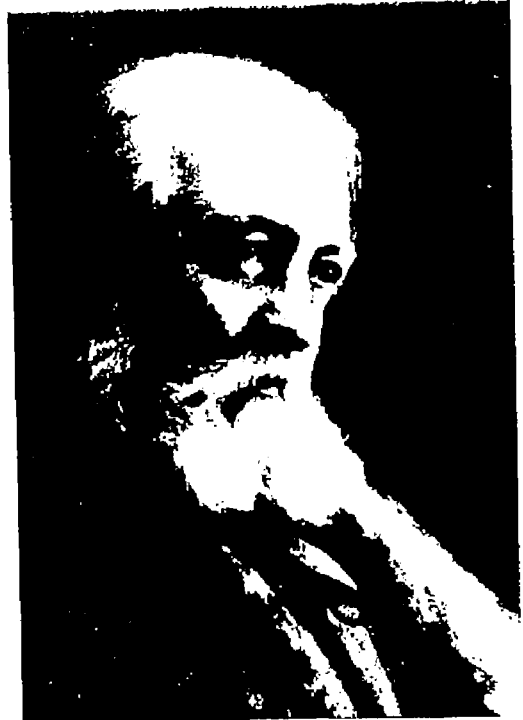


写真-3 Frederick Law Olmsted, Sr.

3. オルムステッドとビルトモア オルムステッド(Olmsted, Frederick Law, Sr., 1822-1903)¹⁰⁾(写真-3)はニューヨークのセントラルパーク(Central Park)を始めとする公園の設計や、キャンパス・都市計画などで既に著名な人物となっていた。しかし、ニューヨークの公園に関わる政治的な闘争に疲れ果てた彼は1863年から65年までカリフォルニア州のマリポサ(Mariposa)の鉱山の責任者の職を引き受けた。その間、何度か近くにあるヨセミテ渓谷を訪れ、1865年にはその保全の必要を求めるレポートを作成している。このレポート¹¹⁾は今日でも新鮮であり、ただ手をつけずに残せと言っても無意味であるということを理解したオルムステッドが、その保全手法とその意義について具体的に検討を行なっている。これからもオルムステッドの自然環境の保全のための計画的な戦略に対する関心がうかがえる。このように都市だけではなく自然環境の保全の必要性



写真-4 George W. Vanderbilt

をもオルムステッドは痛感していたので、ビルトモアの広大な森林の管理に対する関心も高かったのは当然であった。1888年にオルムステッドはジョージ・バンダービルト (George W. Vanderbilt, 1862-1914) (写真-4) からビルトモアの計画に参画することを求められた。彼とバンダービルト家との関わりをた



写真-5. Biltmore House (1988)

どると、ニューヨーク州のスタトン島 (Staten Island) に移住し、科学農法の実践を試みた1848年にさかのぼる。そのとき隣地に農園を所有していたウィリアム・バンダービルト (William H. Vanderbilt, ジョージの父) と知り合いになる。また、彼はバンダービルト家の霊廟の計画やジョージ・バンダービルトのメイン州バーハーバー (Bar Harbor) のサマーホーム計画にもすでに携わっていた。このような縁でオルムステッドはビルトモアの計画にも関与することになった。

当時26才で乗馬などの野外活動を好んだジョージ・バンダービルト¹²⁾はノースカロライナ州アッシュビル (Ashville) 郊外を訪れ、その気候と眺望から、このビルトモアの地が気に入り、1888年までに約2,000エーカーを入手した。だが、その土地をどうするのかという具体的な計画を彼は持っていなかった。ただ景色のすぐれた場所に館を建て周囲は園地 (park) にしたいということであった。しかし、仕事を依頼されたオルムステッドは現地調査の結果から、園地を造成するには土壌などの要因から不適であるので、むしろ社会的評価が高く実益にもなる林業経営を試みることを勧め、バンダービルトはこの提案を受け入れた。当時、森林を育成するという林業は合州国ではまだ行なわれていなかったが、自分が既に関係したアディロンダック山 (Adirondack Mountains) の保全運動などから、林業の必要性を痛感し、オルムステッドはこの提案をしたのであろう。建物自体は当時最高の人気を誇っていたハント (Richard Morris Hunt, 1828-1895) が担当することになった。1889年3月にその図面を見たオルムステッドは、ヨーロッパの城のような折衷主義のハントの建築 (写真-5) に対して批判的であったが、眺望や風向きなどの配慮に関するデザインの変更を勧めた程度で、協力して仕事が遂行され、建物は同年7月には着工された。とはいえ、建物を取り巻く庭園空間 (写真-6) は建築に従属的に成らざるをえなかった。オルムステッドが情熱を注いだのはむしろ周囲の120,000

エーカーに及ぶ広大な樹林地（写真-7， 図-1）であった¹³⁾。

年末にいたり、その社会的意義の重要さに関する認識も深まり、バンダービルトとオルムステッドのビルトモアの森林に注ぐ情熱は高揚した。地は拡大され、苗畑や樹木園(arboretum)をつくることも決定した。これは、彼がハーバード大学が所有するボストン郊外のアーノルド樹木園(Arnold Arboretum)のデザインに関わり、また、雑誌 "Garden and Forest"の発行を通じて、当時のアメリカでもっとも著名な樹木学者で園長でもあったサージェント(Charles Sprague Sargent, 1841-1927)と親しかつたことに関係する。ビルトモアの森林に関しても、1890年の夏にその改良計画書をサージェントに提出し、アドバイスを



写真-6 Biltmore Garden

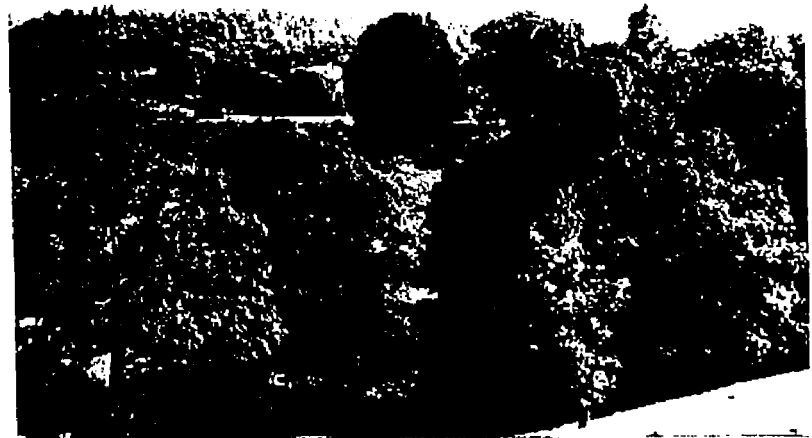


写真-7 Biltmore Forest(1988)

求めていた。1890年には、彼はその後60年に渡ってビルトモアの管理を担当したビードル(Chauncey D. Beadle)を招き苗畑や樹木園を管理させた。森林に関してはピンショーを1891年末にその責任者とした。また、すでに当時から合州国最初の林学校をここに設立することをオルムステッドは画策していた。

1985年までオルムステッドはビルトモアに毎年2-3回は足を運び、時には数週間も滞在することもあった。持病と老化による体調はビルトモアの仕事を行なっているうちにも悪化する一

方であり、ここが彼が直接関わり、衰える自分と戦いながら全力を尽くして行なった最後の仕事となった。1895年の3月にはオルムステッドの記憶力が著しく衰え、ときには会う予定の人物の名前さえも忘れるほどになり実務の多くは息子が代行するようになった。それでも同年4月末にビルトモアの林地の管理をピンショーに代わって行なうために到着し、オルムステッドに

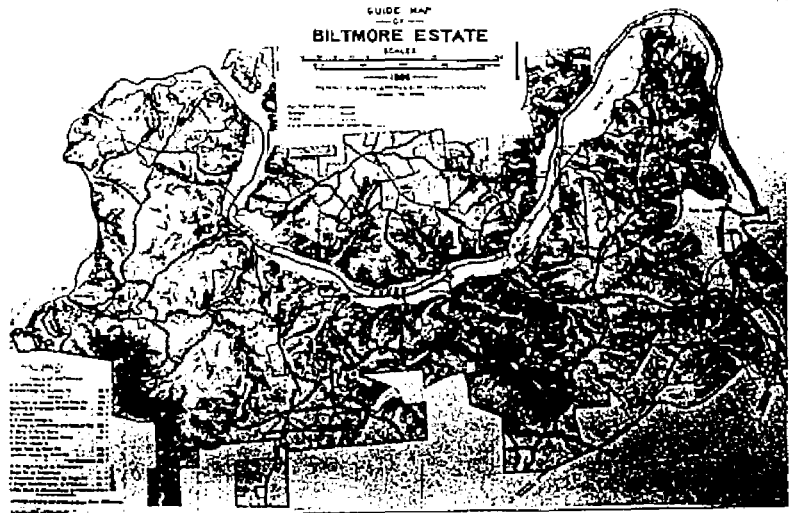


図-1 Biltmore Plan

面会したシェンク (Carl Alwin Schenck, 1868-1955) は彼の専門家としての能力を高く評価しただけではなく、今までに出会ったなかでもっとも愛すべき老人であったと述べている。オルムステッドは1895年6月10日にビルトモアを去り、そのまま療養生活に入り2度と戻ることはできなかった。それでも、療養中に息子にビルトモアのことをいつも尋ねていたといわれる。

オルムステッドは狭義の造園家というよりも社会改革家と呼ぶ方が妥当であり、普通の人々の生活環境の向上に常に心を配っていた。そのような彼が独占的な鉄道で財を成した大富豪の、

あたかも国王の城のような邸宅の周辺の仕事を引き受けたのはなぜであろうか。彼は経済的にも不自由なく、社会における評価も高かった。また、晩年に達し、不眠などの持病も悪化してきたため、仕事からも次第に遠ざかりつつあった。もしこの事業を金持ちの道楽と認識していたのであれば、このような状態で何度もビルトモアに足を運ぶことはなかったであろう。さらに、すでに造園家としての名声が高く、彼の事務所には多くの仕事の依頼があったが、庭園などの個人的な仕事はすべて断わっていた。にもかかわらず、ビルトモアの仕事だけは引き受けたのは、その規模と内容からビルトモアの計画を半公共的な仕事として認識していたからである。彼自身が豊かな家庭に生まれ、造園家としての個人的な顧客も裕福な人々が中心であったが、彼はそれを否定するのではなく、その経済力を私的なものに止めずに、社会に役立て還元しようとしていた。このことはオルムステッドの仕事を振り返るとより明白となる。大富豪の私的な計画であってもそれを否定するのではなく、常にそのクライアントを説得・啓発して社会に役立つものを造りだそうとしていたことがうかがえる。その考え方の延長として、ビルトモアでも働くひとびとの住環境の改善を考慮して、模範的な村落をビルトモア敷地内に計画し

ていた。¹⁴⁾

オルムステッドがビルトモアを重視したもうひとつの理由は彼の事務所とそれを担うであろう息子(Frederick Law Olmsted, Jr. 1870-1957)の将来を考えていたからであろう。彼は息子を常に伴ってビルトモアにやっていた。その理由の第一としてここが植物や林業、さらには大プロジェクトの運営技術について学ぶまたとないチャンスを与えてくれると言うこと。第二に、彼自身が自分の知力や記憶力が衰えてきつつあることを認識し、補佐役を必要としたこと。第三にこの総合的な大プロジェクトを通じて、自分の後継者としての能力を身につけてもらいたかったこと。さらに、若い当主のバンダービルトとのコミュニケーションを円滑にするためには同世代の息子の方が良いと考えたことも推測される。すなわち、衰退する自分と戦いながらも常に冷静な判断を下し、将来を展望していたオルムステッドが浮き彫りにされている。

4. ピンショーとビルトモア

ピンショー(Gifford Pinchot, 1865-1946)(写真-8)¹⁵⁾¹⁶⁾はペンシルベニア州の裕福な家庭に生まれた。子供の頃から夏はアディロンダック山にある別荘で過ごし、狩猟や釣などを通して自然環境に親しんだ。父親のジェイムズ・ピンショー(James Pinchot)は、彼に"forester"になることを勧めた。具体的な"forester"のイメージが浮ばないながらも、ピンショーはそれを自分が望む職業のようだと想像していた。しかしながら、資源が無尽蔵にあると思われた当時のアメリカには森林を育てるという職業は存在しなかったし、そのような教育機関もなかった。そこで、1885年に家の伝統であるイェール(Yale)大学に入学してから、生物学や、地理学、気象学、天文学などの関係のありそうな学科を選択した。



写真-9 Gifford Pinchot

1889年の春に卒業し、本格的に林学を学ぶために、林学が確立したヨーロッパに向かった。ドイツの高名な"Forstmeister"で、ビルマやインドに林業を導入した実績を持つブランディス(Dietrich Brandis)のアドバイスを受けた。祖父がフランス出身のピンショーは、フランス語も堪能だったことも手伝って、フランスのナンシー(Nancy)にある国立林学校

(L'Ecole Nationale Forestriere)に入学し、1年あまり林学を学んだ。しかし、これ以上滞在しヨーロッパの林業を学んでもアメリカでは適用できないと考え、また、師であるブランディスからもアメリカで実践してみることが一番大切だとのアドバイスを受けた彼は、ヨーロッパ諸国の林業を見学してから、1890年12月に帰国した。

帰国後、父親のつてをたどり、森林および政府関係者のもの尋ねて、林業家としての将来についてのアドバイスを求めた。1891年2月のミシシッピへの調査旅行の途中ではビルトモアにも立ち寄った。また、農務省森林部門の主任のファーノウとともに行なった調査旅行を通じてアメリカの森林に対する理解が深まった。しかし、ファーノウの助手という仕事の誘いにもかかわらず、彼は政府機関で働くよりも実際に外に出て仕事をするを選んだ。結局、1892年2月からビルトモアで働くことになったが、それまでに31州とカナダを訪れたり、森林について講演をしたりして祖国の森林とその環境に関する見聞を広めていた。

ビルトモアでの、ヨーロッパから戻り青雲の志に燃えるピンショウと晩年のオルムステッドの出会いには重要である。ピンショウの父親とオルムステッドは昔からの友人であったから、林学を学んだピンショウのことをオルムステッドは聞き知っていたに違いない。1891年10月にピンショウはビルトモアでオルムステッドに初めて会った。さらに翌月にはオルムステッド事務所のあるボストン郊外のブルックライン(Brookline)でピンショウはそれまでの経験や林業に関する知識についてのインタビューを受けた。そして、12月には採用が決定され、翌年の2月から勤務することになった。ピンショウはその出会いの感動を、「オルムステッド氏は私にとって100年に1人と呼ぶべき人物であった。」、また、「私が幸運にも出会うことのできた最高の頭脳の持主であった。」、「彼の知識はその職業の領域をはるかに超越するものであった。」と感動的に記録している。また、オルムステッドも"forester"としてのPinchotの将来に期待し、若い彼を対等な立場で扱って、親身なアドバイスをしている。また、1895年にピンショウがビルトモアでの仕事をやめるとき、結局は辞退したが、彼はニューヨークの公園委員会委員に推薦された。そのことを知ったオルムステッドは喜び、ピンショウは、林業家であるが森林と庭園、公園が異なる原理に基づいて管理されていることを理解していると非常に高く評価していた。

ピンショウは年棒\$2,500でビルトモアの施業計画と1893年に計画されていたシカゴの世界博覧会でのビルトモアの林業に関する展示の準備を行なうという契約で採用された。彼は1892年2月3日に赴任し、積極的に森林計画を立案した。初年度の報告¹⁷⁾によると一番苦労したことは育林の意義をきこりをはじめとする現場労働者に理解してもらうことであった。当時は森林資源も無尽蔵と思われ、伐採したら別のところに移動するのが当然であり、下生えを保護したり、森林を育成することなど考えもされなかったから、ピンショウはその思想の普及を彼の助手から現場の長という順で全員に広めていった。作業計画の目的は第一に利潤、第

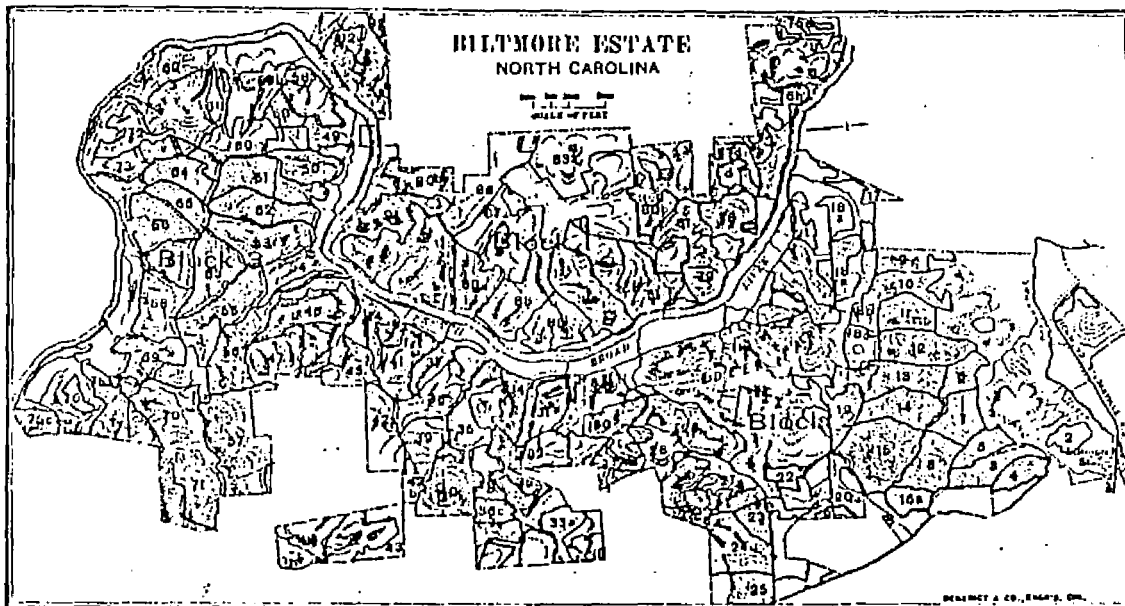


図-2 Management Zone of Biltmore Forest(1893)

二に毎年均一化した恒続生産、第三に将来に向けての改良であった。当時のアメリカの状況では択伐はコストが問題となった。林地は3つの大ブロックに分けられ、さらに平均41エーカーの大きさの92からなる林班に細分されていた。初年度にも\$1,220.56の利潤を産みだしたと記録されている。(図-2)

ビルトモアの施業が軌道に乗り、余裕が出てきたので、1893年12月にはニューヨークで"Counseling Forester"として事務所を開いた。その仕事としては、前章に記したように、夏をよく過ごしたアディロンダックなどの森林の保全計画の策定などをおこなった。さらに、1895年春には、彼のドイツにおける師であったブランディスのアドバイスによって、シェンクを後任として呼び寄せ、ピンショーはビルトモアの森林管理の職を辞した。

ビルトモアを離れてからピンショーは、政府に関係する仕事をするようになった。1896年に政府のForest Commissionの最年少のメンバーに任命され、西部を旅行した。その際、ヨセミテでは、国立公園の保全に尽力し、自然保護団体シエラクラブ(Sierra Club)の創設者であるミュア(John Muir, 1838-1914)にも会った。1898年には"Division of Forestry"のファーノウが辞職し、コーネル(Cornell)大学で林学を教えることになったので、その後任にピンショーが選ばれた。こうして彼はその後の合州国森林局の設立、発展に大きく関わるようになった。

5. ビルトモアの林業教育¹⁸⁾

ピンショーが実践したビルトモアにおける林業は多くの人々の注目を浴びた。1894年に彼は

ビルトモアで働くことを希望した人々からの問い合わせが殺到したと紹介している。しかし、その頃にはビルトモアはまだ研修生を受け入れる体制にはなかった。

バンダービルトの支持を得て、オルムステッドが設立に尽力した林業学校は、彼が引退する1895年にピンショの後継者としてドイツから来たシェンクによって実現された。彼は翌年から学生を受け入れ、1年で林業実務を修得する課程をもつ"Biltmore Forest School"を1898年9月1日から正式に開校した。この学校は後に合州国森林局で活躍した人材を育成した。しかし、1907年頃には木材不況の影響を受け、学校の維持費を捻出してきたビルトモアの製材所からの収入が見込めなくなった。このこともあって、1908年にはシェンクは多くの関係者を集めてBiltmoreFairを催し、ここの林業教育に対する理解を求め、学校を維持するための財源を確保しようとした¹⁹⁾。しかし、次第にバンダービルトの財産も減少してきたことが明らかになり、ビルトモアの維持管理費も急激に削減された。そのこともあり、バンダービルトとの関係が悪化し、1909年にシェンクはビルトモアを去った。その後も、彼は学校では教えていたが学生数が減少し、1913年に学校は閉鎖され、彼はドイツに戻った。翌年に、バンダービルトが若くして亡くなり、1916年には広大な森林は処分された。結局、大富豪の私的なものであったために、バンダービルトの資産状態や気分によって左右されたことがその限界でもあった。

このように短命ではあったが、閉鎖される頃には他にも林業教育を行なう教育機関が誕生していた。1898年ビルトモアより1ヵ月遅れて、農務省の林業部門主任の地位をピンショに譲ったファーノウによってコーネル大学で4年制の林学教育課程が設立された。この課程は現在ニューヨーク州立大学のシラキュース(Syracuse)校の林学部となっている。1900年にはピンショの父親が中心となりイエール大学に基金を寄付し、林学の大学院を設置した。また同年ピンショは同僚とともに専門家同志の意見交換のためにアメリカ林業家協会(The Society of American Foresters)を設立している。

6. おわりに

アメリカの森林の破壊とその問題を把握して、その保全を画策したのは上流階級に属する先駆者たちだった。彼らが集まった場としてビルトモアは環境保全の歴史の中で重要な役割を果たした。しかし、ファーノウが常に主張したように、森林は国家のような主体がかかわらなければ、とりわけ環境保全のように経済的価値が求められない場合には、長期間に渡る恒続的な管理は困難であった。オルムステッドやピンショは基金を設立し恒常的な管理を可能にすることをバンダービルトに訴えていたが実現しなかった。このビルトモアはバンダービルトの資産を食い潰す状態となり、その年間の維持管理費は最盛期には\$250,000だったのが20世紀になった頃には\$7,000へと激減した¹⁰⁾。すなわち、経営という点では林業の試みは失敗であった。

ビルトモアの評価はむしろ、さまざまな試みを可能とした巨大な実験室としての役割を果た

し、そこから保全運動の中心となる人材が輩出したという点であろう。その第一の人材であるピンショールは人間関係、能力、林業を選んだ時代の状況などのすべての点で恵まれていた。しかし、長年月にわたって環境の保全のために努力してきたファーノウやオルムステッドなどの仕事の蓄積があったがゆえに活躍する舞台与えられたといえる。

バンダービルトの死後、処分された森林の多くは、現在Pisgah National Forestとなり、邸宅は博物館として公開されている。

文献

- 1) Huth, Hans(1957): Nature and American, Three Century of Changing Attitudes. University of Nebraska Press, Lincoln. p.175
- 2) Davis, Richard C., ed.(1983): Encyclopedia of American Forest and Conservation History. Macmillan Publishing Company, New York. Vol.1&2
- 3) ナッシュ, ロデリック(1989): 人物アメリカ史(下). 新潮社, 東京. pp.57-108
- 4) Thoreau, Henry David(1962): Walden and Other Writings. Bantam Books, Toronto(Originally published in 1854)
- 5) Marsh, George Perkins(1965): Man and Nature. The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge(Originally published in 1864)
- 6) Wild, Peter(1985): Pioneer Conservationists of Eastern America. Mountain Press Publishing Company, Missoula. pp.42-53
- 7) Schurz, Carl(1877): Annual Report of the Secretary of the Interior on the Operations of the Department for the Fiscal Year Ended June 30, 1877. Government Printing Office, Washington, D.C.
- 8) Powell, John Wesley(1878): Report on the Lands of the Arid Region of the United States, U.S. House of Representatives, Executive Document 73, 45th Congress, "2nd Session. Government Printing Office, Washington, D.C.
- 9) Reiger, John F.(1986): American Sportsmen and the Origins of Conservation, Revised Edition. University of Oklahoma Press, Norman. pp.73-79
- 10) Roper, Laura Wood(1973): FLO, A Bibliography of Frederick Law

- Olmsted. The Johns Hopkins University Press, Baltimore. pp.406-477
- 11) Olmsted, Frederick Law(1952): The Yosemite Valley and the Mariposa Big Trees, A Preliminary Report(1865). Landscape Architecture. 43(1)1:12-25
- 12) The Biltmore Company(1987): Biltmore Estate. The Biltmore Company, Ashville. pp.2-5
- 13) Newton, Norman T.(1971): Design on the Land, the Development of Landscape Architecture, The Belknap Press of Harvard Press, Cambridge, pp.346-352
- 14) Fein, Albert(1972): Frederick Law Olmsted and the American Environmental Tradition. George Brasiller, New York. pp.55-57,95-97
- 15) Pinchot, Gifford(1987): Breaking New Ground. Island Press, Washington, D.C.(Originally Published in 1947)
- 16) Wild, Peter(1979): Pioneer Conservationists of Western America. Mountain Press Publishing Company, Missoula. pp.44-57
- 17) Pinchot, Gifford(1893): Biltmore Forest, the Property of Mr. George W. Vanderbilt, an Account of its Treatment, and the Results of the First Year's Work. Arno Press, Chicago
- 18) Schenck, Carl Anwin(1974): Birth of Forestry in America, Biltmore Forest School 1898-1913, Forest History Society and the Appalachian Consortium, Santa Cruz(Originally Published in 1955)
- 19) Jolley, Harley E.(1970): Biltmore Forest Fair,1908 Forest History,14(1):6-17

第8章 保全運動の展開：“Garden and Forest”とその関係者たち

摘要：19世紀末のアメリカにおける環境問題の顕在化は環境保全の専門分野としての林業と造園の確立を促した。その理論的運動の一翼を担ったのが“Garden and Forest”という雑誌とその関係者たちであった。それまでの林業とは、無尽蔵の森林から木を伐るだけの業であり、造園とは園芸や家の回りの修景でしかなく、裕福な人々の関心は珍奇な植物の収集に向けられていた。そこから環境と言う広大な空間の保全への関心を高め、自然公園や都市の緑地計画へ向かう理論づけがなされるようになることに、この雑誌の関係者たちはその論説などを通じて大いに貢献した。

1. はじめに

前章で¹⁾、環境保全のための林業の実践の場としてのビルトモア(Biltmore)の役割、ピンショー(Gifford Pinchot)とオルムステッド(Frederick Law Olmsted, Sr.)の関係、林業教育などについて論じた。本章では、環境保全思想を広める手段として雑誌に現れた論説やその関係者の活動から、林業と造園の理論的な発展について考察する。ここでもアメリカにおける科学的林業の確立者であるファーノウ(Bernhard E. Fernow)や近代造園の父と言われるオルムステッドが大きな役割を演じている。ブラントハンターが新種を求めて世界を探検したのは金持ちの道楽であったが、単なる珍種への関心から次第に環境に対する意識へ目覚めていく過程が、この保全思想の高まりと相関がある。

ビルトモアでのプロジェクトがノースカロ

ライナ州のアッシュビル(Asheville)で進められていたのと同時期の1888年に、“Garden and Forest”という雑誌がニューヨークで発刊された(図-1)。その発行責任者はハーバード大学教授で、アーノルド樹木園(Arnold Arboretum)の園長としてアメリカの樹木学の中心的人物であったサージェント(Charles S. Sargent)であった。「庭と森林」というタイトル自体からも、2つの異質の空間を扱っているように感じさせるが、その副題が「園芸と造園芸術、林業(Horticulture, Landscape Art and Forestry)」とあるように、植物

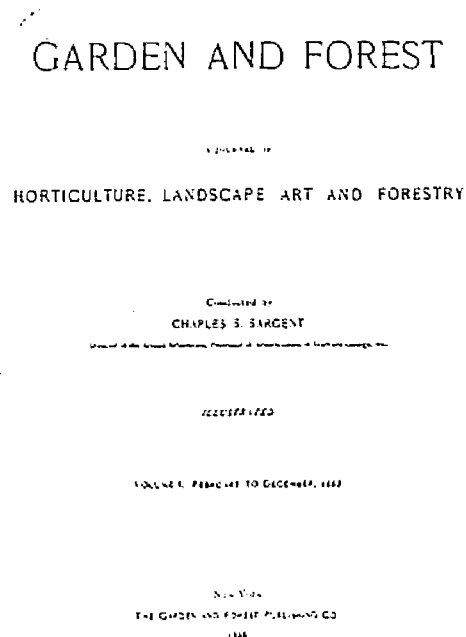


図-1 “Garden and Forest”第1巻(1887)

という共通項があるとはいえ、今日の観点からすれば、対象が非常に幅広く、その購読者は東部を中心とする裕福な知識人階層であったと考えられる。

この創刊の理由として、森林の枯渇という危機感が横たわっている一方、経済的ゆとりの発生による園芸や外来樹種への関心などがあったことが考えられる。本章ではアメリカでの環境保全史における



写真-1 チャールズ・サージェント

この雑誌の意義を明らかにするとともに、この雑誌に関わった人々の活動やその掲載記事を通じて、樹木や造園に関する関心がどのように環境へと拡大し、理論づけられ、さらに専門家が育成されるようになったのか探る。

2. サージェント(1841-1927)とアーノルド樹木園

まず、この雑誌の責任者であったサージェント(写真-1)(1900)について概略を記す²⁾。彼は1841年4月24日ボストンの裕福な家庭に生まれた。父親(Ignatius Sargent)は成功した銀行家であるだけでなく、園芸マニアでもあった。サージェント家はボストン郊外のジャマイカ池のほとりに大邸宅を構えていた。さらに、甥(Henry Winthrop Sargent)のニューヨークの邸宅には、その隣人かつ親友の造園家ダウニング(Andrew Jackson Downing)がデザインした庭園があり、サージェント一家もしばしば訪れていた。

このように恵まれた環境に育った彼は、1862年にハーバード大学を卒うじて卒業後、軍隊生活を体験してから、ヨーロッパで3年間を過ごした。1868年にボストンに戻ってからは、自宅の130エーカー(52.6ha)におよぶ敷地の造園管理を仕事とした。これが職業と呼べるものであるとすれば、彼は造園家となったことになる。この敷地の広大さは庭園だけではなく公園スケールの視点で空間を把握する能力を彼に与えたとも考えられる。

次第に植物への関心が高まり、当時の高名な植物学者で、ハーバード植物園(Harvard Botanic Garden)の園長グレイ(Asa Gray)に個人的に師事した。さらに1864年に出版されたマーシュ(George Perkins Marsh)の"Man and Nature"を読んで感動し、環境保全へ視野が広がった。彼の師グレイとマーシュは親交があった上、サージェントは3年にわ

たるヨーロッパ遊学中に、マーシュがこの本を書くことを思い立った地中海なども訪れ、この本の中で指摘されている文明による植生の衰退を実感していたのであろう。

1873年には、引退するグレイを引き継ぐ形で、ハーバード植物園と新たに設置されたアーノルド樹木園の園長に任命された。その後、終身この地位に留まった彼は、植物学者のネットワークを築き上げ、ここをアメリカの樹木学研究の中心とした。サージェントは、当時の森林に関する第一人者として、1880年の第10回国勢調査の森林部門の責任者に任命された。さらに1884年に公表された「北米の森林に関するレポート (Report on the Forests of North America)」は森林研究者としての彼の名声を確固たるものにした。彼はその中で伐採の問題に触れ、森林の資源の枯渇を警告し、その後の森林政策に大きな影響を及ぼした。

また、1883年からニューヨーク州北部のアディロンダック (Adirondack) 山の森林と水源の管理を州に求める運動にも関わるようになっていた³⁾⁴⁾。第6章でも述べたように1885年にアディロンダック州立保護林が設立された際に、彼はその森林委員会の長に任命された。さらに1881年から85年にかけては自然史博物館のアメリカの樹木の展示品の収集も引き受けている。

40代半ばを迎え最も充実している時期の1887年に、“Garden and Forest”の編集が始まった。この雑誌を出版している期間中にも、1891年から「北米の樹木 (Silva of North America)」の監修をおこない、1902年に完成させた。この全14巻はその後、関係者の必携書となった。さらに、1905年には「北米の樹木マニュアル (Manual of Trees of North America)」を出版している。また、1892年にはフローラの多様な日本を訪れている。雑誌の廃刊の前年の1896年には、森林政策を検討する国立科学アカデミーの森林委員会 (Forest Commission) の長として西部の森林の実情を視察した結果、13ヶ所の保護林の設定を諮問し、後の国有林となる地域の設定にも関与した。このように彼の活動が最も充実していた時期と雑誌の発刊されていた期間は重なっている。

サージェントは1927年3月22日にアーノルド樹木園の園長として在職のまま没した。彼は頑固で気難しい人間であったと言われている。そのことは彼が編集した雑誌からも感じられる。しかし、着実に仕事を組織・推進する能力に関しては、10年間にわたるこの雑誌の編集に加え、樹木園の整備や長大な植物図鑑の監修などの業績からも明らかである。

彼が半世紀以上にわたって園長として活動の根拠地としたこの樹木園は、プラントハンターを世界に送りだし、北米における植物研究や園芸ブームの中心となったことで有名であるが⁵⁾、その敷地のデザインやボストンの緑地系統の中での公園的位置付けなどの点でも、造園史においても重要な意義を持つ。その敷地計画 (図-2) にはニューヨークのセントラルパークの設計で知られるオルムステッドが協力している⁶⁾。

この敷地は130エーカーの面積を有する農場でサージェント家の邸宅にも近かった。この農

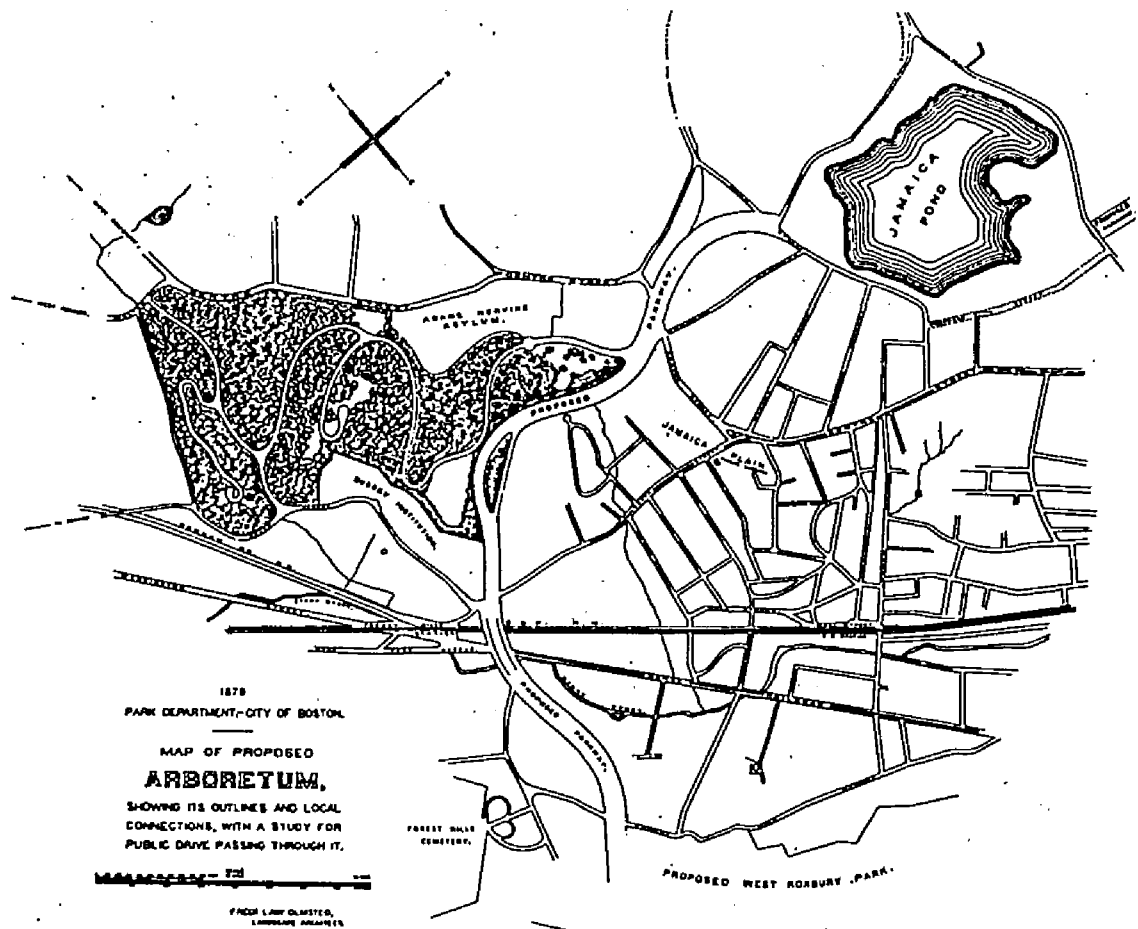


図-2 アーノルド樹木園(1879)

地はその裕福な所有者の遺言により、1872年にハーバード大学に正式に寄贈された。ボストン市街が望める丘や湿地等を含む変化に富んだ土地であったが、当時は全体が荒れ果てていた。サージェントは初代園長として、この広大な敷地を整備して、生育可能なあらゆる種類の植物を、自生であるか外来であるかにとらわれずに育てたいと思った。しかし、それを実現するためには予算が限られているという現実的な問題に突き当たった。

その際の彼の発想の注目すべき点は、彼は植物学者と造園家の2つの視点も持ち合わせていたということである。

1874年6月にボストンの公園に関する公聴会が開催されるのを機に、彼はすでに著名な造園家として、近隣のブルックライン(Brookline)に事務所を構えていたオルムステッドに手紙を書いた。その中で、この130エーカーの樹木園の敷地を公園として、ボストン市に相当の予算を投じて管理してもらう一方、植栽に関しては自分に任せてもらうようにできないものか相談をもちかけている。これに対してオルムステッドは公園と樹木園の要求が同時に満たせるだろうかと疑問を投げかけながら、自分がデザインするよりも、サージェントがオルムステッドのアドバイスによって自らデザインすることを提案している。このようにオルムステッドは当

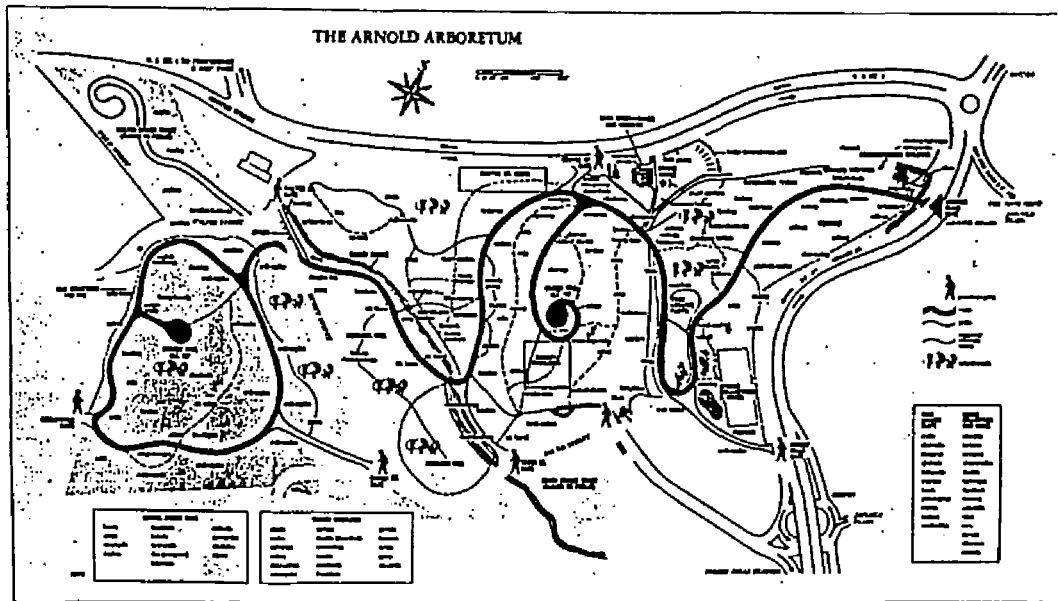
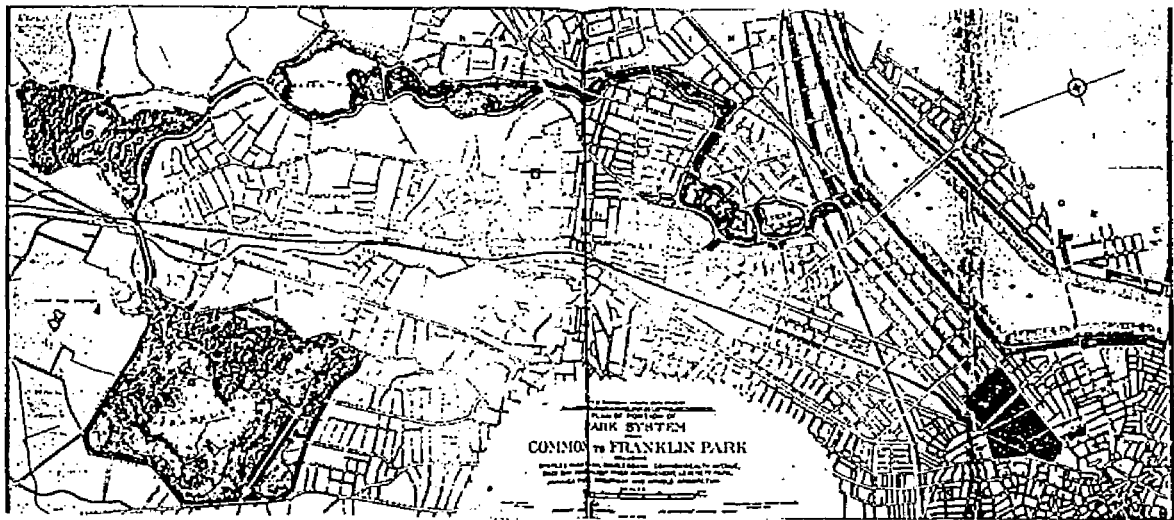


図-3 アーノルド樹木園(1975)

初、サージェントの提案に消極的であった。しかしながら、彼は次第に熱中し、ついにその仕事を無償で引き受け、1878年の夏をほとんどその計画の立案に費やすようになった。

その敷地計画は一見単純に見えるが、外国産のものを多数含むさまざまな形態・色彩の樹木を植物学的に配置しつつ、ここの地形等の特色を生かして、公園に要求される調和のとれた景観を造り出すという過程はかなり困難であった。だが、この科学と風致の結合と言う難問があったからこそ、オルムステッドとサージェントは熱中したのであろう。100年以上を経た今日（図-3）でも当初の状態がそのまま維持されている事実は、当時の計画の完成度の高さの証拠と言えよう。

1882年にはこの樹木園をボストンの公園システムの一つとして管理するための合意書がハーバード大学とボストン市との間で取り交わされた。その内容はサージェントが8年前に望んだものに近かった。すなわち、ボストン市がこの敷地をハーバード大学から一旦購入し、1000年契約でハーバードにリースするという内容で、その施設等の管理は市当局が行なうことになっていた。この際、隣接地もボストン市によって購入され、現在は265エーカーとなっている。このようにしてアーノルド樹木園は北米の樹木学の中心となる基礎ができ上がるとともに、ボストン地域の市民の憩いの場としても提供されることが約束された。換言すれば、アーノルド樹木園は、世界の植物を栽培しただけの空間ではなく、オルムステッドが計画したエメラルドネックレスと呼ばれるボストンの緑地系統に組み込まれた公園（図-4）として、また、さまざまな植物情報の発信地として、多くの人々が関わる場として機能した。

図-4 エメラルドネックレス(1896)²³⁾

3. "Garden and Forest"の概要¹⁾

"Garden and Forest"は、サージェントとオルムステッドが共同設立者となって、1888年2月29日から週刊誌として発刊された。この2人は、アーノルド樹木園の仕事を通じて、既に親しくなっていた。また、その頃にはサージェントの甥のコッドマン(Henry Sargent Codman)がオルムステッドの事務所で働いていた。にもかかわらずオルムステッドが雑誌の責任者に加わらなかった理由としては、先ず造園設計事務所の仕事が大変忙しくなっていたことがあげられる。ビルトモアの計画が始まったのもこの年である。また、彼自身が既に60代半ばを過ぎ、限界を感じていたことも明らかだ。

そこで、刊行責任者(conductor)は一貫してサージェントが務めた。だが、実質的編集者はジャーナリストのスタイルズ(William A. Stiles)であった。各号の最初に掲載された編集者によるエッセイは彼が中心となり、時には関係者が交代で、担当していたと思われる。発刊のための資金はオルムステッドのクライアントでもある富豪たちが提供していた。

この週刊誌の構成は、編集者のエッセイ、植物の紹介、連載記事、読者からの通信、文献の紹介、ニュース的情報を盛り込んだノートなどからなっている。「庭と森林」というタイトルがついているが、ページ数の多くを占めていたのは新種などの紹介である。これはサージェントの専門の影響を考えれば当然と言えるが、むしろ編集者のエッセイや読者からの通信などに当時の環境にかかわる問題に関する情報が多く盛り込まれていることが注目になる。その中にはオルムステッドとその弟子たち、特にその一人で専門職としての造園の確立に貢献したが、若くしてなくなったエリオット(Charles Eliot)が頻繁に投稿していた。森林に関しては、ドイツからの移民で連邦政府の森林部門主任やコーネル大学の林学部長を歴任し、アメリカ・カナダの林業、林学を確立したファーノウと、その後継者とも言えるピンショー、さらには彼らの師ブランディス(Dietrich Brandis)やビルトモア森林学校のシェンク(Carl Alwin

このように黎明期の造園や林業の代表的な専門家たちを執筆者に加えて、かなり質の高い内容を維持しながら刊行されたが、丁度10年目の1897年末をもって廃刊となった。その巻末の廃刊の辞⁸⁾には以下のように記されている。

「第10巻が完結する本号をもち、“Garden and Forest”の出版は終了する。10年間、園芸と森林に関する週刊誌を刊行する試みが、商業的影響を受けず最良を目指して行なわれた。この実験は多くの時間と費用を要したが、結果としてアメリカ合州国にはこのような雑誌の出版を支えるほど、その記事に関心を持つ人々がいないことが判明した。財政的に成功せず遅かれ早かれ消え去る雑誌の刊行にこれ以上の時間と金を費やすことは無益である。」

このように商業的に失敗であったのは、内容の質の高さの代償としてかなり専門的になり、一般の読者の関心を引く記事が少なかったことがあげられる。遙か以前の1841年に出版されたダウニングの造園に関する書物“A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening Adapted to North America”が何度も版を重ねて、ベストセラーとなっていることから伺えるように、その頃にはアメリカの大衆の園芸や庭園に対する関心はかなり高まっていた。しかし、この雑誌はそのような自宅の周囲の修景のための実用的知識を求める大衆を読者として想定していなかったので、購読者が限定されたのであろう。逆に、大衆の要求に迎合しなかった故に、質の高い内容を保持することができたとも言える。

財政難に加えて、この雑誌の協力者のうち、オルムステッドの事務所の実務の中心を担っていたコッドマンが1893年に虫垂炎で死に、オルムステッド自身も1895年には引退した。その上、追い打ちをかけるように、エリオットも1897年3月に、過労が原因と思われる脳膜炎で急逝した。このように発刊の中心的人物が短期間に次々と抜けたことにより雑誌の継続は一層困難になったと推察される。それにとどめを刺したのは1897年10月6日の編集者スタイルズの死であった⁹⁾。

この雑誌の評価は発行部数等の事業的な視点よりも、アメリカの社会の中で、造園や林業が環境保全に関わる分野として位置付けられることに貢献したという点からなされるべきである。このことは知的エリートと大衆の関心の遊離を露呈する結果ともなっている。この時期は、造園に関しては、庭園職人が裕福な人々の庭を対象とする“landscape gardening”から人間と自然環境の調和を扱う専門家としての“landscape architecture”への移行の段階とも言える。一方、森林に関しては、環境の保全を目的として公有林が設定され、管理組織が整備されていく段階に重なる。このため、大衆はこの急激な変化の中で方向が掴めなかったのかもしれない。だが、この雑誌の廃刊の直後に造園や林業の専門家の協会が設立され、機関誌が発刊されているところから、“Garden and Forest”は専門への分化過程のたたき台の役割を果たしたと考えられる。

4. 雑誌への投稿者たちとその活動

この雑誌の中では植物の紹介等に加えて、当時の環境に関わるさまざまな問題がよく論じられている。例えば、ヨセミテ州立公園の私物化問題、セントラルパークの問題、アディロンダック山の保全、1893年のシカゴの世界博覧会の紹介、職業としての造園家や林業家の役割についてなどがその例としてあげられる。以下雑誌にこれらの問題を提起した人々の活動を探ってみる。

1) オルムステッド(1822-1903)

オルムステッド自身はほとんど論説を寄せていないが、彼の事務所の所員たちが時折投稿している。数少ないオルムステッドの論説の一つに、植物材料の選択に関したものが見られる。その中で、自生の植物を主体にデザインはするべきであるが、外国産のものも、周囲との調和が保てれば排除するべきでないという意見を表明している¹⁰⁾。

オルムステッドが、この雑誌に望んだことは造園家の専門職としての社会的認識であった。彼は1863年には、庭師を連想させる“landscape gardener”に対して、“landscape architect”と自称していた。しかしながら、この雑誌の中では“landscape art”や“landscape gardening”ということばのみが用いられ、“landscape architecture”は全く出てこない。ここにも社会における造園認識とオルムステッドらの目指した造園家の評価とのジレンマが読み取れる。

オルムステッドの支持者で美術史家のレンセラー夫人(Mrs. Mariana G. Van Rensselaer)が世界の庭園の連載記事¹¹⁾を掲載したことから、造園家志望の若者がオルムステッドの事務所で働くことを希望するようになった。彼はそういう若者を心から歓迎する一方、庭や花など美しさだけに興味を抱いている人間は造園家として必要ないと断言している。彼は美しさだけではなく、社会的視野を持っていることを造園家志望者に望んでいた。

亡くなった弟の息子で、義理の息子となったチャールズ(John Charles Olmsted)は、得意な構造物の施工等の技術解説記事を何度か投稿している¹²⁾。当時実子のフレデリック(Frederick Law Olmsted, Jr.)はまだ事務所での見習いの時期であった。

2) エリオット(1859-1897, 写真-2)¹³⁾¹⁴⁾

ハーバード大学の学長となった同名の父親(Charles W. Eliot)を持つエリオットは、

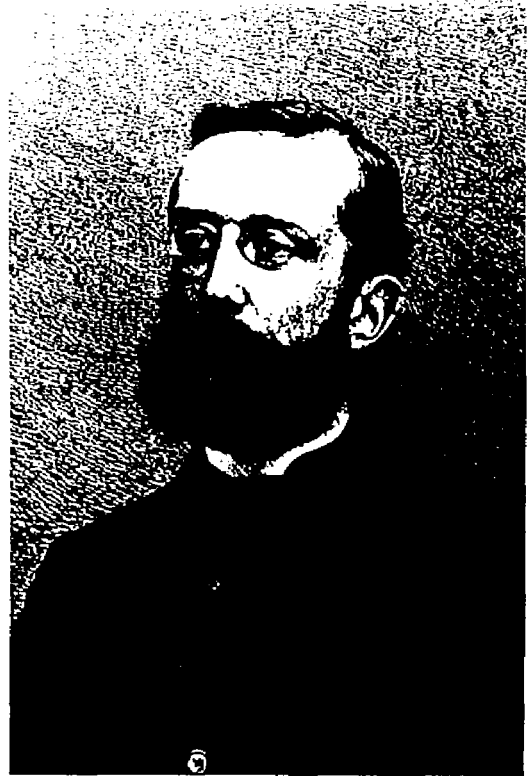
写真-2 チャールズ・エリオット³⁰⁾



図-5 ボストンの広域緑地計画(1899)²⁹⁾

サージェントと同様、ボストンの名家の出身であった。学生時代に現在のアケディア国立公園 (Acadia National Park)を訪れ、その環境を保全するために土地の購入を働きかけるほどの自然愛好家だった。1882年にハーバード大学を卒業後、数ヶ月間の園芸教育を受けてから、建築家の叔父 (Robert S. Peabody)の紹介でオルムステッドの事務所で働くことになった。ここで修業を積んでから一旦独立したが、コッドマンが急死した際には、オルムステッドの事務所の実務をも引き受けた。

エリオットの最初の大きな貢献は公園というものを地域レベルで位置付けたことであろう。すなわち、オルムステッドがボストンの中心であるボストンコモン (Boston Common)からアーノルド樹木園を経てフランクリンパーク (Franklin Park)に至るエメラルドネックレス

と呼ばれる都市の公園緑地システムを造り出したのに対して、彼は環境の保全という視点から次第に希少となってきた都市周辺の樹林を含む空間をマサチューセッツ州という一層広大な地域の中の緑地システムとして位置付けて保全をはかった(図-5)。

その実現のため、エリオットはまず "Trustees of Public Reservations" と呼ばれる公有地の管理委員会の設立に奔走した。その設立の提案が最初になされたのが "Garden and Forest" 誌上であった。¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾ 具体的には、ボストンの広大な公園用地を購入する "Metropolitan Park Commission" の設立に加えて、このニューイングランド地方の残存する天然林を人々の利用と楽しみのために無税で管理する市民の組織づくりを提案した。彼の提案が雑誌に掲載されてから15ヶ月後の1890年には、この組織が立法化されている。ここに彼の行動力の一端がうかがえる。なお、この制度が1895年のイギリスのナショナルトラストの設立に影響を及ぼしていることを忘れてはならない。さらに1892年には "Metropolitan Park Commission" が発足した。翌年に、エリオットはこの委員会に保全選定地域を含むレポートを提出している。

彼は、専門職としての造園家の社会的認識を目指した記事も何度か雑誌に書いている¹⁸⁾¹⁹⁾。このように造園というものを金持ちの道楽や個人の家の修景から社会へ概念を拡大したことに加えて、公園の中にウィルダネス的な要素、すなわち、森林をもちこんだのもエリオットであった。1897年1月に掲載された論説²⁰⁾の中で保全された森林の風致施業 (Landscape Forestry) を提案している。その中で、保全された森林といえども人間が手を加えることが必要であると述べている。そして、これが雑誌での彼の最後の論説となった。彼の活躍をオルムステッドも期待していたのにも関わらず、同年3月25日にエリオットは37歳でこの世を去った。

彼の父親は、同様に建築家志望の息子を失った大富豪ロビンソン (Nelson Robinson) の寄付によって、1900年にハーバード大学に建築と造園のデザイン学部を設立した。このアメリカで初めての造園教育カリキュラムの作成には、オルムステッドの息子 (Frederick Law Olmsted, Jr.) が当たった。

3) ファーノウ (1851-1923)²¹⁾²²⁾²³⁾

ファーノウは1851年1月7日にプロシアに生まれた。その森林アカデミーを卒業後、プロシアの森林局で経験を積んでから、1876年にアメリカに移住した。しばらく企業の森林経営に参画してから、1882年からのアメリカ林業会議 (American Forestry Congress) を組織する際に手腕を発揮した。その間、1885年のアディロンダックの森林の保全にサージェントやオルムステッドとともに貢献した。1886年には連邦政府に設けられた林業部門の主任 (Chief of Division of Forestry) として採用され、アメリカの林業運動の中心的役割を果たし、

1891年の保護林の制定に関してはその法案の起草までこなし、また、オルムステッドも関わった1893年のシカゴの世界博覧会では林業館の展示に精力的に取り組み、林業への支持を求めた。1898年にはビンショールを後継者として主任の職を辞してから、コーネル大学でアメリカで最初の大学レベルでの4年制の林業教育を開始した。

彼は林業、林学に関して約250編の論文と2冊の本を残し、林業専門誌の発刊にも関わっている。“Garden and Forest”誌にも頻繁に投稿し、森林の施業法、樹木の取り扱い方、森林法、ドイツ林業の紹介など多岐な分野にわたって解説している。彼は森林の更新と保続生産をアメリカで最初にとえ、林業は経済的に現実的であるとした。また、今日の都市林に相当するものの取り扱いを述べた“The Care of Trees in Lawn, Street and Park”という本を1910年に著している。さらに、林産研究の必要性をも訴え1909年にウィスコンシン大学キャンパス内の森林局森林生産物研究所 (Forest Products Laboratory) の設立にも貢献した。1923年2月6日にこの世を去るまで、森林を総合的に捉え、出版、政策、教育、研究を媒介として森林の保全思想を普及させることに貢献した。

4) ビンショール(1865-1946)²⁴⁾とシェンク(1868-1955, 写真-3)²⁵⁾

ファーノウの跡を受け継ぎアメリカの国有林の保全に大きな影響を与えたビンショールがヨーロッパ滞在中に書いた林業に関する初めての論文が掲載されたのが“Garden and Forest”誌であった。その後、彼は10回ほど投稿している。これらの論文が縁になったと思われるが、彼はサージェントが委員長を任命された前述した森林委員会の最年少の委員に選ばれている。このことが関係してか、彼はこの雑誌を高く評価し、当時としては林業に関しての一番のものであったと述べている。

シェンクもファーノウと同様プロシア生まれで、ビルトモアの森林の管理をビンショールから引き継いだだけではなく、アメリカ初の林業学校を組織し、林業の専門家を育成した。彼のアメリカで初めての論文“Private Forestry and State Forestry”が4回に渡って掲載されたのもこの雑誌であった。しかし、彼がこれらの論文を投稿したのは“Garden and Forest”が廃刊される年であった。



写真-3 カール・シェンク(1951)

5) スタイルズ(1837-1897)

教育者などを経て、ジャーナリストになった彼は林業や造園の専門家ではないが、その社会的重要性を誰よりも痛感していた。彼は署名入りの記事は全く残してはいないものの、この雑誌の編集者として毎週のように論説を担当していただけではなく、実質的にこの雑誌のすべてを取りしきっていた。週刊誌としてこれほど質の高い出版を10年間にわたって推進した編集者としての能力もさることながら、これを媒介として社会改革を進めようとした姿勢が重要である。彼がこの雑誌を通じて訴えたかったのは、個々の植物や庭の紹介ではなく、環境の保全とその社会的認識であったことが感じられる。植物等の専門家ではなかったからこそ、分野にとられない視点で将来を展望し、世論に訴えることができたのであろう。

具体的にはニューヨーク州のナイアガラの滝やアディロンダック山の環境問題、ヨセミテやイエローストーン国立公園の管理の問題をとりあげた。さらに、セントラルパークへの建築物侵入阻止と、そこでの博覧会開催中止運動を展開し、オルムステッドのデザインを擁護した。サージェントの関心が植物に限られ、植物の解説記事だけを執筆していたのに対して、彼はオルムステッドと同様、造園を社会改革のため生かそうとしていた。このように彼がこの雑誌の刊行の中心人物であったがゆえに、1897年10月6日の彼の死とともに、雑誌も廃刊になった。そして、彼の名前が"Garden and Forest"誌上に登場したのは、彼の哀悼記事が最初で最後となった。

5. "Garden and Forest"の役割とその意義²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾

初めに、同時代の森林関係の雑誌の発行を辿ってみよう。1882年にアメリカ林業会議が開催されるようになり、その議事録の出版が"Garden and Forest"の発刊前年まで続いた。さらに、1895年に図版を持つ唯一の全国規模の林業誌として"The Forester"が発刊された。この雑誌は4回も名前を変更し、1931年に今日まで続くAFA(American Forestry Association)の機関誌"American Forests"となった。さらに"Garden and Forest"の廃刊後の1902年には、ファーノウと彼が教えていたコーネル大学の同窓生によって"The Forestry Quarterly"が発刊され、これも1918年に改名され今日のSAF(Society of American Foresters)の機関誌"Journal of Forestry"となっている。

アウトドア関係の関連雑誌の刊行を調べてみると、一番古いものは1873年にグリーンネル(George Bird Grinnel)が中心となって発刊した"Forest and Stream"があげられる。これは狩猟や溪流釣を楽しむスポーツマンのための雑誌であるが、その記事には水源涵養など森林の保全に関するものが多い。1903年には今日の"Field and Stream"に吸収されている。さらに1887年には"Audubon Magazine"が発刊されている。1888年には廃刊と

なるが、今日の“Audubon”に受け継がれていると考えられる。さらに、1889年には“Outdoor Life”、1893年には登山を中心とした“Sierra Club Bulletin”が発刊されている。

このように“Garden and Forest”と相前後して森林や環境問題を扱ったさまざまな雑誌が発刊されている。しかし、その中でも“Garden and Forest”は極めて質が高く、その内容が多岐に渡っていることが特色と言える。これはその協力者の中に当時のオビニオンリーダーとして社会的影響力が大きな人々が含まれていたからであろう。

さらに注目すべきことは2つの専門家の組織がその廃刊の直後に結成されている点である。まず、造園家の組織作りはオルムステッドの弟子の一人であるマニング(Warren H. Manning)が1896年冬からエリオットの協力を得て進めた。1897年の夏にはまず“American Park and Outdoor Association”が結成された。しかし、その頃にはエリオットは他界していた。さらに、1899年1月4日に11人を発起人とするASLA(American Society of Landscape Architects)が結成され、オルムステッドが引退してから事務所を引き継いだチャールズ(John Charles Olmsted)が初代会長となった。残念ながら会誌の発行は1910年まで待たねばならなかった。

一方、SAFは1900年11月30日にピンショーが中心となって結成された。その機関誌的なものとしては、ファーノウがコーネル大学時代に学生の協力によって1902年に発刊した“Forestry Quarterly”がその役割を果たすようになった。なお、SAFが専門家を中心とする組織であるのに対して、1875年に結成されたAFAは一般の人々も含んだ組織である。

6. 考察

雑誌“Garden and Forest”はアメリカの環境認識およびその反映としての政策が大きく変化した時代に10年間に渡って刊行され、質の高い情報を提供した。この雑誌は購読者が限定されていた可能性があるが、彼らは雑誌から発信された情報を社会に反映できる立場の人達であった。また、この雑誌が読者の投稿を歓迎し、その意見がすぐに印刷される週刊であったため、環境保全の推進者たちがこの中で議論を戦わせたり、自らの考えを発展させていくことが可能になった。その過程で造園は単なる個別的な庭や公園を造る技術から、自然環境と人間社会の調和を目指す地域レベルの視点を形成していった。一方、林業も木材を取奪するという技術から、育林や環境保全へと展開していった。1897年に関係者の死が続いたことによって廃刊されたのは残念だが、その危機感がその後の組織作りや、造園教育の開始に影響をおよぼしたと思われる。

環境保全の分野に対する当時の人々の支持を得ることは困難であったことが想像されるが、今日のように園芸、林業、造園というような専門の分化が進んでいなかったのもむしろ専門の

違いにこだわらない広い視野に立った協力体制が作りやすかったとも言える。サージェントが造園家から樹木学者になり、オルムステッドも科学的農業から造園を確立したことからわかるように、お互いに相手がやっていることを容易に理解できる立場にあった。さらに、誌上で頻繁に掲載記事に対する反対意見が表明されていることから、分野の縄張り意識にとらわれずに健全な議論を促し、環境保全運動の発展に貢献した。この点、あまりにも細分化された今日の日本の森林や公園行政、教育などの縦割り構造の弊害と照らし合せると考えさせられる点が多い。

文献

- 1) 伊藤太一(1989): アメリカ合州国における林業と環境保全運動(1)、京大演報, 61, 236-246
- 2) Davis, Richard C., ed.(1983): Encyclopedia of American Forest and Conservation History. Macmillan Publishing Company, New York, p.589
- 3) Graham, Frank, Jr.(1978): The Adirondack Park, Syracuse University Press
- 4) Thompson, Roger C.(1963): Politics in the Wilderness, New York's Adirondack Forest Preserve, Forest History, 6(4):14-23
- 5) ホイットル, T.(1983): プラントハンター物語, 八坂書房, 東京, p.153
- 6) Zaizevsky, Cynthia(1982): Frederick Law Olmsted and the Boston Park System, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA, pp.58-64
- 7) Roper, Laura Wood(1973): FLO, A Bibliography of Frederick Law Olmsted, The Johns Hopkins University Press Baltimore. pp.404-405
- 8) Garden and Forest Publishing Co.(1897): Garden and Forest, 10, p.514
- 9) Ed.(1897): William A. Stiles, Garden and Forest, 10, pp.399-400
- 10) Olmsted, F.L.(1888): Foreign Plants and American Scenery, Garden and Forest, 1, pp.418-419
- 11) Rensselaer, Mrs. Mariana G. Van(1889-) : The Art of Gardening-An Historical Sketch 1, Garden and Forest, 2, pp134-135(19回まで続く)

- 12) Olmsted, J.C.(1888): The Treatment of Slopes and Banks, Garden and Forest, 1, p.326
- 13) Newton, Norman T.(1971): Design on the Land, the Development of Landscape Architecture, The Belknap Press of Harvard Press, Cambridge, pp.318-336
- 14) Huth, Hans(1957): Nature and American, Three Century of Changing Attitudes University of Nebraska Press, Lincoln. p.119
- 15) Eliot, C.(1890): The Waverly Oaks, Garden and Forest, 3, p.85
- 16) Eliot, C.(1890): How to Save the Waverly Oaks, Garden and Forest, 3, pp.109-110
- 17) Eliot, C.(1890): The Waverly Oaks, Garden and Forest, 3, p.117
- 18) Eliot, C.(1889): When to Employ the Landscape Gardener, Garden and Forest, 2, p.71
- 19) Eliot, C.(1889): The Landscape Gardener, Garden and Forest, 2, p.74
- 20) Eliot, C.(1897): Trees in Public Parks, Garden and Forest, 10, p.37
- 21) Twight, Ben W.(1990): Bernhard Fernow and Prussian Forestry in America, Journal of Forestry, 88(2):21-26
- 22) Journal of Forestry(1923), 21(4), pp.305-348(Fernow追悼号)
- 23) Davis, ibid., pp.168-169.
- 24) Pinchot, Gifford(1987): Breaking New Ground. Island Press, Washington, D.C.(Originally Published in 1947)
- 25) Schenk, Carl Alwin(1955): Birth of Forestry in America, Forest History Society
- 26) Williams, Michael(1989): Americans & Their Forests, Cambridge University Press, Cambridge, MA
- 27) Reiger, John F.(1986): American Sportsmen and the Origins of Conservation, Revised Edition. University of Oklahoma Press, Norman. pp.73-79
- 28) Davis, ibid., pp.192-193, pp.283-284
- 29) Fabos, Julius Gy et al.(1968): Frederick Law Olmsted, Sr., The

University of Massachusetts Press

30) Eliot, Charles William(1902): Charles Eliot, Landscape Architect, Houghton Mifflin, MA

第9章 理想と現実：イエローストーン地域における大火災の影響と意義

摘要：1988年夏にアメリカのイエローストーン地域で発生し約97万haに及んだ大火災は多方面からさまざまな議論を呼んだ。この火災の過程を検証するとともに、2年を経た時点でのその意義や影響を展望した。その結果、国立公園や国有林に課せられた自然環境の保全と人間による利用という相反する目的を果たすことのジレンマと、概念としての「生態系」を境界で囲まれた空間として保全することの問題が明らかになった。とりわけ人間活動の位置付けの難しさが浮き彫りにされた。

1. はじめに

1988年の夏に3ヶ月以上にわたって燃え続けたイエローストーン地域 (Greater Yellowstone Area) の大火災は日本でも報道されるほど注目を浴びた。以来、その焼け跡には植生が侵入するとともに、その影響と公園の在り方に関してさまざまな文献が発表されている。筆者はイエローストーン地域を1978年以来、火災の最中および直後を含め、計6回訪れている。また、1988年は、国立公園研究のため滞米中であったため、日々のニュースからこの火災に対するアメリカの社会の反応にも身近に接することができた。

最初の訪問以来の変化として訪問者の増大が印象に残った半面、国立公園の管理が人間を中心とする保全から自然環境を中心とする保全に移行したことは、火災の発生までほとんど認識されなかった。しかし、公園の目的が自然環境の保全中心になっても、人間の利用を前提して存立している限り、常に人間の影響を考慮しなければならない。すなわち、どこまで人間の影響を許容し、どこからは排除するか境界が意見の別れるところである。

1988年の夏の火災はその最中から多くの論争を引き起こし、その最終的な影響評価には100年以上を要するだろうが、現在の考え方を位置付けてみた。本論では、新聞から一般誌、専門誌までを含む文献に示された多様な視点から、この火災の自然環境と人間への影響を捉えようとした。その議論は消火活動の是非だけではなく、生態系としての認識の妥当性、政策問題、管理問題、マスメディア、教育、行政機構、予算など多岐にわたり、学ぶべきことは多い。

2. アメリカにおける森林火災¹⁾

北米では近年でも森林火災は猛威をふるい1982年からの4年間の年平均焼失面積合計は1,460,000haに達している²⁾。また、都市化により森林と接した郊外の住宅地が増加し、森林火災によって延焼する住宅も増加している³⁾。たとえば、1985年にはアメリカで1400軒の家が焼失し、44人の命が失われている⁴⁾。

火災の原因には落雷、火山活動などの自然の要因に基づくものと、焚き火など人間が関与したものがある。日本では自然発火による森林火災の発生は稀であるが、北米では夏に乾燥する地域が広く、かなりの頻度で発生している。その原因の多くは落雷である。とりわけ、雨を必

ずしも伴わない雷嵐(thunderstorm)がよく発生する。1976年度の統計によると比較的奥地に位置する連邦政府の管理下にある森林における火災の過半数が落雷によるもので、焚き火などの他の要因を大きく上回っている⁵⁾。

森林火災への対応としては、徹底的消火と全く放任という両極端な方法に加えて、管理することによって役立てるという対応もある。そのような見地から管理されている国有林や国立公園の森林火災管理規定について説明する。それによると森林火災は対応の違いから、非管理火災(wild fire)と管理火災(prescribed fire)の2種類に分けられる。森林火災として一般にイメージされるのが非管理火災であり、望まれないものであるので、即消火あるいは抑制活動の対象となる。一方、管理火災ということばは、日本でなじみが薄いだけでなく、アメリカの報道関係者もその管理規定上での定義を正確に把握していなかったので、イエローストーンの火災に関する報道が不正確となり、人々に誤解を生じさせた。

管理火災には自然のもの(prescribed natural fire)と人為的なもの(man-ignited fire)の2種類ある。自然の場合は落雷等が主たる原因であるのに対して、人為的な場合は、焚き火などの失火ではなく、管理者が管理指針に規定された対象地域でその環境管理を行うことを目的として着火したものである。主体が管理者であることと、森林環境管理が目的である点で、放火魔の活動とは明確に区別される。また管理火災においては、自然発火にせよ人為発火にせよ、発生した時点からその動向が観察され、もし管理基準を越えることになれば、非管理火災と認識され、消火・抑制の対象となる。

3. イエローストーン地域の概況⁶⁾⁷⁾

イエローストーン地域はロッキー山脈に位置し、ワイオミング州の北西部からモンタナ、アイダホ州にまたがっている。イエローストーン地域は図-1(1: Grand Teton National Park, 1: Gattalin National Forest, 2: Custer N.F., 3: Beaverhead N.F., 4: Shoshone N.F., 5: Targhee



写真-1 イエローストーンの大渓谷(1988.8, Grand Canyon of Yellowstone)

N.F., 6: Bridger-Teton N.F., A: Red Rocks Lake National Wildlife Refuges, B: Elk N.W.R.)のように国立公園局の管理するイエローストーンとグランドテトンの2つの国立公園とそれらをつなぐロックフェラー記念パークウェイからなる地域と、それら

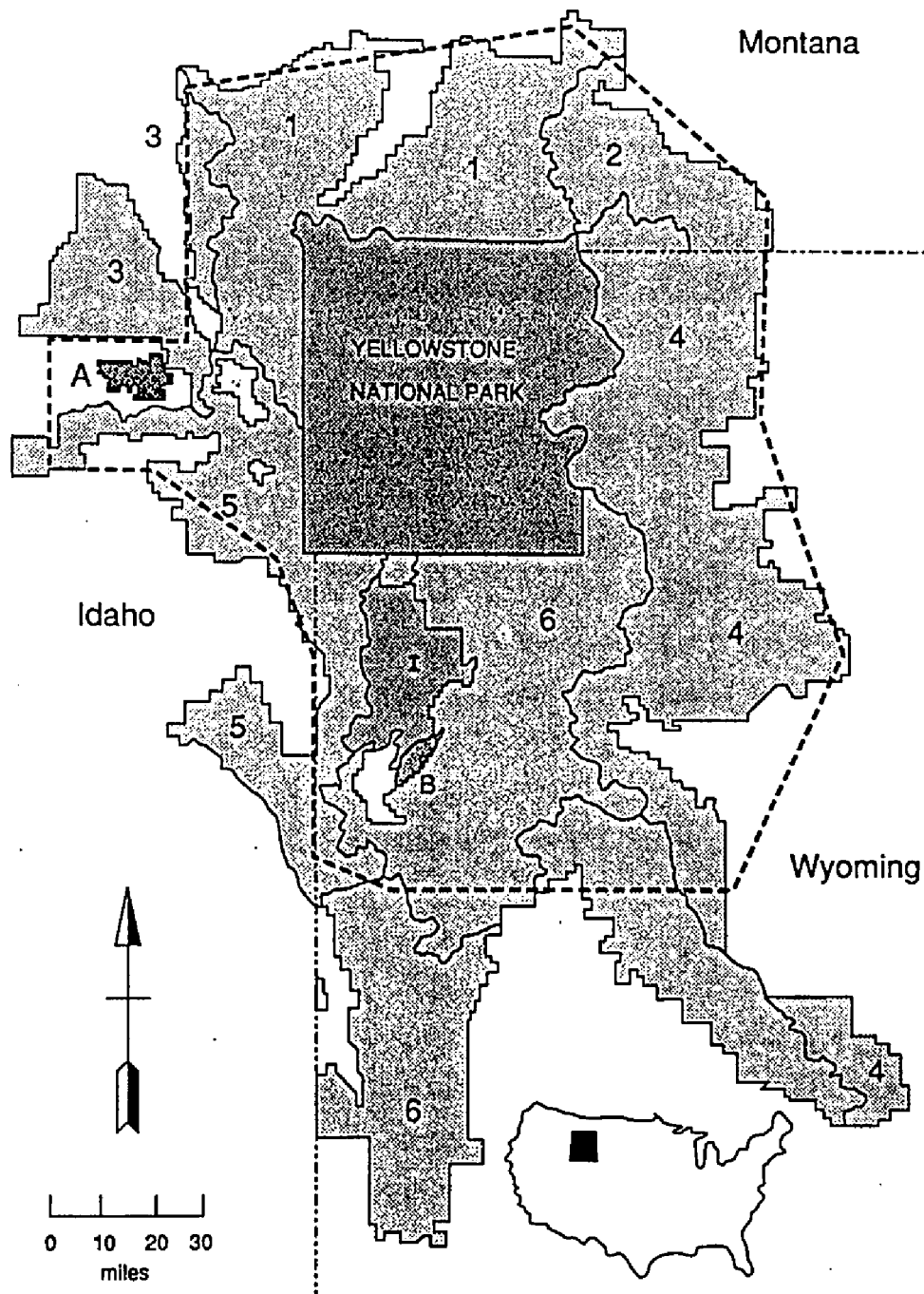


図-1 イエローストーン地域 (Greater Yellowstone Area)

を取り囲む森林局の管理する6つの国有林からなっている。また、2つの野生動物保護区もそれらに含まれている。

このイエローストーン地域は総面積約4,375,000haに及び、6つの国有林の合計面積の53%が木材生産活動から除外されたウィルダネス(wilderness)あるいはそれと同等の取り扱いを受け、2つの国立公園の90%がウィルダネスに相当する自然ゾーン(natural zone)の指定を受けている。これらの地域では自然の過程の保全が重視され、人間の影響は極力排除される。1988年の大イエローストーン火災(Great Yellowstone Fire)では、これらの国有林などの地域も含まれている。

この中心をしめるイエローストーン国立公園は、10,000を越える活発な間欠泉と雄大な溪谷と湖で代表され(写真-1)、その特異な景観が世に知られた結果、1872年3月1日に世界最初の国立公園として設立された。さらに、1976年にはユネスコの生物圏保全地域(biosphere reserve)に、1978年には世界遺産地区(world heritage site)に指定され、その自然環境の特色が世界的に認識されている。この公園の総面積は898,337haで、中心部は標高2,300-2,800mのイエローストーン高原(Yellowstone Plateau)によってしめられる。かつてのカルデラでもあったこの高原を挟み、北西部には3,000mを越えるガラティン山脈(Gallatin Range)の山々が並び、南東部には、最高地点のイーグル山(Eagle Peak, 3,462m)を含むアブサロカ山脈(Absaroka Range)の山々が連なっている。

この標高からも推察されるように冬は長く、厳しい。2月には高原部においても最低気温が-53°Cにも及ぶ一方、7月には35°Cに達する⁸⁾。また、日較差も同様に大きく7月でも零下になる日もある。年降水量は約400mmで、内陸部の特色として、夏期には高温低湿となり、7月には平均して14回の雷をともなった嵐が発生する。そのため、火災が頻発し、この地域の生態系の一部を構成している。

植生は単純で、公園面積の約60%、森林面積の約80%はロッジボールパイン(*Pinus contorta*)で覆われている。このマツは標高2,300-2,560mの流紋岩地域に生息し、その生活史において、落雷による自然発火の火災が大きな影響を及ぼしてきたことが知られている。ダグラスファー(*Pseudotsugamenziesii*)は北部の標高1,800-2300mの地域に見られる。同じ地域の標高1,500-2,300mの地帯にはヨモギ(*Artemisia tridentata*)の草地も広がり、エルクなどの偶蹄類の冬期の食料源となっている。一方、標高2,560-3,000mの山岳地域ではエンゲルマンズブルース(*Picea engelmannii*)や亜高山性のモミ(*Abies lasiocarpa*)やホワイトバークパイン(*Pinus albicaulis*)が優占する。火災などによる攪乱直後の地区や林縁、湿地にはヤマナラシ(*Populus tremloides*)が見られる。これ

らに代表される植生の分布は5,000年前から比較的安定しているといわれる。

大型の哺乳類としては35,000頭以上のエルク(*Cervus elaphus*)と2,700頭程度のバイソン(*Bison bison*)を始めとして灰色熊(*Ursus arctos*)、ムース(*Alces americana*)などが生息する。

なお、園内にはマンモス(Mammoth)、オールドフェイスフル(Old Faithful)、レークビレッジ(Lake Village)、キャニオンビレッジ(Canyon Village)、グラントビレッジ(Grant Village)などの集団施設地区がある。これらを起点として毎年、夏期のシーズンに250万人を越える人々が訪れている。

4. イエローストーン地域の火災への対応の変遷

1) 白人の移民以前

アメリカ大陸では火災はその自然の一部であった¹⁾。イエローストーン地域でも氷河が退いた12,000年前からこの自然を動かしてきたと考えられる。また、300-400年周期で今回と同規模程度の火災が発生している。この地域での前回の大火災は1700年代に発生している。

1872年に国立公園として設立される以前から、約7,000年にわたってインディアンがこの地域を訪れ、火入れを行っていた。彼らは火入れによって狩猟の対象であるエルクやバイソンなどの好む草地が形成されることを知っていたからである。また、集落の周辺では、敵が隠れる場所をなくすためにも火入れを行なった。このように19世紀前半に毛皮を求めて白人がこの地を訪れた頃の自然環境は既に人間の手の加わったものであった。1870年に今日の公園地域を訪れたウォッシュバーン(Washburn)探検隊も、インディアンによる火入れについて報告している。

2) 国立公園における取り扱い⁹⁾

公園設立後しばらくは管理主体不在のままで密猟などが放置されていたが、密猟者やキャンパーによる火災がすでに発生していた¹⁰⁾。1886年には公園の管理のため騎兵隊が駐屯するようになった。当然ながら、彼らは火災は悪であるという信念を持っていたので、それ以降観光資源としての景観と施設の保持および利用者の安全のため、発見された火災はすべて抑制の対象とされた。その消火活動の記録は1889年から始まっているが、当時の管理者の数や装備を考慮すれば、その活動の影響は少ないと考えられる。1912年には公園の境界付近での消火活動について農務、内務、陸軍の3省間でとりきめが結ばれている。1916年に公園局が内務省に設立されたのを受けて1918年に軍隊はイエローストーンを去ったが、21名がレンジャーとして残留し同様な管理が引き継がれた。1926年にはモンタナ州のグレイシア(Glacier)国立公園で大火災が発生したことに対応して、国立公園局に林業部門(Forestry Division)が設立

されている¹¹⁾。1931年には火のみやぐらが設置され、1939年には消火に初めて航空機が用いられた。年間訪問者が500,000人を越えた翌1940年には、消火訓練も催されている。

本格的な森林火災の消火活動が始まったのは、航空機の導入された第二次大戦後である。1946年には消防車も導入され、1951年に専任の消防士が配属された。1958年にはヘリコプターも利用された。さらに、1960年には化学的消火剤が用いられるようになった。

一方、早くも1894年に、ヨセミテ(Yosemite)国立公園の管理に携わっていたゲール大尉(Captain G. H. G. Gale)は、その地域での火災の必要性を述べ、消火は全く破壊的な結果を生じると内務長官に報告していた¹²⁾。しかし、それが広く認識されるのは20世紀になりクレメンツ(Clements)らによる植物遷移に関する研究が進んでからであった。とりわけ、1960年代から自然環境の保全運動が活発になり、1964年のウィルダネス法をはじめとするさまざまな環境関係法案が成立した。

国立公園に関係するものとしては1963年にレオボードレポート¹³⁾と呼ばれる公園の自然環境管理方針に大きな影響を及ぼした報告書が重要である。この報告書はそのタイトルが示すように主として野生動物の管理について論じているが、その生息環境の管理手段として火災が必要であることにも言及している。すなわち、野生動物の管理とともに、植生も人間が管理することによって、白人が植民する以前の、より「自然な」環境を再生することを提案している。

そこで先ず、フロリダ州のエバーグレイズ(Everglades)国立公園とカリフォルニア州のセコイア(Sequoia)国立公園で火災への対応が変化した。エバーグレイズの亜熱帯湿原地域に自生するスラッシュパイン(Pinus elliotii)の森林は乾期の火災によってその生育環境が維持されてきたことが知られ、すでに1958年から管理火災の実験が始められていた。また、セコイアでは、世界最大の巨木であるジャイアントセコイア林は下層植生が頻繁に焼き払われるので成立したことが明らかになっていた。これらの地域ではレクリエーション利用や気候などを考慮して、予め準備を整えてから所定の地域を人間が着火して焼き払うという手法での管理火災が実行されることになった。

国立公園局はこれらの公園での成果を踏まえて、1968年にレオボードレポートに従った政策を採用し、火災の取り扱い指針を変更した。イエローストーンでは翌1969年に抑制、緩衝、自然の3つのゾーンからなる火災管理地域が提案され、正式には1972年から、火災を発見したら直ちに消火するという従来の方針を改め、条件を満たすものは自然による制御に委ねる方式を採用した。その時点でイエローストーンを含めて12の国立公園が落雷による火災で条件を満たすものを管理火災として受け入れるようになっていた。

これらの地域で管理火災を導入した理由は大きく3つある。第一に、この地域の植生遷移には火災が不可欠であること。第二には、利用の点からも、燃えやすい落葉落枝の堆積による危険な大火が防げるとともに、動植物の多様性が維持できるということがあげられる。第三に、

火災が安価な自然環境管理手法であるという点も無視できない。しかし、イエローストーンでは上記の2つの公園とは異なり、処方された焼き払いではなく、自然発火による火災を利用する方式が採られた。すなわち、落雷によって発生した火災は、所定の条件を満たせば自然に鎮火するのに任せることになった。この方針に関する反論は後述する。

許容条件としては、自然ゾーンと指定された地域であること、その火災が利用者や施設などに影響を与えないものであること、希少な動植物の自生地などの特殊な自然環境ではないこと、国有林などの隣接地域に影響を与えないことなどが規定されていた。イエローストーンでも管理者が着火することは許可されていたが、気候条件が合わないとして実行されなかった¹⁴⁾。

この方式は「自然管理(natural control)」、「管理自然火災(prescribed natural fire)」などと呼ばれているが、簡略化して「燃えるに任せる(let-burn)」方式と呼ばれたために誤解が生じた。自然に任せると称しても、火災の発生が関知された時点からその火災の動向を見張り続け、もし広がったりする兆候が表われたら即座に抑制、消火活動に入るというものであり、決して自然発火の火災を放置するものではなかった。

3) 国有林¹⁵⁾

アメリカにおける国有林制度は1891年にイエローストーン国立公園を取り巻く地域が保護林に指定されたことに始まり、1905年に森林局が創立され管理に当たっている。その当初から火災の防止と消火は重要な業務とされた。1910年にはモンタナ州とアイダホ州にまたがる大火で約1,315,000haが焼失し、100名以上の命が失われた。だが、これを教訓として森林火災への対応が急速に進展した。また、啓発活動も防火と平行して推進された。とりわけ、1945年に導入されたスモーキーベア(Smokey Bear、図-2)のキャラクターは、ミッキーマウスやドナルドダックと並ぶ人気を博し、森林火災防止キャンペーンに貢献するとともに国有林のマスコットになった⁵⁾。

一方、林業との関係から火災の利用研究が進み、1940年代から南西部では造林の手法として管理火災が用いられるようになった。また、1964年のウィルダネス法の成立によって国有林を中心としてウィルダネスが設定された。そこでは木材生産が除外されるだけでなく、自然のプロセスに任せると言うことで火災の役割が認識されるようになった。1971年から国有林においても条件を満たす落雷による火災を管理火災と見なすようになった。だが、国有林ウィルダネスでの管理火災の規定は国立公園のそれより



Handbook

図-2 国有林防火のマスコット、スモーキー(Smokey's Fire Prevention Handbookより)

も一層厳密である。すなわち、湿度、風、天候などの気象条件や地形、植生などの状態を加味して火災を抑制するかどうかを決定し、焼失面積が1000エーカー(405ha)を越えるか、所定の湿度基準を下回ると消火・抑制の対象となった。この面積は国立公園の基準よりもはるかに小面積である。なお国有林と国立公園の境界での火災の取り扱いに関する相互の合意が形成されていた。

5. 自然環境への影響に関する調査

イエローストーンの火災を含む自然環境については公園専属の研究者及びモンタナ州やワイオミング州を中心とする近隣の大学の研究者らによって詳細に調べられている。現在も1シーズンに約200件の研究が推進されていると園長は報告している。

ヒューストン(Houston)は園内に81,000haの研究地域を設定し、400年間の火災の歴史を、その頻度と規模から調べ、火災と植生遷移の関係を推定し¹⁶⁾。また、彼は公園の自然環境を維持するためには、人間の非消費的利用(nonconsumptive use)が必要であると述べている¹⁷⁾。また、ロム(Romme)は過去350年間の火災の歴史を水源地域で調べ、植生や動物の多様性と火災の関係を示した。また、300-400年の周期で大火が起こっていることも明らかにした¹⁸⁾。前回は1700年代であったので、景観の多様性は1800年代が最も高くなり、その後減少しているが、公園設立後の人間による火災抑制の影響は大きくないと述べた。ただ、北部のヤマナラシとヨモギの群落が火災抑制の影響を受けていると指摘している。100年前の同じ場所の写真を比較した結果、近年はボブラが減少するとともに、針葉樹が増加・密生していること、ヨモギの草原では草本が減少し灌木が増加していること、さらに、流域のヤナギ類(*Salix* spp.)やハンノキ(*Alder* spp.)が減少していることを報告し、これらの変化はエルクの増加によるものだとする意見もあることを付記している。また、植生に示される景観の多様性は野生動物や魚類にも影響を与えていることを同じ地域の調査から明らかにした¹⁹⁾。

1972年からの管理火災の実施以降に、公園によって作成された火災管理の説明資料では研究の結果からその火災管理手法の正当性を説明している。²⁰⁾²¹⁾²²⁾

6. 1988年の火災の経過(表-1)²³⁾²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾

1980年代になってからロッキー山脈地域では年降水量が少なく旱魃の状態であったが、夏期の降雨量はそれまでの平均の2倍に及んでいた。1988年も冬期の積雪は少なかったものの、火災のモニタリングが始まった4月の月間降水量は平均155%、5月は181%に達していた。ところが、6月になると突然20%に低下し、9月に至るまでほとんど降雨が記録されず、公園開設以来の記録的旱魃となった。樹幹の湿度は6%を記録するまでに下がった。落葉落枝が林床を覆い、病虫害に侵され、ただでさえ燃えやすい状態の老齢林に、異常な乾燥と強風だけの雷が加わり、

表-1 イエローストーン大火の経過

1988年	できごと
4月	火災モニタリング開始、4-5月の降水量は平年の186%
5.24	Lamar Valleyで火災発生
6.15	園内12箇所で火災インデックスの計測開始
6.23	Shoshone火災が始まる
7.03	Storm Creek火災発生
7.04	落雷により3つの火災発生
7.09	Mist火災発生
7.10	Pelican and Cone火災始まる(湿度16-22%)
7.11	Clover火災およびRaven and Clove 火災始まる
7.12	Targhee国有林一般地域で火災発生、消火活動不成功 Falls火災発生
7.15	新たな火災の全ての消火と現在の火災の抑制宣言(湿度12%) 火災面積合計3,500ha
7.18	火災面積合計4,900ha(湿度9-16%)
7.21	消火剤の利用決断、効果なし 全火災の消火を決定 火災面積合計6,800ha
7.22	訪問者への影響が始める Grant Villageのキャンプ場閉鎖、避難の決定 Grant Village保護のためブルドーザーの導入許可 Shoshone火災が1日で400haを焼失 Targhee国有林の火災をNorth Fork火災命名
7.23	Grant Villageから500人避難 ブルドーザーの防火線を火事が通過
7.27	ホーデル内務長官が火災視察、公園政策支持 Shoshone火災で1,800ha焼失
7.31	火災面積合計76,000ha West Thumb地区閉鎖
8.09	火災面積合計80,500ha
8.11	North Fork火災がFirehole川を越える
8.15	Hellroaring火災がGallatin国有林で発生 火災面積合計100,000ha
8.20	100km離れたBillings市に降灰 暗黒の土曜日、1日で64,000ha焼失 Storm Creek火災で9,500ha焼失 1日の焼失面積が過去16年間の5倍に達する Old Faithfulが唯一の開園地区となる Hack火災発生、2時間で4,000acre焼失 Hellroaring火災が3,200haから8,900haに拡大(風速約27m/sec) Clover-Mist火災が4時間で22.4km広がり、1日で60,000haを焼失 Grant Village、2度目の避難
8.22	軍が到着 North Fork火災が大渓谷を越える Lake Hotel閉鎖
9.06	Old Faithful Innの700人の宿泊客避難 消火活動に9,600人が投入される モンタナ州知事が野外レクリエーション禁止を指示
9.08	ホーデル内務長官火災政策を非難
9.10	公園が完璧に閉鎖された唯一の日
9.11	火災発生以来初めての降雨
9.12	雷に変わり火災が弱まる
9.13	レーガン大統領が自然火災の取り扱い方針変更を示唆
9.14	ホーデル内務長官が植林と動物への給餌を約束
9.17	火災が峠を越えたことを宣言
10.01	園内で火災の影響を受けた面積20%、樹冠火10%、全焼1%の報告

表-2 主要な8火災の概要

名称	発生日	面積(ha)	出火原因	出火地域	対応
Clover-Mist	7.09/7.11	166957	落雷	公園	当初は管理火災
Fan	6.25	9439	落雷	公園	当初は管理火災
Hellroaring	8.15	33949	人間	国有林	当初から消火対象
Huck/Mink Complex	8.2	91259	人間	国有林	当初から消火対象
North Fork	7.22	161918	人間	国有林	当初から消火対象
Snake River Complex	6.01	90652	落雷	公園/国有林	当初は管理火災
Storm Creek	7.03	43645	落雷	国有林	当初は管理火災
Wolf Lake	不明	43488	不明	公園	不明

次々と発生した火災が猛威をふるった。この夏はアメリカ全土においても記録的な早魃となり、農作物に大きな被害をもたらしている。また、イエローストーン以外の西部の森林地帯の各地でも火災が発生した。さらには、アラスカではイエローストーン地域を上回る大火が発生している。

表-2に示したようにイエローストーン大火は8つの大火災から成るが、小火災も加えると発生総数は52に達する。

これらの多くは落雷が原因であるが、世界最大の丸太建造物のオールドフェイスフルインを脅かしたノースフォーク(North Fork)火災は、公園に接する国有林におけるチェーンソーの火花が原因となっている。このようにイエローストーン大火という名であるが、国有林で発生して最初から消火の対象であった火災の割合が高い。

筆者が公園を訪れた8月16日には、時刻によって園内の交通が規制されていた。通行可能な道路であっても、その両側はまだ燃っているような状態であった。安全のため、そのような地区での停車は禁止されていた。ビジターセンターには日々の火災状況が掲示されていたが、配付はしていなかった(写真-2)。また、広域にわたって拡散したスモッグが覆い、視程が減少するとともに、目が充血したり、鼻やのどが炎症を引き起こすほどであった。煙は直線距離にして700km程度離れているコロラド州のデンバーまで拡散したようだ。

9月初めに公園に隣接するクックシティ(CookeCity)を危険に晒した火災は、クローバーミスト(Clover-Mist)火災が町を襲うのを防止するために、消防隊が予め迎え火(back fire)を放ったところ、風向きが変わりその迎え火が町に向かったものであった。9月11日に

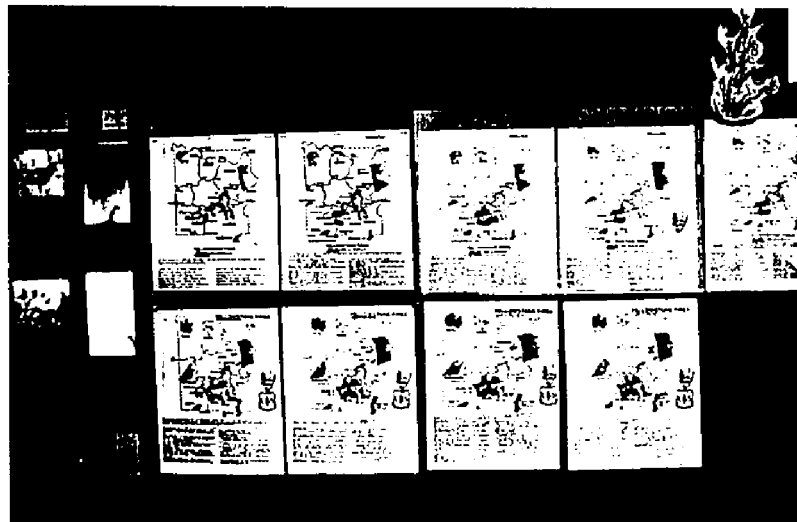
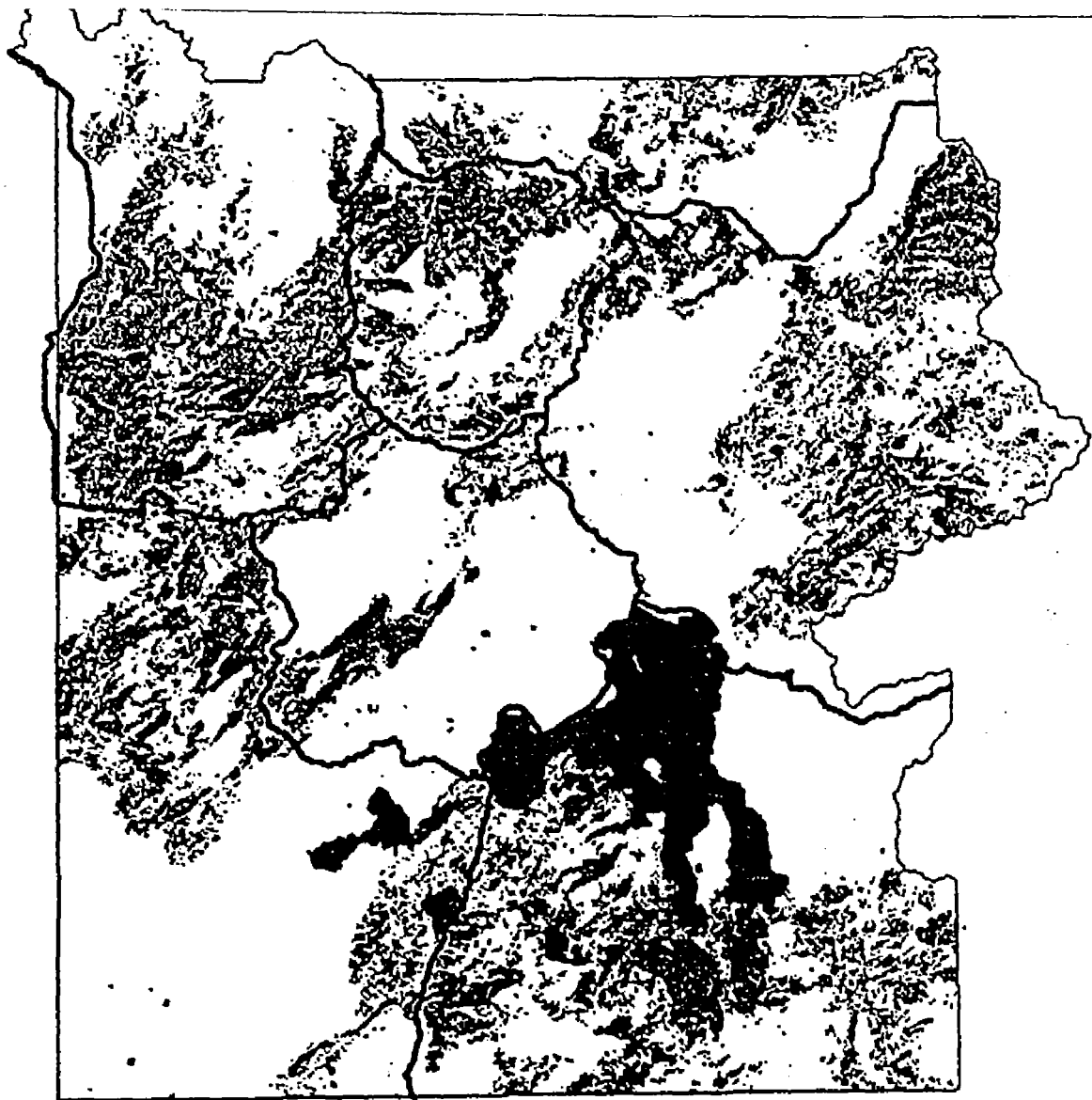


写真-2 ビジターセンターに掲示された火災状況説明(1988. 8)



PARK ROADS - heavy black lines
PARK BOUNDARY - thin black line



Definitions

1. CANOPY BURN: All needles were burned from the tree and bare black branches remain. Ground cover was also burned.
2. MIXED BURN: A complex mixture of surface burn, canopy burn and scorched trees.
3. NONFORESTED BURN: Burned sage grasslands, meadows and alpine areas.
4. UNDIFFERENTIATED BURN: A mixture of burned sparse forests, small burned meadows and surface burns in densely canopied forest.
5. WATER
6. UNBURNED LAND WITHIN PARK BOUNDARIES

UNDELINEATED BURN: Surface burn under dense, unburned forest canopies that does not appear on this map.

図-3 火災焼失地域図(64)

中央部の黒い部分はイエローストーン湖

本格的に雪が降ったことによってこの火災は終息に向かったが、10月8日に再訪した際にもまだ各所で煙が上がり、ヘリコプターで散水していた。

公園内での火災の消火活動を助けるためにカナダも含む地域から消防隊がやってきたが、自然環境への影響を最少に抑えるため、大型機械による消火活動が規制された。途中からは許可されたが当初はブルドーザによる防火線の開削は禁止され、人力が中心となった。また、消火剤の利用も制限された。これらの制限に対する不満も一部に見られたようだが、実際にはブルドーザによる防火線は、強風に乗って2kmも飛ぶ火の粉の前には何の意味もなさなかった。

火災の結果、イエローストーン地域の11%(570,000ha)、国立公園内の45%(400,000ha)が火災の影響を受けた(図-3)。施設に関しては、3軒の家と13軒のモービルホーム、10軒の私有のキャビン、2軒の森林局所有のキャビン、1軒の公園局所有のキャビン、その他18軒の建物が焼失した。消火費用総額は\$120,000,000に及び、人力による防火線1,071km、ブルドーザによる防火線220kmに及び、5,320tonの消火剤と38,000tonの水の散布され、飛行機が18,000時間以上使用された。消火に当たった人員9,500人のうち、2名が死亡した。うち1名は落ちてきた枝に当たり、もう1名は操縦していた飛行機の墜落による。大型動物への被害としては、243頭のエルク、4頭のシカ、2頭のムース、5頭のバイソンの死骸が確認されている。

なお、鎮火直後から防火線、臨時ヘリポートなど消火活動で影響を受けた箇所の修復が始まっている。

7. 火災に対する議論²⁹⁾

火災に関する3つの報告書が作成されている。1つはイエローストーン国立公園のスタッフによるもの³⁰⁾、もう一つはイエローストーン地域調整委員会の要請による生態学などの大学の自然科学者を中心として作成した自然環境への影響に関するもの³¹⁾、3つめは内務省と農務省によって任命された社会学者10人のチームによる森林火災政策に関するもの³²⁾である。それぞれ異なった視点から論じているので比較検討する。

まず、公園の研究部による報告は、これほどの大火災になることは予想不可能であったとし、その自然の一部として火災の意義を述べ、公園での火災の管理計画の適切さを説明し、火災の影響を肯定的に捉える。次に、生態学者らによる報告は、火災が全く自然のものとは言えないものの、その環境への影響は自然の許容範囲内であると述べるとともに、浸食防止を目的とした種子の散布、植林および野生動物への給餌などの人間による行為は例外を除き望ましくないという結論を下した。また、一層の研究を進め、その結果を管理に反映することを訴えた。

これらに対して政府任命委員の報告は、火災管理政策の考え方は健全としながらも、人間や

境界外への影響を考慮し、非常事態にも対応できるもっと厳密な管理指針を設定し、その情報を公開し計画過程への住民や関連機関が参加できるようにすること、さらに一層の研究を進めることを勧告した。1989年5月の最終勧告では、一層具体的に自然火をコントロールする場合に統計的な情報を用いること、可燃物処理に人為的の火災を利用すること、さらに構造物や集落付近可燃物を予め除去することなどが提案された²⁶⁾。この勧告を受けて、6月からブッシュ政権は、それぞれの公園が新たな管理計画を立てるまですべての園内の火災を消火の対象とすることを内務省に指示した。以下これらの報告の内容を含めた火災に関する議論の概要を記す。



写真-3 モザイク状に焼けた地域(1988.10, Bunsen Peakより)

1) 自然環境への影響

ヘンディー(Hendee)は自然環境における火災の役割を、遷移、可燃物、昆虫・菌類、物質循環、生態系の生産力・多様性・安定性、野生動物の生息環境などを制御することにあるとしている³³⁾。今回の火災による環境への影響に関しては、植生、動物、土壌、浸食と沈殿、水系への影響などの分野から調査されているが、大気汚染に関しては、火災の最中に公園管理者によって広報資料に掲載された近隣の集落での大気汚染データが唯一のものである³⁴⁾。

まず、植生に関してはロムらは以前からのイエローストーンの火災史の研究の成果を踏まえ、今回の大火災も異常なものではないとし、過去100年にわたる人間による火災抑圧と大火災化は関係がないことを示した³⁵⁾。

一方、具体的な植生の回復に関してはさまざまな意見がある。多くは焼失地域がモザイク状(写真-3)になっていることから、周囲からの植生が侵入するとともにロジポールバイン球果のうち休眠タイプのものが火災の熱によって開き、種子がまき散らされると言われている。それによると1haあたり125,000から250,000の種子が散布され、その多くが動物の餌となっても5年後には2,500本ほどの実生が残ると予測されている。しかし、このような実生の発芽は激

しく焼けた地域では観察されず、2年を経ても裸地のままである(写真-4)。

この疑問に対して公園側は場所によって変動が大きいことを認めている³⁶⁾(写真-5)。ナイト(Knight)は植生の変化にともなう動物も影響を受けるが、多様性に変化はないと予測し、まだ、不明な部分が多いので今後の研究に期待している³⁷⁾。

シンガー(Singer)は今回の火災で死亡した大型の哺乳類の数は少なかったことを認めつつ、その死亡データを地形、植生、傾斜などとの関係を調べる一方、越冬地の焼失とその冬の死亡率との関係を追跡調査している³⁸⁾。溪流の生態系は短期的には水温の上昇と富栄養化を引き起こし一次生産が増大する一方沈殿物も増加する。生産力はゆっくりと以前のレベルで戻ると予測されている³⁹⁾。

イエローストーン調整委員会への報告を取りまとめた生態学者が合同して、水文、土壌、水域生態、植物遷移、種の多様性などへの影響について述べている。その中で、自然環境の変動は特定の構造を目指しているものではないので、自然地域で火災を排除することはウィルダネスそのものをなくすことであり、予測できないことがウィルダネスの本質であるという意見を出している⁴⁰⁾。

2) 火災の管理規定と防止・初期消火の可能性

大火災が予測できたのかという点に関しては森林の状態と気象状態の2つの側面からの研究が行われている。



写真-4 植生がまだ侵入しない地区(1990.8)



写真-5 草本の侵入した地区のエルク(1990.8)

一般にロジボールパインの森林ではその生長に従って火災発生の周期が規定されている⁴¹⁾。すなわち、裸地から成立した森林は最初の50年間、林床に燃料となる落葉落枝もなく、火災の発生しにくい状態が続く。第二段階の100年間もそれほど燃え易くはならない。第三段階の100年間はそれ以前よりは燃えやすいが、林床にはまだ光が及ぶので、下層植生が火災の延焼をとどめる。最後の段階になると樹木も過熟となり病虫害によって枯れ、燃えやすい木が増えるとともに、林床が暗いため下層植生は発達せず、その代わり落葉落枝などが堆積し、極めて燃えやすかつ拡がり易い条件が整う。1988年の大火の前のイエローストーンがまさにこの状態であったという。この点では大火が予測されていたが、それは100年程度の変動の幅を持ったものである。

気象に関しては1988年の4, 5月は例年よりも降水量が多く、林木の含有湿度も高かったが、6月から急速に湿度が低下し、1988年が記録的な旱魃になったことから明らかなように、公園始まって以来の低湿度となった。そのため例年ならば自然消火すべき落雷による火災が延焼した。この湿潤から乾燥への急激な変化が予測できたと思えないが、近年の旱魃の傾向は明らかであった。

初期消火の可能性に関しては、管理火災の定義でも述べたように、自然発火の火災もすべて発見時から毎日観察され、その拡大や気象状態の変化によっては、消火・抑制活動が行われることになっていた。この点に関して、国有林では状況判断の基準が定められているのに対して、イエローストーン国立公園では管理火災の気温、湿度、季節、風、可燃物のタイプ、湿度、傾斜など条件を規定していない点が公園局の管理の問題だという指摘もある⁴²⁾。しかしながら、当初から消火の対象となっていた国有林で発生した火災さえも消火できなかった現実から判断すると管理規定に関わらず消火は困難であったと推察される。

発生防止策としては人間が点火する方式の管理火災を計画的に実行するか、落葉落枝の除去や間伐を行い可燃物を予め撤去する方法が考えられる。イエローストーンの野生動物管理を鋭く批判するチェイス(Chase)はこの地域の生態系はある程度人間の影響を受けたものであるから、ヨセミテやセコイアなどで行われている人間によって着火する管理火災を用いるべきだと主張している⁴³⁾。また、アーノ(Arno)らも同様な管理火災の計画的実行を提唱している⁴⁴⁾。ペイン(Pyne)は火災の結果自体には肯定的であるが、管理火災にはコントロールする能力が管理者に要求されるとし、また、公園は文化的存在であるから予め可燃物構造を変化させることはできたと判断した⁴⁵⁾。バック(Buck)は自らの消防活動の体験から、人為的管理火災だけではなく、消防士の質の向上と消火体制の確立を求めた⁴⁶⁾。

ボニクセン(Bonnicksen)は更に踏み込み、イエローストーンの火災管理手法を非科学的と批判し、人為火災に加えて機械的な可燃物処理を提案した⁴⁷⁾。彼は公園の管理において人間の影響を無視することは非現実的であるとし、管理目標として自然度の基準を設定し、科

学的に管理することを提案している。また、彼は今回の火災のモザイクは大きすぎるので、公園局の予測するような多様な植生は期待できないとし、一斉林が再生するので病虫害にかかりやすいだけでなく、火災の際にも再び一斉に炎上する可能性高いと考えた⁴⁸⁾。

これらの人為的管理火災や機械的可燃物処理の導入や、火災の結果の否定的な意見に対して、園長らは公園をウィルダネスと認識する立場から、セコイアなどとの環境の違いを明らかにし、人為的管理火災の問題について反論している。また、現在の管理方式は、科学的研究成果に基づいている決められたことを強調した。⁴⁹⁾⁵⁰⁾⁵¹⁾。

3) 国立公園の目的との関わり⁵²⁾⁵³⁾⁵⁴⁾

2)の管理方針は国立公園はいかに管理されるべきか、さらには国立公園とは何かという根本的な問題にも関わってくる。それによって、人間がその管理人になるべきか、あるいは母なる自然が管理するのかということが決まる。

国立公園は元来すぐれた景観を中心とする天然記念物的な対象を保全するために設立された。このためこれらの保護対象に影響を与えるオオカミなどの補食者、病虫害、そして火災がコントロールの対象となっていた。しかし、国立公園の意味が珍しい景観の保全から自然環境そのものの保全に移行するにつれ、レオボードレポートにも述べられているように、国立公園の自然地域の管理目標はその地域の生態系を可能な限り原始的状態に保つことであるとする考えも支持を得るようになった。さらに遺伝子プールなど人類の生存にも関係するようになってきた。

しかし、公園の境界はその自然環境ではなく現実の政治や経済的な理由で決定されたものである。また、これらの制限がないとしても、生態系には具体的な境界は存在しない。すなわち、国立公園の生態系は独立しているものではない。とりわけ大気汚染や温暖化など地球規模の環境の変化を考えれば境界を設けることは不可能かつ無意味である。

隣接地域との関連に関しては、イエローストーンでは幸いにも1960年代に国立公園とその周囲の国有林の担当者たちがイエローストーン地域調整委員会(Greater Yellowstone Coordinating Committee)を結成していた。1987年からはそれぞれの管理計画を統一する試みも進められている。これによって一般の人々の理解が得やすくなるとともに、野生動物や火災などの政治的境界を越える自然現象に対応が容易になった⁵⁵⁾。

4) コミュニケーションとの関係⁵⁶⁾⁵⁷⁾⁵⁸⁾

マスコミによる火災報道には表現の誇張と情報の不正確さという2つの大きな間違いがあったことが指摘されている。まず、火災を表現するのに「破滅させる(destruct)」や「焦土化する(scorch)」、「荒廃させる(devastate)」のような否定的なことばが選ばれるとともに、公園のほとんどが灰塵に帰したような誇張された表現が用いられている。また、それにもなう映像や写真も真っ赤に炎上する樹冠火など、1%未満に過ぎない激甚地区での特に印象の強いものが選ばれた。

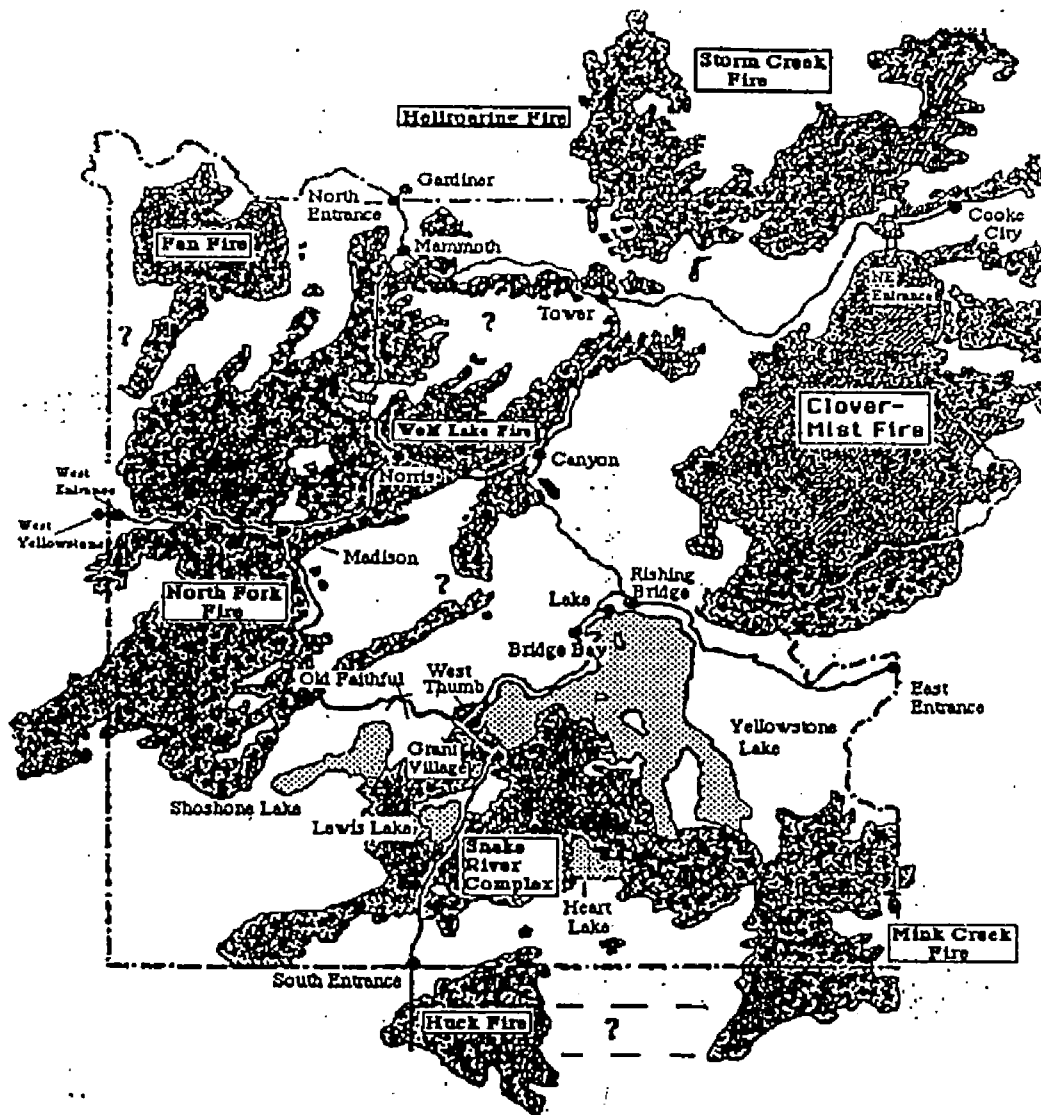


図-4 9月26日に発表された火災焼失地域図

さらに、国立公園における管理火災の処置をあたかも燃えるに任せる放任主義 (let-it burn policy) のように伝え、その管理方針などの情報を正確に伝えなかった。たとえば、主要な火災の半数は国有林での失火が原因なので当初から全力で消火されていたにもかかわらずイエローストーン国立公園による放任主義の責任が強調された。なお、このことばは公園局が使い始めたもので、後に正式には管理自然火災と改められたにも関わらず、便利なのでその後も関係者の間で使われつづけられたことが誤解の一因でもある⁵²⁾。また、火災地域の外郭面積を、公園局の説明にもかかわらず、焼失地域として報道した。そのため、現実には焼失地域はモザイク状でありその境界内の一部が焼けたにすぎない影響範囲内が完全に焼失したような誤解を抱かせたにもかかわらず全焼したようなイメージを与

えた(図-4)。一方で公園側も煙のため正確な焼失面積を火災が終息するまで把握できず、面積を過大評価しすぎたという現実もある。

このようにイエローストーンというアメリカ人の誇りというものを対象にして、人目を引きつける真っ赤なカラー写真や映像などによる誇張と不正確な情報に満ちた報道が行われたことが世論を大きく動かした。そのため、最初の視察の際には公園局の火災管理規定を支持していた内務長官が、後には見直しを表明した。なお、同時期にアラスカの国有林ではイエローストーンよりもはるかに大規模な森林火災が発生したが、ほとんど報道されていない。

火災が鎮火してからは報道も正確になった。だが今度は逆に、翌春にはあたかも焼失地域全域から芽が出て、花が咲き出したような報道で、イエローストーンの再生を誇張した。これもまた不正確で、2年を経ても、裸地のままの地域がかなりに及んでいる。また、自然環境の変化には善悪はないにも関わらず、火災が「健康的な(healthy)」自然環境を造り出したかのような肯定的な表現も出てきた。

近年、アメリカの自然保護団体は国立公園政策に関して批判的であったが、この火災に対しては公園局の政策を強く支持している⁴⁵⁾。また、環境保全指向の雑誌⁵⁹⁾もこの火災に関して肯定的な記事を掲載している。

一方、情報を提供する側の姿勢も問われている。火災の報告書にも指摘されているように、1972年からの16年間を経ているにも関わらず、その火災管理方針についての情報が関係者以外にはあまり知られていなかった。その期間、園内で目立った火災が発生しなかったということも一因であろうが、火災が発生してからようやく管理指針を説明するパンフレット⁶⁰⁾がビジターセンターで配付されるようになった。

1990年8月7日にイエローストーンに劣らず有名なヨセミテ国立公園で、落雷による火災が発生した⁶¹⁾⁶²⁾。そのため4日目には、設立されて以来はじめて公園は閉鎖され、約15,000人の訪問者は退去した。1週間後の8月14日にはほぼ消し止められたが、3,136人の消防士が動員され、8,942ha(公園面積の2%未満)の森林と、フォレスタ(Foresta)という園内の私有地内の67軒の家を焼失した。消火費用は\$4,500,000であった。この火災は居住地の近くで発生したので、当初から消火の対象となった。それでもフォレスタへの延焼は阻止できなかった。また、訪問者の集中するヨセミテ渓谷への入口付近が火災発生地域であったので、風向きなどによって訪問者が渓谷にとじ込められる可能性が高いと判断して公園閉鎖の決定が早急に下ったと思われる。今回はイエローストーンの教訓を踏まえてか、火災情報とその意義を説明するパンフレットがすばやく配付された。

5) 教育に関するもの

以上のような誇張された報道の影響もあろうが、鎮火後に方々から種子や苗の提供、動物への給餌の要求などが出されたことは、公園の管理方針の理解がまだそれほど広まっていないことを示す。また、人々には森林局が半世紀にもわたって繰り広げたスモークーベアのイメージ

が強く、火災はすべて悪だという先入観が支配的である。また、童話の影響で、火災で逃げ惑うバンビの記憶から火災は悪であるという認識を持つようになったという意見もある。現実にはイエローストーンの火災の最中にも、エルクやバイソンなどの大型の哺乳類は、火災のそばで悠然と草を食んでいたことから想像されるように、それほど影響を受けなかった。

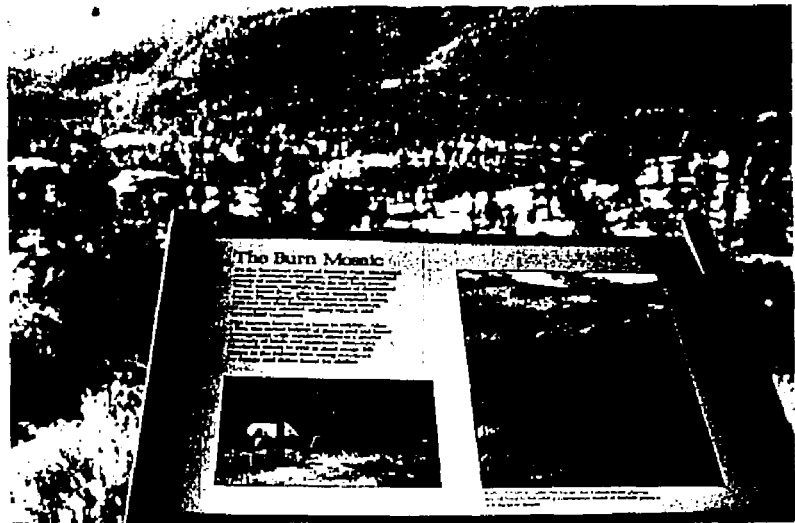


写真-6 新設された火災を説明する案内板(1990.8)

人々の森林火災の猛威の認識の不十分さも指摘されている。セントヘレンズ山のような噴火や地震、嵐などの自然災害はそのまま受け入れるのに対して、森林火災は人間が制御できる範疇に属すると考えがちである。この考え方が潜在的にイエローストーンの火災の拡大に対する非難の背景にあるようだ。現実にはヘリコプターなどの最新の装備を用いて、2,000人の海兵隊員まで含めて9,500人もの専門家が懸命の消火活動に当たってもせいぜい集団施設地区の建造物を保護するのが精一杯で、最終的には降雨(雪)や気温の低下を待たねばならなかった。

このように人々の森林火災の認識の欠如が大きな誤解を招いたことを受けて、森林火災をイラストで平易に説明した本⁶³⁾が国立公園基金(National Park Foundation)の協力によって発刊されている。また、ビジターセンターでは火事に関する案内パンフレットを作成した⁶⁴⁾。さらに園内各地の焼失地域の展望地に火災の解説版が設置され、その意義を説明するようになった(写真-6)。レンジャーによる自然解説プログラムにも火災が含まれるようになった。

教育と管理火災の認識との関係について、マンフレッド(Manfread)らは1989年春に電話でアンケート調査を行なった⁶⁵⁾。その結果、教育レベルと管理火災の理解に相関が見られた。そこから教育活動の大切さを結論として導き、現代林業における教育と広報活動の重要性に対する関係者の認識を促した。

6) 政治・経済に関するもの⁶⁶⁾

選挙の年でもあったためか、地元のモンタナやワイオミング州の政治家が園長や公園局長の解任を要求したのは極端であるとしても、政治家にとってはその要求の科学的根拠よりも選挙区民の人気取りが優先される。特にホーデル内務長官の言動の変化は象徴的である。

鎮火後にはニュースでイエローストーンの「惨状」を知った人々から種子を撒いたり、苗を

植え付けること、さらには、エルクなどの草食動物に給餌することへの要求が出された。公園関係者は、苗木や種子の寄付の申込を断わることにかなりの労力を費やしたという。

もう一つの、重要な問題として\$120,000,000に達する消火活動に要した費用が国家予算の使い道としての正当なものかどうかに関する議論もある。今後、火災によって焼失あるいは破壊されたトレイルやサイン、キャンプ場など復旧にはかなりの費用を要するであろう。それに対処すべく高校生、大学生のボランティアを募集し、その修復と自然教育を同時に進めようという計画も進められている⁶⁷⁾。

7) 生活との関係

イエローストーンには公園管理関係者に加えて、さまざまな人々が生活している。宿泊施設を含む商業活動はいくつか業者に委託されるとともに、郵便局、病院などの施設にかかわる人々もいる。これらの園内に生活する人々に加えて、公園の境界付近には、観光のためにこの地域を訪れる毎年数百万人もの旅行者を相手にした店や宿泊施設が存在する。さらに、隣接してリゾートも開発されている。

これらの人々の反応は複雑であろう。彼らは火災による大気汚染や延焼の危険を直接影響を被った。だが、この地域の森林においては火災が発生しやすくかつ消火は困難であることを承知の上で、そこでの特権的商業活動に従事しているとも言える。具体的な数値は不明であるが、火災期間中には観光客が減少する一方、消火活動関係者の宿泊や買物などによる経済効果も報告されている。

彼らは火災が終了すると一転して公園局の主張を取り込み、イエローストーンは破滅したのではなく生まれ変わったとして、新たな魅力が備わったので是非訪れるように宣伝している。その宣伝の効果というよりむしろ人間の好奇心からか、心配されていた翌1989年のシーズンの訪問者は火災以前より増加した。また、園内の売店では火災のビデオや写真などが売り出されている。

燃えやすい森林地域に散在するこれらの施設の防火には莫大な費用が掛かっただけでなく、そこに多数の人員と消火装備が投入された結果として、本来の森林火災への対応が困難になった。また、公有林に隣接する民家やリゾート施設での防災の費用を税で負担することの是非も問われている。一般に、これらの地域では市街地の住宅地よりも少ない固定資産税が掛かっているにもかかわらず、火災の危険性も消火の費用もより高い。さらに、これらの地域で防火施設を公的に整備することは納税とその恩恵の関係からも極めて不公平となる²⁾。また、実際に住宅として利用されている家と別荘を同じ基準で保護するという点も税の支出の公正さを問われる。

8. 考察

この火災の是非に関してはこれほどの意見が出たのは、自然環境に対する人間の影響が地球

上のいかなる場所でも無視できないと言うことと、国立公園に要求されるものが多様であることの反映でもある。そのため、どの意見が正しいというような結論はありえない。しかし、自然のプロセスを重視している割には、公園での人間の利用、特に自動車などの利用の制限の必要性に関する意見が全くなかったのは意外であった。

日本においては自然発火の火災は稀で、森林の遷移においてもその役割は無視できる。落葉落枝の分解も早いのでそれほど堆積しない。また、自然の森林火災を放置したり、自然環境を維持するために火入れをすることは、空間的にも不可能である。それよりも、日本人の気持ちとしては100年以上を経て蓄積された森林資源を、科学的だからといって、途上国では炊事のための薪の収集にも困っている状況なのに、生態系の維持のために焼き払うことには抵抗を感じざるを得ない。燃やすにしても伐採してからでも同様の効果は得られると思われる。しかし、アメリカでも今回焼けた樹木の商業的利用に関する研究も進められているようだ。また、マスメディアの報道姿勢は知床の伐採を思い出させるが、日本では国有林からも林学・林業関係者からも教育運動が盛り上がらなかったのは対照的である。

文献

- 1) Pyne, S.J.(1982): Fire in America, A Cultural History of Wildland and Rural Fire, Princeton Univ. Press
- 2) Davis, D.(1989): Wildfire Update, American Forests, pp.17-18, 95(9-10)
- 3) Gosnell, R.(1989); Taming a Tiger, American Forests, pp.18-20, 95(9-10), 1989
- 4) McCleese, W.(1989): The Environmental Effects of Wildfire, Fire Management Notes, 50(2), pp.3-8
- 5) Hilts, L.(1978): National Forest Guide, pp.22-27, Rand McNally, Chicago, 1978
- 6) National Park Service(1987): Yellowstone Official Map and Guide, U.S. Government Printing Office
- 7) Sierra Club(1984): The Sierra Club Guides to the National Parks, Rocky Mountains and the Great Plains, pp.202-246, Random House
- 8) National Park Foundation(1990): The Complete Guide to America's National Parks, 1990-1991 Ed., Prentice Hall Trade
- 9) Taylor, D.L.(1974): Forest Fires in Yellowstone National Park, Journal of Forest History, 18(3):68-77

- 10) Wingate, H.W.(1886): Through the Yellowstone Park, p.243
- 11) Albright, H.M.(1985): The Birth of the National Park Service, pp.193-194, Howe Brothers, Salt Lake City
- 12) Runte, A.(1987): National Parks, 2nd ed., pp.201-203, Univ. of Oklahoma Press, Lincoln
- 13) Leopold, A.S.(1963): Wildlife Management in the National Parks, Leopold Committee Report, American Forests(April)
- 14) Sellers, R.E.(1976): Despain, D.G.: Fire Management in Yellowstone National Park, Proceedings Tall Timbers Fire Ecology Conference and Intermountain Fire Research Council Fire and Land Management Symposium, vol.14
- 15) Pyne, S.J.(1982): Fire Policy and Fire Research in the U.S. Forest Service, Journal of Forest History, 25(2), pp.64-77(April)
- 16) Houston, D.B.(1973): Wildfires in Northern Yellowstone National Park, Ecology 54(5), pp.1111-1117
- 17) Houston, D.B.(1971): Ecosystems of National Parks, Science, 172, pp.648-651
- 18) Romme, W.H.(1982): Fire and Landscape Diversity in Subalpine Forest of Yellowstone National Park, Ecological Monograph, 52(2), pp.199-221
- 19) Romme, W.H.(1982): Knight D.H.: Landscape Diversity, the Concept Applied to Yellowstone Park, BioScience 32(8), pp.664-679
- 20) Despain, D.G.(1978): Effects of Natural Fires in Yellowstone National Park, Information Paper No.34, Yellowstone National Park(July)
- 21) Despain, D.G.(1972): Fires as an Ecological Force in Yellowstone Ecosystems, Information Paper No.16, Yellowstone National Park(March)
- 22) Cole, G.F.(1975): Nature and Man in Yellowstone National Park, Information Paper No.28, Yellowstone National Park(June)
- 23) The Staff of the Billings Gazette(1989): Yellowstone on Fire!, The Billings Gassette

- 24) Schullery, P.(1989): Yellowstone Fires, A Preliminary Report, Northwest Science, 63(1), pp.44-54
- 25) Shively, C.A.(1989): A Smoke-scented Diary, Natural History, pp.35-40(Aug.)
- 26) Jeffry, D.(1989): Yellowstone, the Great Fire of 1988, National Geographic, 175(2):252-273(Feb.)
- 27) Carrier, J.(1989): Summer of Fire, Journal of Forestry, 87(12):12-25
- 28) Schullery, P.(1989): The Fires and Fire Policy, BioScience 39(10):686-694
- 29) Elfring, C.(1989): Yellowstone, Fire Storm over Fire Management, BioScience, 39(10):667-672
- 30) Yellowstone National Park(1988): The Yellowstone Fires, A Primer on the 1988 Fire Season(Oct. 10)
- 31) The Greater Yellowstone Postfire Ecological Assessment Workshop (Christensen, N.L., Chairman)(1989): Ecological Consequences of the 1988 Fires in the Greater Yellowstone Area, Final Report(Nov.)
- 32) Fire Management Policy Review Team(1988): Report on Fire Management Policy(Dec.14)
- 33) Hendee, J. C. et al.(1978): Wilderness Management, pp.249-278, U.S. Government Printing Office
- 34) Yellowstone National Park(1988): The Buffalo Chip(Aug.)
- 35) Romme, W.H.; Depain, D.G.(1989): Historical Perspective on the Yellowstone Fires of 1988, BioScience 39(10):695-699
- 36) Nurnett, H.; Barbee, R.(1990): Lodgepole & the Yellowstone Fires, American Forests, 96(1-2):34-35
- 37) Knight, D.H.; Wallace, L. L.(1989): The Yellowstone Fires, Issues in Landscape Ecology, BioScience 39(10):700-706
- 38) Singer, F.J. et al.(1989): Drought, Fires, and Large Mammals, BioScience 39(10):716-722
- 39) Minshall, G.W. et al.(1989): Wildfires and Yellowstone's Stream Ecosystems, BioScience 39(10):707-715

- 40) Christensen, N.L. et al.(1989): Interpreting the Yellowstone Fires of 1988, BioScience 39(10):678-685
- 41) Stevens, W.K.(1990): Biologists Add Fuel to Yellowstone Fire, Journal of Forestry, 88(6):27-28
- 42) Bologiano, C.(1989): Yellowstone and the Let-Burn Policy, American Forests, 95(1-2):21-25
- 43) Chase, Alstone(1988): A Voice From Yellowstone, New York Times(Sep. 18)
- 44) Arno, S.F.; Brown, J.K.(1989): Managing Fire in Our Forests, Time for a New Initiative, Journal of Forestry, 87(12):44-46
- 45) Pyne, S.J.(1989): The Summer We Let Wild Fire Loose, Natural History, pp.45-49(Aug.)
- 46) Buck, B.(1989): A Yellowstone Critique, Journal of Forestry, 87(12):38-40
- 47) Bonnicksen, T.M.(1989): Nature vs. Man(agement) , Journal of Forestry, 87(12):41-43
- 48) Bonnicksen, T.M.(1989): Fire Gods and Federal Policy, American Forests, 95(7-8):14-16
- 49) Barbee, R.D. et al.(1990): Replies from the Fire Gods, American Forests, 96(3-4):34-36
- 50) Hackett, T.(1989): The Yellowstone Story, Journal of Forestry, 87(12):26-35
- 51) Evers, L.(1990): The Last Fires of Yellowstone, Journal of Forestry, 88(6):29-32
- 52) Agee, J.K.(1989): Fire and Ecosystem Management, Paper Presented at the Greater Yellowstone Coalition Annual Meeting, May 18-20
- 53) Sellers, R.W(1990): Yellowstone, Part II, Journal of Forestry, 88(1):40-43
- 54) Reinhold, R.(1988): What is a National Park Supposed to Accomplish, New York Times(July 10)
- 55) Agee, J.K. ed.(1988): Ecosystem Management for Parks and

- Wilderness, pp.204-215, Univ. of Washington Press, Seattle
- 56) Reid, T.R.(1989): When the Press Yelled 'Fire!', Journal of Forestry, 87(12):36-37
- 57) Fire in Yellowstone(1988), Hot Air in D.C., New York Times(Sep. 25)
- 58) Matthiessen, P.(1988): The Case for Burning, The New York Times Magazine(Dec.11)
- 59) Zumbo, J.(1988): The Year Yellowstone Burned, Outdoor Life, pp.53-55, 81-84(Dec.)
- 60) Yellowstone National Park(1988): Fire, A Natural Force
- 61) Once Burned, Twice Careful(1990), Newsweek, pp.50-51(Aug. 27)
- 62) Fire, August 7,1990, Brochure published by Yosemite National Park, Aug., 1990
- 63) Cottrell, W.H(1989): The Book of Fire, Mountain Press, Missoula
- 64) Yellowstone National Park(1990): Yellowstone fires 1988, A Supplement to Yellowstone Today(May)
- 65) Manfredo, M. et al.(1990): Attitudes Toward Prescribed Fire Policies, Journal of Forestry, 88(7):19-23
- 66) Robbins, Jim(1988): Many Flee Blazes on Park Grounds, The New York Times(Sep. 11)
- 67) The Student Conservation Association(1989): Great Yellowstone Recovery Corps

終章 まとめと展望

1. まとめ

前半でヨセミテ、イエローストーン、マキノー、ブラット、サリーズヒル、ホットスプリングの成立過程を辿り、その主たる動機にはメニュメント景観や珍奇で好奇心をそそる対象を観光資源としての利用するための保護であったと言う点を明らかにした。いずれの場合も、設立当初は環境を保全するという考えがなく、せいぜい動物の保護だけが考慮された。

後半では、保全の芽生えを探った。最初は東部でもナイアガラのようにナショナリズムをかきたてるモニュメントの私有化防止が動機で景観保護が始まった。公園より少し遅れて東部では水利確保などのような功利主義的な理由から環境保全の意識が芽生え始め、ニューヨーク市に流入するハドソン河の水源およびその水運確保を目的としてアディロンダックの保全が認識された。その全国版とも言えるのが国有林の嚆矢となった保護林の設定であった。それと並行して、ビルトモアのような林業の試みと雑誌により保全の啓蒙が推進された。

換言すれば、人間の影響がまだ少なく土地が余っている西部でロマン主義やナショナルイズム、および観光目的の景観保護が始まり、環境問題も表われていた東部では水源涵養を主たる理由とする森林保護が始まった。また、林業はプラグマティズムに基づく森林保護の一環として始まった。これも生態学的と言うよりも水利を中心とする現実的な必要であった。

以下、全体を振り返って得られた知見を4つに絞って整理する。

1) 功利主義とロマン主義

自然環境保全の動きはロマン主義的発想にもとづくものと、功利主義的な発想に基づくものとの大別される。国立公園の設立が前者で、特異な景観、動物などの保護であったのに対して、国有林やアディロンダック州有林の設立は後者の水利保全など森林破壊による環境改変阻止が動機であった。しかし、アディロンダックの保全においても暗黙のうちにロマン主義的目的がある一方、国立公園の保全には鉄道資本などの功利主義的な目的が潜んでいる。そのため、第一次大戦後、国立公園は観光地化することによって観光資源の保全と言う方向を辿り、後者は木材生産と言うものとの板挟みになりながらも、むしろ施設化が進まなかったため、ロマン主義の産物とも言えるウィルダネス空間(wilderness)を誕生させることができた。

今日ではロマン主義と功利主義は、自然保護とリゾートを含む開発という形になっている。現実には一個人が両方の側面を持っている。国立公園も森林保護も東部のエリートが進めたが、今日でも自然環境保全の主たる推進者は中流以上の人々である。一方で、一番自然環境にインパクトを与えているのもこれらの人々である。

2) 公園の理念

ヨセミテやイエローストーンがそのモニュメント性のために設立されたことに加えて、小規模

な公園の設置はそれ自体理念の欠如を示すものである。しかし、1920年代に人間の影響が少ない空間としてのウィルダネスが評価され始めると公園よりも国有林がその設定の中心となった。そのため、それまで観光中心だった公園もウィルダネスを考え、「生態系」の管理を試みるようになった。しかし、「生態系」は結局概念に過ぎず、具体的に空間に当てはめることは困難であった。それに関しては、公園とそれを取りまく国有林から構成されるイエローストーン地域での火災への対応の中で明らかにした。結局それぞれの空間が設定された当時の主旨がはっきりしないまま時代の流れによって人々の認識も変化し、そのズレが埋められないまま今日に至っている。このことは自然環境保全地域の理想化の問題とも関わっている。

3) 国立公園と国有林

フロンティアの消滅と、都市化によって変化したウィルダネスに対する意識は国立公園の設立とそれに遅れること約20年後の保護林（のちの国有林）設置によって具体化された。しかし、それぞれの管理組織に関しては、森林局が功利的な理由によってすばやく設立されたのに対して、公園局は森林局の反対に加えて、金持ちのリゾートというイメージも強くなかなか設立されなかった。

その後、内務省公園局と農務省森林局と言う異なる省の機関に管理が委ねられたため、別個に目的が規定されて言った。その結果、公園は施設の改善が重視され、観光の方向に進んだ。これに対して、国有林は、木材や放牧等による生産活動の場として管理され、観光のための施設は重要視されなかった。公園は利用のための保全となったのに対して、その後の国有林のウィルダネスは保全中心の空間となった。今日、国立公園よりも国有林の方にウィルダネスが多く存在する事実は、景観を要件とした観光中心に公園が管理されたことの代償である。景観は人間が訪れることによって評価されるものであるのに対して、ウィルダネスはむしろ訪れないことによって評価される。

すなわち、国有林にウィルダネスが設定できたのは、利用を中心に据えた公園行政があったからとも言える。今まで公園局と森林局は対立するものとしてとらえられることが多かったが、むしろ良きライバルとして理解できる。今後はイエローストーン地域で試みられているような国有林と国立公園との共同管理、さらにはそれ以外の地域をも含む境界を越えた領域での提携が要求されるようになってきた。

4) 造園家と環境保全

初期の国立公園や森林保全運動にオルムステッドを初めとする造園家に関わっていたと言うことは、造園家が当初から環境計画および社会改革者としての役割を担っていたと言うことを示す。とりわけ、公園を「つくる」者というイメージが先立つ今日の造園の中で保全のために、施設を撤去し、開発を抑制すると言う、いわば対立する概念を持ち得たと言うことは造園家が単なる空間のデザイナーではなく環境の意味を理解した社会改革と言う視点を当初から持っていたと言うことを示す。

当初、造園の分野は庭園や都市公園という人間中心の空間であったが、次第に拡大して広大な自然環境をその対象とするまでに至った。そこで人間中心から環境中心へというアプローチの大転換が行われている。もちろん環境中心というアプローチ自体が現代人の要求であるとするればこれも一種の人間中心と言えるが、ここで大切なのは造園家がこのような対照的な空間を取り扱う能力を秘めていたという点だ。

ここ数年のリゾートブームに便乗した造園家も少なくないようだが、近代造園が保全という思想をバックボーンとして持っていたことは心すべきであろう。上述したように、今日の公園や森林の管理において人々のイメージと現実の森林のギャップが問題となっている。本当の森林を知らない都会の人々がイメージだけで地元民の生活を無視した自然保護を要求することが多々ある。このような場合にも、実際の空間と都会の人々のイメージとのギャップを満たす役割を担えるのが造園家であろう。

2. 展望

アメリカの保全史を研究するにあたって潜在的意識として日本との比較が横たわっていた。日本との比較は今後進めていく予定であるが、明治末期に始まった日本における国立公園設置運動にも鉄道を初めとする経済的な動機が主たる推進力であって点など類似している。また、日本は土地所有との関係でいわゆる地域制の公園を発展させた点でアメリカとは異なるが、そのアメリカでも1960年代から地域制の公園が増加してきている。そこで日本の環境保全を、アメリカの事例を踏まえて展望する。

まず、国立公園や国有林を管理するのが官僚であるという視点からすれば、官僚組織の飽くなき自己増殖の欲望から逃れることはできない。その点、アメリカで公園局と森林局と言う異なる省に属する組織がライバルとして存在したことは、むしろ望ましいのではなかろうか。それに対して、日本のように組織の規模が違うだけではなく、国有林に国立公園地域を被せると言う方式では相互に監視しあうような体制にはなかなかならない。国有林での木材生産の比重が減少している一方、国有林か国立公園かを問わずにレクリエーション利用が増加している状況を踏まえると、それらの空間の管理の在り方を見直す必要がある。たとえば、国立公園の中心部だけでも環境庁の単独管理が望ましい。

第2に、アメリカでも公園や森林空間とその中の自然環境の独立性の問題が重要になっている現在、核心部を営造物としてそれらを地域性による制限で取り巻くようなシステムが求められる。その際、日本の地域性という制度はアメリカでも今後必要となろう。そのように考えると、地域性と言うものを一層発展させる必要もある。

第3に、アメリカの保全地域の歴史を振り返ると、当初の設立意図とその後の理解が異なっていることが明らかになった。すなわち、国立公園では観光客を誘致できる景観資源の保全、国有林では水利の保全だったのに対して、今日ではどちらでもウィルダネスの保全、レクリエー

ションが主たる管理目的となっている。すなわち、当初意識されていなかった管理目的が現れた。そのため、適応過程で様々の矛盾が誕生すると共に、新しい目的を包含できるような空間的ゆとりの有無が問題となる。この点、一層自然環境に対する理解が必要となる。さらに、野生動物にみられるように、その広大な移動空間を保全するためにはなんらかの私有地の利用規制が不可避であろう。

3. 出典一覧

本論は以下の文献を骨格として形成されたものである。

- 1) アメリカの国立公園とその保全, 伊藤精悟編: 森林風致計画学, pp.158-172, 文永堂出版(1991)
- 2) アメリカにおける森林の風致的取扱いの変遷, 伊藤精悟編: 森林風致計画学, pp.230-247, 文永堂出版(1991)
- 3) マキノ国立公園の変遷から見た初期の国立公園の実体, 造園雑誌, vol.53, no.5, pp.25-30(1990)
- 4) アメリカの小規模な国立公園の変遷と意義, 造園雑誌, vol.54, no.5, pp.60-65(1991)
- 5) ホットスプリングス国立公園の変遷, 造園雑誌, vol.55, no.5, pp.85-90(1992)
- 6) イエローストーン国立公園の成立とその理想化, 造園雑誌, vol.56, no.3
- 7) アメリカ合州国における林業と環境保全運動(1), ビルトモアをめぐる人々, 京都大学農学部演習林報告, no.61, pp.236-246, (1989)
- 8) アメリカ合州国における林業と環境保全運動(2), 雑誌"Garden and Forest"とその関係者たち, 京都大学農学部演習林報告, no.62, pp.248-260(1990)
- 9) アメリカ合州国における林業と環境保全運動(3), ニューヨーク州での保全運動の展開, 京都大学農学部演習林報告, no.63, pp.195-208(1991)
- 10) イエローストーン地域における大火災の影響と意義, 京都大学演習林集報, no.21, pp.163-182(1991)

最後に、資料収集では主として首都ワシントンの議会図書館、内務省図書館、国立公園局ハーバースフェリーサービスセンター図書館、同デンバーサービスセンター図書館、イエローストーンおよびヨセミテを初めとする各国立公園の図書館にお世話になった。